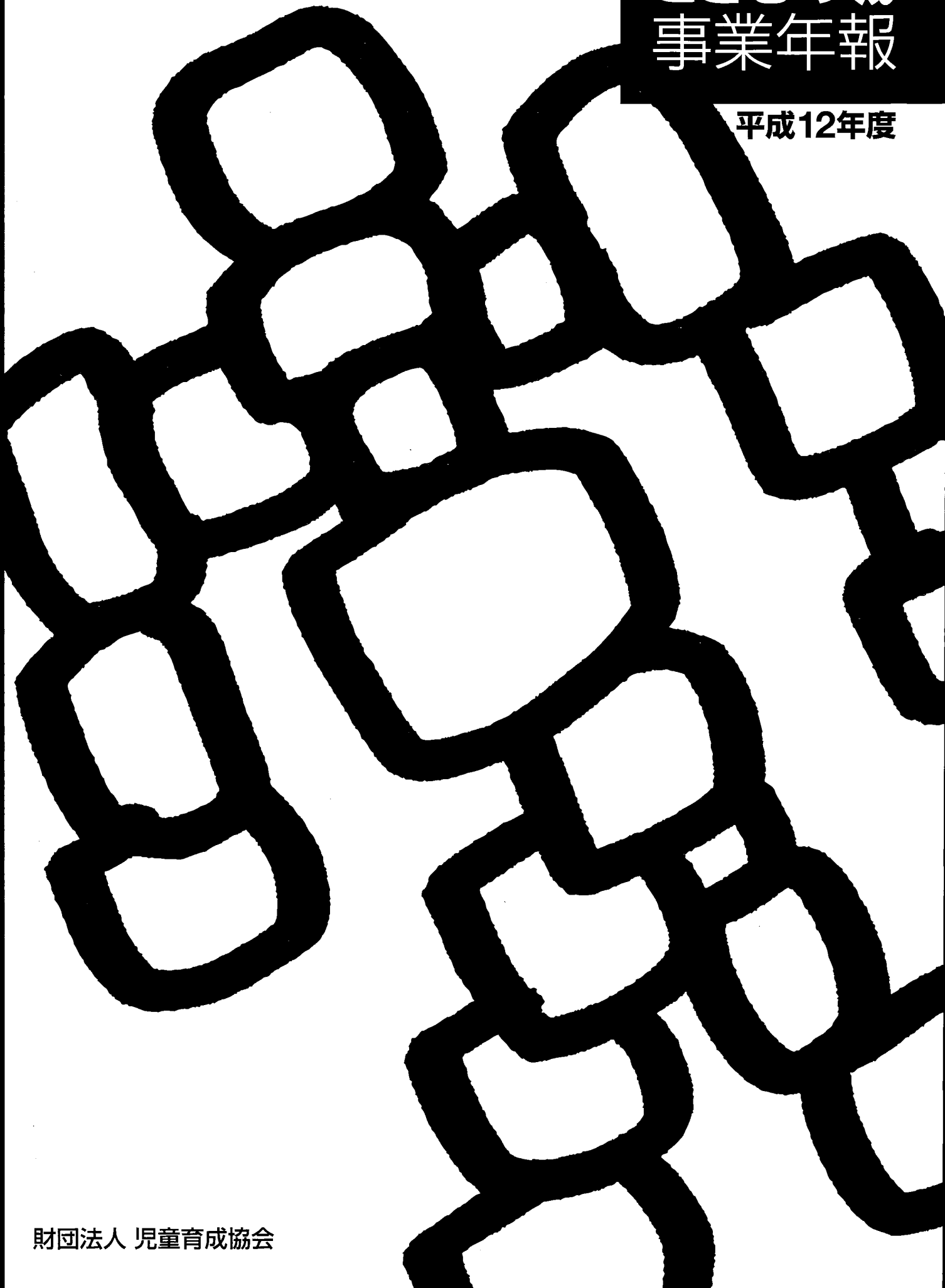
こどもの城
事業年報

平成12年度



財団法人 児童育成協会

CONTENTS

こどもの城 事業年報　平成12年度 目次

Ⅰ 事業の概要

平成12年度の活動 ―― 7
❶ 事業と運営の基本的な考え方 ―― 7
❷〔こどもの城〕の概要 ―― 7
❸〔こどもの城〕の組織機構と役員 ―― 9
❹ 平成12年度の事業活動の概要 ―― 9
❺ センター的役割を果たすために ―― 11
❻ 開館時間・入館料（こども活動エリア） ―― 11
平成12年度活動一覧表 ―― 13
❶ 入館者数 ―― 13
❷ グループ活動実施状況 ―― 14
❸ 講座・クラブなど ―― 15
❹ 視察・見学実績 ―― 17
1年の歩み ―― 18

Ⅱ 各部の活動

体育事業部

平成12年度の活動 ―― 21
❶ 一般利用 ―― 21
❷ 講座・クラブ・講習会 ―― 23
❸ グループ活動 ―― 26
❹ その他 ―― 26
❺ まとめ ―― 27
平成12年度活動一覧表 ―― 28
❶ 一般利用 ―― 28
❷ 講座・クラブ ―― 29
❸ その他 ―― 32

プレイ事業部

平成12年度の活動 ―― 33
はじめに ―― 33
❶ 一般利用 ―― 33
❷ 講座・クラブ ―― 36
❸ グループ活動 ―― 39
❹ パソコンを使った遊びのプログラム ―― 39
❺ まとめ ―― 39
平成12年度活動一覧表 ―― 40
❶ 一般利用 ―― 40
❷ 講座・クラブ ―― 43
❸ その他（野外活動、動くこどもの城、講師派遣など） ―― 44

造形事業部

平成12年度の活動 ―― 45
はじめに ―― 45
❶ 一般利用 ―― 45
❷ 講座・クラブ ―― 50
❸ グループ活動 ―― 53
❹ その他の活動 ―― 53
❺ まとめ ―― 53
平成12年度活動一覧表 ―― 54
❶ 一般利用 ―― 54
❷ 講座・クラブ ―― 55
❸ その他 ―― 56
平成12年度プログラム一覧表 ―― 58
❶ 親子プログラム ―― 58
❷ 子どもだけのプログラム ―― 59

音楽事業部

平成12年度の活動 ―― 61
はじめに ―― 61
❶ 一般利用 ―― 61
❷ 講座・クラブ ―― 64
❸ グループ活動 ―― 64
❹ 派遣事業 ―― 64
❺ まとめ ―― 64
平成12年度活動一覧表 ―― 66
❶ 一般利用 ―― 66
❷ 講座・クラブ ―― 69
❸ その他(動くこどもの城など) ―― 71

AV事業部

平成12年度の活動 ―― 73
はじめに ―― 73
❶ 一般利用 ―― 73
❷ 講座・クラブ ―― 75
❸ その他 ―― 77
❹ まとめ ―― 78
平成12年度活動一覧表 ―― 79
❶ 一般利用 ―― 79
❷ 講座・クラブ ―― 80
❸ その他(動くこどもの城など) ―― 81

保育研究開発部

平成12年度の活動 ―― 83
❶ 保育事業 ―― 83
❷ 研修事業など ―― 87
❸ まとめ ―― 88
平成12年度活動一覧表 ―― 89
❶ 一般利用 ―― 89
❷ 講座・クラブ ―― 90
❸ その他(講師派遣など) ―― 92

小児保健部

平成12年度の活動 ―― 93
❶ 活動の概要 ―― 93
❷ 診療・相談活動 ―― 94
❸ 講座など集団で行う活動 ―― 95
❹ 研修会などの啓発活動 ―― 96
❺ 研究活動・その他の活動 ―― 97
❻ まとめ ―― 97
平成12年度活動一覧表 ―― 98
❶ 一般利用 ―― 98
❷ 講座・クラブ ―― 98
❸ その他(動くこどもの城) ―― 100

企画研修部

平成12年度の活動 ―― 101
❶ 事業全般にかかわる企画調整 ―― 101
❷ 特別期間などに実施した事業 ―― 102
❸ ボランティアの活動と養成 ―― 105
❹ その他 ―― 107
❺ まとめ ―― 107
平成12年度活動一覧表 ―― 109
❶ 一般利用 ―― 109
❷ ボランティア関係の活動 ―― 110
❸ その他(野外活動など) ―― 114

CONTENTS

劇場事業本部

平成12年度の活動 ―― 115
本年度の主な演目 ―― 115
平成12年度公演演目一覧表 ―― 120
❶ 青山劇場 ―― 120
❷ 青山円形劇場 ―― 121

広報部

平成12年度の活動 ―― 125
❶ パブリック・リレーションズ ―― 126
❷ 宣伝関係 ―― 127
❸ その他 ―― 127
❹ まとめ ―― 127

国際交流担当

平成12年度の活動 ―― 131
❶ 交流プログラム ―― 131
❷ 特別期間などに実施した事業 ―― 133
平成12年度活動一覧表 ―― 134
❶ 一般利用 ―― 134

業務部

平成12年度の活動 ―― 135
業種別の状況 ―― 135
平成12年度の概要 ―― 137
業務の一覧 ―― 137

Ⅲ こどもの城から全国へ

こどもの城から全国へ

平成12年度の活動 ―― 141
❶ こどもの城のセンター機能について ―― 141
❷ センター機能の実践 ―― 141
❸ 今後の課題 ―― 143
平成12年度活動一覧表 ―― 145
❶ 〈動くこどもの城〉プログラム一覧 ―― 145
❷ 〈動くこどもの城〉実施一覧 ―― 147
❸ 講習会 ―― 148
❹ 講師派遣 ―― 148
❺ 助成金事業 ―― 153

利用案内

●開館時間

平　　日　　午後　0時30分～午後5時30分

土・日曜日・祝日
学校の季節休み中　　午前10時00分～午後5時30分

●休館日

毎週月曜日

（月曜日が祝日や振替休日にあたる場合は翌日が休館日となります。
また、学校の季節休み等には休館日が変則となることがあります。）

●入館料

こども 400円（3歳以上18歳未満）　おとな 500円

（20人以上の団体は、こども320円、おとな400円です。
事前にご連絡ください。）

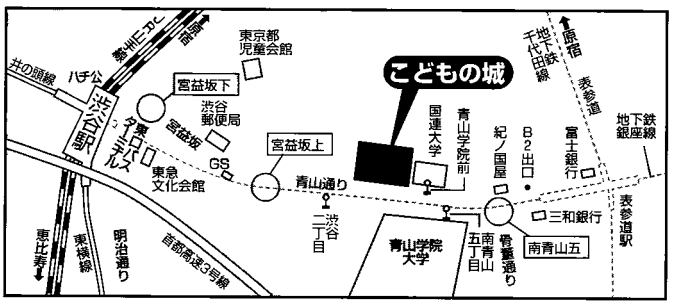
●交通案内

・渋谷駅　　徒歩10分（東口／東急文化会館側）
JR山手線・埼京線／東急東横線・新玉川線／
京王井の頭線／営団地下鉄銀座線・半蔵門線
○渋谷駅（東口バスターミナル）から都営バスが
ご利用いただけます。
新橋駅北口行　「青山学院前」下車すぐ

・表参道駅　　徒歩8分（B2出口）
営団地下鉄銀座線・千代田線・半蔵門線

●駐車場（地下）

有料・約80台収容・車高制限2m
日曜日・祝日は混み合いますので、なるべく電車・バスで
ご来館ください。



財団法人 児童育成協会

こどもの城

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-1
TEL 03-3797-5666(代表) FAX 03-3797-5676
こどもの城ホームページ　http://www.kodomono-shiro.or.jp/

I 事業の概要

事業の概要

平成12年度の活動

〔こどもの城〕は昭和54年('79)の国際児童年を記念して、厚生省（当時）が計画・建設した児童の健全育成のための総合施設である。

国が東京都から譲り受けた、渋谷区神宮前5－53－1の約1万m²の敷地に、昭和56年11月に着工し、以来、4年の歳月をかけ、地上13階、地下4階のミラーガラスに包まれた美しい建物が完成、昭和60年11月1日に開館した。運営は、厚生労働省の委託を受けて㈶児童育成協会があたっている。

❶ 事業と運営の基本的な考え方

〔こどもの城〕の創設にあたって、昭和54年に「こどもの城企画委員会」(葛西嘉資座長)が設けられ、「"こどもの城"(仮称)の基本構想に関する意見」が厚生省児童家庭局長（当時）に提出された。

基本構想では、"子ども"を"未来を担う者"と位置づけ、「豊かで活力のある社会を将来にわたって維持していくため」に、子どもを健やかに育てることの必要性が強調されている。そして、〔こどもの城〕の性格を、①全国の子どもの健全育成に役立たせる施設　②全人としての子どもに接近する施設　③先導的・開拓的なプログラムを大胆に試行する施設　④子どものニーズに柔軟に対応する施設――とした。

厚生労働省と㈶児童育成協会は、この基本構想を踏まえ、協力しながら〔こどもの城〕の建設にあたり、運営に取り組んできた。現在も、社会環境の変化に柔軟に対応しつつ、基本構想に示された理念を大切に、より一層の充実をめざして児童のための福祉・文化活動を展開している。

〔こどもの城〕は、児童だけでなく、親をはじめ児童の福祉・文化関係者、研究者、教育者など、子どもの幸せを願うあらゆる人々が利用できるように開かれている施設である。

子どもを主な対象とした〈あそび〉のプログラムを中心にした活動ばかりでなく、大人も視野に入れた子育て支援の活動や、育児に関する研究・研修活動にも力を入れるなど、幅広い活動を展開している。

❷〔こどもの城〕の概要

〔こどもの城〕には、「こども活動エリア」と総称される体育、プレイ、造形、音楽、AV(オーディオ・ビジュアル）の各部門のほかに、保育研究開発、小児保健、企画研修、劇場事業(青山劇場・青山円形劇場)、広報などの部門がある。そして、それらの部門が相互に協力して、①芸術・文化・科学・スポーツなどの活動による児童の健全育成　②児童福祉関係者の研修・現任訓練　③児童福祉に関する研究・開発　④国際交流――といった各種機能を併せ持つ総合施設としての〔こどもの城〕の運営にあたっている。

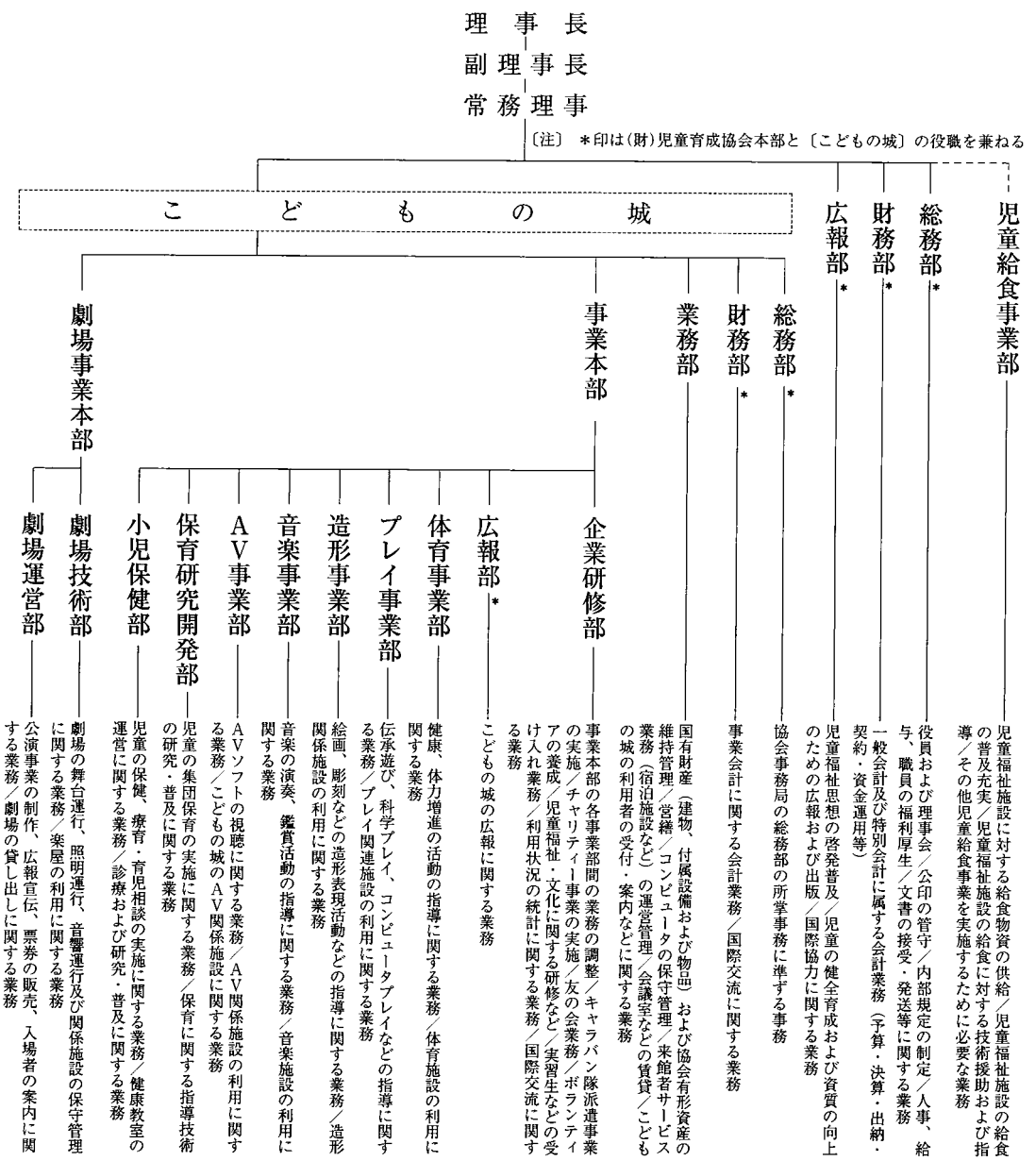
(ア) こども活動エリア

〔こどもの城〕の活動は、①一般来館児・者を対象とした活動　②団体を対象としたグループ活動　③講座・クラブ活動――の3つを柱としている。

「一般来館児・者を対象とした活動」は、〔こどもの城〕に来館した子どもやその家族が楽しみながら参加、体験できる〈あそび〉のプログラムで、毎日「こども活動エリア」で行われている。〈あそび〉をとおして、出会いと発見、そして仲間作りができるように工夫されたもので、初めての子どもでも自然に〈あそび〉の輪のなかに入って楽しむことができる。

平常期間の平日は、スタッフとのふれあいを大切にしたきめ細かいプログラムを、土・日曜日・祝日には、より多くの子どもたちが楽しめるようにプログラム内容などを工夫して対応している。また、学校の季節休み（夏休み、冬休み、春休み）と児童福祉週間（ゴールデンウイーク）、開館記念日（11月1日）の前後を特別期間として、各部門が協力して、たくさんの人が参加できる大型

【〔こどもの城〕組織機構図】（平成13年3月31日現在）



部	職員数 一般	嘱託	計	部	職員数 一般	嘱託	計	部	職員数 一般	嘱託	計	部	職員数 一般	嘱託	計
総務	6	0	7	事業本部	1	0	1	音楽事業	4	0	4	劇場技術	6	0	6
財務	6	0	7	企画研修	8	0	8	AV事業	6	0	6	劇場運営	8	0	8
広報	3	0	3	体育事業	7	1	8	保育研究開発	8	1	9	劇場事業本部	2	0	2
業務	20	0	20	プレイ事業	8	0	8	小児保健	4	0	4				
				造形事業	4	0	4					合計	101	2	103

【(財)児童育成協会役員】(平成12年3月31日現在)

役職	氏名	
理事長	高峯一世	
副理事長	小山敬次郎	さくら総合研究所顧問
常務理事	本橋紘	
理事	石野清治	資生堂相談役
理事	大野出穂	
理事	上村一	(社福)恩賜財団母子愛育会理事長
理事	品川正治	日本火災海上保険(株) 相談役
理事	篠原徹	日本商工会議所常務理事
理事	成瀬健生	日本経営者団体連盟常務理事
理事	山口規容子	総合母子保健センター愛育病院院長
監事	秋山昭八	弁護士
監事	藤間秋男	公認会計士

のプログラムを集中的に実施している。

「グループ活動」は、保育所、幼稚園、小学校、ハンディキャップを持った子どものグループなどを対象に、〔こどもの城〕ならではの〈あそび〉のプログラムを提供する活動で、平日の午前中に行っている。グループ活動のプログラムは、活動の中で個が全体に埋没せず、個としての存在も発揮できるよう、一般来館児・者や講座・クラブ活動の経験をもとに作り上げてきたものある。

利用法としては、事前に打ち合わせを行い利用グループの要望を取り入れて実施している。

「講座・クラブ」は、平日を中心に〔こどもの城〕の整った施設・設備を生かして行っている。幼児と親が一緒に受講するもの、就学前の幼児を対象とするもの、小学生から高校生までを対象とするもの、高校生から一般成人、さらに専門家を対象にするものなど50種類を超える講座・クラブを開講している。

(イ) その他の活動

「こども活動エリア」の各部門のほかに、先駆的な保育の実践と保育士などの研修事業を主とする保育研究開発部門、子どもの心や体の健康、育児相談などの家庭支援に取り組む小児保健部門、円滑な事業の推進をはかるための調整やボランティアの養成とコーディネート、全国の児童館などで子どもに遊びを指導する職員などの研修事業を担当する企画研修部門、機関紙「こどもの城ニュース」の編集などを行う広報部門、ホテルや研修室などの運営にあたっている利用者サービス部門などがあり、〈あそび〉のプログラムをとおして直接子どもたちとふれあう活動だけでなく、研究や研修など幅広い活動を展開している。

(ウ) 青山劇場・青山円形劇場

あらゆる世代の人間が、それぞれの視点で楽しめ、見終わったあとに対話が生まれるような、真の意味での“ファミリー向け”の演目を上演する青山劇場・青山円形劇場の2つの劇場がある。自主公演はもとより、貸し劇場の場合でも、企画の内容を吟味し、〔こどもの城〕の劇場としてふさわしいものを選んで上演している。

❸〔こどもの城〕の組織機構と役員

〔こどもの城〕の組織機構と(財)児童育成協会の役員等は別表のとおりである。

❹ 平成12年度の事業活動の概要

(ア) 入館者数

本年度の年間入館者数は、一般来館児・者426,291人、劇場入場者365,134人。これに、研修会議室やホテル関係の利用者を加えた総数は930,614人である(13ページ参照)。

(イ) 一般来館児・者活動

【平常期間】

体育、プレイ、造形、音楽、AV(オーディオ・ビジュアル)の「こども活動エリア」では、幼児と母親の来館の多い平日は、親子でゆったり過ごせる環境作りや気軽に参加できるプログラム作りに留意した。父親も含めた親子連れが多い土曜日・日曜日・祝日には、家族一緒に参加できるプログラムの充実をはかると同時に、小学生以上の子どもも満足できるようにプログラムの質にも配慮した。

また、日替わりプログラムや季節行事によって、活動に変化をもたせ、新鮮な魅力、効果を出すように努めた。

【特別期間】

学校の季節休み(夏休み、冬休み、春休み)の期間および児童福祉週間(ゴールデンウィーク)、開館記念日(11月1日)の前後を特別期間として、多数の来館児・者が同時に楽しめるプログラム作りと効率的な施設利用の工夫をした。

また、屋上など全館を利用した大がかりな企画を各部門協力のもとに開催し、来館児・者に魅力ある充実したプログラムを提供すると同時に、今後に残るプログラム作りに努めた。

夏休み特別期間には、〔こどもの城〕、「東京都児童会館」、「NHKスタジオパーク」、「電力館」、「たばこと塩の博物館」の5館共催で「渋谷スタンプラリー」を実施し、渋谷駅周辺の関連施設と共同でPRに努めるなど連携をはかった。

(ウ) 講座・クラブ

継続的・体系的に〔こどもの城〕を利用できるプログラムとして、講座・クラブなどを実施した。講座・講習会は47種82コースで受講者は1,637人、クラブは7種で受講者数833人となった。

このほか夏休み特別期間、春休み特別期間などには体育、造形、音楽などの各部門で短期集中講座(18種、1,806人受講)を開くとともに、指導者向け講習会(11種、936人受講)を実施した。

講座・クラブの運営にあたっては、地域児童の減少、ニーズの多様化などを念頭に入れ、改廃や新設を行い、きめ細やかな対応に努めた。

(エ) グループ活動

保育所、幼稚園、小学校およびハンディキャップを持った子どもたちのグループを対象に、平日の午前中、「こども活動エリア」各部門のプログラムを提供するもので、本年度は121グループ(総計2,941人)を受け入れた。

(オ) 保育研究開発と小児保健

保育研究開発部は、3つの柱である「幼児グループ」「保育クラブ」および「親子教室」を継続して実施したほか、「育児相談研修会」、「育児相談概論研修会」、「保育セミナー」の開催、「子育て支援のニュースレター」の発行など、保育関係者のための研修プログラムを実施した。

また、児童福祉週間、夏休み、開館記念の各特別期間には一般来館児・者向けのプログラムにも積極的に取り組んだ。

小児保健部は、日常の診療・相談を実施したほか、他部門との連携事業である「健康スポーツ教室〈太りすぎクラス〉」、「母と子のリトミック〈ダウン症クラス〉」、「マタニティ・スイミング」などを継続して実施した。また、小児保健関係者のための「小児肥満のための指導者講習会」、「小児保健セミナー」、0～1歳6ヵ月の子どもとその親を対象とした「赤ちゃんサロン」を実施した。特に「赤ちゃんサロン」は、毎回100組前後の参加者があり、盛況だった。

(カ) 劇場事業

自主公演は、青山劇場で1公演、青山円形劇場で9公演(15演目)を実施した。このうち、青山劇場での「第15回青山バレエフェスティバル」、青山円形劇場での「EASTDRAGON 2000」および「第13回青演劇フェスティバル」は、日本芸術文化振興基金の助成対象に選ばれた。

劇場の貸与は青山劇場が30件、青山円形劇場が45件で、青山劇場の国費による工事期間を除けば77.4%、青山円形劇場は94.7%の稼働率であった。(117～120ページに公演名一覧)。

(キ) 健全育成活動のセンター的役割としての各種の普及・協力活動

「事業と運営の基本的な考え方」の項でも述べたように、既成のプログラムを越えて実践活動の中から生まれた先駆的で実験的なプログラムを全国的に普及して行く役割を年々充実させてきている。

〔こどもの城〕の活動の趣旨・内容を広く知ってもらい、関係団体との交流をすすめるために各種の事業を行った。

主なものは、「児童厚生員等実技指導講習会」(5月、10月、平成13年1月)、「小児肥満のための指導者講習会」(9月、平成13年3月)、「小児保健セミナー」(10月)、「保育セミナー」(8月)などである。

また、前年度に引き続き各地の児童厚生施設との連携によって、地域の健全育成活動に対し巡回による支援活動と実技指導を行う〈動くこどもの城〉事業を24ヵ所で実施した。さらに、各地の児童健全育成関係者の研修会などに、職員が講師として招かれ〔こどもの城〕のプログラム運営の実際と理念の普及に努めた。

(ク) 利用者サービス事業

〔こどもの城〕を利用する人への便宜をはかるため、ホテル、売店、自動販売機および駐車場の営業を行い、サービスに努めた。また、各種の研修や会議などに研修室を貸与し、多くの関係者に利用された。

(ケ) その他の活動

【広報】

〔こどもの城〕の事業の主旨、活動内容の周知および来館児・者増をはかることを目的として、各種の広報活動を行った。活動の主な柱は、①「こどもの城ニュース」

の発行（年11回）　②各種広報資料（ちらし、ポスター、パンフレットなど）の作成　③月刊誌「こども未来」（財）こども未来財団発行）をとおして〔こどもの城〕の活動紹介　④新聞・テレビ・雑誌など各媒体への情報提供――などである。本年度の新聞・テレビなどの取材対応は、外国からのものを含めて217件であった。

【国際交流】

外部団体、大使館などの協力により、4月に国連「新しい世紀　子どもの願い」展、夏休みには「キンダー・フィルム・フェスト・ジャパン」、3月の上旬には恒例となった東京・横浜地区のインターナショナルスクールの子どもたちの合同美術作品展「アートスケープ展」3月末には「日本・ノルウェー友好こども絵画展～瞳をひらいて」を開催するなど子どもたちの自然な国際交流をめざした。また、8月には「こどもの城合唱団」引率を含め181人が北京、上海を訪れ現地の子どもたちと友好を深めた。

【こどもの城友の会】

〔こどもの城〕の活動をより理解し、利用してもらうために家族単位で参加する組織。「友の会通信」を発行し、会員との交流を深めるなど、より魅力的な「友の会」をめざした。常に加入の呼びかけを行い、平成13年3月末日現在の会員数は1,783家族である。

【実習生・研修生の受け入れ】

大学などの要請に応じて、〔こどもの城〕の各部門をフィールドとし、その活動内容を研修対象とする実習生・研修生を受け入れている。本年度は、実習生50人を受け入れた。

【チャリティ事業】

ハンディキャップを持つ子どもや児童養護施設の児童などを対象にチャリティ事業を行っている。本年度は、延べ12回、117人を青山円形劇場ならびに〔こどもの城〕の催しに招待した。

❺ センター的役割を果たすために

〔こどもの城〕は、10年以上にわたって、従来の児童館などの枠を越えた幅広い福祉・文化の総合施設をめざし、さまざまな試みを繰り返してきた。その間に蓄積してきた知識・経験は少なくない。芸術・文化・科学・スポーツなど多方面から、〈あそび〉に内包されるさまざまな要素をそれぞれの専門分野の視点で見直し、新しい命を吹き込んできた。

これらのノウハウを広く公開し、児童の健全育成に役立ててもらおうと、平成6年度から国の助成を受けて「キャラバン隊派遣事業」（通称〈動くこどもの城〉）が始められた。さらに、前年度から〔こどもの城〕の活動プログラムをまとめた「活動事例集」の発行が加わり、充実した活動が展開されるようになった。

〈動くこどもの城〉は、〔こどもの城〕で開発・実施しているプログラムを持って全国の児童館などの児童厚生施設や文化センターなどに出向き、子どもたちに〈あそび〉のプログラムを提供すると同時に、児童厚生員や保育士などを主な対象にした講習会を開催し、プログラム（運営）の実際を紹介する活動である。〔こどもの城〕のさまざまなノウハウを公開する場であると同時に、全国の児童館・児童センターとの交流・情報交換を進める場として評価されている。本年度は24ヵ所で実施した。

さらに、〈動くこどもの城〉とは別に、講習会・研修会の講師やプログラムの指導を依頼されることが増えている。〔こどもの城〕の活動が評価された結果と自負し、日常活動に支障をきたさない範囲で、これらの依頼にも積極的に対応するようにしている。本年度は、117件の講師派遣を行った。

このほかにも「こどもの城ニュース」の全国の児童館への配付、保育研究開発部門の「ニュースレター」の発行など、さまざまな形で〔こどもの城〕からの情報が発信されるようになった。

❻ 開館時間・入館料（こども活動エリア）

(ア)　平常期間

〔こどもの城〕の「こども活動エリア」の開館時間は以下のとおりである。

平　日	午後0時30分～午後5時30分
土曜日 日曜日 祝　日	午前10時00分～午後5時30分
月曜日	休館（祝日または振替休日にあたるときは開館し、翌火曜日が休館。開館時間は午前10時～午後5時30分）

(イ)　特別期間

学校の季節休み（夏休み、冬休み、春休み）は特別期間とし、曜日にかかわりなく、午前10時から午後5時30分まで開館した。

夏休み特別期間（7月20日～8月31日）は、昨年度より毎週月曜も開館、全期間を通じて開館とし9月5、6、7日を振り替えて休館とした。冬休み特別期間は12月23

日から1月8日で、12月25日は月曜日のため休館、12月29日～1月2日を年末年始の休館とし、1月3日は午後0時30分に開館した。また、春休み特別期間は3月24日から4月5日で全期間開館し、期間中の月曜日を4月6・10日に振り替えて休館した。

また、本来の児童福祉週間は5月5日からの1週間であるが、4月29日「みどりの日」から5月5日「こどもの日」までのゴールデンウィークを〔こどもの城〕の児童福祉週間特別期間とし、厚生省（当時）、(社) 全国児童館連合会（当時）との共催で「こどもフェスティバル」などの特別プログラムを実施した。

さらに、11月1日の〔こどもの城〕開館記念日をから11月5日まで開館記念「ファミリーウィーク」を全館で実施した。児童福祉週間と開館記念特別期間の開館時間は平常期間と同じとした。

また、横浜開港記念日（6月2日）、千葉県民の日（6月15日）、川崎市制記念日（7月1日）、東京都民の日（10月1日）、埼玉県民の日（11月14日）は、午前10時に開館し、多くの来館児・者を迎えた。

(ウ) 入館料

一般		18歳未満	400円
			(保護者に同伴される3歳未満児は無料)
		18歳以上	500円
回数券		18歳未満	12枚つづり4,000円
		18歳以上	12枚つづり5,000円
団体	(20人以上)	18歳未満	320円
		18歳以上	400円
「わくわくパス」			1,800円
夏休みパスドキドキパス			1,500円
平日ゆうゆうパス			3,000円

(エ) その他

例年どおり、5月5日の「こどもの日」は18歳未満の入館料を無料とした。しかし、11月1日の「こどもの城開館記念日」は、月曜日のため休館とした。

平成12年度活動一覧表

入館者数

	一般利用者			劇場利用者			その他	計
	有料		総数	青山劇場	青山円形劇場	小計		
4月	大人	8,358	26,687	19,740	8,043	27,783	12,275	66,745
	子ども	8,258						
	団体	1,962						
	招待など	8,109	推計（30,871）					推計（70,919）
5月	大人	10,479	28,549	26,547	9,592	36,139	14,445	79,133
	子ども	7,164						
	団体	662						
	招待など	10,244	推計（33,796）					推計（84,380）
6月	大人	9,044	26,931	35,444	6,817	42,261	13,834	83,026
	子ども	7,108						
	団体	1,174						
	招待など	9,605	推計（31,459）					推計（87,554）
7月	大人	11,207	29,932	35,708	7,096	42,804	12,694	85,430
	子ども	10,436						
	団体	1,218						
	招待など	7,071	推計（35,543）					推計（91,041）
8月	大人	24,958	69,535	25,663	7,685	33,348	9,291	112,174
	子ども	26,883						
	団体	6,642						
	招待など	11,052	推計（82,021）					推計（124,660）
9月	大人	8,887	23,361	11,672	5,573	17,245	11,291	51,897
	子ども	6,396						
	団体	516						
	招待など	7,562	推計（27,811）					推計（56,347）
10月	大人	8,008	23,594	20,902	8,197	29,099	10,700	63,393
	子ども	6,201						
	団体	1,028						
	招待など	8,357	推計（27,607）					推計（67,406）
11月	大人	9,282	25,866	38,992	7,447	46,439	11,559	83,864
	子ども	7,397						
	団体	1,252						
	招待など	7,935	推計（30,512）					推計（88,510）
12月	大人	5,946	18,049	13,193	9,110	22,303	9,109	49,461
	子ども	5,728						
	団体	689						
	招待など	5,686	推計（21,026）					推計（52,438）
1月	大人	8,970	26,539	11,318	7,564	18,882	9,386	54,807
	子ども	7,374						
	団体	4,626						
	招待など	5,569	推計（31,029）					推計（59,297）
2月	大人	8,628	24,157	2,963	5,695	8,658	11,261	44,076
	子ども	6,682						
	団体	2,334						
	招待など	6,513	推計（28,477）					推計（48,396）
3月	大人	10,690	40,787	31,398	8,775	40,173	12,891	93,851
	子ども	11,209						
	団体	6,572						
	招待など	12,316	推計（46,139）					推計（99,203）
計	大人	124,457	363,987	273,540	91,594	365,134	138,736	867,857
	子ども	110,836						
	団体	28,675						
	招待など	100,019	推計（426,291）					推計（930,161）

注）一般利用者の推計は，3歳未満児の推定入館者数を含めたもの。
「招待など」は、招待と講座・クラブ受講生を合算したもの。
「その他」は、ホテル・研修室等の利用者。

❷ グループ活動実施状況

			保育所	幼稚園	小学校	中学校・高校	養護学校	盲学校	小学校特殊学級	中学校特殊学級	自主保育グループ	計
件数			31	33	15	1	17	2	19	2	1	121
月別内訳	4月			1	1							2
	5月		1	4	2		1	1				9
	6月		3		4		2		3	2		14
	7月		1						4			5
	8月											
	9月			2		1	3		1			7
	10月			1	1		7					9
	11月		3	1	4		1		1			10
	12月		4	1							1	6
	1月		6	4								10
	2月		8	11	3		2	1	7			32
	3月		5	8			1		3			17
地域別内訳	東京都	区	31	31	14		11	2	13		1	103
		市			1	1	2		1			5
	他府県			2			4		5	2		13
参加児童数別内訳	10未満		2	1		1	8	2	14	2		30
	10～19		19	6	1		6		4		1	37
	20～29		10	5	9		2		1			27
	30～39			5			1					6
	40～49			3	3							6
	50～59			3								3
	60～79			6	1							7
	80～99			4	1							5
	100～149											
	150以上											
児童参加	延べ人数		558	1,445	506	8	223	10	154	5	15	2,924
	1件当たり人数		18.0	43.8	33.7	8.0	13.1	5.0	8.1	2.5	15.0	24.2
引率者数			97	187	44	8	197	8	85	2	1	629
付き添い者数			33	27	15		29	10	10	1	2	127
活動部門	体育		4	10	1		1		1			17
	プレイ		17	13	6		3		3			42
	造形		2	15	5		1		6		1	30
	音楽		4	15	3	1	12	2	8	2		47
	AV		5	7	8		1		1			22
	プレイ自由		31	31	12		3	2	15		1	95
	AV自由			2	2							4

注）「活動部門」は、1つの団体が複数の部門を利用するケースがある。

❸ 講座・クラブなど

〈講座〉

部門	プログラム名	対象	コース	総定数
体育	親子水泳	幼児・親	1年 2コース	60（組）
	幼児水泳	〃	〃 5〃	270（人）
	幼児体育	〃	〃 3〃	120
	小学生水泳	小学生	〃 7〃	380
	シニア・スイミング	小・中学生	〃 2〃	60
	シニア・スイミング・フレッシュ	〃	〃 1〃	30
	小学生体育	小学生	〃 2〃	60
	ジュニア新体操	〃	〃 1〃	35
	シニア新体操	小・中学生	〃 1〃	35
	手足の不自由な子の水泳	〃	〃 1〃	15
プレイ	キッズクラブ	小学生	〃 1〃	30
	ユースクラブ	小・中学生	〃 1〃	40
造形	こどもクリエイティブクラブ（クレイワーク）	小・中学生	〃 1〃	20
	〃 （ゆかいな造形）	〃	〃 1〃	20
	〃 （プリントワーク）	〃	〃 1〃	20
	〃 （絵本の世界へ）	〃	〃 1〃	20
	〃 （ハンズワーク）	小・中・高校生	〃 1〃	20
	映・造ワークショップ（AVとの共同）	小・中・高校生	〃 1〃	10
音楽	おかあさんもいっしょトミック	幼児・親	〃 3〃	60（組）
	リズム・ムービング	幼児	〃 2〃	32（人）
	リズム・ムービング＆パーカッション	小学生	〃 1〃	15
	合唱講座	〃	〃 1〃	30
	児童合唱団	合唱講座修了者	〃 2〃	90
	ガムラン講座	小・中・高校生	〃 1〃	15
	ガムラングループ	ガムラン講座修了者	〃 1〃	15
	三味線	小・中・高校生	〃 3〃	36
	和太鼓グループ	小・中・高校生	〃 1〃	12
	レッツ・プレイ・サンバ　初	小	〃 1〃	10
	レッツ・プレイ・サンバ	小・中・高校生	〃 1〃	10
	シンセワーク初級	中・高校生	〃 1〃	8
	エレクトリック・アンサンブル	〃	〃 1〃	8
	パーカッション・アンサンブル	小・中・高校生	〃 1〃	15
	混声合唱	高校生以上	〃 1〃	15
保育	幼児グループ	幼児	〃 1〃	24
小児保健	健康スポーツ教室〈太りすぎクラス〉	小学生	〃 1〃	20
	親と子のリトミック〈ダウン症クラス〉	ダウン症児・母親	〃 1〃	15（組）
合計	36種		57コース	1,716

〈クラブ〉

部門	プログラム名	対象	コース	総定数
体育	ダイナミック・ヘルス・クラブ	一般	通年 1コース	会員180（人）
	レディース・コース	一般女性	〃 1〃	150
プレイ	パソコンクラブ	小・中・高校性	1年 1〃	30
保育	保育クラブ	幼児・親	〃 1〃	400
企画研修	L．I．T．（高校生ボランティア）	高校性	〃 1〃	30
合計	5種		5コース	790

〈講習会（1か月以上のもの）〉

部門	プログラム名	対象	コース		総定数
体育	幼児・母親体育Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	幼児・母親	3か月	3コース	150（人）
	母と子のすくすくランドⅠ・Ⅱ・Ⅲ	〃	〃	3 〃	60
	ぱちゃぱちゃファミリースイムⅠ・Ⅱ・Ⅲ	〃	〃	3 〃	90
	成人集中水泳	一般	通　年(月7回)	12 〃	240
プレイ	プレイ小学生パソコン教室Ⅰ（初級）	小学生	2か月	2 〃	40
	小学生パソコン教室Ⅱ（中級）	パソコンⅠ修了者	〃	1 〃	20
音楽	音楽おんがく星みつけた	幼児・親母	3か月	3 〃	90（組）
	おとなのためのリズム・ムービング	一般	4か月	1 〃	15（人）
保育	親子教室	幼児・親	3か月	3 〃	45
小児保健	マタニティ・スイミング	妊婦（16週～）	通　年(月7回)	1 〃	315
企画研修	手話講座	高校性以上	5か月	2 〃	60
合計	11種			34コース	1,125

〈短期集中講習会（1か月未満のもの）〉

部門	プログラム名	対象	コース		総定数
体育	夏休みこども集中水泳	幼児・小・中学生	5日間	4コース	180（人）
	春休みこども集中水泳	〃	〃	2 〃	90
	夏休み体操教室　ガンバ　'2000	小学生	〃	1 〃	30
	ハッスル　'2000	水泳7級以上の講座生	3日間	1 〃	30
プレイ	小学生パソコン教室スペシャル	小学生	5日間	1 〃	20
造形	夏休み1日造形教室	小・中・高校生	1日間5種	25 〃	375
音楽	作って合奏　手作り楽器	小・中学生	〃　4種	21 〃	630
AV	映像体験ワークショップ	小・中・高	2種	32 〃	1,280
	プロフェッショナルビデオ講習会	高校性以上	2日間	1 〃	50
小児保健	夏休みこども1日ドック	小・中学生	1日間	1 〃	10
企画研修	ボランティア講習会	18歳以上	11日間	2 〃	100
	女性ボランティア講習会	一般女性	4日間	1 〃	20
合計	11種	〃		92コース	2,815

〈専門指導者向け講習会等〉

部門	プログラム名	対象	コース		総定数
AV	現代アニメーション講座	一般・指導者	1日間（年）	1コース	30（人）
保育	育児相談研修会	育児相談担当者	3日間	1 〃	50
	育児相談概論研修会	保育関係者	1日間	1 〃	130
	保育セミナー	〃	2日間	1 〃	150
小児保健	小児肥満のための指導者講習会	養護教諭等	1日／2日	2 〃	100
	小児保健セミナー	保育士・保健婦等	1日間	1 〃	100
企画研修	こどもの城児童厚生員等実技指導講習会	児童厚生員等	2泊3日等	3 〃	150
	おりがみにつよくなる講習会	保育士・児童厚生員等	1日間	2 〃	120
合計	7種			12コース	830

❹ 視察・見学実績

年度		都道府県・市区町村の本庁その他の行政部局，公共団体		児童館，保育所，幼稚園，学校，施設，サークル，これらの団体		海外からの視察・見学		その他		計	
昭和	60年度	(100)	1,122	(100)	1,578	(22)	1,578	(22)	1,578	(22)	1,578
	61年度	(121)	714	(192)	4,085	(52)	4,085	(52)	4,085	(52)	4,085
	62年度	(107)	439	(123)	2,437	(36)	2,437	(36)	2,437	(36)	2,437
	63年度	(91)	598	(69)	770	(30)	770	(30)	770	(30)	770
平成	元年度	(72)	541	(71)	931	(10)	931	(10)	931	(10)	931
	2年度	(65)	605	(27)	292	(8)	292	(8)	292	(8)	292
	3年度	(63)	417	(47)	705	(11)	705	(47)	705	(47)	705
	4年度	(78)	585	(62)	1,038	(9)	1,038	(62)	1,038	(62)	1,038
	5年度	(69)	698	(75)	1,182	(14)	1,182	(75)	1,182	(75)	1,182
	6年度	(96)	782	(73)	1,251	(13)	1,251	(73)	1,251	(73)	1,251
	7年度	(136)	956	(101)	1,542	(19)	1,542	(101)	1,542	(101)	1,542
	8年度	(63)	402	(188)	1,691	(19)	1,691	(188)	1,691	(188)	1,691
	9年度	(89)	723	(134)	1,335	(14)	1,335	(134)	1,335	(134)	1,335
	10年度	(63)	474	(150)	1,470	(26)	1,470	(150)	1,470	(150)	1,470
	11年度	(83)	863	(171)	975	(18)	177	(18)	177	(18)	177
平成12年度	4月	(4)	43	(3)	4	(0)	0	(2)	2	(9)	49
	5月	(8)	41	(6)	14	(2)	8	(4)	8	(20)	71
	6月	(10)	61	(18)	34	(0)	0	(2)	2	(30)	97
	7月	(11)	102	(13)	52	(1)	8	(1)	22	(27)	164
	8月	(2)	25	(16)	46	(0)	0	(3)	5	(21)	76
	9月	(6)	123	(11)	25	(1)	4	(2)	2	(20)	154
	10月	(7)	61	(10)	88	(2)	8	(4)	8	(24)	165
	11月	(7)	30	(23)	123	(4)	62	(1)	1	(35)	216
	12月	(9)	56	(13)	48	(1)	7	(1)	1	(24)	117
	1月	(3)	11	(2)	3	(1)	21	(3)	3	(9)	38
	2月	(9)	41	(19)	74	(0)	0	(2)	2	(30)	117
	3月	(9)	22	(20)	85	(2)	10	(1)	1	(32)	118
	合計	(85)	616	(154)	596	(14)	128	(27)	37	(280)	1,377
類計		(1,381)	10,535	(1,734)	21,878	(315)	2,940	(293)	3,004	(3,726)	38,357

※「海外からの視察・見学」：韓国，中国，台湾，タイ，インド，アメリカ，その他
「その他」：中央官庁，中央団体，会社など

1年の歩み

月　日	事　項
平成12年	
4.1～3	五線譜の中の動物たち「パリのいんげん豆Ⅱ」（青山円形劇場）
4.1～2／9～10	「スプリングアドベンチャー2000」（屋上ふしぎが丘）
4.8-14	「音楽の玉手箱」（青山円形劇場）
4.22-5.21	「国連　新しい世紀子どもの願い展」（アトリウム・ギャラリー）
4.28-5.7	ゴールデンウイーク（児童福祉週間）特別期間「スパースターゲッター2000」（音楽ロビー） 「人形劇フェアー」（4.29－ 30　研修室）
5.3-5	こどもフェスティバル（青山円形劇場）、親子工房（保育室）、おはなし広場（研修室）
5.3-7	「キャッスルクエスト2000」（屋上ふしぎが丘）
5.14	マタニティーコンサート」（青山円形劇場）
6.3-4	こどもの城友の会ファミリーキャンプ（横瀬ファミリーパーク）
6.17-25	「走れ！キャッスルトレイン」（フリーホール）
6.26-29	「EASTDRAGON」（青山円形劇場）
7.20-9.3	「感覚探検、見て、聴いて、触って遊ぼう！」（アトリウム・ギャラリー）
7.27-8.3	こどもの城合唱団夏期公演・合宿（上海・北京）
7.28-8.5	「キンダー・フィルム・フェスト・ジャパン」（スタジオＢ）
8.1-4	ことばバラエティーショー「月猫えほん音楽会」（青山円形劇場）
8.11-13	「第15回青山バレエフェスティバル～ラストコンサート」（青山劇場）
8.12-15	「ウォーターアドベンチャー」（屋上ふしぎが丘）、親子工房（保育室）
8.13-15	第６回人形劇カーニバル（青山円形劇場・研修室）
8.21-27	こどもの城・きりんファミリー劇場「トイダンス－人形たちと７つの不思議な箱」（青山円形劇場）
8.26-27	「集まれ探検隊」（フリーホール）こどもの城合唱団15周年記念公演「ずっと友だち」（青山円形劇場）
10.7-15	「走れ！キャッスルトレイン」（フリーホール）
10.9-11.8	「第13回青山演劇フェスティバル」（青山円形劇場）
10.28-11.19	「おりがみカーニバル」（アトリウム・ギャラリー）
11.1	「赤ちゃん大集合」（研修室ほか）
11.1-12.5	第15回造形スタジオ展「遊びと造形発想展」（造形スタジオ）
11.3-5	「だんだん村の秋祭り～遊びの屋台大集合」（屋上ふしぎが丘）、親子工房(保育室)、人形劇フェアー（フリーホール）
12.1	「三味線の夕べ」（青山円形劇場）
12.8-26	「ア・ラ・カルト」（青山円形劇場）
12.10	水泳記録会（プール）
12.27-1.9	キリンファミリーオペレッタ「まんぷく村のハムスターキック５」（青山円形劇場）
1.3-8	2001年あそびの初場所～はっけよいでお正月」、凧づくりワークショップ（アトリウム・ギャラリー）
1.4	新春もちつき大会（ピロティー）
1.13-14	「おひさま・おはなしコンサート」（青山円形劇場）
1.27-2.4	「保育展」（アトリウム・ギャラリー）
3.5-7	「Amanda Miler　沈黙の対話」（青山円形劇場）
3.11	新体操発表会（体育室）
3.17-20	「ぼくらのサウンド2001」（青山円形劇場）
3.21-31	五線譜の中の動物たち「パパゲーノ」（青山円形劇場）
3.24-4.8	「ニッサンゆかいな絵本と童話展」（アトリウム・ギャラリー）
3.24-25	「発見！遊びの宝島」
3.26-4.14	「日本・ノルウェー友好こども絵画展～瞳をひらいて」（フリーホール他）
	オープニングセレモニーに皇后陛下、ノルウェー王国ソニア王妃閣下ご来館

II 各部の活動

体育事業部

平成12年度の活動

25m×5コースのプール、バスケットコート約一面の体育室、体力測定を行う健康開発室、マシントレーニングなどができるトレーニングジム。このスペースを利用して、一般来館者へのプログラムである一般利用。6カ月の乳児から大人までが対象である水泳、体操の講座・講習会。6種類のプログラムが用意してあるグループ活動。大人のためのスポーツクラブであるダイナミック・ヘルス・クラブ（D・H・C）を行っている。夏のキャンプや冬・春のスキースクールなどの野外活動、そして他事業部との協力事業を行っている。今年のメインプログラムの「みがけ！みんなの運動センス」では運動にたいするセンスに着目し、自分に備わっているセンスをスポーツ遊びを通じて気づかせることを目的とした。センスという言葉は子どもたちにとって難しく、理解してスポーツ遊びに参加するのは困難である。そこで子どもたちには上手にできる「方法」や「やり方」として説明し行った。

❶ 一般利用

(ア) 平常期間

平常期間の一般利用は土・日曜日と祝日に、プール・体育室・健康開発室にて行っている（平日の特定時間にもプールを一般解放）。体育室の活動は、さまざまなスポーツ活動と触れ合い、スポーツの楽しさや喜びを感じたり、親子のコミュニケーションがとれる場になるように考えられている。幼児から中学生までの参加があり、対象としている幅が広いが、練習内容に工夫をこらしている。最近では小学生の高学年や中学生の参加が増えてきたようである。祝日（GW等を除く）にタックルの代わりに腰につけた鉢巻きのようなタグを取る、「タグラグビー」を行ってきている。タックルをしないので安全なラグビーができる。特に小学校高学年は少し練習をするとパスを回したりステップを踏んで敵をかわしたりラグビーのゲームが展開できる。

【体育の日】

サッカー2000と題してゲームを行った。対象は小学生1・2年生の部、3・4年生の部、5・6年生の部に分け一般来館者の中からチームを作る（個人エントリー）とあらかじめ5人でチームを作りエントリーする（チームエントリー）でトーナメントorリーグ戦を行った。

ルールは〔こどもの城〕ウォールサッカーのルールに基づく。即席チームと思えない程、良いゲームを行ったところもあり、応援している保護者もおおいに盛り上がっていた。

(イ) 特別期間

特別期間も、プールの一般利用と健康開発室での体力測定、体育室のプログラムになるが、体育室のプログラムについては平常期間にはなかなかできない種目を実施したり、その年度の主となるテーマのスポーツをしている。「みがけ！みんなの運動センス」を、GW、夏休み、冬休みを使い運動センスに関するスポーツ遊びを細かくし、掘り下げて冬休み特別期間にテーマを決め実施した。

人間は2本足で立って歩く。歩くときは筋肉や骨だけでなく、いろいろな感覚（センス）を働かせて倒れないよ様にバランスをとったり、速さや力かげんを調節したりしている。このような体を動かすときの働きや体を動かすときの働き、体を動かして運動したりスポーツを楽しむことをセンスとした。誰もが運動センスを持っている。しかし、普段から体を動かして運動センスを生かしている人もいれば、体の奥にしまいこんだままの人もいる。そこで、しまいこまれた「運動センス」つまり「運動センスのカンヅメ」を開けてみようとスポーツあそびを行った。

【ゴールデンウィーク（児童福祉週間）特別期間】

「みがけ！みんなの運動センス」

第1弾　～あけてみよう動きのカンヅメ～

いろいろなスポーツあそびを通じて体に備わっている運動センスを感じ、発見していくプログラムである。ドッジボール、サッカー、タグラグビー、フライングディスク等で必要なスキルや身のこなしなどを検証し、子どもたちにわかりやすく説明をした。ゲームにはいる前の練習では説明したことを取り込んだ。今までやってきたなかで、どうも動きが分からない子どもたちも納得した様子が伺えた。

【夏休み特別期間】

「みがけ！みんなの運動センス」

第2弾　～あけてみよう5つのカンヅメ～

GWではからだに秘めている運動センスを発見、引き出す為のスポーツあそび行った。

今回はスポーツに必要な5つの能力、感覚（センス）「スピード」「タイミング」「バランス」「イメージ」「予測する力」をスポーツあそびを通じて感じてもらった。これらの能力、感覚はあらゆるスポーツに必要不可欠といっても過言ではない。また、オーストラリア、シドニーで開催されるオリンピックにちなんで、5つの種目が体験できる（元来ある種目やシドニーオリンピックから種目になるもの）「オリンピックへレッツゴー」を行った。（※　土曜日、日曜日限定）

○オレ、オレ！ストライカー（サッカー）
○スカッと一発ホームラン（野球、キックベースボール）
○めざせ！海の守り神（ライフセービング）
○自分をためせ！投、跳、走！（陸上競技）
○あみだせ！ウルトラE（トランポリン；毎年恒例になっている山田光明氏の指導）

【開館記念特別期間】

（親子三代楽しくレクリエーション）

毎年レクリエーションを中心に行っているが、今年度はおじいちゃん、おばあちゃんも含む親子三代が楽しめるレクリエーションあそびを行った。一般来館者対応の為、子どもだけの参加や親の参加もできるプログラムを考えた。ただしスピードのあるもの、力をださないとできないものは省く内容とした。

【冬休み特別期間】

「みがけ！みんなの運動センス」第3弾～　あけてみよう、あけてみよう！はじめて感じる第6（缶）感」

夏休み特別期間において行った、スポーツを行う際必要な感覚（センス）、能力、スピード、タイミング、バランス、イメージ、予測の他に、ひらめき、勘、インスピレーションといった違った感覚を探る内容とした。予測にちかいところがあるが、不思議な感覚としてスポーツあそびに導入した。

【春休み特別期間】

「みがけ！みんなの運動センス」第4弾～　鬼ごっこでみがくスポーツセンス～

スポーツには鬼ごっこに類似している箇所が随所見受けられる。スピードのコントロールやフェイント、おとりをだして、その場をしのぐなどスポーツに使える技術が多く含まれている。今回は様々な鬼ごっこに触れてみてスポーツに大切な技術を身につけサッカーやラグビー

特別期間　体育室前

のゲームに使えればと思っていた。小学生低学年には理解が難しかったが、高学年はスポーツに必要な感覚としてとらえゲームに生かされていたようだ。

❷講座・クラブ・講習会

体育事業部の活動の中心である講座は、１歳からの幼児母親水泳から、幼児、小学生、レディーススイミングと幅広い年齢層を対象に指導を行っている。講座ごとに担当を決め、その担当を中心に技術レベルにあわせた班分けをし講座を行っている。受講生には体育水泳の苦手な子どもが多いので、指導は技術的なことと、親や子どもとのコミュニケーションを心掛けながら、個性的な子どもたちに対応している。技術的にも高く、クラブ的な要素のあるシニアスイミングクラスは渋谷区の大会や辰巳プールでの長水路の大会などに挑戦した。

(ア) 親子水泳と幼児のプログラム

「親子水泳」はお母さんのみならず、お父さんも参加出来るようにしたところ、たくさんのお父さんが参加するようになった。水曜日と土曜日にあるこのクラスは、主に２歳児とその親であるが、水を媒体に親と子のコミュニケーションをはかるものである。「幼児水泳」は３・４歳児のクラスと４・５歳児のクラスにわかれている。３・４歳児のクラスは講座当初は泣いて嫌がる子もいるが、水に慣れることとプールを楽しめるような活動を心掛けているので、元気良く活動できるようになっている。４・５歳児のクラスでは泳ぐことだけではなく、水の中で巧みに体を動かせるように進めている。一番上の班では、クロールなどで25メートル泳げる子も多くなってくる。３・４歳児のクラスで受講者が少ないクラスがあるので検討を行った。来年度に時間や対象の変更を行う。

「幼児体育」も３・４歳児のクラスと４・５歳児のクラスに分かれている。一人遊びの世界から少しずつグループでの運動へと移行していき、遊びの中から運動要素を多くしていく。並ぶこともままならなかった子どもたちも３学期には全員でリズム体操ができるようになる。４・５歳児のクラスは球技や器械体操を含め、バランスの良い運動体験、基本的な身体の使い方の習得を目標とした。

(イ) 小学生のプログラム

「小学生水泳」はクロール、背泳ぎから導入してバタフライ、平泳ぎへとつなげていく。以前より早くバタフライ、平泳ぎを始めることでこの２種類の上達が目ざましく、４泳法の習得が以前より早くなってきた。しかし平泳ぎのキックができずに苦労する子どもも多い。今後もより良い指導を目指していきたい。「シニアスイミング」は小学生水泳のステップアップの講座である。ここ数年小学生水泳で上級に合格した子どもにシニアスイミングを勧めている。シニアスイミングの受講生が減少している傾向があったが、昨年度から多く変更する傾向が見受けられる。今後も継続し魅力ある講座にして小学生水泳から移りやすい状況を作りたい。フレッシュの講座は、泳げない中学生や高学年からかなりの泳力を持っている人もいるが、それが良い方向になり初心者の上達も早いようである。人数も多く、人気の講座の一つになっている。この夏には渋谷区の大会や辰巳プールの大会に参加した。週に一度の練習ながらも思っていた以上の成績を上げた。ただ泳ぎ込みは不足しているようで力強さ

水泳教室

が足りなかった。子どもたちも指導者にも新たな課題ができ、今後の練習の指針になった。子どもたちは普段見せない緊張した一面を見せたが、良い自信にもなったようである。辰巳のプールは50ｍの長水路のプールであり、普段の25ｍプールとは違い、なかなか泳ぐ機会も無く、また日本選手権も行っているそのプールで泳ぐことは子どもたちにとって良い経験になっている。

「小学生体育」はそれぞれのクラスで目標を作りそれに向かっていった。１学期の初めと３学期の終わりに体力測定を実施し、その指針にした。測定値も上がり、続けて受講した結果がでていた。この講座には運動が得意でない子どもが多く、技術的な練習をするための基礎的な体力トレーニングを行うこともあった。運動体験の少ない子が増えてきたように感じる。また水泳と体育の両講座をとれるシステムにしてあるが、都合の良い曜日が選べるので受講者が増えている。バランスのとれた体力作りを目指している。

「新体操」は、手具を扱う巧ち性、柔軟性、ジャンプ等で必要な瞬発力を要求される。ジュニアとシニアのクラスに分かれているが、ジュニアは基礎的な運動（柔軟）から手具を使い、簡単な演技の練習を行う。シニアでは、それから一歩進めて個人や団体の演技を、自分たちで作る。ここでは自主性や表現力等を育めるようにしている。大会として東京ジュニア新体操選手権に参加した。個人、団体、チャイルドの部にエントリーした。毎日練習しているクラブの子どもとは差があるが、刺激を受け帰ってくる。年々大会にも慣れてきて堂々と演技できるようになっている。

「手足の不自由な子の水泳」ではボランティア・リーダーと一緒に水慣れから始め、徐々に自分にあった泳ぎを見つけられるように指導している。水を怖がっていた子どもも水のなかで楽しく活動できるようになり、長く継続している子はかなりの体力を持ってきている。

(ウ) 水泳記録会と体操発表会

「水泳記録会」は１年間の総まとめというような意味と集中して泳ぐ緊張感を味わうことで、一回の泳ぎの大切さを知ってもらう意味がこめられている。幼児、小学生、シニアスイミングの受講生が日々の練習の成果を発揮する場であるのは勿論のこと、他の曜日で練習している子たちとの交流、刺激が生まれれば良いと考えている。日頃は人の泳ぎをあまり見ていない子も、真剣な顔で上手な子どもの泳ぎを見ている。その後の練習でも参加した子の顔つきが変わっていることもあり、大会の意義を感じる。

「体操発表会」は１部：幼児体育の部、２部：新体操の部とし、演技発表をした。幼児はほのぼのとした感じであるが、子どもの顔は真剣そのもの。緊張しながらも堂々と発表していた。

(エ) 成人のプログラム

レディースコースは13回のチケット制にして「レディーススイミング」３コースと「リズム＆ストレッチ」１コースを合わせて４コースの全てを受講できるようにした。以前のシステムであると休むと振り替えがきかなかったが、13回を有効に使い切れるようにした。13回を使い切った方には６回受講できるクーポン券を購入してもらい受講してもらった。受講者は当初、以前に受講していた曜日のみの参加であったが、徐々に他の曜日やストレッチコースの方はスイミングなどと、受講してきた。受講者の反応も良いようである。

小児保健部との共同事業である「マタニティ・スイミング」は、妊娠16週以降の妊婦を対象に月単位で実施している。夏期には人数も多く活気のある講座になるが、冬期は寒さのため、参加人数が減少する傾向にある。プールでリラックスや、呼吸法の練習等をする。

(オ) ダイナミック・ヘルス・クラブ(D.H.C)

成人のクラブ、ダイナミック・ヘルス・クラブは、平日の昼間と夕方にプール、体育室、トレーニングジムで体力づくりや健康維持を目指し、個人会員、法人会員、ビジターとそれぞれに合った方法で利用してもらっている。シーズンプログラムとして体育室のプログラムを展開、健康作りや技術習得のきっかけにしてもらっているが、それ以外でもメンバー相互の交流ができる場になっている。３カ月ごとにプログラムを変更しているが、卓球、バドミントンは人気がある。昨年度からは、入会金100％オフにして会員確保に努めている。

(カ) 講習会

講座と同じ時間割のなかで10回で完結するもの、月７回の成人集中水泳、特別期間に３～５回で完結する集中水泳等がある。講座とは異なり、開始までに対象年齢に達していれば参加できるので、講座に入る前に経験したい人や、地域的に通いきれない人も参加しやすくなっている。

10回完結の講習会は、「幼児・母親体育」「母と子のすくすくランド」「母と子のパチャパチャスイム」がある。

6カ月～3歳までの子と母親を対象にして、講座に2人で参加できる前の土台作りをしている。すくすくランドはお座りができるくらいの乳児がはいはいでの運動を自発的にすることで、この時期に必要な体力づくりや、母親とのスキンシップ作りを目指している。全講習終了2カ月後には思い出会として父親を含めて全員が集まり、活動中に撮ったビデオを見たり近況報告やゲームをして過ごす。ここでは同じ歳の子を持つ仲間作り（家庭内での交流）ができればと考えている。

幼児・母親体育は2～3歳の子と母親を指導。親子体操やリトミック的な遊び等を中心に色々な運動を体験している。子どもとの触れ合い、共に汗をかくことで信頼関係やコミュニケーション作りができている。始めは親から離れない子も一人で元気に体育室を走り回り、遊べるようになった。

パチャパチャスイムは幼児・母親水泳講座と同じ年齢対象であるが10回完結なので、体験的な意味合いも深い。

「成人集中水泳」は月単位の講習会。前月20日に募集、火・金曜日で月7回行う。水泳経験のない人から、レベルアップを目指している人が2つの班に分かれて練習を行っている。継続して受講している人はいるのだが、冬期の新規受講の人が減少するので、広報等を行い、1年間コンスタントに受講者が集まるようにしたい。

春休みと夏休みには「集中水泳」を実施。普段の講座とは違い5日間連続で練習でき、色々な泳法に挑戦したり、泳ぐ量を増やしたりできるので、上達も早いようである。

(キ) 野外活動

「スポーツキャンプ」はテニスの技術を学んだり、マラソンで体力トレーニングをしたり、栄養を考えた野外料理作り等、合宿的要素が大きいハードなキャンプである。カヌーやプールなどのリラックスタイムがあるが、苦しい練習を乗り越えて帰ってきた子は出発前よりひとまわり大きくなったような気がする。

「チャレンジキャンプ」は1～3年生で「何にでも挑戦しよう」を合言葉に山中湖YMCAセンターで開催。今年度のチャレンジは、明神山から三国山への縦走である。低山ではあるが同じ日に2つの山を登ることは子どもたちにとって初めての経験であったが、がんばって登りとおした。その顔には自信がみなぎっていた。

「新体操合宿」は、①集中的に練習を行うことで講座では出来ない活動を経験する。②生活面、精神面の自立を促し、集団活動により協調性を養うことを目標とした。講座ではできない集中的な練習だったため、個人の精神面を含めた成長が見られた。

「スキースクールⅠ」は、妙高高原、池の平スキー場（1期）とグリーンピア津南（2期）で行った。1期、2期とも年末に津南で行った年もあったが、積雪不足が原因で、昨年より1期は妙高高原で行っている。池の平

スキースクール

スキー場は自然の地形を生かしたロングコースが楽しめるゲレンデである。一方、グリーンピア津南のゲレンデはファミリー的なゲレンデで、子どもたちもスタッフも安心して使えるゲレンデである。また、年明けのこの時期は降雪量やゲレンデ混雑も含めて最高の状況で開催できた。ひとつの問題点として1期のスクールは冬休みすぐということもあり、すぐに満員になるが、2期は正月明けということもあり応募数は1期にくらべ少ない。もう一度、時期に関して見直すときであろう。

「スキースクールⅡ」は低学年のキャンプで、雪遊びとスキーレッスンを通じて自然と多く触れ合うことを目標としている。低学年ということもあり、初めてスキーを履く子どもも少なくない。しかし楽しみながらスキーを行っているので上達も早く3日目には頂上から滑ってくることもできるようになる。3月ということもあり天候も安定し、日中はポカポカ陽気で子どもたちには、寒い思いをさせずにレッスンができた。昨年は、スノーチューブに挑戦をしたが、今年は班対抗の雪合戦を行った。雪合戦協会のルールにもとづいているのでなかなか迫力があり存分に楽しめた。

❸ グループ活動

グループ活動は、講座との関係で火、木曜日の午前中に実施している。6種類のプログラムがあるが身体を動かす楽しさや、あまり経験できない種目を紹介、体験ができるようにしている。また利用団体のニーズに対応できるように数プログラムの中から種目をピックアップして作っている。パラバルーン、フライングディスクや数種類の運動要素を組入れたサーキット運動の実施回数が多かった。最近では幼児の利用が多く、お別れ遠足のひとつとして利用しているようだ。

❹ その他

(ア) 協力事業

「こども一日ドック」「マタニティ・スイミング」「健康スポーツ教室」「小児肥満のための指導者講習会」(以上小児保健部)「ジュニア・アウトドア・スクール」(企画研修部・プレイ事業部と合同による) などを行った。

(イ) 動くこどもの城

〔こどもの城〕の指導者が地方にでかけ、通常行っているプログラムを数多くの子どもたちや指導者に伝える活動である。スポーツあそびで体力づくりというプログラムでは小学生を対象にしているが、「お母さんと赤ちゃんのすくすく体操」では依頼をしてきた指導者に好評であった。

(ウ) 研究活動

『厚生科学研究』

－小児期からの総合的な健康づくりに関する研究－

「鬼ごっこ系あそびにおける、運動量と柔軟性の関係」

「鬼ごっこ系あそびの必要性について」

羽崎泰男　渡辺恒一

チャレンジキャンプ

(エ) 外部指導

親子体操、肥満児予防講習会、骨粗しょう症予防講習会、レクリエーション指導など全国各地に指導に行った。

❺まとめ

体育プログラムの基本のスポーツあそびは毎年内容を工夫しながら現在にいたっている。身近な道具をつかったものから昔から伝わる伝承的なものまで少しのアレンジの仕方であそびの幅がでてくる。そのことによって運動の強弱、運動量の多少がでてくることにより子どもたちの年齢の違いに対応できることになる。このようにさまざまな運動を子どもたちに伝え、動くことにたいして興味がでてくれることを望んでいる。

また、1月から3月にプール改修工事を行った。そのため3学期の水泳講座は休講であった。一覧表の0はそのためである。

体育室にて

新体操講座風景

平成12年度活動一覧表

一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
プール一般利用	土曜日　13：30～16：00 日曜日・祝日　10：30～17：30	各曜日にそれぞれの時間帯で一般開放。18歳以上300円、小1～17歳200円、幼児100円。レンタル（タオル・水着）各200円。 幼児は保護者が1対1でついて利用。
体育室一般利用 レクリエーションゲーム ドッジボール　卓球 ウォールサッカー ユニホック	各月 第1日曜日と前日の土曜日 第2日曜日と前日の土曜日 第3日曜日と前日の土曜日 第4日曜日と前日の土曜日 第5日曜日と前日の土曜日	週ごとに内容を変えて行っている。卓球の週は終日卓球のみ(混み合う場合は各グループ20分交代で利用)。他の種目は日曜日の①14：00～　②16：00～の2回、土曜日①14：00～の1回、練習とゲームを行い、それ以外の時間帯はフライングディスクの的当てとフリースローイングを行っている。 利用時間は土曜日が13：30～16：00、日曜日が10：00～17：00。 単独の祝日(GW、開館記念日などを除く)はタックルのかわりに腰に付いたタグをとるタグラグビーを行った。
体力測定	土曜日 日曜日・祝日	健康開発室で7種目9項目の体力測定を行っている。4歳児くらいから大人までだれでも利用でき、男女別に全国平均値と比べることができる。利用料1人100円。土曜日が①14：00②15：00の2回、日曜日が①11：00②13：00③14：00④15：00⑤16：00の5回。
グループ活動	毎週火・木曜日	午前中を使ってまとまった団体（グループ）を指導する。体育室を使っていろいろなプログラムを展開している。時間は10：00～12：00。
サッカー2000	10.8～9	チームを作りエントリーする（チームエントリー）と個人で来ている子どもたちのエントリー（個人エントリー）で5人1チームとし試合を行った。ルールはこどもの城ウォールサッカーにもとづく。
小児肥満のための指導者講習会	7.9	小児保健部との協力事業。体育では運動指導や測定についてのレクチャーおよび実践を行った。時間は10：00～12：00。
第13回水泳記録会	12.10	体育の水泳講座受講者がエントリー（1人2種目1,000円）を行い参加。年齢別・男女別で記録に挑戦。9：30～13：30に実施。幼児17名、小学生以上108名、計125人参加。幼児4種目、小中学生10種目。講座対抗のリレーも行う。
2001こどもの城 体操発表会	3.11	幼児体操受講生と新体操クラブ受講者による発表会。1部の幼児、2部の新体操、それぞれ1年間の成果を発揮し、親、祖父母の前で演技を発表した。1部53名、2部42名の参加。今年のテーマは「心」。思いやり・心を合わせる・心にひびくなどを演技に盛り込んだ。

〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
〈児童福祉週間〉みがけ！みんなの運動センス		
みがけ！みんなの運動センス	4.29～5.7	誰もが持ち合わせている運動センスに磨きをかける、というテーマで行うプログラム。時期や力加減などを見極めて、眠ったままにしないよう語りかけた。
体力測定	4.29～5.5～7	測定用紙に測定値を記入し全国平均値と比較する。
〈夏休み〉①みがけ！みんなの運動センス　第2弾　あけてみよう5つのカンヅメ ②オリンピックへレッツゴー		
①あけてみよう5つのカンヅメ	7.20～8.31	スピード・タイミング・バランス・イメージ・予測をスポーツの5感として、これらの要素を動きのなかで感じてみようという試みのプログラムにした。
②オレ！オレ！ストライカー	7.29～30 サッカー	9月のシドニーオリンピックにちなんだスポーツ遊び。ウォールサッカーを行う。 練習からゲームを楽しんだ。
②スカッと一発ホームラン	8.5～6 野球	9月のシドニーオリンピックにちなんだスポーツ遊び。ゴロベースやキックベースなど野球にちなんだ色々なゲームを楽しんだ。

名称	期間	備考
②めざせ！ 海の守り神	8.12～13 ライフセービング	9月のシドニーオリンピックにちなんだスポーツ遊び。ヒューマンチェーンで人を運ぶなど、レスキューゲームを行った。
②自分をためせ！ 投・跳・走	8.19～20 陸上競技	9月のシドニーオリンピックにちなんだスポーツ遊び。ミニハードルを使ったり、マットを使いハイジャンプやロングジャンプを行った。
②あみだせ！ ウルトラE	8.26～27 トランポリン	9月のシドニーオリンピックにちなんだスポーツ遊び。特別講師によるトランポリンの指導。
〈夏休み〉 ちびっこプール	7.18～8.13	5階屋上に仮設プールを設置、一般に開放。利用料200円、レンタル（タオル・水着）各200円。
〈　〃　〉 こども一日ドック	7.26	小児保健部との協力事業。体力測定など運動面の指導を担当。
〈開館記念〉 親子三代楽しく レクリエーション	11.1～5	おじいちゃん、おばあちゃんも含め身体を動かして親子で楽しめるスポーツ遊びを行った。

名称	期間	備考
〈冬休み〉みがけ！みんなの運動センス第3弾		
あけてみよう、あけてみよう はじめて感じる第6(缶)感	3.24～4.5	スポーツに必要な感覚、スピード、バランス、タイミング、イメージ、予測する以外の感覚、勘、インスピレーションを探る。
〈春休み〉みがけ！みんなの運動センス第4弾		
鬼ごっこでみがくスポーツセンス	3.25～4.5	鬼ごっことスポーツは似ている箇所が随所見られる。いろいろな鬼ごっこを体験してスポーツのセンスをみがく。
体力測定	特別期間中	健康開発室で7種目9項目の体力測定。男女別に全国平均値と比べることができる。
プール 一般利用	〃	10:30～12:00 13:30～17:30に一般開放。（プログラムにより変更あり）

❷ 講座・クラブ

〈講座〉

名称	対象・定員	受講数	日曜・日時	備考
親子水泳 A	親子 (組) (30)	(組) ① 24 ② 31 ③ 0	水曜日 10:00～11:00	今年度から親と子の水泳教室とし、お父さんの参加を促す。ダイナミックな動きなどは、さすがお父さんと思わせた。親子での参加であるので子どもも安心してできるようである。 受講料＝1期・2期27,000円、3期17,000円。
〃 B	〃	① 37 ② 38 ③ 0	土曜日 〃	
幼児 水泳 A	3・4歳児 (人) (50)	(人) ① 17 ② 24 ③ 0	木曜日 14:30～15:30	単に泳法の修得だけでなく、陸上と同じように水中でも楽しく活動できるように指導。プールでの活動を通して、水に慣れることやバランスよく水に浮く感覚など、水泳に必要な運動の基礎を身につける。クラスの人数も少ないので、ゆったりとした雰囲気で行われている。 6段階にレベル分けをして、次のステップへの目標としている。 受講料＝1期・2期21,000円、3期14,000円。
〃 B	3・4歳児 (60)	① 19 ② 20 ③ 0	木曜日 15:00～16:00	
〃 C		① 17 ② 19 ③ 0	金曜日 14:00～15:00	

名　称	対象・定員	受講数	日曜・日時	備　考
幼児　水泳　D	3・5歳児 (50)	① 47 ② 41 ③ 0	火曜日　14:30～15:30	水慣れから泳ぎへと個人差に応じた班分けを行っている。クロールなどの練習のみならず、幼児期に必要な水中感覚を得られるように指導を行っている。6段階にレベル分けをして、次のステップへの目標としている。
〃　E	〃	① 38 ② 45 ③ 0	木曜日　13:30～14:30	受講料＝1期・2期21,000円、3期14,000円。
幼児　水泳　A	3・4歳児 (40)	① 32 ② 34 ③ 34	水曜日　14:30～15:30	たくさんの友だちと一緒に思い切り体を動かし、運動遊びリズム遊びなど楽しく動きながら健康な体や運動の基礎をつくる。
〃　B	4・5歳児 (40)	① 17 ② 19 ③ 25	火曜日　15:00～16:00	
〃　C	4・5歳児 (40)	① 20 ② 29 ③ 27	木曜日　〃	幼児体育A・Bを土台にして、それを発展させながら様々な運動を体験し身体の使い方を学んでいく。 受講料＝1期・2期19,000円、3期13,000円。
幼児　水泳　A	小学生 (60)	① 64 ② 62 ③ 0	水曜日　14:30～15:30	生涯楽しめるスポーツ「水泳」を基礎から学び、4泳法をマスター。シニア・スイミングへのステップアップを目標。 各学期の後半に進級テストを実施（10級～1級）。次への目標としている。
〃　B	〃	① 22 ② 29 ③ 0	火曜日　15:30～16:30	受講料＝1期・2期21,000円、3期14,000円。
〃　C	〃	① 54 ② 46 ③ 0	水曜日　〃	10級　顔付け　もぐり　息こらえ　ボビング　水なれ 9級　伏し浮き　背浮き　板キック　ボディーイメージ1 8級　伏し浮きキック　背浮きキック　ボディーイメージ2
〃　D	〃	① 66 ② 57 ③ 0	金曜日　〃	7級　ノーブレクロール　バックキック　ボディーイメージ3 6級　クロール・バック(12.5)　ブレスト・バタフライ（キック）
〃　E	〃	① 59 ② 48 ③ 0	木曜日　16:00～17:00	5級　クロール・バック(25)　ブレスト・バタフライ（リズム） 4級　クロール・バック(50)　ブレスト・バタフライ（呼吸）
〃　F	小2以上 (40)	① 29 ② 37 ③ 0	火曜日　16:30～17:30	3級　ブレスト(50)　バタフライ(25)　個人メドレー（タイム） 2級　個人メドレー(100)（タイム）
〃　G	〃 (40)	① 21 ② 21 ③ 0	木曜日　17:00～18:00	1級　個人メドレー(200)（タイム）

名　称	対象・定員	受講数	日曜・日時	備　考
シニアスイミング　A	小・中学生 (30)	① 3 ② 4 ③ 0	火曜日16:30～18:00	小学生水泳からの移行の場であり「シニアスイミングB」へのステップとしての役割もあるため、基礎体力の向上と4泳法の完成を中心に行った。個別のメニューを組んでより速く泳ぐことにチャレンジする上級者向けのコース。水球も経験する。指導者の推薦が必要。
〃　B		① 22 ② 19 ③ 0	水曜日　〃	
シニアスイミング フレッシュ	小3～ 中学生 (30)	① 23 ② 22 ③ 0	金曜日　〃	小学3年生以上で泳ぎが不得意な人のクラス。クロールで25m以上泳ぐことを第一目標に練習を進める。90分の練習とあいまって上達の度合いが大きかった。 受講料＝1期・2期21,000円、3期14,000円。
小学生体育　A	小学生 (30)	① 28 ② 23 ③ 19	火曜日16:00～17:00	器械体操、球技を中心に多種多様な運動経験をし、苦手な種目を克服する。 受講料＝1期・2期17,000円、3期11,000円。
〃　B		① 32 ② 31 ③ 28	木曜日　〃	バランス良い発達ができるよう、体操と水泳の2講座の受講ができる。 受講料＝1期・2期25,000円、3期17,000円。
ジュニア新体操	小1～3 の女子 (35)	① 21 ② 19 ③ 24	水・金曜日 15:30～17:00	はねたり、跳んだり、回ったり、リボンやボールを使って楽しく身体を動かす。基礎的な運動も含めた新体操の初歩を指導。 受講料＝1期・2期26,000円、3期19,000円。
シニア新体操	小3～中学生の女子 (35)	① 22 ② 18 ③ 18	水・金曜日 16:30～18:00	ジュニアから一歩進んで新体操独特の美しい表現ができるような練習。創作活動や発表会も開催。 受講料＝1期・2期26,000円、3期19,000円。

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　　考
手足の不自由な子の水泳	小・中学生 (15)	① 7 ② 7 ③ 0	土曜日17:00～18:00	身体に障害があり、水泳の機会に恵まれない小・中学生を対象にし、スタッフ・ボランティアの個人指導を中心に楽しく活動。 受講料＝1期・2期16,000円、3期10,000円。
レディースコース	女性	① 68 ② 80 ③ 24		レディースのスイミング3コース、リズム＆ストレッチ1コースを合わせてレディースコースとし、13回チケットでどこでも参加できるようにした。13回終了後は6回分の追加チケットを発行する。 受講料＝1期・2期21,000円、3期16,000円。 クーポン券（6回）5,000円。
スイミング リズム＆ストレッチ			火曜日10:00～11:00 木曜日　〃 土曜日11:00～12:00 水曜日10:00～11:00	生活習慣の中に定期的な運動を取り入れることが健康づくりの第一歩。各クラスとも4班編成で、各自のレベルに合った班を選択し、クロールの練習から4泳法の修得を目標に健康づくりをしている。 ゆったりと気持ちのよいストレッチと軽快なリズム運動、楽しく動きながら明日への活力を生みだす。

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　　考
健康スポーツ教室（太りすぎクラス）	太りすぎの小学生とその親 (25)	① 12 ② 14 ③ 15	土曜日16:00～17:00	小児保健部との協力事業。医師によるチェック、栄養士によるチェック、体育指導者による体力チェック、この3者が協力してトータルな活動を行う。 受講料＝1期・2期22,000円、3期18,000円。
マタニティスイム	妊娠16週以降の妊婦 (35)	延べ 312	火曜日11:00～12:00 木曜日　〃	小児保健部との協力事業。水泳プログラムを通して、妊娠中を楽しく過ごすためのクラス。医師が活動前後にチェックを行い、活動中も不測の事態に備えて常駐する。お産や子育てに関するレクチャーや栄養・心理の相談も受けられる。 受講料＝12,000円（月7回）。

講座回数＝1学期13回、2学期13回、3学期9回（新体操は週2回）

〈クラブ〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　　考
ダイナミック・ヘルス・クラブ（D. H. C）	成　人 メンバー ビジター 法　人 その他	(人) 年間延 7,337 294 212 515	火～土曜日 12:00～13:30 18:00～21:00 日曜日・祝日 18:00～20:00	18歳以上の大人のためのクラブ。プール、体育室、ジムほかを利用し体力作り、健康管理のために最適な環境で楽しく活動。個人会員は、入会金100％オフ、会費20％オフキャンペーンを実施して、新規会員の募集に努めた。 入会金0円、年会費50,000円、4カ月20,000円、月会費5,500円、利用料（利用の都度）300円。 パス券（月3,000円、4カ月11,000円）ビジター1,500円。
	計	8,358		渋谷ウォーカーに掲載。

〈講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　　考
幼児・母親体育	(組) 2・3歳児と母親 (30)	(組) ① 23 ② 32 ③ 40	水曜日　11:00～12:00 ①②学期は10回 ③学期は9回	親子が体育室でリズムに合わせてはね、跳び、走るうちに運動神経を養い、楽しさを身につける。 1期・2期19,000円、3期17,000円。
母と子のすくすくランド	お座りのできる子～ (20)	① 30 ② 21 ③ 12	金曜日　10:00～11:00 ①②学期は10回 ③学期は9回	はいはいから歩行へと成長していく時期の赤ちゃんを対象に、楽しい体操や親子での遊び、お母さんのシェープアップも。 1期・2期23,000円、3期21,000円。
母と子のパチャパチャスイム	1・2歳児と母親 (30)	① 27 ② 23 ③ 0	金曜日　10:00～11:00 ①②学期は10回 ③学期は9回	楽しくプールの活動をして、水慣れとともに母子のコミュニケーションを深める。 1期・2期25,000円、3期23,000円。
成人水泳集中講習会	18歳以上の男女 (月20)	延べ 121	火・金曜日 18:00～19:00 (各月7回)	18歳以上の初心者やレベルアップを考えている人の集中水泳講習。月ごとに募集を行い、各月の講習種目に合わせて指導を行う。 受講料＝10,000円（月7回）。

〈短期講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　考
春休みこども 集中水泳講習会A 〃　B	(人) 小学生(50) 幼　児(40)	(人) 50 40	4.1～5　9:30～10:30 〃　10:30～11:30	5日間の集中練習で泳力アップといろいろな泳法体験。 受講料＝7,000円。
夏休みこども 集中水泳講習会A 〃　B 〃　C 〃　D	小学生(50) 幼　児(40) 小学生(50) 幼　児(40)	51 40 50 41	7.20～24　9:30～10:30 7.20～24　10:30～11:30 8.18～22　9:30～10:30 8.18～22　10:30～11:30	5日間の集中練習で泳力アップといろいろな泳法体験。 受講料＝7,000円。
ガンバ！2000	小学生(30)	30	8.18～22　9:30～10:30	器械体操や球技などの基本動作を習得する、体操の苦手な子の体操教室。 受講料＝7,000円。

〈野外活動など〉

名　称	期　間	備　考
新体操　夏合宿	7.31～8.3	新体操講座生27人参加の技術向上を目指した合宿。福島県東白河郡ユーパル矢祭。練習は勿論のこと、仲間との親交を深めた。お互いに切磋琢磨している姿が見られた。
スポーツキャンプ	7.26～29	小3～中学生32人参加。新潟県グリーンピア津南3泊4日の中でテニスの技術の習得やカヌー、ランニングと合宿的な要素のキャンプを行った。
チャレンジキャンプ	8.27～30	小1～3年生43人参加。山梨県YMCA山中湖。みんなでチャレンジ！が合言葉の低学年の体験キャンプ。明神山～三国山縦走登山に挑戦。
スキースクール　Ⅰ　1期	12.26～29	昨年度から積雪の関係で年末と年明け2つに分けてスクールを開催。 1期、小2～中学生、45人参加。新潟県妙高高原池の平スキー場にて実施。 積雪量は多くなかったが、全面滑走でき充分なレッスンが行えた。 2期、小2～中学生、43人参加。新潟県グリーンピア津南にて実施。 積雪量、雪質、そしてゲレンデの利用者も少なく、良い条件でレッスンを展開できた。 1期に参加予定していた人が多く、2期の参加者も安定してきた。
〃　Ⅰ　2期	1.4～7	
〃　Ⅱ	3.27～30	小学1～3年生45人参加。新潟県グリーンピア津南。コテージに宿泊し、スキーや雪遊びで雪と親しむ低学年キャンプ。

❸ その他

〈講座〉

名　称	期　間	主　宰	会　場
骨粗鬆症予防講習会	4.1～全12回	横浜市衛生局保健所	横浜市各保健所
0,1,2歳児で使えるプログラム	5.10	杉並区児童青少年センター	板橋区産文ホール
親子でのびのび一緒にアソボ	5.22	港区教育委員会	品川区立大間窪小学校
子どもの健康を考える	6.15	児童健全育成指導研修会	調布市多摩川児童館
夏休み親子教室	8.1	東林地区健康づくり運動協議会	保谷市下保谷児童館
乳幼児の遊びと関わり方	10.13	新潟市総合福祉課	今川児童館
親子であそぼう	3.11	大野南地区健康づくり運動普及員協議会	大野南公民館

プレイ事業部

平成12年度の活動

はじめに

プレイ事業部は、プレイホール、屋上、コンピュータプレイルームやパソコンルームなど、異なった性格を持った広いエリアを担当している。それぞれのエリアで子どもたちの遊びの活動がより豊かに展開されるように、次の3つの方向性を軸にプログラムを展開した。

(1)「遊びの空間整備」＝遊び空間を整備するということは、遊び場としての安全性を保ちながら、子どもたちが能動的に遊びを展開できるように環境を設定することである。子どもの発達年齢、遊びの種類を考えてスペースと遊具を整えて動機付けをし、遊び場のルール、様々な遊びのプログラム、遊びを支援するリーダーも配置して、よりよい遊び環境を整えた。

(2)「児童文化、子どもの遊び文化をテーマにしたプログラムの提供」＝七夕、節分などの季節の行事や、折り紙、こまといった伝承的な物、また紙芝居や人形劇などの児童文化財、そしてコンピュータ活動まで幅広くテーマにし、遊びのプログラムとして構成して実施した。

(3)「交流を促進するプログラムの展開」＝人が出会い、相互理解をすすめながら人間関係を深め、また活動を共にする喜びを肌で感じることは、子どもの社会性の発達に非常に大切である。遊びを通した人の交流は、プレイ事業部の活動の基本と考えた。

今年度は、乳幼児と母親のために0・1・2才のコーナーを常設化した。また実施した様々なプログラムに関して、外部からの照会も増え、より整理した形で広く伝える方法を検討することが必要となってきた。

❶ 一般利用

(ア) 遊びの空間作り

子どもたちにとって遊びの入口であるプレイホールは、〔こどもの城〕に来館した子どもたちを受入れ、まず自由に遊ぶスペースとなっている。ここでは、それぞれの発達年齢や遊びの種類にあった場所を設定し、区分けすることで、子どもたちが十分に遊べるようにしている。また、遊具やプログラムの提供をすることで、子どもたちの遊びがより魅力的になるように計画をした。

【幼児コーナー】

昨年からの乳幼児を連れた母親の増加にともない、プレイホール内に0・1・2才のコーナーを設置した。乳幼児の専用スペースができたことで、3才以上の子どもたちと一緒に遊び場を共有していた以前と比べ、親子が安心してゆったりと遊んでいる姿が多く見られた。また、同じ年齢層の子どもたちが同じスペースにいることで、母親同士の交流のきっかけともなった。今後、乳幼児に合った遊具の整備を続けていくとともに、母親同士の交流がより促進されるような空間作りが望まれる。

【親子のふれあいのプログラム】

幼児コーナーでは、動物のハンドパペットを手にはめた母親がままごとをしている子どもの相手をしたり、母親が持つ人形を相手役にごっこあそびを楽しんでいる子どもたちの姿が見られる。このような親子のやりとりを

プログラム化し、ハンドパペットを使って家でも気軽に親子でできる人形あそびである、『みんなであおむしくん』を4歳から6歳の幼児とその親を対象にして実施した。靴下人形は家にある素材（靴下）に手を入れるだけであそび始められ、口を使う動き（食べる・しゃべる・噛む）や体の動きが小さい子どもでも操作・表現しやすい。ストーリーはエリック＝カール作『はらぺこあおむし』をモチーフにした。一緒にあおむしになりきってお互いの体の上をはったり、食べ物に見立てた新聞紙を食いちぎったり、チョウチョに変身するといったごっこあそびを通して、大人も子どもも同じ立場であそびを共有することや、お互いの体に触れること、そしてその経験を参加した他の親子とも共有することの楽しさ・大切さをプログラムに盛り込んだ。

親の働きかけに子どもが笑顔し、その笑顔を見た親の嬉しそうな顔を見てまた子どもも安心する。このような親子のふれあいをテーマにした活動を今後も模索していく必要がある。

0・1・2さいのあそびば

みんなであおむしくん

(イ) 児童文化・子どもの遊び文化をテーマにした活動

子どもたちに伝えていきたい文化として、折り紙、こまといった伝承的な遊び、紙芝居や人形劇などの児童文化財、また年間を通して節分や雛祭り、七夕などの季節行事を様々な遊びのプログラムにアレンジして実施した。

【週間行事】

プレイホールでは、毎週の催しとして『おはなし紙しばいのつどい』『みんなのにこにこ広場』『おりがみあそび広場』を実施した。紙しばいや人形劇などの公演では、登場人物や語り手の声色でお話の世界に入り込み、笑いや驚き、恐怖などの感情を体験し、おりがみでは、一枚の紙から作品ができあがることで達成感や喜びを感じることができる。今年度もたくさんの参加があり、子どもたちの感性を豊かにする文化財として、とても大切なものだと改めて実感することができた。また今年度は、昨年まで毎週水曜日に実施していた「おはなし人形広場Ⅰ」の名称を「みんなのにこにこ広場」に変更した。これは、人形劇や影絵などの鑑賞型のものだけでなく、平成10年から実施している『作って遊ぼう』のように、子どもたちが積極的に参加できるものを、さらに「おはなし」にとらわれず「あそび」の要素を強くして組み入れていきたいという考えからである。実際には昨年までの内容をアレンジしての実施となり、今後内容をさらに深く検討する必要がある。

【季節の行事】

核家族化が進み、日本に昔から伝わる伝統行事を家庭ではあまり取り上げなくなってきた今日、プレイ事業部ではこれらの伝統行事の由来を、遊びの要素をとりいれながら分かりやすく伝えている。今年度も七夕、節分、雛祭りと3つの季節行事を行った。どの行事もプレイホール内で行うため、行事への雰囲気づくりを大事にした。七夕行事では十数本の本物の竹を立て込み、そこに短冊を飾るようにし、節分行事では参加した子どもたちがただ豆をまくのではなく、鬼対福の神（と子どもたち）の劇のなかで、節分の由来が伝わるようにしている。また、雛祭り行事においては、今年度は本物の雛人形を飾り、雛人形や雛祭りというものを身近に感じてもらえるように配慮した。このような季節行事を通して、参加した家族が、家庭でも伝統行事のことを話してもらい、日本の文化というものを考えるきっかけになっていければと考えている。

(ウ) 子どもたちの交流を促進するプログラム

子どもたちの人間関係が希薄になったと言われて久しい。都市化・過疎化による環境の変化、地域社会の崩壊、学歴偏重社会による子どもの多忙化など、様々な要因があるが、中でも大きな要因の一つとして遊びの変容が挙げられよう。

近年では同じクラスの友だち1人か2人と部屋の中でマンガやゲームで遊ぶといった「受け身的な孤立型遊び」が主流であるが、一昔前までは幅広い年齢層の子どもたちが身近な物を工夫しながら群れをなして屋外で遊ぶという「能動的な群れ型遊び」が遊びの中心だった。このような「群れ型遊び」を通して、子どもたちは自己と他者の距離や関係性を学ぶことができたのである。

こうした「群れ型遊び」のエッセンスは、コマやメンコ、紙相撲などの昔遊びや、ダイナミックな水鉄砲遊び、冒険ごっこなどの中に凝縮されている。プレイ事業部ではこうした「群れ型遊び」を、ゴールデンウィークや夏休み、お正月などの特別期間に実施し、見知らぬ子ども同士、あるいは子どもと大人との関係が、より深く楽しいものになるようプログラムを考えた。また、特に高学年においては、意図的に交流のための遊び場を設置し、必要があればスタッフも介入しながら仲間作りを支援した。

【2001年あそびの初場所 ～はっけよいでお正月～】

本年度のお正月特別期間は、毎年恒例となった屋上のコマ、三ツ馬の他、Bスタジオにおいて、数年ぶりに紙相撲のワークショップを実施した。

紙相撲は「村杉紙相撲道場」の村杉輝治氏に、力士の型紙や土俵なども含めて、雰囲気の作り方や指導方法などを教えていただいた。力士は十数種類の中から好きなものを選べ、土俵で他の人との対戦に勝つと、星のスタンプがもらえる。スタンプを10コ集めるとトーナメント大会への出場権を獲得でき、この模様は館内テレビで中継された。なお、観戦している子どもや親も参加できる工夫として、「音相撲」という遊びを考案した。これは、東西両チームの応援団がマイクに向かって声援を送ると、その振動でスピーカー上の紙相撲力士が対戦するという遊びである。

こうした昔遊びは親子3世代を通じて楽しめるものであり、また勝負を通じて自然に周囲の人とも交流を育むことができるという魅力がある。正月期間6日間を通して、非常に多くの親子が昔遊びを楽しむことができた。

2001年あそびの初場所

【バンパー大会・高学年コーナー】

高学年コーナーは、小学校4年生から高校3年生までの子どもたちのための遊び場で、複雑なルールのある遊びや、2人以上だとより楽しめる対戦型の遊具など、高学年以上の子どもたちにとっての、より高い欲求を満たし、また子どもたち同士の交流を促進するような遊具を配置している。最初から友だち同士で遊びにくる子ども

【ファミリー・プレイ・タイム　実施プログラム】

実施日	プログラム	対象	参加人数
4月22日	ファミリーわなげ大会（ゲーム大会）	年中児以上30組	16組39人
5月28日	空飛ぶおもちゃ大集合！（クラフト）	年長児以上15組	11組24人
6月11日	新聞紙で君も遊びの鉄人！（プレイ）	年中児以上15組	11組23人
7月9日	おはなしカードを作ろう（クラフト）	小学生以上15組	4組9人
9月17日	みんなでとばそう！紙ひこうき（ゲーム大会）	年中児以上20組	13組32人
10月28日	科学あそび大集合（サイエンス）	年長児以上15組	12組26人
11月11日	木の枝でペンダント（アウトドア）	年中児以上15組	12組26人
12月10日	クリスマスキャンドルをつくろう（クラフト）	年少児以上15組	12組30人
1月27日	おもしろチャレンジゲーム（ゲーム大会）	年中児以上15組	11組22人
2月24日	紙すきハガキを作ろう（クラフト）	年長児以上15組	7組15人
3月11日	ファミリー紙相撲春場所（作ってあそぼう）	年中児以上16組	10組20人

も多いが、〔こどもの城〕の講座・クラブの子どもたちを中心とした常連の子どもたちは自分たちの仲間という枠を越えて、高学年コーナーで遊んでいる他の子どもたちとも交流している姿も多く見られた。

この高学年コーナーでは、集まる子どもたちの更なる交流の促進を目的に、人気遊具のバンパーを使って年に２回大会を開いている。参加する子どもたちは、常連の子どもたちが中心で、継続的に参加する子どもたちが多い。大会で試合を重ねたり、応援席で会話をしているうちに、人間関係を深め、大会終了後も、一緒にバンパーを楽しむことができる仲になり、さらに友人関係に発展した子どもたちもいる。バンパー大会は「子どもたちの交流促進のために」という目的で行っているが、大会自体はきっかけであり、その後の高学年コーナーでの働きかけが重要になる。再会した子どもたちの様子を見守り、時にはスタッフが介在して交流を継続させ、子どもたちの仲間作りを目指している。

ファミリー・プレイ・タイム

❷講座・クラブ

(ア) ユースクラブとキッズクラブ

プレイ事業部の講座として２つのクラブがある。これらの事業は子どもたちのグループを作り、そこに参加しているメンバーがグループでの活動を通して社会性を育んでいくことを目的にしている。具体的には①多岐にわたる遊びを通して様々な直接体験をすること②仲間と遊ぶことを通してその楽しさや集団でのルールなど協調性を身につけること③自分たちで遊びを考えることを通して夢の実現する楽しさや発想を豊かにし、能動的に遊ぶ楽しさを感じることなどを主な目的としている。それぞれのクラブでは、集団を育てる基礎として、指導者が参加している個々のメンバーの様子を常に把握することが肝要と考えている。活動を共に進めることで一緒に楽しみ悩み、考えて行く中で個々の状況を把握し、それぞれに対して適切なアドバイスをすることでメンバー自らが解決できるようにグループワーカーの立場で援助している。人間関係が希薄になり、子どもが成長する過程において友だちとの交流体験が少なくなっている現状を考えると、このような事業を行うことは、子どもたちが大人になっていくためにたいへん重要な経験である。

【キッズクラブ】

キッズクラブは小学校低学年～中学年を対象にしているが、実際に１年生と４年生とでは知識、肉体、社会性にも幅がある。そこでプログラムも発達差を踏まえ、１学期、２学期、３学期と、少しずつねらいを変えながら実施していくことが重要である。

特に１学期の１年生はまだ、異年齢の集団にはなじみが少なく、不安になりがちな場面も多いため、まずはキッズクラブへの期待感・安心感を高め、スタッフやリーダーとの信頼関係を育んでいくことを大きなねらいとしている。２学期は夏休みのブランクを解消すると同時にプログラムに多様性を持たせたり、子どもたちの希望も積極的に採り入れ、上級生の指導性を喚起している。３学期はそのまとめとして、子どもたちが「仲間と何をして遊びたいか、どうすればみんなが楽しく遊べるか」を自ら考えながら、積極的に遊びを作り上げていくことがねらいであり、ビジョンでもある。

【ユースクラブ】

ユースクラブは10代前半の子どもたちを対象とし、少年から青年へと変化していく、いわゆる「思春期」の前半にあたる子どもたちの遊びのクラブである。第２次成長期を迎える参加対象者は体の成長も大きいが心も大きく成長する時期であり、仲間と一緒に活動する楽しさを感じ、仲間の中で社会性が育まれていく時代である。そんな子どもたちに仲間と場所を用意することで、体験的にさまざまなことを感じていくのがユースクラブのねらいである。今年度は昨年度以前から継続して参加するメンバーが多くグループとしての凝集性が高かった。また新メンバーとして最小学年となる５年生も多く新加入し、クラブとして目的に沿った活動が展開しやすく、２学期からは自分自身で活動を計画し実現させる体験を多く行う事ができた。また、今後の課題としては人数が受験などの影響で途中で減少する傾向があり、新しいメンバーの確保に向けた一層の広報と参加者や保護者に対しての趣旨説明や動機づけや魅力づけなどに努力が必要であると感じている。

(イ) パソコン教室とパソコンクラブ

「小学生パソコン教室」では、小学校4～6年生を対象として、3コースで4回の教室を実施した。教室の基本となるテーマは、パソコンを子どもたちのグループ活動、仲間遊びの道具・媒介物としてどう利用できるかを考えることである。

「小学生パソコン教室」では、教育用のプログラミング言語であるLOGO（ロゴ）を利用し、グラフィックスのグループ協同製作を内容とした。春休みに実施した、「小学生パソコン教室スペシャル～マルチメディア探検隊～」では、グループごとにデジタルカメラを持ち、予め話し合って決めた視点・切り口で〔こどもの城〕館内を取材し、写真と文章を組み合わせたレポートを作成するという内容である。この活動を通し、子どもたちは物事を自分の目で見、考え、そしてその内容をいかに人に伝えるかを考える機会となった。このレポートの結果は、〔こどもの城〕のホームページで発表した。

「パソコンクラブ」は、各人の興味にそった内容をすすめる自由利用を中心とした活動をしていたが、家庭へのパソコンの普及もあって参加者が減少し、今年度をもって終了した。

【平成12年キッズクラブ委員会】

月日	タイトル	内容
①4月15日	みんな・なかよしゲーム大会	ゲームをしながら仲良くなることをテーマに「ジャンケンチャンピオン」や「人間知恵の輪」、「沈没船」、「3億円ゲーム」などを行った。
②5月13日	デジカメしりとり2	デジカメを持って街に出て、しりとりの順番でいろいろなものを写してくるというゲームを実施。最後は12階でみんなの映像を楽しく鑑賞した。
③6月3日	くるくるダンサーを作ろう	紙コップを工作して人形を作り、その足元にモーターを取り付けた、動くおもちゃを制作。出来上がってから廊下でレース大会を行った。
④6月24日	パパもほしがるママもほしがるくれくれミルクレープ	クレープの生地を何層にも重ねてクリームやフルーツを挟んだミルクレープ作りに挑戦。班の中で役割分担ができ、よく協力していた。
⑤7月1日	スーパーじんとり大作戦	相手チームの人とじゃんけんをして、負けたらその場に座る。しかし自分チームの王様にタッチされたら復活できるという、王様陣取りを実施。
⑥7月17日	ウォータープロジェクトV	水鉄砲を使って相手チームのおでこについている金魚すくいの的を多く打ち破いたチームが勝ちという、水遊びの陣取り合戦を実施。
⑦9月16日	シロニーオリンピック2000	折からのシドニーオリンピックブームに乗って、室内オリンピックゲームを実施。マジックペンを使ったバトンリレーなどで盛り上がる。
⑧10月7日	秋だ一番！ 代々木で遊ぼう！	代々木公園で好きな遊びを思い思いに展開。草相撲、Sケン、ブランコ作り、だるまさんがころんだなど、徐々に仲間の輪が増えていった。
⑨10月28日	みんなで トトロに会いにいこう	西武園駅近くにある通称トトロの森まで遠足。車内ではトトロの手紙に書かれた課題を解いたり、森の中ではクラフトや鬼ごっこなどに興じた。
⑩11月4日	スーパーかんけり2000	4つの班に分かれて、かんけりを実施。一つの班で鬼を担当し、協力して他の班をさがすというルール。
⑪11月25日	みんなで作ろう 夢の観覧車	シールやリボン、綿、着色したマカロニなどを張りつけた画用紙のゴンドラを1人1個作成し、直径180センチの大観覧車を共同で作った。
⑫12月9日	キッズ Xmasパーティー	オリジナルケーキ、ミニピザ、バーベキュー、おすしの4つのメニューを作り、保護者の方も招いてクリスマスパーティーを実施。
⑬1月13日	新春 あてましておめでとう (キッズオリジナルドッジボール)	屋上ネット広場でドッジボール大会を実施。途中で、チームの中で決めた秘密の王様がやられたら負けというオリジナルルールも実施した。
⑭2月17日	スーパーおやつ 大作戦！	焼き上がったクレープを何枚もつなげて、903センチの長いスーパーおやつを作成。ピザ味、カレー味、和風味などバリエーションもたくさん。
⑮2月24日	ぼくら駅前カメラマン	世田谷線の一日乗車券を使って、電車スゴロクを実施。降りた駅の名前が出てくる被写体を、デジカメで撮影するという課題も設定した。
⑯3月3日	宿泊大作戦会議?!	館内宿泊の許可証を何者かに奪い取られてしまった。残された謎を解き、宿泊許可証を奪い返し、理事長に印をもらうという館内謎解きゲーム。
⑰3月10日～11日	こどもの城館内宿泊プログラム	〔こどもの城〕から代々木公園までの追跡ハイキングや、暗闇陣とり、プレイポートでの星のかけら探し、ドッジボールなど、最終回は館内に一泊してたっぷりと遊んだ。

(ウ) キャンプ活動

日常の生活を離れ、大自然の中で繰り広げられるキャンプ活動。プレイ事業部では、夏期に小学校１年生～３年生を対象とした「ちびっこ冒険団」と小学校４年生～６年生を対象とした「フェローシップキャンプ」、冬期に小学校１年生～３年生を対象とした「ゆきんこ冒険団」を開催している。対象年齢や、実施時期は違うが、いずれのキャンプも「社会性を育むこと」を第一の目的としているため、グループワークの観点から６人～８人で構成される班での活動をプログラムの中心としている。班の仲間がプログラムの内容を相談することでお互いを感じ、認め合い、またプログラムを実施することで達成感を共有する。このような過程を通して、参加した子どもたちは日を追うごとに仲間の輪を広げていったようである。

また、今年度からＡＶ事業部の協力により、キャンプの記録ビデオを参加者に販売することになった。この事により、実際には現場に行けない家族の方々にも、キャンプ中の参加者の様子がわかりやすくなり、キャンプ活動の大切さがより伝わりやすくなったと思われる。

【平成１２年ユースクラブの活動】

月日	タイトル	内容
１学期① ４月９日	フレンドシップゲーム大会 （新メンバー説明会）	新入会者を多く迎え、現クラブ員から「どんなクラブか」を紹介する話をしたり、お互いが知り合えるようなゲームを展開した。
② ４月23日	代々木公園で遊ぼう! 外出＝代々木公園	仲間と思い切り遊ぶをテーマに代々木公園へ移動して活動。段々と鬼が増える「手つながない鬼」やアドベンチャーゲーム「クマ狩り」を楽しんだ。
③ ５月14日	探検ラリーin IKUTA～ 野越え山越え大作戦～ 外出＝川崎・生田緑地	小グループの活動を通して仲間の輪を深めることをねらいに野山に囲まれた自然の豊かな緑地を使った課題ハイクを行った。
④ ６月４日	「熔かして遊ぼう」 ～キーホルダーを作る～	鉛を熔かし手作りの型に流し込み、ペンダントやキーホルダーを作る活動。金属が熔ける事に驚く姿や協力して熔解作業を行う姿が印象的であった。
⑤ ６月25日	「踊ろ大捜査線!!」 ～ユースクラブ　緊急出動～	こどもの城に爆弾が…という話でメンバーを巻き込みながらヒントをもとに捜し出すゲーム。「ぼく、だんご…」がばくだんに間違えたという設定。
⑥ ７月16日	「うどんイロイロ大作戦」 ～家族でクッキング～	手打ちの麺はメンバーがお汁と具は家族の方々に作ってもらい、一緒に食べるという活動。普段は見られない活動を家族に見てもらうねらいで実施。
夏休特別 ８月20日	夏だ! ユースだ!　みんな遊ぼう!! 外出＝代々木公園	２学期までに大きく間があくのでメンバーの希望を生かして特別活動を行った。内容は水鉄砲を使った陣とり合戦とスイカ割りを実施。
２学期① ９月10日	みんなであそぼう＆作戦会議	ユースの活動に慣れてきたところで、個々の希望を活動に生かしていくための作戦会議を実施。その他、ジャンケンを使ったゲームで遊んだ。
② 10月１日	「ゲームを考えて遊ぼう」 ～ユースあそび プロジェクト～	身近な材料を使い班ごとに簡単に遊べるゲームを開発し、実際にやってみる活動。碁石を茶碗に投げ入れるゲーム等おもしろいゲームが完成した。
③ 10月22日	巨大な料理に挑戦!! タコヤキなんぼ大作戦	メンバーの提案を受けて行ったプログラムで、野球のボール程のタコヤキを作った。中華鍋のおたまを使い各自挑戦した。
④ 11月12日	いざ!!　ＫＡＭＡＫＵＲＡ！ 外出＝鎌倉周辺	リーダーがプレゼンテーションした中から選ばれた活動。周辺のフリー切符を配付、その範囲で班ごとに取材をした。後日、互いにレポートを発表。
⑤ 11月26日	20世紀最後の活動をどうするか 考える会議	思い切り遊ぶをテーマに互いの仲をより深めるための活動を最終回に１泊で行う。その活動の中でどんなことをするかを話し合った。
⑥ 12月16日 ～17日	20世紀最後のプログラム 泊まって遊ぶ大作戦!	企画した遊びを思う存分楽しむ。日暮れまで公園で遊び、原宿で外食、夜は貸切りの館内で遊ぶ、手作りパーティ等の夢だった活動を実現した。
３学期① １月14日	ハッピーニューセンチュリー ゲーム大会	ジャンケン等のゲームで雰囲気が和んだ後、年間のまとめの活動についての作戦会議を行った。最終回は仲間で何かをつくろうという話がまとまる。
② １月28日	進め!!代官山探検隊 「見て来て聞いて大作戦」	時ならぬ雪が残る中、代官山を舞台に街の中にある小さな名物を課題シートにそっていくつ見つけ答えられるかを班ごとに競うゲームを行った。
③ ２月11日	もうすぐバレンタイン ケーキ作りスペシャル＆作戦会議	バレンタインにちなみケーキ作りをする活動を実施。普段は男女混合の班だが、この日は男女別の班とした。後半は最終回へむけて話し合いを実施。
④ ２月25日	ユース最後の活動をどーするか 大作戦会議	何をつくるかを最終決定した。これまでの話し合いをもとにプレイホールの一角に家を班ごとに作り、軒を連ねて長屋にすることを決定した。
⑤ ３月17日 ～18日	みんなの夢の実現! ＮＡＧＡＹＡプロジェクト	Ｉ♥ＮＹ（アイラブながやユース）とテーマを決めて、プランを考え仲間と力を合わせて長屋を作り一泊した。次の日は一般の来館者へ公開した。

平成12年ユース会員

ゆきんこ冒険団2000－63番

❸グループ活動

豊島区区立保育園の園長会で「忍者修行道場」の紹介がされ、同プログラムへの参加申込みが集中したのが、今年の大きな特徴である。そうした中、パペットランドの新プログラム「みんなであおむしくん」・養護学校向けに「みんないっしょ・パペットと遊ぼう」など、人形を使った内容のものが試みられ、今後よりプログラムの展開方法を検討し、来年度に形にしていくことが期待される。また、小学校（障害児学級を含む）からの参加では、総合学習の一貫として利用するところがあった。「プログラムを通してグループを意識する」「仲間作り」をプレイ事業部でのグループ活動の目的としていることを、事前の下見打合せで伝え、学校側の利用の目的とのすり合わせを行った。今後、増えてくると思われる学校のニーズに合った活動が出来るようにし、内容的にも、総合学習に対応できる内容のプログラムを検討していく必要がある。

❹パソコンを使った遊びのプログラム

コンピュータは、社会生活のあらゆる場面で利用されるようになり、インターネットを中心としたＩＴ化が進んでいる。コンピュータ技術の進歩も非常に早く、テレビゲームで始まった子どもたちとコンピュータの関わり方も、日々変化しているのが実状である。

〔こどもの城〕では、コンピュータプレイルームとパソコンルームで、パソコンを使った様々な遊びの活動を実施した。活動内容は、（1）様々なソフトの楽しさや情報機器としての利用を体験する（2）パソコンの機能を活かした創作活動・表現活動を楽しむ（3）情報発信や情報交流を体験する（4）コンピュータを媒介とした協同作業やグループ活動を楽しむ、の４つのねらいを持ち、子どもたちの発達を促すという健全育成にかなった遊びのプログラムを実施した。

コンピュータプレイルームでは既成のソフトを楽しめるようにし、パソコンルームでは様々なテーマを持ったプログラムを、１ヶ月半ごとに内容をかえて運営した。また登録したメンバーのための「パソコン教室」と「パソコンクラブ」（別項参照）とを合わせ３つの活動を実施した。

多くの児童館でもパソコンの導入が始まり、活動内容の問い合わせや、指導依頼も増えている。今後はさらに児童センターなどとの情報交換や、パソコンルームなどでのプログラム資産、経験の効率的な伝達が重要になってきている。

❺まとめ

今年度、課題であった乳幼児のコーナーを常設化することができた。限られた予算の中での対応なので、遊具が不足しているなど、まだまだ充分とは言えないが、少しずつよりよい環境を目ざしたい。ただ運営のルールや、活動プログラム、またとくに子育て支援、子どもたちの発達や健全育成に役立つような情報提供など、ソフト面が未整備であり今後の早い対応が望まれる。

近年、乳幼児を連れた親子の来館が多くなり、実施するプログラムも幼児向けが多くなり、また同じプログラムでも運営方法や内容が低年齢向けとなり、小学生以上の子どもたちに満足のいくプログラムが不足してきている。幼児で来館した子どもたちが、小学生、中学生と長い期間で参加できるプログラムの構成が〔こどもの城〕全体として必要である。この点が今後の大きな課題であろう。

平成12年度活動一覧表

一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
おはなし紙芝居のつどい	毎週火曜日 15：00～15：30	ボランティアによる紙芝居の公演。毎回子どもたちと対話しながら楽しめる作品や物語など、子どもたちの年齢、季節感を考慮して3作品を選び上演した。公演の前には歌や手遊びも実施し、楽しい集いになるように心がけた。毎週2～6歳位の子どもたちが中心に集まり、親子で楽しむ姿も多く見られた。
みんなのにこにこ広場	毎週水曜日 15：00～15：30	昨年度までの「おはなし人形広場Ⅰ」を、鑑賞型のものだけでなく、集まった子どもたちが参加できる遊びの要素も組み込んでいきたいとの考えから「みんなのにこにこ広場」と名称変更して実施。ボランティアの影絵・人形劇の公演のほか、スタッフによるパネルシアターや人形劇、参加劇の上演、簡単人形を作って遊ぼうなどを実施した。
おりがみ遊び広場	毎週木曜日 14：00～15：00	季節にちなんだもの、動物、食べ物、作って遊べるものなど、様々な種類の折り紙を毎回1～2つ選んで、子どもたちに紹介した。ボランティアの、折り方を伝えるだけでなく、子どもとの触れ合いを大切にする姿勢が、会場をあたたかくアットホームな雰囲気にしている。そんな雰囲気の中、親子の交流も多く見られた。
おはなし人形広場Ⅱ	毎週土曜日 15：00～15：30	毎回、プロやアマチュアの人形劇団が人形劇やパネルシアターなどを公演した。第2第4土曜日とそれ以外の土曜日は、観劇者の人数が異なるので、大勢でも楽しめる演目・少人数で間近で観る演目などを考慮した。演じ手の息づかいが感じられる公演を親子で楽しんでいた。
〈七夕行事〉 天までとどけ ねがいごと	7.1－2 11：00～16：00 7.4－7 13：00～16：00	プレイホールの一角を竹の庭に見立て、短冊に願い事をかいて、竹にさげた。また、江戸時代から伝わる七夕飾り（着物・妹背鶴・くず箱・投網・吹き流しなど）を行事のいわれとともにビデオ編集し、モニター上映をすることで、飾り作りへの動機付けとなった。
〈秋分の日〉 第26回　バンパー大会	9.23 12：00－16：00 小学生の部 中・高生の部 同時開催	プレイホール高学年コーナーの人気遊具バンパーをとおして、高学年の子どもたちの交流を広げることを目的に実施した。小学生大会9人、中高生大会8人が参加。特に小学生の部では初参加の子どもが多く、新しい仲間を迎え、盛り上がりを見せた大会となった。（バンパー：ビリヤードに似たニュースポーツゲーム）
〈節分〉 節分会 大まめまき大会	2.3　①15：00～ 2.4　①13：00～ ②15：00～	スタッフとボランティアが扮する鬼軍団に捕らわれた福の神を、会場に集まった参加者と司会者で豆まきをして助け出すという参加劇仕立てのプログラム。途中「節分の由来」をわかりやすく説明する場面も設け、プログラムの終了後、全員に福豆（砂糖豆）を配付した。
〈ひなまつり〉 みんなでひなまつり	2.27－3.2 雛祭りウィーク 3.3－4 折り紙ワークショップ 13：00～	雛祭りウィークでは、紙芝居や人形劇などの普段のプレイホールの活動も雛祭りをテーマに行った。またプレイホール内に雛壇を設置し、雛祭りの雰囲気を盛り上げた。当日は、雛祭りにちなんだ昔遊び、貝合わせや百人一首、お手玉などを楽しむコーナーを設置。夕方には会場で雛祭りの集いとして、雛祭りをテーマにした人形劇の公演を行った。参加者にはひなあられを配付した。
〈春分の日〉 第27回　バンパー大会	3.20 12：00、16：00 小学生の部 中・高生の部 同時開催	秋分の日と同様に高学年の子どもたちの交流を目的として実施。小学生5人、中高生8人が参加。小学生の参加人数が少なかったため、1人あたりの試合数を増やし、できるだけたくさんのメンバーと対戦できるように試合の方法を考慮した。小学生、中高生の大会合同で行うようになって3度目の大会でもあり、大会の前後に小学生、中高生のわくを越えた交流の姿が見られた。

〈パソコンルーム〉

名　称	期　間	備　考
きみもパソコン アニメーター	4.19－6.6	2枚の絵を交互に表示し、簡単なアニメーションが手軽に楽しめるプログラム活動。参加者がコンピュータで描いた絵をもとに、それをコピーして2枚目の絵を作ることもできる。自分の絵が動くことに喜んだり、他の人の作品を眺めたりと活動が広がった。
ネイチャークイズ	6.7－7.11	鳥や花の名前をクイズ形式で出題し、コンピュータの図鑑ソフトを使って調べるプログラム。相談しながら活動する友だち同士や親子の姿が多く見られ、一緒に楽しんでいる姿が印象的だった。
夏休みプログラム① 探検家キャプテンクリックの冒険地図	7.12－8.7	島や大陸などの地図の上に、生き物、山や洞窟、乗物などのイラストを並べて地図を作る。子どもたちは、いろいろな物語を考えながら冒険地図作りを楽しんだ。
夏休みプログラムJ 探検家キャプテンクリックの ジャングル☆カメラ	8.8－9.19	ジャングル・草原・森などの風景を選び、そこにいろいろな生き物や植物、岩、雲などの写真画像データを、組み合わせたり、重ねたりと自由に配置して、コラージュ手法によるグラフィックス作りを楽しんだ。
ことばあそびの A☆B☆C	9.20－10.26	しりとり、アナグラム（文字の並べ替え遊び）、暗号解読の3つのプログラムを実施した。パソコンと対戦するしりとりでは、1台の前で友だち同士や親子で一緒に考え、楽しんでいる姿も見られた。
わくわくBOX	10.27－12.19	予めパソコンに用意した5種類（コモノイレ・タカラバコ・サンカクボックス・キンチャク・ペンダント）の箱の展開図に、パソコン画面上でイラストを貼ったり、色を塗って、プリントし、それを画用紙に貼って組み立てる箱作りのプログラム。
どんなんかな？スコープ	2.20－H13.2.15	21世紀の未来の世界を想像しながら、風景を選び、そこにいろいろな生き物、ロボット、建物、乗物などの写真画像データを組み合わせて作品を作った。出来上がった作品には、子どもたちの様々な空想の世界が広がっていた。
サウンドエフェクター OTOPITA－55	2.16－3.20	選んだ風景（商店街・公園・夜のお屋敷等）、効果音（足音・なき声・騒音等）やBGMを組み合わせ、映画やテレビのような1シーンを作る活動。風景のイメージを、音で表現して楽しんだ。
フレンドシップカード	3.21－4.17	名前や住所、生年月日など、自分のプロフィールをパソコンに入力し、イラストを加えて名刺のようなカードを作るプログラム。期間中何日もパソコンルームに通い、いろいろな種類のカードを作るという子どもの姿も見られた。

ジャングル☆カメラ

〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
〈児童福祉週間〉 キャッスルクエスト 2000 ～古代遺跡の謎を追え～	5.3－7 受付11：00～15：30 終了　17：30	子どもたちに人気のロールプレイングゲームをモチーフにしたプログラムで、子どもたち自身が物語の主人公となり世界の危機を救うために魔王を倒すという、大型のごっこ遊び。受付でストーリーを説明するビデオを見た子どもたちは、屋上ふしぎが丘で修行と称する様々な遊びにチャレンジする。修行のあとは、こどもの城全体を使った謎解きの旅に出発。古代文字で書かれた謎を、解読表を使って協力しながら解き、魔王の居城を目指す。到着した子どもたちは、復活した魔王とジャンケンを模した型の勝負を行い、全員で協力して魔王を倒した。
〈　〃　〉 ゴールデンウィーク 人形劇フェア	4.29－30	パペットマーケットと〔こどもの城〕が共同プロデュース、大学生の児童文化サークル「じゃんぐるじむ」の協力を得て実施。人形を作る、人形を使って遊ぶ、人形劇を見ることを楽しむプログラム。今年度は、作って遊ぶワークショップの会場を研修室からＢスタジオに移し、人形劇の公演を音楽ロビーで行った。劇に登場した形の人形を作ったり、逆に作った人形と同じタイプの人形が劇に登場したりするので子どもたちも喜び、より楽しみが深くなったようだった。
〈夏休み〉 ウォーターアドベンチャー2000 ～戦え！キャッスルレンジャー～	8.12－15 受付11：00－16：00 終了　17：00	子どもたちに人気のロールプレイングゲームをモチーフにしたプログラムで、子どもたち自身が物語の主人公となり世界の危機を救うために魔王を倒すという、大型のごっこ遊び。受付でストーリーを説明するビデオを見た子どもたちは、屋上ふしぎが丘で修行と称する様々な遊びにチャレンジする。修行のあとは、こどもの城全体を使った謎解きの旅に出発。古代文字で書かれた謎を、解読表を使って協力しながら解き、魔王の居城を目指す。到着した子どもたちは、復活した魔王とジャンケンを模した型の勝負を行い、全員で協力して魔王を倒した。
〈開館記念〉 開館記念人形劇フェア	11.3－5 ①13：00～ ②15：00～	プロの人形劇団の公演を「観る」プログラムと人形ごっこを親子でたのしむ「表現する」ワークショップを実施。「観る」人形劇では、人形の動きを楽しめるものや、ストーリーを楽しめる物語など、バラエティーに富んだ公演となった。ワークショップは、絵本「はらぺこあおむし」のストーリをモチーフにした「みんなであおむしくん」の人形あそびをプレイスタッフで実施した（対象は年少組以上の子どもと親、事前申込み）。目玉を付けるだけの簡単な工作で作ったあおむしを靴下を手にはめ、親子であおむしになりきってお話の世界を表現することを楽しんだ。 11.3　童心座「ムギワラぼうし」「赤ずきんちゃん」 11.4　プレイスタッフによるワークショップ「みんなであおむしくん」参加25組 11.5　ぱぴぷぺぽ劇場「にょろにょろ・のそのそ」
〈冬休み〉 クリスマス 人形劇フェア	12.16－17 ①13：00～ ②15：00～	大学生の児童文化サークル「じゃんぐるじむ」の公演。6大学9グループが参加し、子どもたちに素敵な思い出をプレゼントすることを目標に、人形劇・パネルシアター・ペープサートなどそれぞれの大学で行っている演目を子どもたちに披露した。 参加大学／大妻女子大学、創価大学、千葉大学、東京家政大学、明治学院大学、立正大学
〈冬休み〉 2001年あそびの初場所 ～はっけよいでお正月～	H13.1.3－8 受付11：00～16：00 終了～16：30 （ただし3日のみ13：00～）	本年度は村杉紙相撲道場の協力を得て、Ｂスタジオで紙相撲のワークショップを実施した。紙相撲力士を作って道場で他の子と対戦し、勝ち星のスタンプを一定数以上集めると、一日2回開催される紙相撲トーナメントに参加できる。この模様は館内テレビでも生放送された。また今回、ギャラリーの参加性も考え、声援で土俵を振動させるスピーカー相撲も実施。チーム意識を高めるのに一役買った。屋上遊園では昨年同様、三ツ馬、木馬育、投げゴマなどを実施し、親子で遊ぶ姿が多く見られた。
〈春休み〉 春休み人形劇フェア	3.31 4.1－2 ①13：30～ ②15：30～	Ｂスタジオを使い、演じ手が見え、観客と演じ手が一体になる空間を目指し、親子で楽しんだ。演じ手が観客に語りかけ、観客がそれにこたえることで交流が生まれ、子どもにとって気軽で身近な人形劇となった。 3.31くすのき燕「ハロー！かんくろう」「ねずみのすもう」 4.1　茶問屋ショウゴ「ネコくんトラくん」「ゴリちゃん」 4.2　パペットシアタ-おまけ「からからからが・・・」

❷ 講座・クラブ

〈講座〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　考
小学生 パソコン教室Ⅰ	(人) 小4～6 (20)	(人) 11 5	ⅠAコース 4.8～5.27　6回 日曜日10：30～12：30 ⅠBコース 1.14～2.25　6回 日曜日10：30～12：30	パソコンの入門コース。ロゴ言語を使用し、グループ活動によるコンピュータグラフィックスの協同制作を通して、ロゴ言語のプログラミングとパソコンを媒体とした小集団活動を楽しむことがテーマ。5人のグループを作り、各々が絵の部品を作成し、最後にその部品を合体するプログラムを作り、グラフィックスを完成させる。 受講料＝各7000円
小学生 パソコン教室Ⅱ	パソコン教室Ⅰ **終了者** **小4～中1** **(20)**	**12**	**Ⅱコース** **9.24～10.29　5回** **日曜日10：30～12：30**	**小学生パソコン教室を修了した子どものためのコースでゲーム作りがテーマ。ロゴ言語を使用し、ゲーム作りのプログラミングを通して、変数や再帰処理といった概念も学ぶ。** **受講料＝各6000円**
小学生パソコン教室 スペシャル ～マルチメディア 探検隊～	小4～6 (20)	1	3.26～3.30　5日間 連続10：30～12：30	小学生パソコン教室のスペシャル版。デジタルカメラを持ち、グループごとにテーマを考えて〔こどもの城〕の様々な場所を取材した。パソコンで写真入りレポートにまとめ、インターネットのホームページに発表した。パソコンを新しい情報とコミュニケーションのツールとしてとらえたプログラム。 受講料＝各6000円

〈クラブ〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　考
キッズクラブ	(人) 小1～4 1期(30) 2期(30) 3期(30)	(人) 30 30 30	隔週土曜日 15：00～17：00 1期・2期は6回 3期は5回開講	小学校1～4年生までのあそびのクラブ。①家庭や学校では体験できない活動を行う②地域や学校とは違う新しい人間関係作りをめざす③子どもたち自身がプログラムを考え作り上げることで、自発性や発言力を養う一以上3点を目的としている。 受講料＝9,000円（1・2学期）、8,000円（3学期）
ユースクラブ	**小5～中3** **1期(40)** **2期(40)** **3期(40)**	 **35** **32** **30**	**隔週日曜日** **13：30～15：30** **1期・2期は6回** **3期は5回開講**	**小学5年～中学3年生のあそびのクラブ。10代前半の心の成長期に集団活動を通し豊かな人間形成をはかるのがねらい。①多彩な活動を通しての様々な直接体験②仲間から人間関係を学び深める③計画や実施を通し自己の夢を実現することが目的。** **受講料＝9,000円（1・2学期）、8,000円（3学期）**
パソコンクラブ	小4～高3 (40)	8	水・木曜日 14：00～17：30 土曜日13：00～17：30 土曜日10：00～17：30	パソコン教室を修了した子ども、またパソコンに興味のある子どものための交流を中心としたクラブ。パソコンの家庭への普及等により参加者が減少し、本年度を持って終了した。 受講料＝5,000円（1年間）

❸ その他（野外活動、動くこともの城、講師派遣など）

〈野外活動〉

名　称	期　間	備　考
ちびっこ冒険団2000	7.28－31 3泊4日	小学校1～3年生のための舎営キャンプ。班での生活に重点を置き、大自然に恵まれた環境の中で「何をして遊ぼうか」とか「どうやったらみんなが快適に過ごせるか」などを班のみんなと相談しながら、社会性の基礎を養ったり、自然体験を通して感じる心を養うことなどを主な目的としている。今年はグループアクティビティ（班別自由時間）の枠を以前より増やし、子どもたちの創意工夫で自由に遊ぶことを主なプログラムとし、さらに野外炊事やキャンプファイヤーなども実施した。 参加者68名、ボランティア24名、スタッフ4名（福島県国立那須甲子少年自然の家）
ゆきんこ冒険団2000	12.25－28 3泊4日	小学校1～3年生のための、小集団での活動に重点を置いた舎営キャンプ。本年度は積雪、天候に恵まれ、雪合戦、かまくらづくり、そりあそび、雪の造形など班で相談して展開した活動のほか、もちつき大会やキャンプファイヤーなど、さまざまプログラムを楽しむことができた。また、今回は看護婦を外部からスタッフとして参加を依頼し、保健担当として、健康管理、傷病対応等を行った。 参加者72名、ボランティア28名、スタッフ5名（福島県国立那須甲子少年自然の家）
フェローシップ キャンプ2000	8.4－8 4泊5日	小学校4～6年生のためのキャンプ。豊かな自然の中、グループでの活動をプログラムの中心にし、新しい仲間と出会い、関係を深め、社会性を育むことを目的とした。大自然を体で感じることのできた「茶臼岳トレッキング」や、仲間と力を合わせ森の中の基地で一晩を過ごす「オーバーナイトキャンプ」等、出会った仲間との相互理解と協力を進めながら、子どもも大人も全員で楽しみながら作り上げたキャンプとなった。 参加者38名、ボランティア14名、スタッフ3名（福島県国立那須甲子少年自然の家）

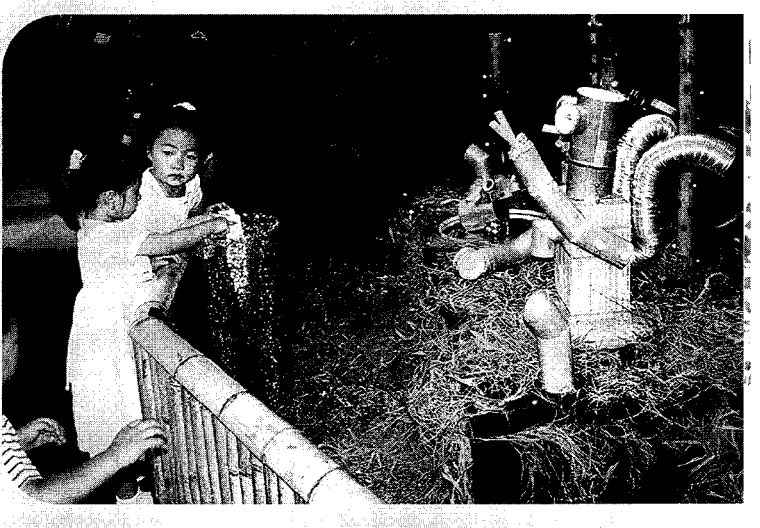
〈動くこどもの城、講師派遣、他〉

名　称	期　間	備　考
〈講師派遣〉 レク指導の実際 「ゲームをとおした 仲間作り」 （大田区鵜の木児童館）	10.11	鵜の木児童館より職員の資質向上や具体的なプログラムの研修の一環として「親子で遊べるゲームの実際」をテーマに実技講習の依頼があった。それに基づいてオリンピックゲーム大会を内容に児童館に集まる子どもたちを対象にゲーム指導を行い、それを見学及び一緒に実施することを通してプログラム展開の研修を行った。この研修は2年目を迎えており、先生方との意見交換の中でも今後は一緒に展開したり、実際に実践される活動について相談するなど、より実践的に展開していくことを確認した。
〈講師派遣〉 「遊びの中で育つ 子どもの社会性」 （浦安市日の出公民館 家庭教育学級）	11.10	浦安市の日の出地区に住む、子どもを持つ保護者のための講習会。遊びとは、①昔と今の遊びの変容、②群れ型遊びの効能、③遊びを通して社会性を育む、④遊びの支援をするということなど、遊びの理解とその支援の仕方についての講習を行った。 特に新興住宅地という地域性もあってか、遊び環境についての悩みや、具体的に遊びを支援するための組織作りなどについての質問も多かった。
〈講師派遣〉 静岡県放課後児童指導員研修会 （沼津） （静岡） （浜松）	 2.13 2.15 2.19	県庁が主催する学童クラブの指導員を対象にした研修会で実技講習を行った。内容としては「仲間作りを進めるゲーム」をテーマにイニシアティブゲームとジャンケンを使ったゲームのいろいろを紹介した。先生方は経験の長い方を対象としていたため、①新しいスタイルのゲーム②ゲームのバリエーション（発想により活動を豊かにする）の紹介をねらいとして、ゲーム紹介とその基本的な考え方について紹介をした。どのゲームについても興味深く話を聞いてもらうことができ、有意義な機会であった。
〈平成12年度地域子育て支援センター担当者研修会〉 ［こどもの城］	9.21 9.28 10.5	厚生省と日本保育協会主催による研修会。プレイ事業部による実技講習は、「みんなであおむし君」を行った。エリックカールの絵本「はらぺこあおむし」の読み語りの後、くつしたに目のシールをはってあおむしのパペットを作る。その後、パペットを使って新聞紙の食べ物をちぎったり、身体を木に見立ててよじのぼったりというプログラムを実施。今回は昨年からの課題でもあった3～4歳位の親子を対象にしたプログラムを紹介した。
〈講師派遣〉 「レクリエーション実技研修」 （調布）	2.8	調布市児童青少年課職員を対象に「児童館におけるレクリエーションゲームの指導法」についての研修会を行った。アイスブレイクのゲームやグループ対抗ゲームなどを実際に体験する中で、レクリエーションゲームを指導する際の留意点を検討する機会となった。

平成12年度コンピュータプレイ利用実績
月・利用者（人）　合計利用者数　57,133

4月	4,429	5月	4,413	6月	4,270	7月	5,795	8月	10,585	9月	3,515
10月	3,496	11月	3,985	12月	3,267	1月	4,226	2月	3,562	3月	5,590

造形事業部



平成12年度の活動

はじめに

1985年の開館以来、造形スタジオでは、子どもたちが造形体験を豊かにしながら、感性を健やかに発育してゆく方法として、①新しい視点で素材を探究して、子どもたちに素材への広い関心を抱かせる方法：②そのままでは素材になりにくい音や光などを制作の媒体としてとらえ、子どもたちの造形感を新しくする方法：③制作活動の基本となる「素材と道具と技法」の三つの関係を理解できるように視覚化した方法。これらの三つの「ワークショップ」を軸にして行っている。そして、これらの三つを、順次くりかえしながら、スタジオの運営をしている。

このワークショップの構成要素である「展示・体験・制作」という従来の基本コンセプトに加え、プログラムに応じて新ためて環境設定を行ない、その環境に子どもたちが積極的にかかわっていけるようにプログラムを展開した。今回2年続けて「素材との出会い展－竹と造形－」を実施した。同じテーマでも平坦にならないように節目ごとにアクセントをつけて行った。

①「一般来館児へのワークショップ活動」

今年度の一般来館児対応活動は、子どもはもちろんのこと大人も触れることの少くなってきた「竹」を造形素材に選び、「素材との出会い展：竹と造形」を開催した。

②講座・クラブの活動

「講座・クラブの活動」では、〈こどもクリエイティブクラブ〉として5つコースを実施した。今年度は、指導者が得意とする技法や領域を積極的に子どもと共有するために、素材・表現法・創造性の刺激などにこだわるプログラムを実施した。

③グループ活動

平常期間の午前中は、受け入れの総合案内課と協力して従来のプログラムどおり造形スタジオの運営を行った。

❶ 一般利用

(ア) 素材との出会い展～竹と造形

平常期間＝平成12年4月8日～7月19日

①「やってみよう！つくってみよう！竹と造形」

夏休み特別期間＝平成12年7月20日～9月3日

②「素材との出会い展～竹と造形～バンブー革命」

平常期間＝平成12年9月8日～10月1日

③「やってみよう！つくってみよう！竹と造形」

平成10年10月から継続してきた造形素材として、本年度も竹を選び、夏休み特別期間は「竹と生活」「造形素材としての竹の可能性」という視点からワークショップ活動「素材との出会い展～竹と造形～バンブー革命」を実施した。

平常期間をプログラム試行のステップにして、プログラム開発、実施、再考から特別期間の構成準備を行った。今回も展示・体験・制作という造形スタジオ独自のワークショップ形式を行った。

竹は、アジアや日本に特有の植物で、プラスチック製

品の普及する前は生活用品・農耕用具・工芸品・玩具など生活の中でさまざまな役割を果たし、非常に広範囲な用途のある材料であった。しかし、最近ではプラスチック製品の量産化や竹細工の手間賃の高騰などのため、子どもたちはもちろんのこと、大人でさえ竹でできた製品等に触れる機会が少なくなっている。つまり、私たちの祖先が培ってきた竹細工の伝統的な技や巧みな技が失われつつあるのである。

「素材との出会い展〜竹と造形」は、竹の伝統的な役割と大切さを子どもたちに伝えること、子どもたちに造形素材としての竹の特性——しなる・かたい・筒状など——をどうすればプログラムに生かすことができるか考え、これからの造形素材として竹をどのように捉え、扱い、子どもたちに提示できるのか、作ることだけでなく、五感で感じ、知り、楽しむことを根本的な要素として企画した。

来館する年齢の異なる「不特定多数」の子どもたちに竹というテーマを自然に見て、触って、感じ、知ることができるように、3階エレベーターホールから廊下、ロビー、そして造形スタジオへと、造形スタジオだけでなく、子どもが直接竹と出会い、造形スタジオでの活動と有機的に関係づける展示・体験空間を広げた。そして、今年も活動空間の演出のひとつとして子どもたちと一緒に遊び、探索する「狂言回し」的なキャラクター「たけくん」を登場させた。活動空間の至るところで「たけくん」と子どもたちが出会い、一緒に活動しているかのように設定した。

廊下には、「たけくん」が指さす方向に「竹冠」を使った漢字と並列に竹で作られた民具や道具等を展示し、竹の展示物の名前・使い方などがイラストと説明文で理解できるようにした。

3階ロビー・スロープには、竹の壁を作り竹林のなかを子どもたちが通り抜けられるように設定した。スロープの片側の円形劇場壁面には、手で触れると音がでる竹の音具を設置した。そして、スタジオ入口には、竹で作ったロボット「タケボット」とロボット犬「タケボ」が竹と照明を組み合わせて作った宇宙的な空間の中で、子どもたちがスイッチを押すとタケボットたちの動きと照明がシンクロするように設定した。子どもたちは、竹という和風のイメージと宇宙的なイメージとの融合を楽しんでいたようである。

スタジオに入ってすぐのコーナーでは、竹の情報をカプセルのように詰め込んだ「竹情報カプセル」やいろいろな種類の竹の触れる展示など、竹を知って体験する、コーナーを設けた。ここでは、スタッフと博物館実習の学生が随時、竹のマットを敷いて特設のミニワークショップの場を設定し、竹で作った操り人形のライオンが冒険するなかで、竹の特性を知り、竹を体験するミニワークショップ「ライオンくんの竹ぼうけん」を実施した。これは、博物館実習としてきた学生の実習の一環でスタッフとの指導で作りだし実戦したものをもとに、夏休み期間中随時行った。

「素材との出会い展〜竹と造形」 ミニワークショップ

「素材との出会い展〜竹と造形」 小学生コーナー「たけ・タケ・竹」

エレベーターホールからロビーへと展示空間を広げたことは、より積極的な展示物の鑑賞活動と造形活動へと繋がった。単独の事業部専有のスペースではないので事前の展示準備（準備での時間的な制約など）や保守・点検などなどさまざまな配慮や人的な配置など昨年の経験が今回は生かされた。しかし、初めて来た来館者だけでなくリピーターへのアピールも高かったと思われる。

そして、造形作家・松本秋則氏の協力をえて、昨年制作した竹と和紙による音の環境彫刻「松本シアター」に新たに、旋回しながら音が出る竹の飛行船や割った竹で作られた鼓状の巨大なオブジェなども設置して再開した。竹の空間には、音具が設置されており、16個のスイッチをそれぞれ入れると、竹の異なる音色が聞こえてくる。小さな子どもでも簡単に操作ができるように配慮されているので、誰でも竹のさまざまな音に耳を傾けることができた。スタジオでの制作空間ののこぎりなどの音の聞こえる活気のある空間と別の、竹の音が聞こえながらも静寂を感じさせる「癒しの空間」であった。今回も来館者は、心がやすらぐ、自然の音がする、竹の音はすばらしい、きれいとか、異口同音にこの竹の音空間を評価してくれた。

「親子プログラム」「子どもだけのプログラム（小学1年～）」「子どもだけのプログラム（小学3年～）」それぞれに人気があった。造形スタジオはほぼ毎日フル稼働した。プログラム内容もステップで実施し再考したもので充実したものであった。（プログラム内容は別表に記す。）子どもだけで一日平均1,000人以上がプログラムに参加した。プレイングボードの利用者、及び保護者をカウントすると1,500人以上が造形スタジオを利用したと推測される。未だ使える材料を捨てる、使った道具、材料をかたずけずに出し放しにしているなど、ここ数年道具や材料の扱いなどが悪くなってきている。造形スタジオでは、常にオリジナルのプログラムを実施しているので材料の補充、管理、竹のストックの問題（管理場所、虫食い、使いやすい大きさへの準備など）及び、道具等のメンテナンスなどにも時間を要した。

「素材との出会い展～竹と造形」
竹道具の展示

(イ)「こども歳時記」

それぞれの歳時記の、季節感やイメージが、楽しくてわかりやすく伝わるようなプログラムと、さまざまな展示で、創作意欲をかきたてるような環境作りを心がけた。

【端午の節句－こどもの日】

スタジオ入口のロビーに大きな口をあけた、竹をしならせて出来たコイのアーチを設置。ひもを引くと、じゃらじゃらと小ゴイがおどり音を出し、子どもたちの健康を祝してくれる。スタジオの天井には、竹の大きな筒をつなげたコイのぼりが登場し、子どもたちの制作を見守ってくれた。スタジオのあちらこちらに制作の手助けになるようにと、コイを象徴した飾り付けをして雰囲気を盛り上げた。

【七夕】

七夕の演出として、3方向を竹で囲み、天井から竹の輪飾りをぶらさげた特設コーナーを設置。7/6、7の2日間限定で、親子で参加するプログラム、『たなばたんざく』を実施した。一般の親子コーナーに比べ、特別な空間の中での制作により、普段以上に密接に親子のかかわり合いを持っていた。小学生以上も参加可能なため、親子に混ざっての制作を楽しんでいた。

【クリスマス】

21世紀、未来へ向けてのクリスマス。スペースシャトルにデザインされた大きな看板と、宇宙飛行士のおじぎ人形（ひもを引っぱるとおじぎする仕掛け）を設置。足下に、星模様の空飛ぶトナカイも配した。子どもたちは思い思いに、それらの人形で遊んでいた。スタジオに設置した、竹と和紙で出来たドームをサンタの家に見立てて、色とりどりのプレゼントとトナカイを飾り付けることで、楽しい雰囲気を演出し、制作の足がかりとした。

【お正月】

エレベーター横の廊下壁面に、特製かるたを貼ったり、スタジオ入口の壁にはお正月にちなんだクイズをめくって遊ぶしかけを設置。にぎやかな雰囲気を感じながらスタジオへ向かえるように心がけた。プログラムにも干支（巳）をモチーフにしたものを実施。天井からぶら下がったひもを引くと、干支（巳）のパネルが出てきて、子どもたちを歓迎する。和紙で出来た凧をちりばめたり、紙で作ったおもちや、鯛の飾りで、楽しく制作できるように環境作りをした。

【節分】

スタジオ内に、角の生えた雲（鬼雲）、鬼のパンツ、鬼の金棒でにぎやかに飾り付けした壁で囲んだ『鬼道場』を設置。空気でふくらませておきあがりこぼしになる鬼を登場させると、子どもたちは、たおしてもたおしても起き上がってくる鬼を相手に奮闘していた。たたいて遊ぶ赤鬼の『鬼太鼓』や、かぶって青鬼に変身する『かぶり鬼』も設置し、親子で体験できるようにした。受付のスタッフは、それぞれに鬼の角を頭に付けて、節分の演出に心がけた。

【桃の節句－ひなまつり】

スタジオへ向かう廊下の壁等に、桃の花や、ひしもちの飾りをしたり、大きなボイド管で作った桃の花のドームを設置し、中に入って竹楽器の音を楽しめるようにして、おひなさまの雰囲気を演出した。スタジオにもおひなさまの飾りをちりばめて、華やかな空間の中で、子どもたちが楽しく制作出来るように配慮した。特製のひな壇も設置し、創作意欲をかきたてるような環境作りとなった。

(ウ) 第15回造形スタジオ展

この度、第15回目を迎えた「造形スタジオ展」は、毎年11月に行われる〔こどもの城〕の開館記念行事にあわせて実施しており、昨年の造形スタジオ展以降、一年の間に、我われスタッフが子どもたちのためにテーマをさだめて開発したいろいろなプログラムと、参加した子どもたちの様子を作品と写真を通して伝えることを目的としている。今回は主に夏休みに実施した「素材との出会い展～竹と造形　バンブー革命～」を中心に、「こどもクリエイティブクラブ」各コースの活動を紹介した。

「素材との出会い展～竹と造形　バンブー革命～」では、竹の持つ「筒状」「しなる」「割れる」などの特性を生かして、伝統玩具を現代風にアレンジしたものから、独創的なものまで、プログラムは多岐にわたった。これらのプログラムをそれぞれプログラムボックスに収納し、造形スタジオ入り口前に40点、造形スタジオ内の壁に8点の合計48点展示した。

また、竹を素材にした活動をしているアーティスト、松本秋則さんの作品を展示した「松本劇場」も再開し、こどもたち自身が竹の作品群の不思議な音や動きを、手元スイッチによって操作できる展示体験空間を用意した。

「こどもクリエイティブクラブ」のコーナーでは、火曜日から土曜日までの各コースを作品と活動風景写真で紹介した。各コースとも、扱う素材や技法が異なるため、展示された作品も様々でユニークな展示となった。

「造形スタジオ展」は、過去1年間の活動のダイジェ

スト版的な展覧会である。多くの人に紹介すると同時に、我われ自身もこの展覧会から過去の内容を振り返り、そして新たな活動につなげていけるよう心がけている。

(エ)「遊びと造形発想展2000」

平常期間＝H 12.10. 3 .～H 13.3.18.
春休み特別期間＝H 13.3.20.～H 13. 4 . 8 .

『どんな小さいことでもよい、自分の目で見、自分の頭で考えながら、何かを感じとれる時、「創造性」が芽生えはじめる。』　　高山正喜久

「遊びと造形発想展2000」は、筑波大学名誉教授の高山正喜久氏が、数十年にわたって造形の基礎教育に携わり、培ってこられた「遊びと造形発想法」を元に、子どもたちが遊びを通じてものを見、触り、作りながら、造形の楽しさ、からくり的要素のおもしろさを見い出すことを目的としたワークショップである。

このワークショップの展示体験コーナーとしては、3階ロビーに約3メートル角の恐竜の形を模したブースを作り、その中に昔ながらの玩具の数々を展示した。ブース中央には、子どもが通り抜けられる程のトンネルを作り、内二ヵ所にブース内に顔を覗かせるドーム状の窓を設けて、さまざまな方向から玩具が見られるようにした。これらの玩具は、高山正喜久氏が数十年以上もの間、玩具や遊びの中にある造形的な着想や機構を、造形的なまなざしで見つづけながら集めてきたものの数々であり、これらの玩具を氏は、「L型」や「Z型」、「3枚組」、「折って切る」など、機構の原理を独特の方法で分類し、そして実践教育の中で生かしてこられている。

その他の展示では、A1大の展示パネルにこの分類に従った機構イラストと、氏所蔵の学生サンプル作品のレプリカを構成し、3Fのエレベーターホール脇からロビーに到るまでの廊下壁面、円形劇場脇のスロープ壁面に計16枚の展示パネル及び、18枚の作品パネルを展示構成した。また、造形スタジオ入口前の展示コーナーには、大人と同じくらいの大きさの宇宙飛行士の人形があり、ひもを引っ張ると「Z型」という機構により、おじぎをして子どもたちを迎えてくれる。

これらの展示体験コーナーは、11月の開館記念行事にあわせてその前後行ったもので、春休み特別期間には、入口前の展示コーナーに直径1.2メートル、高さ2メートルのボイド管の中央に、前述のようなドーム状の窓を設けて、そこに「穴開き」という機構で遊べる仕掛けとした。この「穴開き」は、描いたイラストの一部に穴が開いており、その穴に裏から指を入れると、動きを伴ったイラストに早変わりするというもので、ボイド管の内側に取り付けてあるアクリルミラーによって、子どもたち自身で遊んでいる様子がわかる仕組みとした。展示期間中、まだ背の届かない妹を抱き抱えるようにして見せてあげている兄弟に逢い、とても微笑ましく感じられた。

また造形スタジオ奥の展示体験コーナーでは、前述「Z型」のライオン（ひもを引っ張って親ライオンをおじぎさせると、親ライオンの後ろから子ライオンが三匹、顔をのぞかせる)、扇形に切った色とりどりのシートをマグネットボード（1m×3.6mの大きさ）に貼って自由に形作って遊ぶ「円形を十文字に切る」、重ねた二枚の絵の違いのおもしろさを、切り抜いた穴から連想させる「切り抜き」など、小さな子どもにも楽しめるコーナーを設置した。

制作コーナーにおいては、親子コーナーでは、一枚の紙に切れ込みを入れたり、曲げる、折るなど、ほんの少し手を加えるだけで、思いもよらない形が生まれることや、幾つかの素材の組み合わせで簡単に動きを伴うものができるなど、発想の転換によってどんどん広がりを見せる工作のおもしろさを、子どもたちに分りやすく、そして楽しみながら取り組めるよう活動を行った。例えばプログラム「ペーパー.COM」では、一枚のWクラフト紙（両面の色が違う色紙）に一～数ヵ所の切れ込みと、部分を折る、曲げる、つけるなどして飾り付けた後、平面だった紙が猿やねずみ、魚などの立体作品に早変わりする。このプログラムを実施するにあたって、切れ込みや曲げ、折り込みなど、数十種類にのぼるサンプルを制作し、その中から可能性がある数種類を見い出しプログラム化した。

また、低・高学年コーナーにおいては、竹や紙、段ボールなどの各種素材や、のこぎりや万力、手回しドリルなどの用途に合った道具を用い、出来上がるとユーモラスに動く、勢い良く回る、ぴょこっと飛び出すなど、からくり的な要素のあるプログラムを展開した。参加した子どもたちは、機構の部分にはてこずりながらも実際動くものが出来上がると、それまでの苦労もすっかり忘れた満足そうな笑顔を見せてくれていた。

「遊びと造形発想展2000」の期間中、親子コーナーでは8プログラム、低・高学年コーナーで8プログラム、全体を通じて16のプログラムを実施したが、これらの活動を通じても、展示や制作の中で出逢ったり遊んだり

しながら、ものを作ったり描いたりデザインしたりする発想は、遊びの心から生まれてくる、ということを感じてもらえれば、と願ってやまない。

㈶「映・造ワークショップ」

造形事業部では、過去にもAV事業部と共同で「アニメ体験」などの講座を実施してきている。今回は、アニメーションという手法を体験していくのではなく、「時間」と「動き」を伴う映像性と素材や道具を使って平面や立体のものを表現する造形性、各々の分野からひとつのテーマにアプローチしてプログラムを作り上げていくクラブ「映・造ワークショップ」を3期各4回、1年間にわたって講座を開設した。

1期では、まさに映像と造形の出発点とも言えるスペインのアルタミラ洞窟の壁画をテーマにした。子どもたちがアルタミラ壁画を段ボールや岩絵の具などを使って制作し、蝋燭の照明などを使って追体験しながら、アルタミラについて自分なりのイメージを映像化した。

2期では、映画の元といえる「マジックランタン」を制作し、フィルムにあたるガラス絵を投影し、スクリーンになる素材も布、ドライアイスの煙など投影の効果を体験した。映像の歴史を制作のなかに組み入れて、ハードの製作、効果の体験、表現する内容のソフト（ガラス絵の種板）の製作と子どもたち自らがメディアと表現を体験的に学ぶワークショップを展開した。

3期では、さらに現代の映像製作を体験するためにデジタルビデオカメラとコンピュータを使った「デジタルシネマ」作りに挑戦した。子どもたちは、映像作りの全体像を理解すると、ストーリー作り、小道具や大道具作りや環境設定と各自でペースを作り製作に取り組んでいった。しかし、個々の作業に終始せずにお互いが協力しあうことでより効果が生まれることに自然に気づき、出演者、演出効果など共同作業も行われ、作品は作り上げられた。

「こどもクリエイティブクラブ　映・造ワークショップ」

非常に実験的な試みで、毎回スタッフ同士の事前、事後の打合せ、準備、反省を繰り返しながら、学校教育の現場で取り上げられることの少ない映像表現を「どのようにして子どもがメディアにアプローチできるか」という課題に対して、プログラム化できたと思う。

❷講座・クラブ

こどもクリエイティブクラブA　（火曜日）

(ア)「クレイワーク」

土にはいろいろな種類があり、技法や釉薬、焼成方法などもさまざまである。「クレイワーク」では、土による表現の可能性を追求しながら、子どもたちの表現力を引き出すための活動をおこなった。土をこねる、たたく、つまみだす、といった初歩的な行為から、次第にくり抜きやぞうがん、たたら、型押し、ひも作りなど、陶芸の基本的な技法を用い、子どもたちが遊びながらも個性を発揮できるよう指導していった。また、年間を通じて子どもたちが使用する粘土は、一人あたり合計100キロ以上というダイナミックな活動である。

1期は「かたまりからの変化」とし、普段は用いることのないような大きさの粘土の塊を使い、身体全体を使った活動をおこなった。初回はまず、粘土に慣れること、クラブメンバーにも慣れることを目的としたワークショップ「粘土の冒険旅行～宇宙編」（グループ活動の一つをアレンジしたもの）を実施。これによって、最初は緊張していた子どもたちも和やかな雰囲気となったようである。次に、計50キロもの土の粉に大量の水を混ぜ、足で踏んで粘土を作り、一部を平らにのばして自分たちの足型をとった。足型のそばにその日の日付けをいれる子、足型だけではものたりず、手型や肘型、顔の型までとりだす子も出てきて、とにかくにぎやかな活動となった。

続いて、くりぬきの技法をつかう「岩山をつくろう」、くり抜きとぞうがん、磨きの技法をつかう「ボコボコ隕石とツルツル隕石」、ろくろ体験の「ろくろ星人」などを制作した。

2期は「板からの変化」で、これは四角形にこねた粘土をたたら板と切り糸で切っていくと、たたら板の厚さ分の粘土の板「たたら」ができあがる。これを丸めて形作る「トーテムポールをつくろう」、ボールにかぶせて型をとる「ボールのお面」、箱状に組み立て、ガラスを溶かして飾りにする「宝箱をつくろう」などを制作。

3期はひも状にした粘土を、蛇がとぐろを巻いているように巻いたり、積み上げたりして作る「ひもからの変化」で制作した。まず粘土のひもから器をつくり、その中に動物や飼育小屋などをつくる「動物園をつくろう」を制作。りすやうさぎなどの小動物ばかり作る子や、恐竜や怪獣専門の子など、自分たちの好きな動物や生き物が盛り沢山の動物園ができあがった。そして最後には1期にみんなで粉から作った粘土を使って、大物の「粘土のたいこ」を制作した（平均的な大きさは直径25センチ、高さ30センチくらい）。このたいこは、胴の部分も革をはる部分ももちろん粘土なのだが、膜に「エ」の字に切れ込みを入れ、高温（1200度）で焼成することにより、まるで金属を叩いているように澄んだ、数種類の音を奏でることになる。子どもたちは出来上がった自分の作品を前にしたとき、はたしてきれいな音がするかどうか、不安そうな表情だったが、いざ叩いてみるとそのような思いもどこかに行ってしまったようで、音くらべをしたり即興演奏をしたりと楽しそうに叩いていた。

こどもクリエイティブクラブB（水曜日）

（イ）「ゆかいな造形」

ゆかいな造形では、木や金属、プラスチックなど、さまざまな素材と用途に合った道具を使い分け、子どもたちが遊びのなかで、より深い造形体験をすることを基本とした活動を行っている。

1期の最初は、子どもたちにクラブに慣れてもらうため、体全体を使った遊びの「空気であそぼう」というワークショップを行った。まず導入として、色とりどりの大きなポリ袋に空気をためて風船状にしたものを百数十個、クラブスペースに隙間なくばらまいたうえで、子どもたちの登場を待った。開始時間前、期待と不安の入り交じったような顔つきでやって来た子どもたちは、たくさんのポリ袋風船を前にして、今から一体何がはじまるのか、興味津々の顔つきになっていた。そして、様々な大きさや色のポリ袋に空気をつかまえたり、つかまえた空気の形を変型させてみたりの活動につながった。

その後は、この大きなポリ袋を裂いてシート状にしたものを30枚程つなぎ合わせて、直径1メートル、長5メートルほどの筒状にしたものに、送風機で強制的に風を送ってやると、こいのぼりのように空気をはらんだオブジェになる。子どもたちは、その中を空気とともに通り抜けたり、先程つかまえた空気の袋を飛ばしてみたりと、大はしゃぎの様子だった。

次には、この自分でつかまえた空気を和紙で型取る「空気の抜けがらで異次元体験」を実施。出来上がった空気の抜けがらは、大人でも一抱え程の大きさがあり、またそれをかぶると、目の前がスクリーンに早変わりする。このスクリーンにいろいろな映像を写したり、同時にシンセサイザーで不思議な音をからめたりして楽しんだ。その他には、自分が蟻になった気分で蟻の巣を作る「ありの気持ち」、鏡の無限反射の原理を利用した「ミラクルボックス」を制作。「ありの気持ち」は、巣の雄型を粘土で作り、それに石膏を流し込んで型取る、という技法を用いている。

2期の最初には、「ヒッピーの椅子」を制作。これは、段ボールを利用したもので、組み立てるとかなり頑丈な椅子になる。また必要のないときには、コンパクトに丸めておくというもの。一枚の段ボールを、ちょっと折ったり曲げたりするだけで、全く違った形態と機能が生み出されるということに、こどもたちも驚きの声をあげていた。次に制作した「鋳物ゲーム盤」は、砂の雌型に錫の合金を流し込んで、金属の駒を作り、これに自分自身で考えた双六を組み合わせた。他にはピアノ線の弾力を利用し、中空でユーモラスな動きをする「ぼよよんマン」、数十本の光ファイバーと光源を仕込んで、神秘的なイルミネーションを見せる「ビンの中の小ツリー」を制作。

そして3期の最初に作った「かげえでポン」は、見た目にはボルトやマカロニ、木の端材など雑多な素材の集まりにしか見えないものが、強い光をあてると不思議と象やペンギン、蝶といったものの影が映し出される。子どもたちは、何度も光と影の関係を調整しながら取り組んでいた。続いて木の枝や泥を使って思い思いの巣を作る「これって何の巣？」、竹ひごを丸く組み合わせて行灯を作る「ライトボール」を制作して一年を終了した。やって来る子どもたちは、プログラムの変わり目には必ず「先生、今日は何するの？」と、目を輝かせて聞いてくる。その度に「今日は金属を溶かすよ」とか「光るものを作るよ」などと簡単に話をすると、「どうやって作るの？」「何を使うの？」といった具合に制作に関する質問が次々ととんできた。

年間を通じて子どもたちは、さまざまな素材や道具、そして技法に接し、個人の造形表現の巾を広げながら、それぞれに楽しみを見い出していた。また、回を重ねるごとに取り組み方や制作技術も向上していっていたことも見逃せない点である。

こどもクリエイティブクラブC（木曜日）

（ウ）「版画の楽しみ　プリントワーク」

「プリント」というと、どうしても「浮世絵」など、私たち日本人に馴染みが深いためか、技法が先にうかび、

木版、銅版、孔版などとジャンルで見てしまいがちである。この「プリントワーク」では、そうした版画の領域にこだわらずに、刷る対象も紙に限定せず身の回りにある木、金属、プラスチックなどさまざまなものに形・色・テクスチャーなどをうつしていく版画の領域を越えて、「うつす」ことを楽しむクラブである。

1期では、子どもたちが、その日のクラブに、出席した際に押す判子（スタンプ）を作り、毎回カードに押すようにした。版画材料で刷る道具や技法も重要であるが、刷る対象物＝素材も重要である。毎年4月に行われている紙の見本市を子どもたちと一緒に見学した。そして、自分自身の身体＝掌、腕、足などを版にして見本市で展示されていたいろいろな種類の紙にプリントした本を制作した。また、布を2枚重ね合わせ、絵の具の浸透性を生かしたプリントやスポンジ版画の方法でサンダルの底面に版を作り、サンダルを履いて歩きながら印刷したり、卵の包装紙パックやトイレットペーパーを水に溶かして紙を再生して新聞紙を丸めた型を使った型取りでお面を作った。さらに、スポンジ版画によるTシャツの制作も行った。

2期では、フェルト羊毛を使って、素材体験をした。ベニヤ板にソリッドマーカーで絵を描いて版にする「本格的な」リトグラフを刷った。絵の具の油分が水分をはじくことで絵が紙に定着することを自然に子どもたちは理解できた。他にはシルクスクリーン技法によるカレンダーの制作や、石膏の型取りからキャンドルスタンドなどを制作した。

3期では「うつす」行為を多角的にとらえ、カラーインク・ボタン・羽などいろいろな素材を使い、OHPやコピー機などを用いた「光」と「影」をうつして作品にするプログラムや銅版による制作を実施した。

こどもクリエイティブクラブD（金曜日）
（エ）イメージする楽しみ「絵本の世界へ」

昨年度と同様、「絵本の世界」では、1年を通し製本された“本”を制作するだけでなく、様々な表現方法や造形素材と出会い、絵本を造る土台となる子どもたちの想像力を養う事を目的に進めた。1年を通し各学期毎にテーマを設け、プログラムを計画、実施した。1期は、絵本制作の前段階として、いろいろな技法あるいは手法を体験する事を基本に活動した。床一面に敷いた紙に、クレヨンや絵の具を筆のかわりに手や足を使って、ペインティングをし、できた紙を使いコラージュ作品を制作した。同じ紙を使っても表現方法を変えると違う作品になる事を体験した。さらに○△□のシールを構成して絵を描いたり、図鑑のコピーを使い、コラージュで新種生物を作ったり、木の箱型絵本の中に2つの反対の島を作り、小枝、小石、電気の部品などで飾ったりと、いろいろな表現方法や日常であまり見慣れない素材などと出会う事によって、新たな発見がもてる様に心掛けた。

2期は、“お話し的”な要素をいくつかの場面に組み立て、絵本の制作を試みた。絵本が真ん中で半分に切れていて、めくると上半身と下半身の組み合わせを変えられる「モンタージュ絵本」やくじ引きを引き、そのキーワードをお話しに取り入れて「くじ引き紙芝居」を制作した。また、日光写真の様に、印画紙の上に直接物を置き、光りを当てるという、フィルムを使わない方法で写真を撮り、それを1冊の本に製本した「フォトグラム絵本」を制作した。子どもたちは、各々のプログラムで想像力を駆使して制作に励んでいたようだ。

3期は、1、2期で体験したことを生かし、制作のスケジュール、絵本の形（製本方法）、何の素材で絵本を作るか、描画材料、お話しの内容などを一人ひとりで考えて制作した。それぞれの個性が光る作品が完成した。何年も継続して受講している子や、学年の差がある事などを踏まえ、どの子でも興味や好奇心を持って取り組めて、想像力が膨らむ様に、プログラムを実施してきた。こどもたちは想像の世界を形にする楽しさを体験したようだ。

「こどもクリエイティブクラブ　ハンズワーク」

こどもクリエイティブクラブE（土曜日）
（オ）ハンズワーク「創造探検」

対象年令を小学校4年生以上に設定した高学年向けのクラブ。工具の基本的な使用方法を確認すると共に、素材の可能性を探究出来るようなプログラムを実施した。1期は、1本の垂木を好きな角度で切断し、くぎやボンドでつなげて生き物などを作り、ノコギリ、トンカチの使い方をおさらいした。他に、石膏を塗った板に、線香で穴を開けた下絵をかぶせて鉄粉をまき、腐食作用によ

って絵が完成する「錆び絵」や、和紙に竹ペンで絵を描き障子にしてスライドさせながら観賞出来る「スライドピクチャー」、新聞紙をボンドで固めながら作る「プロテクトマスク」などを制作した。完成させた作品にはアーティストの気分でサインをすることに決め、オリジナルのサインスタンプを作り活用した。その日に使った材料の屑を小さなビニール袋につめて保管する制作日記も平行して行った。2期では空間をテーマとしたプログラムを実施。電動ドリルや糸ノコなど、少し抵抗感のある工具も使用した。穴のあいたテーブルを作り、普段はテーブルとして使えるが穴にオブジェを差し込むと劇場に変身する「テーブルシアター」や、何層にも分かれた町並みを作り、虫眼鏡のレンズをはめ込んだのぞき窓から見ると不思議な奥行きを体感することが出来る「スコープタウン」、なましたり、たたいたりした銅板に、銅線や真ちゅう線をハンダづけして未来建築を想定し、バチなどでたたくと音の出る「メタリックシアター」などを制作した。

3期は、じっくりと時間をかけて制作が来るように、プログラムを二つにしぼり実施した。透明な球の中に様々な素材で宇宙都市を作り、磁石の反発を利用して動きだす「ぶらぶら宇宙儀」と、木材を中心にした材料で内部までも細かく再現した小さな家を作る「ミニチュアハウス」を制作。完成した家の中を小型カメラでのぞくと、実際の家を歩いているような不思議な感覚にとらわれる新しい視線を子どもたちは体験した。

❸ グループ活動

例年通り、「かげをうつそう」「木をつくろう」「ねんどのジャングル旅行」と昨年度から実施している「竹体験ワークショップ」を実施した。以前から実施している3つのプログラムは、すでにルーティンのものとなっていて、事前の打合せ、リハーサル、実施とスムースに運営できた。「竹体験ワークショップ」は、2年間の造形スタジオでの一般プログラム活動から生まれたもので、参加する子どもたちの年齢や経験などを考慮して、竹の素材としての特性をスタッフとともに手、体、道具などをフルに使い体験し、実際に竹の玩具などを制作する。今年度は、健常児のグループだけでなく、なかよし学級の子どもたちの参加があった。他のプログラムと同様に参加する子どもたちの状態を考慮し、竹の素材体験の方法や実施プログラムをアレンジして実施した。子どもたちは、約1時間半「竹体験ワークショップ」を楽しんだ。今後もこうしたそれぞれのグループに合わせたプログラム活動が重要になると思われる。

❹ その他の活動

【共同事業】

「日本・ノルウェー友好こども絵画展〜瞳をひらいて」'WIDE OPEN EYES' Friendship between Japan and Norway

造形事業部は企画研修部との共同の事業として、「日本・ノルウェー友好こども絵画展〜瞳をひらいて」を開催した。ノルウェーの首都オスロにある「オスロこども国際美術館」の所蔵する世界約150ヵ国の子どもたちの絵画作品、コラージュ、織物などの中から選ばれた約100点に及ぶ作品の展覧会を核に、ノーベル平和賞を記念して行われた「平和と国際理解」のためのプロジェクトの一つである日本とノルウェーの子どもたちの絵画コンテストの入賞作42点を加え、3月26日から4月15日まで〔こどもの城〕地下1階フリーホール、3、4階ロビーをつないで展覧会を開催した。

13年1月に「オスロこども国際美術館」の館長アラ・ゴールディン氏とコーディネイターのアンジェラ・ゴールディン氏、駐日大使、企画部と造形事業部職員を交えて打合せが始まった。実施まであまり時間がなかったが、ゴールディン館長の精力的な打合せと具体的なアイデア、そして、造形事業部スタッフの16年間の展示などに関する方法などの蓄積があってこそ実現できたと自負している。展覧会場は、世界各国の子どもたちの作品と造花などのアレンジで非常に華やいだ雰囲気を作りだした。子どもたちの絵の表現の多彩さやユニークさに見入る来館者も多かった。特に日常的に絵画などの展示を行っていない地下1階と4階での展示は、来館者だけでなく他事業部のスタッフからも「いつもの場所ではないほど素敵だ」とか「このまま作品ごと残してほしい。」など称賛の声を聞いた。

❺ まとめ

3年間にわたり竹をテーマにワークショップを実施した。竹という素材は伝統的な生活雑器としてだけでなく、現在自然資源的、環境問題などの意味からも改めて見直されつつある。今回の竹のプログラムを基にし、さらに幅広い視点で「竹」のプロジェクトを計画していきたい。また「日本・ノルウェー友好こども絵画展」のような活動理念に共感できるものや、造形スタジオの活動に幅の出る外部との共同事業は、今後もスタジオ活動と連携しながら考えていきたい。

平成12年度活動一覧表

一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
やってみよう！ つくってみよう！ 「竹と造形」	4.8～4.23 5.6～7.19 9.8～10.1	平成10年10月から始まった竹のワークショップの最後の年である。2年間の集大成として、夏休み特別期間：素材との出会い展「竹と造形～バンブー革命」に向けて、竹とその特性ー硬い・筒状・しなるなどを竹の創作玩具などを作りながら体験できるようにさまざまなプログラムを実施した。
やってみよう！ つくってみよう！	10.3～12.3	高山正喜久氏の「遊びと造形発想」の造形の持つ遊び心やアイデア、仕掛けなどを造形スタジオでの視点で再構成、プログラム化し実施した。
こども歳時記 「節分」	1.16～2.3	「節分」の鬼にちなんだワークショップを竹を素材に使い実施した。プログラムは、「かわりオニ」(親子)、「鬼ぞり」(小3～)。
こども歳時記 「桃の節句」	2.4～3.3	「桃の節句」にちなんだワークショップを竹を素材に使い実施した。プログラムは、「回転びなひなクル」(親子)、「ダンスびなパタビーナ」(小2～)。

〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
児童福祉週間 こども歳時記―たんごの節句	4.21～5.5	「こどもの日」のこいにちなんで「コイの竹のぼり」(親子)、「ふきながし2000」(小2～)、「たんごのたけ・タケ・竹」(小4～) を実施した。
夏休み特別期間 素材との出会い展 「竹と造形 ～バンブー革命」	7.20～7.31 8.1～8.15 8.16～9.3	素材との出会い展の「紙」「木」「土」「金属」に続く五つ目の素材「竹」をテーマに2年続けたワークショップ活動のまとめである。竹と生活、造形素材としての竹の可能性という視点から日本特有の植物の竹を造形素材にしたワークショップを展開した。
＜開館記念＞ 第7回 親子体験ワークショップ	10.24～11.12	「親子ワークショップ」の第7回。親子で協力して創作玩具「ペーパー．Com」を実施した。
開館15周年記念 「遊びと造形発想展」	11.1～11.26	元筑波大学教授、高山正喜久氏のデザイン教育30年の中から生まれた学生作品や参考作品を中心に造形の持つ遊び心やアイデア、仕掛けなどを「遊びと造形発想」展としてまとめた展示とワークショップを開催した。
開館15周年記念 第15回造形スタジオ展	11.1～11.26	平成11年11月から12年10月までに造形スタジオに来館した子どもたちが制作したさまざまな作品とこどもクリエイティブクラブの子どもたちの作品の展示。一般プログラムでは、内容をよりわかりやすく実物見本と写真、キャプションで説明したプログラムボード形式の展示をおこなった。
こども歳時記 「クリスマス」	12.5～24	クリスマスにちなんだワークショップを実施した。プログラムは、「ひっぱりスマス」(親子)「まわりークリスマス」(小2～)。
こども歳時記 お正月	12.26～1.14	お正月にちなんだワークショップを実施した。プログラムは、「ヘビーロール」(親子)「祝たい」(小2～)。
〈春休み特別期間〉 やってみよう！ つくってみよう！ 「春休みオープンスタジオ」	3.20～4.5	高山正喜久氏の「遊びと造形発想」の造形の持つ遊び心やアイデア、仕掛けなどを造形スタジオでの視点で再構成、プログラム化し実施した。

❷ 講座・クラブ

〈講座〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　考
こどもクリエイティブクラブA 土の冒険 クレイワークA	(人) 小1～中3 (20)	(人) ① 10 ② 8 ③ 9	火曜日16:00～17:30	「土」は楽しいをテーマに、陶芸の枠組みにとらわれないプログラム活動を実施。器作りだけでなく、粘土による表現の可能性を追求し、素材を冒険的に体験しながら、子どもたちの無限の表現力を引き出すクラブです。
こどもクリエイティブクラブB 素材の楽しみ ゆかいな造形	〃	① 13 ② 17 ③ 20	水曜日　〃	造形の基礎の楽しさは、素材を扱うことから始まります。紙、木、金属などさまざまな素材を組み合わせたり、変化させて、いろいろな素材がもつ創造するエネルギーを引出します。
こどもクリエイティブクラブC 版画の楽しみ プリントワーク	〃	① 2 ② 2 ③ 3	木曜日　〃	版画の領域を越えて、紙だけでなく身の回りにあるさまざまなのに、色・かたち・テクスチャーなどをうつしていく、なんでもプリントクラブ。
こどもクリエイティブクラブD イメージする楽しみ 絵本の世界へ	〃	① 20 ② 20 ③ 17	金曜日　〃	絵本を描くときに使われる方法ー描画材料・絵の具・インク・紙などを用いた基本的な技法からユニークな方法まで幅広く体験しながら絵本の世界を体験するクラブ。
こどもクリエイティブクラフE 創造探検 ハンズワーク	小4～中3 (20)	① 19 ② 15 ③ 13	土曜日　〃	紙・竹・木・金属などの素材や新素材をじっくりと吟味しながら、素材と技法、あるいは、道具などについてより広い知識を求め、造形表現にかかわる造形力を養うクラブ。

火～土曜日＝1期：11回、2期：12回、3期：9回、講師はすべて〔こどもの城〕専門職員
(受講料：1期：27,500円、2期：30,000円、3期：22,500円「クレイワーク」は各期毎に焼成費8,000円が必要)

〈講座〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　考
映・造ワークショップ	(人) 小4～高3 (10)	(人) ① 6 ② 4 ③ 4	5.21、6.4、18、7.2、10.15、29、11.5、19、1.21、2.4、25、3.11 日曜日13:00～16:30	AV事業部との共同で実施した映・造探検クラブ。 映像と造形の世界が出会うことによって生まれる新しい世界を子どもたちに体験してもらうことを目的に1期4回を1テーマで活動を実施した講座。

〈短期集中講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　考
夏休み造形教室A 「竹生活楽」 (タケセイカツガク)	(人) 小3～高3 (各日15)	5日間 計27人	7.25～7.29（火～土） 10:30～17:00	つつ状の形をした竹は、軽くて丈夫です。数種類の太さの竹を切る、割る、穴をあけるなどして組み合わせ、コップ、はし、テーブルなど身近な生活用具を作りました。
〃　B 「竹音機」 (チクオンキ)	〃	5日間 計19人	8.1～5（火～土） 10:30～17:00	「ししおどし」のように竹は中空なので叩くと共鳴して独特の音がします。竹とモーターなどを組み合わせて、竹の自動音具を制作しました。
〃　C 「竹AKARI」	〃	5日間 計76人	8.8～12（火～土） 10:30～17:00	竹ひごは薄く削ぐ（へぐ）とバネのように曲がることができます。竹ひごや薄く削いだ竹を使い、思い思いの形に竹を曲げ組み合わせて、竹の照明器具を作りました。
〃　D 「バンブー サーカス」	〃	5日間 計75人	8.15～19（火～土） 10:30～17:00	乾燥した竹の硬さ、軽さ、強さを生かして、数種類の機構やからくり仕掛け（クランクやバネなど）の玩具を作り、それらを組み合わせたサーカスのステージを作りました。
〃　E 「竹飛行」	〃	5日間 計38人	8.22～26（火～土） 10:30～17:30	削いだ（へいだ）竹の弾力性や竹の軽さなどを生かして、飛行船や鳥のようなモビールを作り、モーターとプロペラを取り付け、軽やかに動くオブジェを作りました。

❸ その他

〈動くこどもの城および講習会〉

名　称	実施日	施設会場	備　考
栃木県平成12年度保育所保育士研修会Ⅰ	12.6.13	栃木県社会福祉教育センター	これからの保育所のあり方を考えるとともに、子ども一人ひとりを見つめていく保育を実戦するための、保育社としての姿勢・支店について学ぶことを目的に保育実技として「しなやかな感性を培う造形遊び」をテーマに実技研修を行った。「マペット」「おきあがりだけ」などを実施。
東久留米市青少年委員会委員研修	12.6.13	〔こどもの城〕造形スタジオ	東久留米市青少年委員会委員を対象にした実技研修。
ブルーノ・ムナーリ展	12.7.18～9.24	神奈川県相模原「光と緑の美術館」	こどもの城開館記念事業として「こどもの創造性をいかに引出し、心身を豊かに育てるか」という視点にたち実施した「ブルーノ・ムナーリ展」の作品を中心にした「ブルーノ・ムナーリ巡回キット」の展示。過去15年間で全国約20カ所の児童館や美術館等で展示とワークショップを開催してきた。
横浜市小学校第52回夏期実技研修会　造形・美術体験ワークショップ	12.7.25～7.27	〔こどもの城〕研修室	横浜市教育委員会教育センター、横浜市小学校図画工作教育研究会主催による「造形・美術体験ワークショップ」。1995年からこどもの城造形事業部がコースのひとつを担当するようになった。
えひめこどもの城児童関連施設職員研修会	12.9.4	松山市にぎたつ会館	愛媛県内の児童館などの館長、児童厚生員、放課後児童指導員などを対象にした実技研修会。「マペット」「平成とんだりはねたり」「じたばたけ」「光のチューブ」を実施した。
日本保育協会造形ワークショップ	12.9.21 9.28 10.5	〔こどもの城〕造形スタジオ	日本保育協会の主催による「地域子育て支援センター担当者の実技研修会」。親子で一緒に造形活動できるプログラム「じたばたけ」「のぼり竹」「光のチューブ」を実施。造形スタジオという環境の中でできたことは参加者に制作する上で重要なファクターになった。
子育て夢のフォーラム　ワークショップ「たのしい造形Ⅰ」	12.9.30	山口県児童センター大ホール	「山口県子育て夢のフォーラム」事業の一環で子育てに関わっている指導者及び親など約80名への実技研修会。「マペット」「シェクシェク」「竹ジャンパー」「ヨーヨー」を実施。
福井県児童科学館児童支援ボランティア研修会	12.10.1	福井県児童科学館内コミュニティルーム	福井県児童科学館主催の福井県児童科学館児童支援ボランティアにかかわる人々の交流と学習の機会としての実技研修会。「マペット」「じたばたけ」「光のチューブ」を実施。
平成12年度新潟県児童育成指導者研修会	12.10.5	新潟県立こども自然王国	「動くこどもの城」事業による児童館、児童クラブ関係者への実技研修と造形プログラム作品の展示「造形ワークショップ展」を行った。「マペット」「ポンドだいこ」「竹のぼり」などを実施。
子育て夢のフォーラム　ワークショップ「たのしい造形Ⅱ」	12.10.29	山口南総合センター多目的ホール	「山口県子育て夢のフォーラム」事業の一環で子育てに関わっている指導者及び親など約80名への実技研修会。「マペット」「竹のぼり」「光のチューブ」を実施。
ブルーノ・ムナーリ展	12.10.21～11.19	えひめこどもの城	「動くこどもの城」事業として実施。こどもの城開館記念事業として実施した「ブルーノ・ムナーリ展」の作品を中心にした「ブルーノ・ムナーリ巡回キット」の展示。児童厚生員への実技指導として「木をつくろう」「さまざまなかたち」を実施した。
山口県「遊びと造形の実技研修員会」	12.11.17	山口県児童センター小ホール	山口県児童センター主催による山口県内の児童館・児童クラブ職員など児童の健全育成に携わっている職員や指導者等への造形実技研修会。「マペット」「ポンドだいこ」「平成とんだりはねたり」「じたばたけ」「光のチューブ」を実施。

名　称	実施日	施設会場	備　考
平成12年度北区幼稚園教諭研修会	12.11.21	北区立さくらだ幼稚園	北区教育委員会学校教育部指導室主催による幼稚園教諭および教頭を対象にした実技研修会。「マペット」「リンリン・クリスマス」「竹のぼり」を実施。
第19回福島県保育・子育てのつどい	12.11.25	福島県立会津大学	「福島県保育・子育てのつどい実行委員会」主催による保育・幼年教育・学童保育にかかわる人々の交流と学習の機会としての実技研修会。「マペット」「リンリン・クリスマス」「竹のぼり」を実施。
平成12年度放課後児童指導員等研修会	12.12.1～12.12.22	愛知県西三河総合庁舎 愛知県自治センター	愛知県健康福祉部児童家庭課主催による放課後児童指導員を対象にした造形実技講習会。それぞれに「マペット」「じたばたけ」「平成とんだりはねたり」「竹のぼり」「光のチューブ」を実施した。アンケートなどでも参加者の反応は良かった。各回約100名の指導員が参加した。
CITTA' DI TORINO "IL PIACERE DELL 'ARTE"	12.12.4～12.14	hotel "Le Meridien"	イタリア・トリノ市主催の国際シンポジウム・会議「造形の楽しみ（Pleasure of Art)」のパネリスト、発表者として前田ちま子職員に招聘依頼があり、こどもの城造形スタジオの活動などを発表した。
日本・ノルウェー友好こども絵画展～瞳をひらいて	13.3.24～4.15	〔こどもの城〕 地下1階フリーホール 3、4階ロビー	オスロ国際こども美術館、ノルウェー王国大使館、王国外務省と〔こどもの城〕の共済事業。日本とノルウェーの子どもたちの「平和と国際理解」をテーマにした絵画コンテストの入賞作品とオスロ国際こども美術館の世界各国の子どもたちの絵画作品の展覧会。

「日本・ノルウェー友好こども絵画展～瞳をひらいて」展会場

平成12年度プログラム一覧表

親子プログラム

プログラム名	備　　考
「くねりん坊」	段ボールと色紙帯の真ん中にそれぞれポンチで穴を開けたら、色紙帯の両端を段ボールに逆U字型にとめる。これに竹ひごをしならせたものを組み合わせて飾り付けをすると完成。竹ひごをくるくると回すと色紙帯がつられて動き、飾りの表情が変化する。
「コイの竹のぼり」	長めの竹ひご2本の片端を薄紙でとめ、1センチ程度に切ったしの竹を通す。竹ひごの反対端に抜け止めの飾り、しの竹にこいのぼりの飾りをつけると完成。竹ひごを開くと、飾りのこいのぼりがスルスルと上に登っていく。
「竹のぼり」	「コイの竹のぼり」の通常期間バージョン。自由な飾り付けをする。
「じたばたけ」	色紙にポンチで穴を2つ開けて筒状にする。竹ひごを和紙でつなげたものを、筒の中に組み込んで飾り付けをすると、からくりおもちゃのできあがり。引き手を動かすと、竹ひごにつけた飾りがばたばたと動く。
「ひっぱっ竹」	半分に折って穴を開けた小さめの色紙2枚と、2～3センチの長さに切ったしの竹を2個、交互にたこ糸に通して飾り付けをする。たこ糸の片端を引っ張ると、あたかも作品に力かみなぎるように、しゃきっとする。
「タケ・カチャリーナⅢ世」	色紙を半分に折ったら、折り目側にポンチで穴を開ける。色紙を開き、両端に小さく切ったしの竹と割り竹をテープではり、始めに開けたポンチ穴に平竹を通して飾ると出来上がり。平竹を持って振ると、竹と竹が触れあう心地よい音が響く。
「タケコロロ」	色紙に車輪の軸が通る穴を2個開けて、筒状の本体を作る。小さく切ったしの竹に輪ゴムを仕込んで本体に組み込んだら、竹の車輪のプルバックカーが出来上がり。
「オドリダケ」	平竹を曲げ、両端にたこ糸を結んで弓状にしたら、1～2センチの長さに切ったしの竹を2個、たこ糸にテープでとめる。紙で作った飾りをしの竹に付けて平竹を動かすと、飾りが踊っているように見える。
「たなばたんざく」	色紙にポンチで2つ穴を開け、十字にとめた竹ひごを組み込んで筒にする。竹ひごの上端には好きな飾り、下端には願いごとを書いた短冊を吊るすと完成。風で短冊がゆれると、上の飾りがピョコピョコと動く。
「竹ホッパー」	色紙にポンチで2個穴を開けて円柱状にし、竹ひごをポンチ穴に通す。小さく輪切りにしたしの竹2個を竹ひごに通したら、しの竹の飾り付けと、竹ひごの上下に抜け止めの飾りをつける。色紙を弾くとバネの役割をするので、しの竹がぴょこぴょこと跳ねる。
「かみスティック」	色紙の四つ角にそれぞれポンチで穴を開けたらU字型の曲げ、抜け止めの紙をつけた2本の竹ひごを、ポンチ穴に交互に差し込む。飾りを竹ひごの反対端にそれぞれ付けたら完成。色紙のU字部分を押さえると飾りが動いて見える。
「ペーパー．COM」	わずかに手を加えるだけで、紙は平面から立体へと変化するという体験。色紙をまるめたり、折ったり、切り込みを入れて組み合わせ、何に見えるか考えて飾りをつけると完成。
「あっちこっちU弧」	しならせた平竹にたこ糸を結んで弓状にしたら、たこ糸の中央に別のたこ糸を結ぶ。このたこ糸の反対端に紙切れをつけ、平竹に余裕をもって巻いたら飾り付けをする。弓を動かすと、飾りが平竹にそってすべるように動く。
「ひっぱりスマス」	段ボールと紙帯の真ん中にポンチで穴を開け、段ボールに対して紙帯を逆U字につける。穴にたこ糸を通して飾り付けをすると出来上がり。たこ糸を引っ張ると、飾りがユーモラスに動く。

プログラム名	備　　考
「ヘビーロール」	二枚の色紙を、それぞれ切り出したべろの部分でつないで二重の筒にし、飾り付けをする。二つの筒をスライドさせると、べろの部分がぴょこっと飛び出たり、隠れていた飾りが出て来る。
「かわりオニ」	横長の色紙の真ん中にポンチで穴を二個開ける。竹ひごにたこ糸を結んだら、先程の穴にたこ糸を通して、両端を色紙の両下端にとめる。これに持ち手と飾りをつけると完成。竹ひごを動かすと、たこ糸に引っ張られた色紙の形態が変わり、飾りの表情が変化する。
「回転びな　ひなクル」	ボール片の片端に穴開けポンチで穴を二個開けたら、内側の穴にしならせた平竹を差し込む。段ボールの外側の穴と、平竹の反対端をたこ糸で結んで弓状にし、飾り付けをすると出来上がり。弓をしならせると段ボールと飾りがくるくると動く。
「エルパタ」	大きめの色紙を半分に折り、好きな形を描いて2枚同時に切り抜く。これに動かす部分とコの字型の仕掛けを組み込んで、飾り付けをすると完成。色紙をスライドさせると飾りがぱたぱたと動く。
「ハル来ル」	色紙を半分に折り、折線側にポンチで穴を開けたら、たこ糸を通してとめる。これに飾り付けをすると出来上かり。折線側の角を指で弾くと、ぴょんと跳ぶ。

❷ 子どもだけのプログラム

プログラム名	備　　考
「ひっぱり竹」 (小2以上、1時間)	しの竹を3～4センチの長さで四～五個斜めに切り、向きを変えて紙でつないだら、たこ糸を通す。たこ糸の両端に抜け止めの竹片をつけて、飾り付けをすると完成。たこ糸を引っ張ると、思い掛けない方向に竹が動く。
「ふきながし2000」 (小2以上、1時間)	1センチ巾程度に輪切りにした竹の中に竹チップを入れて、両端を薄紙でふさいだら、ぶんぶんごまの要領でたこ糸をつけ、平竹に弓状に取り付ける。これに筒状のこいのぼりの飾りをつけると完成。平竹を動かすと竹の中の竹チップが暴れて、バチバチとにぎやかな音が鳴る。
「たんごのたけ・タケ・竹」 (小4以上、1.5時間)	一本の竹を斜めに数個切ったものを、断面の向きを変えてつなげていくと、クネクネと不自然に曲がった竹になる。これにこいのぼりの飾り付けをする。
「弓鼓」 (小2以上、1時間)	「ふきながし2000」の通常期間バージョン。
「たけ・タケ・竹」 (小4以上、1.5時間)	「たんごのたけ・タケ・竹」の通常期間バージョン。
「鳴竹」 (小2以上、1時間)	3～4センチの長さに切った2個の割竹にそれぞれ穴を開け、半折の紙の帯でつなぐ。これを二組作り、竹ひごに通して抜け止めをつければ、竹のカスタネットの出来上がり。上下に振ると、竹独特の乾いた音が響く。
「ひょっこり竹」 (小4以上、1.5時間)	10センチ程度の長さに切った竹をナタで割り、内一つにのこぎりとのみで窓を開ける。もう1つの竹に三日月状に割った竹を仕込んで、双方を組み上げると完成。2つの竹をスライドさせると、窓から三日月状に割った竹がひょっこりと出てくる。
「ビクッ竹」 (小1以上、1時間)	昔ながらのおもちゃ、「へびのたまご」からの発展プログラム。直系5センチくらいの竹を10センチ程度の長さに切り、ナタで半分に割ったら、竹の片側に蝶番にする紙をはる。女竹を5センチくらいの長さで2本切って輪ゴムでしばり、飾り付けをしたら出来上がり。女竹を数回ねじったものを竹の中に入れて、ふたをする。ふたを開けたとたん輪ゴムが戻り、女竹が音をたてて飛び出してくる。
「バンブーリン」 (小1以上、1時間)	神奈川県の郷土玩具「経木舟」からの発展プログラム。真竹を10センチ程度、しの竹を2センチ程度に切り、軸穴と持ち手穴をそれぞれ開ける。しの竹の軸穴に竹ひごを通したら真竹と組み合わせて、飾り付けをすると出来上がり。短冊に風を受けると、かざりがひょこひょこと動く。
「竹タップ」 (小1以上、1時間)	浅草の伝統玩具「ずぼんぼ」からの発展プログラム。紙を箱状に組み立て、4つの下角に1センチ巾程度に輪切りにしたしの竹をそれぞれつける。飾り付けをして持ち手の竹ひごを動かすと、カチャカチャとタップダンスをしているような音をたてて踊る。
「キャタケラ」 (小1以上、1時間)	しの竹を5センチ程度の長さに切って手回しドリルで穴を開けたら、穴に竹ひごを通す。色紙帯の両端を竹ひごの先端としの竹にとめて動かすと、尺取り虫のような動きをする。
「なかよし竹」 (小1以上、1時間)	2～3センチ巾で輪切りにした竹をナタで半分に割り、その上にしの竹をボンドと紙ではりつける。これを2つ作り、双方並べて竹ひごを通して飾り付ける。台紙の上に乗せて台紙を揺さぶると、ゆらゆら仲良く動く。
「タケブリ」 (小3以上、1.5時間)	平らに割った竹を使う。短い竹を長い2本の竹の間にはさみ、十字架型に組み合わせ、穴を開けて竹ひごを通す。長い竹の先端にも穴を開けて竹ひごを通したら、短い竹にたこ糸を結び、途中をこの竹ひごに一巻きしてまた短い竹に結ぶ。短い竹を動かすと、先端の竹ひごにつけた飾りがクルクル回る。青森県八戸市の郷土玩具「えんぶり人形」からの発展プログラム。

プログラム名	備　　考
「タケブー」 (小3以上、1.5時間)	10センチくらいに切った竹の上の方に2つ、下方に1つドリルで穴を開ける。長めのたこ糸を上の2つの穴に通し、真ん中を下の穴から通したたこ糸と結ぶ。上の穴のたこ糸に竹片で飾りをつけると完成。下のたこ糸を引っぱると上のたこ糸にもテンションがかかり、竹片の飾りが動く。
「バラバンブー」 (小2以上、1.5時間)	**割竹を15センチ程度の長さに4本切り、井桁状に組んで竹ひごでとめる。飾り付けをして動かすと、井の字が潰れたり戻ったりと、ユーモラスな動きをする。**
「ジャバランブー」 (小2以上、1時間)	割竹を10センチ程度の長さに五本切って、それぞれに手回しドリルで穴を開けたら、竹ひごを通してマジックハンドのように組み立てる。竹ひごの先端と割竹の先頭を飾りでつなげて動かすと、伸びたり縮んだりするおもちゃができる。
「タケ・ハッケン伝」 (小3以上、1.5時間)	**動くからくりを試しながら、竹で制作する。実際にからくりを作るなかで、構造を解き明かし、組み立て、さらに工夫を重ねることによって作る、オリジナルのおもちゃ。「タケブー」型か、「じたばたけ（竹バージョン」型かを選択。**
「竹ピコピコ竹」 (小2以上、1時間)	10センチ程度の長さに切った竹をナタで半分に割り、片側に和紙をはったへぎ竹を交互に貼る。これにたこ糸をクロスさせて取り付け、飾り付けをしたら完成。竹をスライドさせると、たこ糸に引っ張られた飾りがぴょこっと顔をのぞかせる。
「まわりークリスマス」 (小2以上、1.5時間)	**割竹を体、手、足など必要な数だけ切り出し、それぞれ手回しドリルで穴を開ける。これに竹ひごのピンを組み込んで飾り付けをすると完成。持ち手を動かすと、手足などがゆらゆらとゆれ動くおもちゃができる。**
「祝たい」 (小2以上、1時間)	色紙を半折りにして、好きな形を切り抜く。折り線の方から切れ込みをたくさん入れ、広げて紙帯を交互に差し込んで端をとめたら、飾り付けをする。紙帯の反対端を引っ張ると本体がくねくねと動く、からくりおもちゃ。
「鬼ぞり」 (小3以上、1.5時間)	**竹を7～8センチに切ったら半分に割り、片方の内側に竹片を組み合わせたからくりを仕込む。これに動かす部分の女竹をたこ糸とともに組み込むと完成。引き手を動かすと、女竹の部分がぴこぴこと動く。**
「ダンスびな　パタビーナ」 (小2以上、1時間)	割り竹を4本切り、それぞれ端に手回しドリルで穴を開けたら、うち2本を台座に固定する。残り2本の割竹と固定した竹をそれぞれ竹ひごでとめ、双方をたこ糸でつなぐと完成。たこ糸を引っ張ると、てこの原理によって割竹が動き、つられて飾りも動く。
「おどるクイッキー」 (小2以上、1時間)	**段ボールの土台に支柱になる竹ひごを差し込んだら、からくり部分の竹ひごとたこ糸を仕込む。これを飾りと組み合わせると、ミニチュア操り人形の出来上がり。**
「スピンクル」 (小2以上、1時間)	十割竹を大小二個、のこぎりで切ったら、それぞれ手回しドリルで穴を開ける。これらを竹ひごでつないで引き手のたこ糸をつけ、飾り付けをする。たこ糸を引っ張ると、竹と飾りがくるくると回る。

「素材との出会い展～竹と造形」
スタジオ点景

音楽事業部

平成12年度の活動

はじめに

昨年に引き続き、今年度の大きな目標は、遊びに来た親子が楽しく快適に遊べる環境作りであった。スペースや楽器・備品の整備は当然のことながら、スタッフの意識と資質を高めることが運営の柱となった。

音楽事業部では子どもと音楽の出会いをさまざまな形で提供しているが、つねに「楽しく」と「みんなで」がキーワードである。音楽は、楽しいもの、そして音楽を通して生みだされる人と人とのコミュニケーションは、とても素敵なもの。それを活動の場で出来るかぎり伝えていきたい。そのためには全てのスタッフが個性的で魅力的でなければならない。音楽事業部のスタッフはそれぞれの個性を自ら見いだし向上できるよう努力している。そのひとつひとつが集まって互いを高め、アンサンブルとなるその理想はまさに音楽そのものである。

一般利用

(ア) 平常期間

平常期間はイベントの時間編成などを改善し、さまざまな個性的な音楽プログラムを常に提供できるように工夫した。イベント以外の時間帯にも、フリーにスタッフがアコーディオンやフルートなどの楽器を持って音楽ロビーをグルグルと歩き回り、利用者のリクエストに応じたり、打楽器を使って即興のリズムセッションを展開するなど、スタッフの個性がいかされた活動で、楽しいコミュニケーションが生まれる場面が多く見られるようになってきた。遊び場を管理するだけならだれにでもできる。スタッフが人間性をいかして子どもと音楽を楽しむことができるか。〔こどもの城〕の財産は、たくさんの楽器ではなく、それを使って子どもと音楽を遊ぶスタッフである。

【わいわいスタジオ】

世界各地の民族音楽を定期的にとりあげて、来館する親子に鑑賞型中心の音楽体験を提供している。開館以来のプログラムであるため、内容が安定しており、来館者のプログラムへの理解も浸透してきているようである。運営面では出演者経費の大幅な削減により、外部出演者によるプログラム数を減少させなくてはならない状況となり、存続させるプログラムの選定、そしてなによりも経費の少ない、あるいは経費のかからない職員主導型プログラムの実施に労力をさいた。

今年度の主な内容は次のとおりである。レギュラープログラムとして、南米アンデス、中国、インドネシア(アンクルン、ガムラン)、草笛、手作り楽器のワークショップ、西アフリカの太鼓とダンス、など。職員主導型の新規のプログラムとして「おさわがせオンガク小僧」(劇仕立ての打楽器合奏)、「クリスマス会」(歌とお話しのバラエティー」を実施した。

今後の課題としては、民間との共催など、経費の確保といった動きを少しずつ取り入れていきたいと考えている。

(イ) 特別期間

【ゴールデンウィーク（児童福祉週間）】

◎おんがくがスキ！

今年度で8年目となる「おんがくがスキ！」を円形劇場で公演した。〔こどもの城〕一般来館児向けプログラムのオリジナル性を1時間に凝縮して演出している。

今回は「ダンス」をひとつのテーマとして構成し、新たにメンバーを一人加えて6人編成とした。二人のパーカッショニストのたたき出すアフリカンビートやサンバのリズムや跳ねる16ビートの今風のリズムなどに合わせて子どもも大人も簡単に踊れるように構成した。音楽の原点は踊りにある。楽しくなれば躍りたくなる。踊りには音楽。沢山の人びとの踊る空間は幸せな空気に満ちている。大人も子どもも忘れていた何かを感じることのできた時間ではなかっただろうか。

【ゴールデンウィーク／夏休み特別期間】

◎「スーパースターゲッター2000」

昨年度実施して好評だった「おんがくゲームアーケード・スーパースターゲッター」の内容をアレンジし「スターゲッター2000」をゴールデンウィークと夏休み特別期間に実施した。音楽ロビーにさまざまな音楽遊びのゲームコーナーを設定し、参加するごとに星のシールをもらえるというこのゲームは予想以上に高い人気があったので2つの特別期間をリンクする形を始めて試みた。ゴールデンウィークに集めたポイントはそのまま夏休みにも使えるという形にしてリピーター効果も狙ったものである。期待どおりたくさんの来館児が参加した。内容も歌遊びの要素を取り入れたカラオケゲーム「ウタダミルキーウェイ」やマラカスを持っておどる「マンボでウー！」楽器の音あてクイズ「耳をすませば」などの新ゲームも登場し完成度の高いものとなった。

おんがくがスキ！

◎手作り楽器ワークショップ

夏の手作り楽器ワークショップは今年で4回目。Bスタジオを会場として、①竹のハンドベル「アンクルン」、②宇宙人の声が出せる「口琴」、③西アフリカの太鼓「アフリカンジェンベ」、④インドネシアの竹の縦笛「スリン」を今までと同様に親子を対象とし、新規プログラム②③④を加え、昨年より1コース多い全4コースで21日間実施した。

①はインドネシア・ジャワ島に伝わる民族楽器、3年連続の実施。竹のハンドベルと言われている楽器で、小さい子どもからお年寄りまで多人数で楽しむことのできる楽器。「講義・製作・合奏」の流れを大切とし、〔こどもの城〕開館以来、さまざまな形で紹介してきた「アンクルン」をいろいろな角度から深い体験ができることを目標とした。2年間の実施経験があるため安定した活動ができた。毎年参加してくれるリピーターが増えた傾向にあるため、また新規プログラム開設やコース増設を行ったため「アンクルン」の開催日数を3日にしぼったところ、いずれも定員で一杯となった。

②は今年の新企画。宇宙人の声が出せる「口琴」と題し、マレーシアに伝わる竹製の楽器「口琴（ゲンゴン）」を製作した。振動する弁のある竹べらを口に当て指ではじくと、口に共鳴しあたかも宇宙人が話しているかのような音の出せる楽器。楽器自体日本人にはあまり知られていないため、館内ビデオにてその演奏を紹介したところ、多くの子どもたちが自ら興味を持ち参加してくれた。遊び心をたくさん持った楽器だからだろう。造りがシンプルな楽器でありながら比較的製作が難しく、出来上がりの質もさまざまであったため、次年度に向け製作内容の再検討が必要とされる。

③は昨年演奏体験だけを実施した「アフリカン・タムタム」というプログラムに楽器製作課程を加えたもので、

スーパースターゲッター2000

「講義」「製作」「合奏」の3本柱が整った完成型で初めて実施することが出来た。昨年と同様に西アフリカ、セネガル出身のパーカッショニスト、ワガン・ンジャエ・ローズ氏を演奏指導の講師として迎えた。そのワガン氏の存在と、サイズこそアフリカオリジナルの楽器より一回り小さい大きさながら、本物の木、山羊の皮を使った楽器の存在感が影響したのだと思われるが、募集を始めると、比較的高額な受講料でありながら、30名定員8日間すべてがあっと言う間に一杯になってしまった。

ハードな太鼓の練習、合奏を通して西アフリカ・セネガルの音楽文化を子どもたちが肌で感じさまざまな感想を持ったことだろう。親の表情もひじょうに明るく、この企画に対し好印象をもってくれていたようだ。受講できなかった人たちからは、来年の再開講の声がいくつも上がっていた。

④インドネシアの竹の縦笛「スリン」も今年の新企画。新企画を立案決定する上では、受講者のニーズ、企画側の意図、そして材料費などの採算という3点が大きく影響するが、この「スリン」企画に際しては、「受講者のニーズ」を最優先に考えたものであった。その結果30名定員7日間がすべて一杯となった。笛や太鼓は幼児期から誰でも1度はさわったことのある楽器。その大変ポピュラーな楽器に対して、正面切って「音の鳴る仕組み」「演奏の楽しさ」を理解し感じてもらうことをテーマとした。年齢差のある子どもたちが、各々の理解度の中で音の出る「不思議」を感じ、最後の合同演奏では各々の表現技術の中で多人数での音楽の迫力を体感してもらえたと思う。

21日間全企画を終了し、収支的には定員の95％近い数字を残し問題はなかったと言えるであろう。受講者からのアンケート、また講座中に直接声をかけてもらった内容は「来年も来ます」といったとても好意的なものが多かったように思われる。今後この企画を維持発展させるためには、前述の経費、ニーズ、企画サイドの思惑。この3点のバランスをどう考えていくのかと言うことであろう。先々のことを考える長い視野をもって来年度も新しい企画を子どもたちに提案していきたいと考えている。

【冬休み特別期間】

昨年に引きつづき「へんしん大飯店」を今年度も正月に実施。中国風の飾りつけを華やかに施し、動物のかつらや王女の冠、天使の羽など様々なコスチュームを用意した。家族で「変身」を楽しみ、コンサートや音楽遊びの催しに参加していた。この催しは常連の家族にも好評で、また期間中のリピーターも多かった。変身遊びの魅力、人気の高さを改めて感じた。

【春休み特別期間】

昨年にひきつづき「みんなでおどれ春ダンス！」を実施。アフリカ、サンバ、ストリートダンス、フォークダンスなどで構成。音楽は全て生演奏でビート感を大切にし、踊りと音楽は常に一体感をもっていることを強くア

へんしん大飯店

ピールした。スタッフも3回目ということでダンスリーダーとしてレベルアップしたようだ。現代の子どもたちは、踊ることに全く抵抗がないように感じられる。ある世代までは「恥ずかしい」「うまくできないからキライ」という感覚が、踊りに対してあると思われるが、子どもたちは本当に活き活きと体を動かしている。今年度は親子で踊る微笑ましい姿も随所に見られた。音楽事業部としても新たな分野として位置づけ積極的に取り組んでいきたい。

❷ 講座・クラブ

今年度、一部恒常的に定員に満たない講座・クラブに対してクラス間の統合や講座時間の見直しなどの措置をした。「三味線」と「リズム・ムービング」は、それぞれ3クラスあったが、編成を2クラスに統合。ガムラン講座は講座時間を短縮して講師謝金の支出を押さえ、収支のバランスを保ち、講座が継続できるように配慮した。今後は、ただ講座などの規模を縮小するだけではなく、頻繁に一日体験コースや短期ワークショップを企画し、〔こどもの城〕ならではの活動をPRし、受講者を増加させるよう努めるつもりである。

(ア) ぼくらのサウンド2001

年度末の春休み直前の3日間、音楽事業部の講座・クラブが1年間の成果を発表する合同コンサートで、館内の青山円形劇場で開催。講座・クラブの受講生の発表の場であると同時に、一般の来館者などに、広く〔こどもの城〕の活動を知ってもらうことも目的としている。

(ロ) こどもの城合唱団

こどもの城合唱団は毎年夏休み期間中、1週間位の合宿を行い、宿泊先の団体と合同公演など交流している。本年度は中国の上海市で開催された「上海国際少年児童文化芸術祭2000」に上海市から招待された。芸術祭には、東南アジア各国など10カ国、800人が集い、参加国の民族音楽やダンスなどが披露された。期間中、上海市の各区の少年宮（児童館）で、参加各国の児童や少年宮に通う中国の児童と、音楽や遊びを通じて、貴重な国際交流を体験することができた。

❸ グループ活動

音楽事業部は、グループ活動の全体の利用件数の約半数を占めている。グループの希望をできるだけ取り入れて、フレキシブルな対応ができるようにつねに心掛けている。今年度も養護学校などの利用の多い「ガムラン」のプログラムや、インターナショナルスクールにもよく利用される「めずらし楽器」や「サンバ」などのプログラムの人気が高かった。

❹ 派遣事業

派遣事業は、つねにその場に応じて綿密なアレンジを施し、子どもとの音楽活動に対する、音楽事業部のスタッフの心を伝えるよう意識を高く持って取り組んでいる。講習会についても今後さまざまな要素を取り入れていきたいと考えている。スタッフや予算が限られている中でも応用がきくプログラムの提供が求められているので、それらを念頭において開発に取り組んでいきたい。

❺ まとめ

今年度の活動で特筆すべきは、海外へ派遣した「おんがくがスキ！」の公演である。スイス、ベルギー、ドイツの3か国4都市で公演し、延べ2000人を動員した〔(株) 全日空主催〕。これは、スイスのジュネーブのＮＨＫ勤務の職員が、数年前にＮＨＫのテレビで放映された音楽事業部のグループの演奏ビデオを見て、それに共感し、日本領事館など各方面に呼びかけて、実施されたものである。ステージと観客席との垣根を取り払う「おんがくがスキ！」の演奏は、初公演以来注目を浴びてきたものであるが、ヨーロッパに在住の日本人の家族ばかりでなく、外国の人びとにも好評であった。

開館以来〔こどもの城〕は15年になるが、その間、当然ながら子どもたちを取り巻く環境も大きく変化してきている。当然ながらそれにともなって〔こどもの城〕の役割も、社会からの要請や要望に応じてきている思われる。そして、今まで築き上げてきた経験やノウハウを基盤にして、それらの要望に応じた新たな方向を模索して時代に突入しているという実感をもっている。

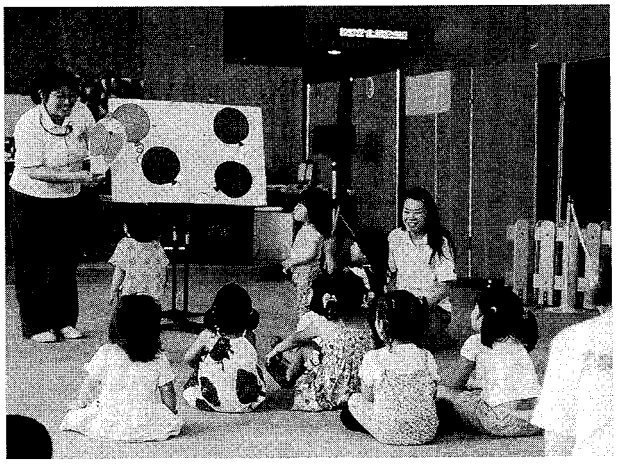
①「より《遊び》を意識した」音楽活動、②「親子を対象にした」音楽活動、③「民族・ワールド系音楽の展開」(2002年指導要領による)、④派遣（レクチャー・コンサート)、⑤手作り楽器などによる他の活動との共同。これらの考えは、これから5年の活動の大きなポイントになると思われる。現実をしかりと踏まえ、明確な展望をもち、精力的に事業を推進したいと考えている。

サンバコンサート

土曜ロビー

土曜ロビー

土曜ロビー



土曜ロビー

平成12年度活動一覧表

一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
みんなでライブ！	毎週火曜日 14:30～	音楽を介して親子でふれあいながら楽しむプログラム。今年度より小児保健部の「赤ちゃんサロン」が直前に行われているので、0歳からの乳児と親を対象としたプログラム作りにも意識的に取り組んでいる。
水よう パチパチパーク	毎週水曜日 15:30～	うたあそび、手あそびを中心とした参加型プログラムとアフリカ、インドネシア、ブラジル、中国の楽器を聴かせる鑑賞型プログラムの二種類を実施。後者では聴くだけではなく、リズムに合わせて身体を動かしたり、演奏に参加する部分も設けた。
木ようなかよし広場	毎週木曜日 14:30～	イベントに参加する子どもたちか手作りの名札を付け、仲間の輪を広げながら親子で参加。音楽に合わせ歌ったり、体を動かしたり、演奏を聴いたり。親子のスキンシップをとってもらいながら身近なうたに合わせて遊ぶプログラム。
楽器屋わんちゃん	毎週木曜日 16:00～	スタッフの一人「わんちゃん」が店長をつとめる楽器屋にあそびに行くという設定。店長厳選の様々な楽器をスタッフ扮する店員と紹介。演奏後は丁寧な指導のもと子どもたちも体験出来る。活動の導入にはボランティアによる手あそびもある。
みかんちゃんスの オパオパサンバ！	毎週金曜日 15:00～	スタッフの補助としてではなく、女性ボランティアが活動の主軸となり子どもたちと関わっているプログラム。昨年度から行っているプログラムをふくらませる事によって活動に巾が出たが、新プログラムの開発も課題である。
ハートフル・ライブ	毎週土曜日 13:00～　14:00～	演奏を聴く・楽器に触れて演奏してみるという体験を通して様々な音楽を楽しむ鑑賞・体験合体型のコンサート。毎回テーマに沿って紹介。インドネシアの「ジャワ島のガムラン」が新プログラムに加わった。きらびやかな楽器が魅力ではあるが、体験方法などの開発について探っていきたい。
うたって Happy	毎週日曜日・祝日 13:00～　14:00～ 15:00～　16:00～	バンド形式による弾き語り。今までのスタイルに加え、ボーカルに専念するスタッフをたてた。子どもたちに歌の魅力をよりダイレクトに、またダイナミックに伝えられライブ感の増すプログラムとなった。子どもたちも楽器や歌や踊りで自由に参加している。親自身が楽しんでいる姿も増加したように思われる。
みんなであそぼう 音楽広場	「わいわいスタジオ」が音楽事業部 担当でない日・祝日　14:30～	当職員の個性とレパートリーを活かしたプログラム。手あそび、歌あそび、リズムあそび、パネルシアターなど。担当職員と子どものかけあいによって、遊びの世界が拡がり、子どもの後ろにいる親までも巻き込んでいける活動になった。「一緒にあそんで楽しかった」という思いを参加者全員で共有出来たのではないだろうか。
いろいろ楽器コンサート	毎週日曜日 16:30～	世界各地の楽器を演奏し、紹介する鑑賞型のプログラム。アフリカの太鼓、カリブのスチールドラム、ブラジルのサンバをはじめ定番化した音楽では演奏技術、子どもたちへの提供方法も安定したものとなっている。新しいジャンルの音楽の開発が課題となっている。
わいわいスタジオ	日曜日・祝日 (平均的に隔週) 13:30～　15:30～	来館している親子全般を対象にしているコンサート。アフリカ、中国、インドネシアアンデスなどの音楽を専門家の本格的な演奏で幼児から大人までが楽しめる構成で。フィルムケースを用いた手作り楽器のワークショップも引き続き行っている。

〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
(G.W.特別期間) スーパースターゲッター2000	4.29～5.7 音楽ロビー	昨年度から行っているプログラム。新しいゲームも加えパワーアップ。「聴く」「動く」「歌う」「鳴らす」など音楽のいろいろな楽しみをゲームという親しみのある形に置き換えて知らないうちに音の世界を体験出来る。ゲームに参加し、星型のシールをポイントとして集めるシステムは変わらず。夏休み期間にもリンクさせ、得たポイントは夏休みにも引き続き使用出来るようにした。
(〃) ゆったり親子のおんがく園	4.29～5.7 音楽ロビー	0～3才の幼児と親がゆっくりと音のでるおもちゃ〔音具〕で遊ぶことのできる部屋として昨年に引き続き開園した。親子の触れ合いを楽しむためのスペースとして位置づけられ、大勢の親子に利用された。
(〃) おんがくがスキ!	5.5　11:00 13:30　15:30 青山円形劇場	今年度のテーマは踊りである。新メンバーを1人加えてアフリカやサンバのビートなどに合わせて親子で簡単にダンスに参加できるプログラムを取り入れた。
〈夏休み特別期間〉 夏のごいっしょライブ	7.20～31　13:00 14:00　15:00 音楽ロビー	平常期間のプログラム「うたってHappy」をベースに、より夏らしさを意識した選曲と、演奏で実施。ステージ周りも夏を感じさせる装飾にするなど、夏休みの始まりのわくわくした気持ちを子どもたちと共有した。
(〃) ストリートオルガンタイム	7.20～31 12:30　16:30 音楽ロビー	オランダ風の手まわしオルガン。時間を設け、より多くの親子に体験してもらうように設定したプログラム。大きな子どもたちに混じって、小さな幼児も親の手を借りて一生懸命挑戦していた。
(〃) いろいろ楽器コンサート	7.20～31 13:30　15:30 音楽ロビー	夏休みにあそびに来た子どもたちに、より多く異文化の音楽にふれるチャンスを！と平常期間は夕方1回のコンサートを時間を早め、2回実施。音楽や楽器の説明も小学生向けにグレードアップ。宿題のためか、メモをとる子どもたちの姿もみられた。
(〃) おんがくゲーム アーケード スーパースター ゲッター！2000	8.1～31 開館時間中 音楽ロビー	ゴールデンウィークから引き続いて行うプログラム。前回実施した際のポイント表（バッチ）大切に持ってあそびに来る子どもたちがたくさんいて、スタッフ一同励みになった。アルペンホルンを吹く「ザ・ラッパだめし」も加わり多くの子どもたちで賑わった。のべにすると12,525人もがスーパースターゲッターをめざしてゲームに参加したことになる。
(〃) アフリカン・ジェンベ (半日講座)	8.8、9、12、13、23、24、28、29 13:00～16:00 Bスタジオ	親子を対象とした「手作り楽器・ワークショップ」その1。西アフリカ、セネガル出身のパーカッショニスト、ワガン・ンジャエ・ローズさんを演奏指導者に迎え、今年は昨年実現出来なかった太鼓制作を加えた。「講義」「製作」「合奏」の3本柱が完成した。アフリカの音楽文化をみな好意的、かつ強烈に肌で直接感じてくれていたようだ。30名定員8日間すべて満員の人気プログラムとなった。
(〃) 宇宙人の声が出せる「口琴（コウキン）」 (半日講座)	8.19、30 13:00～16:00 Bスタジオ	手作り楽器・ワークショップその2。今年初登場の企画。あまり有名ではない楽器「口琴」をとりあげ、全員で遊び心を刺激する宇宙人のような声を出して楽しんだ。振動する弁のある竹へらを口に当てて弾き、口を共鳴させて演奏する楽器。今後このようにマイナーではあるが、面白楽器をもっと採用していきたいと考えている。
(〃) 竹のハンドベル アンクルン (半日講座)	8.15、21、22 13:00～16:00 Bスタジオ	手作り楽器・ワークショップその3。この竹のハンドベルといわれている、インドネシアの民族楽器「アンクルン」は3年連続の登場。3回目と言うことである程度浸透したであろうと予想されたため3日間限定としたところ、これも殆ど定員一杯となった。講義、製作、合奏のバランスが良く手作り楽器の定番となりつつある。
(〃) 竹のたて笛「スリン」 (半日講座)	8.10、11、14、16、18、20、31 13:00～16:00 Bスタジオ	手作り楽器・ワークショップその4。昨年手作り楽器で作りたい楽器のアンケートをとったところ、太鼓とともに大変リクエストの多かった楽器。ドレミファといった音階の出せる笛と、コミカルな鳥の鳴き声の出せる鳥笛の2本を制作。人気楽器を反映しこれも7日間定員一杯とった。
(冬休み特別期間) わいわいスタジオどうようコンサート 「クリスマス会!!」	12.23、24 13:30　15:30 スタジオB	入場した来館者が、まるでクリスマスパーティの招待客のように、歌やゲームに参加して出演者と一緒に作り上げるコンサート。音楽とおはなしの「よみかたり」も取り入れた。親子を包む暖かで、アットホームな雰囲気の公演になった。

名　称	期　間	備　考
(冬休み特別期間) うたって　ハッピー	12.23～24 13:00　14:00　15:00 音楽ロビー	歌、シンセサイザー、ベース、ドラムという楽器編成のバンドで様々な歌を演奏。子どもたちに大人気のクリスマスソングを中心に演奏し、親子で楽しむ姿が多くみられた。
(　〃　) いろいろ楽器コンサート	12.23～24 16:30 音楽ロビー	世界の民族楽器を紹介するコンサート。アフリカの太鼓、ブラジルのサンバ、インドネシアのアンクルン、カリブ海のスティールドラムを演奏。
(　〃　) へんしん大飯店	1.3～1.8 開館中 音楽ロビー	お正月の定番プログラムになりつつある催し。赤と金のテーマカラーは一年の始まりを祝う雰囲気にぴったり。変身する事で違った自分を演出出来るのは子どもも大人も同じ。音楽を聴いて思わず立ち上がって陽気に身体が動いてしまう場面が多くみられた。変身には魔法の力があるようだ。弾き語りの「うたって　まんぷく」、うたあそびやダンスを楽しむ「へんしん大宴会」、世界の音楽を紹介するコンサート「たらふくコンサート」などのプログラムが行われた。コンサートの合間にはスタッフによるマンボやポルカが演奏され、楽器をもって子どもたちとスタッフが自由に接する時間も好評だった。
(　〃　) ゆったり親子の おんがく園	1.3～1.10 開館中 Aスタジオ	対象の中心は親子だが、家族で訪れ祖父母などと一緒に過ごし、こころゆくまで滞在し、ゆっくりすごす人たちがたくさんいた。今回はロビーの変身も小さい子どもから楽しめるとあって、混雑のない落ちついた雰囲気が保てた。
(春休み特別期間) みんなでおどろう 春ダンス！	3.24～4.5 14:30 音楽ロビー	陽気な春はダンスでスタート。昨年から始まったプログラム。アフリカンリズム、サンバ、フォークダンス、ヒップホップのリズムに合わせてダンスをした。スタッフのステップにも余裕がみられるようになり、音楽に合わせて身体を動かすことの楽しさを子どもたち伝えられたようだ。
(　〃　) いろいろ楽器コンサート	3.24～4.5 16:30 音楽ロビー	世界の民族楽器を紹介するコンサート。コンサート後から閉館までの時間に演奏された楽器をスタッフと共に体験出来る時間にした。催しという堅苦しい感じではなく、気軽にさわれる雰囲気を大事にし、大人にも一緒に楽しんでもらえるようにした。
(　〃　) うたってハッピー	3.24～4.5 13:00　14:00 15:00　16:00	バンド形式による弾き語り。レパートリーは童謡のほか、アニメのヒットソングなどのリクエストも多く、子どもたちが積極的にロビーの楽器を楽しめる。それぞれのスタッフが毎回工夫し、個性豊かな内容を展開することが出来た。
(　〃　) 手作り楽器の ワークショップ	3.24 13:30　15:30 Bスタジオ	フィルムケースを素材とし、「回す鳥笛」「鳴を呼ぶ笛」の2種類を制作した。廃材に少し工夫をこらすだけで、想像も出来ない音が出せることは小学生にとってかなりの驚きであるようだ。3、4種類めの展開を次年度の目標としたい。
(　〃　) ゆったり親子のおんがく園	3.25～4.5 開館中 Aスタジオ	0～3歳児と保護者のためのスペース。場所の設置という意味では十分に淘汰されてきたと思う。今後の発展として、この部屋の主な利用者「乳児」と平常期間の「赤ちゃんサロン」をリンクした活動が出来ないか、新たに検討していきたい。
＜春休み＞ ぼくらのサウンド'2001 (青山円形劇場)	3.17 17:00	レッツ・プレイ・サンバ、レッツ・プレイ・サンバ初級、エレクトリックアンサンブルの公演。今年から開講されたレッツ・プレイ・サンバ初級はぼくらのサウンド初参加となる。
	3.18 13:00	リズム・ムービングA、B、およびリズム・ムービング＆パーカッションとパーカッション・アンサンブル、おとなのためのリズム・ムービングの公演。
	3.18 17:00	和太鼓、ガムラン講座、公演。
	3.20 13:30　16:30	おかあさんもいっしょリトミック・合唱講座・合唱団Ⅰ・Ⅱ・混声合唱団、三味線の(13:30のみ) 公演。

❷ 講座・クラブ

〈講座〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　考
リズムムービングA	（人） 3歳児 （12）	（人） ① 5 ② 8 ③ 6	火曜日14:30～15:20 （全32回）	定員割れしているBクラスとCクラスを統合した。自分の名前を使って言葉でリズム遊びをすることから始まる。身の回りのまざまなことからリズムを感じさせ、子どもたちの眠っている感覚を揺り動かし、創造性を引き出し、はぐくむことを目指した活動を行っている。主にコンガ、ボンゴなどの打楽器、リズムやメロディー、ハーモニーを即興で演奏できるオルフ楽器を使用しているが、そのほかに聞こえた音を全身で表現したり、造形活動を行ったりしている。楽譜は使用していない。
リズムムービングB	4歳児 （12） 5歳児	① 11 ② 13 ③ 12	〃　15:30～16:20 （全32回）	
リズムムービング&パーカッション	小1～3	① 17 ② 14 ③ 14	火曜日16:30～17:20 （全32回）	リズムによる自己表現を行う。更に読譜力など、音楽的基礎力の理解、打楽器演奏法の導入、オルフ楽器を使った即興演奏をするなど一歩踏み込んだ指導を行う。
おとなのためのリズムムービング	18歳以上	① 17 ② 16 ③ 16	火曜日18:00～19:30 （全16回）	昨年度より開講。かねてから要望のあったおとなのためのコース。小学校教諭や音楽教室の指導者、一般企業の会社員や子供コースの保護者と様々なメンバー。
お母さんも一緒リトミックⅠ	3歳児と母親（20）	① 21 ② 20 ③ 22	水曜日14:00～15:00 （全32回）	子どもの発達段階に即したリズム遊び、歌遊び、簡単な造形活動を通して親子のコミュニケーションを図り、音楽を楽しむ心と豊かな感受性を養うことを目指している。
お母さんも一緒リトミックⅡ	4歳児と母親（20）	① 18 ② 16 ③ 16	水曜日15:00～16:00 （全32回）	初級で培ってきた感性や音に対する感受性を引き続き伸ばすよう心がけ、それぞれの成長の実際に合わせながら、個性豊かな発達を促すような活動へと更に高めていっている。
お母さんも一緒リトミックⅢ	5歳児と母親（20）	① 17 ② 19 ③ 19	水曜日16:00～17:00 （全32回）	就学を控えるころになると子どもの感受性も親離れが始まり、子どもたち同士の接触の機会が多くなる。生き生きと目を輝かせて音楽を楽しみ、遊んでいる子どもたちが印象的。
おんがく星みつけた	2歳児と母親（30）	① 30 ② 31 ③ 32	木曜日10:30～11:30 （1期10回　2期10回 3期9回）	就園前の幼児と母親が対象で、リズム遊びを中心に、造形活動や身体表現なども取り入れた活動を行っている。母親とスキンシップをしながら楽しく音楽と遊べることを目指す。
シンセワーク初級	中1～高3 （8）	① 6 ② 6 ③ 6	金曜日17:00～18:00 （全32回）	受講生のニーズに合わせ、ギターやドラムといった生楽器、コンピュータを使用した録音など個人のテーマに沿って実施。バンド形式でのアンサンブルは引き続き取り入れている。
和太鼓グループ	小3～高3 （12）	① 15 ② 15 ③ 14	土曜日14:00～15:30 （全32回）	湯島に伝わる「助六太鼓」のコース。大太鼓、中太鼓、締め太鼓の3種の太鼓を使って演奏する組み太鼓。口唱歌で指導している。
レッツ・プレイ・サンバ初級	小1～小3 （10）	① 5 ② 6 ③ 6	土曜日13:00～14:00 （全15回）	昨年度の模擬開講を手掛かりに通年コースとして今年度より開講。まずはサンバのリズム、楽器に楽しみ、親しみを感じるような事を第一に運営。
レッツ・プレイ・サンバ	小4～高3 （10）	① 11 ② 13 ③ 12	土曜日15:30～17:00 （全29回）	ブラジルの独特な打楽器を使い、サンバのリズムを楽しくアンサンブルするコース。対象年齢を引き上げたため、より高度で力強い演奏を展開している。
合唱講座	小1～4 （30）	① 35 ② 34 ③ 32	土曜日14:00～15:30 （全32回）	遊ぶことを通して無理なく声を出し、身体表現なども取り入れて、上手に歌うことだけではなく、身体全体で音楽を表現するユニークな合唱活動プログラム。
混声合唱	高校生以上 （15）	① 49 ② 48 ③ 47	土曜日19:00～21:00 （全32回）	子どもたちに豊かな音楽や表現のすばらしさを伝えることを目指している。コンサートや合宿などのときは、常に「こどもの城児童合唱団」と活動をともにしている。
エレクトリックアンサンブル	中1～高3 （8）	① 11 ② 10 ③ 10	日曜日10:00～12:00 （全32回）	バンド形式で行うプログラム。継続して続ける受講生からの要望を取り入れつつ、さまざまな音楽にチャレンジしている。今年度より対象年齢があがり、技術的により深まりをみせた。

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　　考
三味線講座　A (初級)	小2～高3 (12)	①　11 ②　9 ③　12	日曜日10:00～11:30 (全32回)	クラスは2クラスに統合になったが、学校教育への邦楽の取り入れ対策もあるのか、新たな受講生の獲得にもなり、クラスは充実した。ぼくらのサウンドでは合唱団との共演になり、異ジャンルの音楽と、多くの人と共に演奏する楽しさを感じることが出来た。お正月のNHK総合テレビへの生出演など、外部からの取材も多数あった。
三味線講座　B (経験者)	小2～高3 (12)	①　14 ②　13 ③　14	〃　11:30～12:45 (全32回)	
ガムラン講座	小1～高3 (15)	①　7 ②　9 ③　10	〃　13:00～14:30 (全32回)	インドネシアの青銅の打楽器アンサンブル「ガムラン」の初心者のクラス。さまざまな音楽的な要素が潜在しているガムラン音楽は、アンサンブルでその特異さが分かる民族音楽。

〈クラブ〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　　考
パーカッションアンサンブル	(人) 小4～高3 (15)	(人) ①　20 ②　18 ③　18	火曜日17:30～19:30 (全32回)	さまざまな打楽器をふんだんに使い、演奏したり、体を楽器にしてリズム打ちを行ったり、子どもたちのはじけるようなリズム感を表現する。初心者も、ていねいな指導で、すぐに楽しんでいる。
こどもの城 児童合唱団Ⅰ	小2～3 (30)	①　44 ②　41 ③　39	土曜日15:30～17:30 (全32回)	音楽を通し、協調性・創造性・幅広い知的好奇心を養い、豊かな音楽性を育てることを目的としている。合唱活動だけでなく野外活動、シンセサイザーやリズム楽器による合奏なども体験するユニークな総合プログラムを展開。
こどもの城 児童合唱団Ⅱ	小4～中3 (60)	①　96 ②　97 ③　95	〃　17:00～19:00 (全32回)	
ガムラングループ	小4～高3 (15)	①　9 ②　9 ③　8	日曜日14:30～16:00 (全32回)	ガムラン講座の継続者のコース。年齢の差を超えて、子どもたちは打楽器の合奏を楽しむことができる。初級終了者と経験者が一緒になってアンサンブルをして練習している。

〈短期講座〉

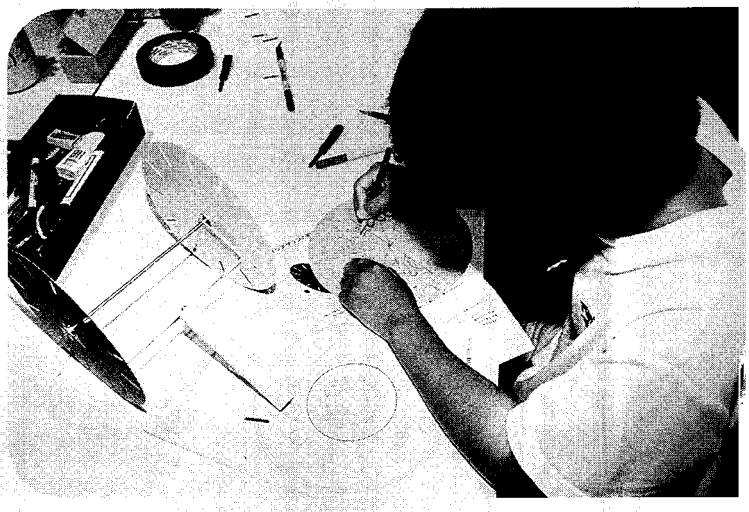
名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　　考
こどものための“お箏”体験短期講座	(人) 小1～高3 (10)	(人) 8	10.15、22、29 16:30～18:00	お箏を体験する短期コース。平常期間の土曜日にお箏の体験を行っているが、さわって、簡単な曲を演奏するまでに挑戦。小学生8人が受講。講師は音楽事業部のアルバイトで箏演奏者の（全3回いずれも日曜）重田恵美子が担当。
指導者のための“三味線”体験短期講座	学校の教員など、子どもたちに対応する大人 (20)	18	11.8、15、22 18:00～20:00 (全3回いずれも水曜)	邦楽を取り入れる、という新学習指導要領に対応するためを目的とした大人（指導者）向けの講座。受講者の熱気で二時間はあっという間だった。実際に始めて手にした方がほとんどだが簡単な曲を演奏したり、楽器の仕組みなど、楽器全般の内容が好評であった。小、中校の教員、児童館の職員など、18人が受講。
指導者のための“サンバ”体験短期講座	学校の教員など、子どもたちに対応する大人 (20)	18	11.19、26、12/3 16:30～18:30 (全3回いずれも日曜)	小中学校の学習指導要領が平成13年度より変更されることと関連し、渋谷区の先生方からの声に答えたかたちで発生した企画。こどもの城では開館直後からサンバ音楽をいろいろな形で実践してきた。そのノウハウを生かし学校で即実践可能な内容の指導を行った。今後ガムラン等の展開も考えられる。

❸ その他（動くこどもの城など）

名　称	実施日	施設会場	備　考
＜講師派遣＞ 子育て支援の輪つくり講座	7.18	新潟市総合福祉会館	新潟市の主催する講習会。地域の子育てサークルで活動するボランティア、または今後活動してみたい人、新たにサークルを作りたい人を対象にした。約140名が参加。内容は手あそびから、身体を使ったあそび、乳児のあそび等。
＜講師派遣＞ 地域子育て支援センター担当者育成研修会	9.21、28、10.5	〔こどもの城〕 音楽ロビー	毎年恒例になった㈳日本保育協会主催の指導者向け講習会。今年で5回目。約170名が参加。乳児と親の活動への関心は年々高まりつつあるようで、乳児向けのすぐ使えるプログラムからプログラムを作る上でのポイントを講習。
第十二回 三味線のつどい	10.1	青山円形劇場	こどもの城三味線講座の講師である田島佳子氏と音楽事業部の共催する演奏会。三味線講座生も2クラス揃って出演。今回は「花見踊り」を演奏。専門家の皆さんの助演もあり、子どもたちも普段とは違う雰囲気で演奏に取り組んだ。子どもたちが揃って合奏する姿はなかなか珍しいらしく、観客の皆さんにも好評であった。
（演奏依頼） 初春江戸のにぎわい	1.2	NHK総合	邦楽の大切さを気軽に伝えたいという同局の番組からの出演依頼。学校教育における邦楽の本格的な導入を目前にした今、子どもたちが気軽に邦楽に親しみ、取り組んでいる姿を広く伝えたいという趣旨のもと講座生揃って生出演した。
＜講師派遣＞ 手遊び実技研修会	1.19	埼玉県 北永井児童館	同館の主催による職員、指導者向け講習会。指導者が一人だけで活動する事が多い児童館の現状を踏まえ、「一人でどのようにすすめるか」という事にポイントをおいた講習会。講師自身も一人で活動を行い実戦法を示す内容にした。
＜講師派遣＞ 乳幼児親子のあそび（音楽表現活動）	1.23	港区 女性センター	主催は東京都公立児童厚生施設連絡協議会。港区、新宿区、千代田区などの児童館職員が対象。前述の㈳日本保育協会主催の指導者向け講習会で取り扱った乳児向けのプログラムを地域でも講習してほしいという要望であった。
（演奏依頼） リズムとあそぼう	1.26	世田谷区 多聞幼稚園	園児とその親、約180名が参加。園の子どもたちにベストなプログラムを、と園からのリクエストなどにも応え、主催側と互いに協力しプログラムを作りあった。
＜講師派遣＞ 親子で楽しむリズム	3.5～6	沖縄県 与儀幼稚園	主催は沖縄県那覇市教育委員会。同園での園児、同園近隣地区の乳児と保護者を対象にした実戦プログラムと指導者対象の音楽に関するプログムのレクチャーを行った。前述の㈳日本保育協会主催の指導者向け講習会で取り扱った乳児向けのプログラムを地域でも講習してほしいという要望であった。
＜講師派遣＞ ガムラン音楽 アフリカの音楽 サンバ等の講義と実習	6.23、9.8、1.29	宮城教育大学	小中学校の教師になるための課程の学生を対象とした民族音楽の実習と講義。平成13年度より小中学校の指導要領か改定され、音楽の授業に邦楽や民族音楽が今まで以上に取り上げられる。そのことに関連したもので、現場で即実践可能な内容を多く含んだ実習と講義。
こどもの城合唱団合宿	7.27～8.3	上海・北京	上海市から招待を受けて、「上海国際少年児童文化芸術2000」に参加した。7月27日から8月7日まで10日間滞在した（参加児童の滞在費を上海市が一部負担してくれた）。団員と保護者合わせて184名が参加。東南アジアを含め、アメリカ、カナダなどから、10カ国約800名が集った。北京では日本大使公邸において演奏を行い、万里の長城の見学などもした。
＜講師派遣＞ インドネシアの音楽 アフリカの音楽 サンバ等の講義と実習	8.22	佐倉市 教育委員会	佐倉市の小中学校の教師を対象とした民族音楽の講義と実習。平成13年度より小中校の指導要領が改定され、音楽の授業に邦楽や民族音楽が今まで以上に取り上げられる。そのことに関連したもので、現場で即実践可能な内容を多く含んだ実習と講義。
＜講師派遣＞ アフリカの音楽	10.24、10.30、11.7	国立市 教育委員会 国立市 第3小学校	国立市第3小学校4年生を対象とした教育委員会主催の研究授業に参画した。初日は学年全員で演奏の鑑賞。2・3日目はクラスに分かれ、美術担当の教師との共同作業で、アフリカの太鼓ジェンベの音楽を聞きながらの造形表現活動を行った。
おんがくがスキ！	6.17	杉並区立 高井戸第2小学校	ゴールデンウィークに行っている円形劇場でのプログラム派遣。民族楽器の紹介、音楽遊び、ダンス、手作り楽器の紹介など。
おんがくがスキ！	12.9	茨城県 土浦市都和公民館	ゴールデンウィークに行っている円形劇場でのプログラム派遣。民族楽器の紹介、音楽遊び、ダンス、手作り楽器の紹介など。3人編成のミニバージョン。

名　称	実施日	施設会場	備　考
(動くこどもの城) おんがくがスキ！	1.20	仙台市太白区 文化センター	ゴールデンウィークに行っている円形劇場でのプログラム派遣。 民族楽器の紹介、音楽遊び、ダンス、手作り楽器の紹介等。
(動くこどもの城) おんがくがスキ！	2.24	北九州市 戸畑市民会館	ゴールデンウィークに行っている円形劇場でのプログラム派遣。民族楽器の紹介、音楽遊び、ダンス、手作り楽器の紹介など。
おんがくがスキ！	2.9～19	スイス・ジュネーブ ベルギー・ブリュッセル ドイツ・デュッセルドルフ ドイツ・フランクフルト	ゴールデンウィークに行っている円形劇場でのプログラム派遣。民族楽器の紹介、音楽遊び、ダンス、手作り楽器の紹介など全日空の主催による海外公演。

A V 事業部



平成12年度の活動

はじめに

AV（オーディオ＆ビジュアル）事業部の活動は、子どもたちに豊かな感性や知識を養ってもらいたいと願い行われる「一般活動」と、直接利用者に接することのない「後方活動」とに大別される。そして、部の全業務の内でこの「後方活動」が比較的大きな割合を占めるというのがAV事業部の特質であるといえる。

〈一般活動〉

◎４階ビデオライブラリー

利用者は、ビデオライブラリー内に設置された35のブースで希望のビデオソフトを選択し視聴できる。ビデオソフトは、一般市販作品の他にオリジナルソフトも登録されており、その本数は約１万８千本である。運用の流れはその殆どがコンピュータ制御となっている。

◎４階Ａ・Ｂスタジオおよび音楽ロビー

子どもたちに是非視聴させたい優良映像作品を厳選しての上映会や、《視覚玩具》作りのワークショップなどを実施。また、子どもを対象とした短期講習会や指導者向けビデオ講座なども行っている。

〈後方活動〉

◎１０階ＡＶ資料室

ビデオライブラリーに登録する映像ソフトの内容を１本ずつ事前視聴し、コンピュータ制御に必要となる多数の情報をデータとして入力する。構築されたデータベースには、各映像ソフトの情報（主題、副題、ジャンル、ストーリー、原作者、視聴時間、言語）が含まれているため、これを利用し運用をすると同時に利用者の希望に添った映像ソフトの検索なども行う。

◎４階映像調整室

スタジオで行われる各部の催しを映像記録すると同時に館内テレビ中継を行う。また、特別期間用の館内案内映像の制作や、各部が行うイベントでの技術協力（映像を用いた演出効果等）をする。

◎４階マスターコントロール室

青山劇場・青山円形劇場に設置されたビデオカメラや取材用のビデオカメラを利用し、劇場公演や館内外の活動を収録編集する。出来上がった作品は、オリジナルソフトとしてビデオライブラリーに登録する他、一部を関係者に記録用として頒布している。

❶一般利用

(ア) 平常期間

【ビデオライブラリー】

本年度ビデオライブラリーで視聴できるタイトル本数が１万８千本を超えた。歴史・科学から童話やアニメーション、ドラマや映画など、子どもから大人までが楽しめるソフトが98の項目に分類されている。また、３分の短いソフトから164分の長いソフトまで揃っている。その中で本年度の利用数が一番多かったのは、分類83変身ヒーローの「スーパー戦隊」である。そして、２番目には分類70アニメの「名探偵コナン」で、３位には分類74アニメの「ドラえもん」であった。また高学年

向けの作品では分類97ドラマの「GTO」が人気が高かった。このように、テレビで人気のあった作品がここでも多く利用されている。

ビデオライブラリーの《見たいソフトを自由に選択し、その場で見る》という基本姿勢を支えているのは、新着ソフトでもあるとますます思うところである。これからも年間500本の新しいソフトの購入をどう維持していくか。また、比較的空いている時間帯に幅広い年齢層の利用者をどう引きつけるか、そして、あまり見られないが有用なソフトをどうしたら見てもらえるようになるかが、これからのビデオライブラリーにとって欠かせない課題である。

◎川特集

ビデオライブラリーには、川に生きる動物や植物、環境など《川》に関連するソフトが約40タイトルある。これらのソフトをより多くの人に、アピールするために「川特集」を行った。ビデオライブラリーの周辺に12枚のパネルをつなげ、川の「上流、中流、下流」の3つのパートに分けた。子どもの身長の高さに合わせ、直径30cmの穴をパネルにあけ、長さ1mの紙管を通した。その紙管の中に頭を入れてのぞくと、水中の映像や実際に水槽で飼育している「ザリガニ、沢ガニ、うなぎ、どじょう」や、鳥やへびのレプリカの観察ができるようにした。また紙管の横に取り付けられたボタンを押すと紙管内に川の流れの音や、鳥、かえる、昆虫の鳴き声などが響き渡るように工夫した。私たちの近くにある川に住む生き物を選び、体験コーナーを設け、わかりやすくおもしろい方法で、あらゆる角度から川を紹介することができた。その結果、大勢の子どもたちが喜んで体験コーナーを利用し、参加した。

ビデオライブラリー「川特集」

◎鉄道模型運転会

鉄道関連ソフトの視聴促進活動の一環として行ってきた鉄道模型運転会も、今年で開催10回目を数えることとなった。昨年までは年3回実施してきたが、今年度は諸事情により2回しか開催できなかった。このイベントは子どもたちのみならず親からの要望も強く、今後も色々なテーマと内容で実施していきたい。

【こどもの城映画劇場】

この催しは、フィルムライブラリー「武藤行雄記念文庫」収蔵のカナダ国立映画制作庁（NFBC）作品から、毎月テーマを決め、作品を選んで上映している。今年度も昨年同様、英語の台詞がある作品の上映は、日本語の台詞を吹き込んだテープを作成し、それを同調させて上映するオーバー・ボイス方式を採用した。毎年夏期には、この催しの拡大版的な企画「キンダー・フィルム・フェスティバル」（以下キンダー）を実施しているが、今年度は、「第8回キンダー・フィルム・フェスティバル」としてキンダー実行委員会との共催で開催。ベルリン国際映画祭子ども映画部門との協力関係で行われているこの催しでは、世界の優秀映画やアニメの上映だけでなく映像作りの裏側を知るワークショップが毎年の注目企画。ところが今回は、ゲストとして予定していたドイツのアニメ作家が急病のため、来日が中止となり、急遽国内のゲストによる内容に変更した。しかし、同様の企画を何年も行っているため、変更にともなう広報や実際のプログラム変更などもスムーズに進み、大きな問題は生じなかった。また、リピーターも増加し、Bスタジオでの上映は約3,000名を超える来場者でにぎわった。Aスタジオには、イギリスの幼児向けテレビ番組「テレタビーズ」をモチーフにしたゲーム大会を実施したり、関連CD-ROMやグッズで遊べるコーナーを設けた。夏期特別期間は学童向けのスペースが増加し、幼児の遊び場所が少なくなるので、このコーナーは、未就学児を連れた親子にたいへん好評であった。

今年の大型企画としては、9月にNFBCから人形アニメ作家のコ・ホードマン氏を招いた特別上映とワークショップを実施したことが挙げられる。国際交流基金とキンダー実行委員会から招へいされたホードマン氏は、60歳という年齢を感じさせないほど精力的に東京や関西、広島各所で講演を行い、日本のアニメ作家との交流に力を注がれた。〔こどもの城〕では、子どもたちに向けたアニメ作りのワークショップにオリジナルなアイデアを注ぎ込んで実施していただいた。特に子ども向け作品を数多く手がけているホードマン氏の指導は、動かないモ

ノに命を吹き込むというアニメ本来の表現活動のテーマが幼児にも理解できる内容であり、指導者にとってもたいへんに参考になる内容であった。

(イ) しる・つくる

【不思議な映像実験室】

映画発明以前の動く画を見る《視覚玩具》をつくるワークショップや、ビデオ機器を使用したワークショップを総称して『不思議な映像実験室』と呼んでいる。

《視覚玩具》を題材としたプログラムでは、他の施設にプログラムを紹介した場合なども容易に同様のプログラムが実施できるように、可能なかぎり身近な材料でできる工作をおこなっている。

ピンホールカメラのワークショップや、残像効果を体験する「ソーマトロープ」、写真に針で穴をあけて夜景のイルミネーションを再現する「ライトパノラマ」などを実施。平常期間の日・祝日には昨年に引き続き本年も、これまでに開発した数種類のプログラムをランダムに実施した。

夏期特別期間には視覚玩具の展示コーナーをAスタジオに開設。ソーマトロープやライトパノラマ、ヘリオシネグラフの展示とともに、常時くるくるアニメを作れるミニコーナーを設置。この展示スペースは夏期講座の短期コースのスペースを半分に仕切って行ったものである。地味で小規模な展示・体験スペースではあるが、幼児からゆったりと楽しんだり、小学生の夏休みの宿題の情報収集の場として熱心に展示物を見ていったりとそれなりに賑わっていた。

ビデオ機器を使用したイベントとしては、音楽事業部が『ぼくらのサウンド』で音楽ロビーで活動しない3月17日から20日まで、同ロビーでビデオ機器を使用した映像あそび『ビデオアスレチック』を実施。テレビモニターとビデオカメラを利用した「テレビでんわ」、パーソナルコンピュータを使って2枚の静止画像を交互に表示する「人間ぱたぱたアニメ」、ビデオの映像信号の特定の色をマスクとし、別の画像と合成する「クロマキー」を実施。音楽ロビーでの『ビデオアスレチック』の開催は初めてである。実施前から多少の心配はしていたが、自然光の入る音楽ロビーで「クロマキー」がどれほど《抜ける》かという問題があった。太陽光線の直射でできる強い陰影や、時間帯で変化する太陽光線の色温度の変化など予想どおりの「クロマキー」向きではない環境であった。対応策としては、ブラインドを閉めて極力自然光をカットすること、カメラを数時間おきにこまめに調整するしかない状態であった。

また、平常期間の土曜日夕方に音楽ロビーで行う「くるくるアニメ」の枠を「不思議な映像実験室」という名称に変更し、「くるくるアニメ」の他に「人間ぱたぱたアニメ」なども実施した。

こどもの城映画劇場

不思議な映像実験室

❷ 講座・クラブ

【子ども向け講座】

AV事業部では、以前にも造形事業部と「アニメ体験」などの子ども向け講座・クラブを共同実施していたが、今年度は、新たに双方の得意とする分野から一つのテーマを考察してプログラムを作り上げていくクラブ「映・造ワークショップ」を1年間に渡って実施した。メディアの起源と言われているスペインのアルタミラ洞窟の壁画を再現し、その時代の光源である小さな炎の光で見える空間を体験したり、幻灯機を作ってガラス絵を投影したり、ドライアイスに映像を投影して疑似的な立体映像

を作り出したりするなど、映像の歴史を追体験しながらその時代のハードウェアとメディアの関係を考えていくという方針で、メディアに対する知識を実際の体験で身体的に受け取るワークショップが展開された。さらには、現代の映像制作を実際に体験するため、デジタルビデオカメラとパソコンを使った「デジタルシネマ」作りに挑戦。ストーリー作りから小道具作り、そして１人何役もの出演をこなすなど、子どもたちは各自のペースをつかむと、作品作りがどんどん進行し、撮影、効果音、そして演技者などに分担しての協力も積極的に行われて、作品が作り上げられていった。非常に実験的な試みではあったが、毎回指導者が事前の打ち合わせと事後の反省を繰り返す中から、普通の学校教育では取り組むことが少ない「子どもたちがメディアへアプローチするプログラム」をどのように進めていけば良いのかをかなり明確に掴むことができたと自負している。

【指導者・一般向け講座】

昨年同様、夏期特別期間に「アニメーション撮影技術セミナー」を９階研修室で実施。あまりノウハウが公開されていない照明機器の扱い方やマニュアル撮影の方法などを指導する講義には、施設の指導者や映像系学科の学生たちが多数参加。また特別ゲストとして人形アニメ作家の保田克史氏を招き、作品の上映と講演を開催。実際に使用した人形や小道具なども披露され、参加者の熱い視線が集まった。また希望者には、８月と９月の土曜日に実際に短いアニメ作品をビデオで制作するワークショップを実施。この会場は、今年度から講座スペースとして新しく音楽オフィス奥に設けたレクチャールームを本格的に活用した。毎年恒例のプロフェッショナル・ビデオ講座は、昨年からスタートした「ビデオマンの電気基礎コース」、毎年好評の「VE技術コース」、「映像ソフトセミナー」を開催した。デジタルが主流になってきた現在の制作環境では、アナログ系のビデオ機器を中心とした講義の内容がなかなかマッチしにくくなってきていること、実際に〔こどもの城〕に設備されている機器はアナログのものがほとんどなので、数年前では教材として使用できたカメラやデッキが現在では通用しない状況になっていることなどから、これらの講座は、今後の開催に当たっては内容を大きく変えていく必要があると考えられる。

【短期講習会】

一般来館者を対象とした視覚玩具ワークショップとは別に、より複雑で材料費が少々高額になるものを短期講習会として実施。Aスタジオでは「ヘリオシネグラフ」の工作を行った。ヘリオシネグラフは、映画発明以前にあった円盤に描かれた絵が動いて見える視覚玩具。以前からこのプログラムは来館者向けに実施を検討してきたが、構造が複雑でコストがかかるため、参加費が高くなってしまう問題があった。今回、短期講習会という枠で実施することで、一般来館者向けのイベントでは考えられない高額な参加費をもとに、材料にかけられる費用に余裕がもてた。また、開館10周年を記念して制作したアニメーションキットの用紙を流用することで、ヘリオシネグラフに不可欠なスリットの開いた円盤を工作する手間がいらなくなったことも、このプログラムを実現できた大きな要因である。

品物自体は英国の映像博物館で販売されているヘリオシネグラフを参考に、子どもの使用に耐えうる強度をもったオリジナルな部品を手作りしたもので、強度を含めた性能では非常に高い水準のものを提供できたと思う。問題点としては部品一つ一つが手作りなため、準備に大変な手間がかかることである。次回は規格品の部品を加工する程度の手間で実現可能なプログラムを検討すべきであると強く感じている。

講座内容は、数点の部品を組み立てて本体を作り、円盤に動く絵を描くというもの。絵は12枚の動画を描くのだが、動画を描く難しさや枚数が多いため、塗り絵用紙も用意した。単純に着彩すれば完成する用紙に加え、単純な丸が動く塗り絵用紙をつくってみた。これは、ただ色を塗ってもよいし、丸に絵を描き加えることでボールが動く動画になったり、キャラクターが動く動画になったりと多少のオリジナリティを発揮できるものである。この幾何学図形への《加筆着彩用紙》は、大きな失敗がなく、なおかつ自分の好みの作品にアレンジできるという点でなかなかに優れもので、今後は他のプログラムにも応用していきたいと考えている。

毎夏休みにおこなっている科学工作教室では、「3D工作教室」を実施した。レンズを組み込んだ3D眼鏡の製作は過去に何回か行っているが、今回はレンズを使わない形式の「ホイートストーン式3D眼鏡」とした。この種の工作では精度が問題になるため、部品はあらかじめカッティングしたものを用意しておき組み立てさせた。眼鏡に入れて見る立体写真にはあらかじめ用意したものの他に、会場に設定した撮影コーナーで子どもたち自身の立体写真を撮影したものも持ち帰ることができる。また、家に帰った後でも自分で立体写真が撮れるように、誰の家にもある普通のカメラで立体写真を撮る方法も教えた。講義の中では「なぜ物が立体的に見えるのか」と

いう理論も取り上げた。レベル的には小学校高学年以上を想定していたが、実際の受講者には保護者同伴の低学年も多かった。この年代には、理屈よりも現象（体験）で伝えるほうが話が伝わりやすい。教室で製作する3D眼鏡の他にも、他の方式（アナグリフ方式や、ポラロイド方式と呼ばれる）にもとづいた3D体験コーナーを同じ会場内に設けたのは、その意味でよい一助にになったと感じている。

❸その他

(ア) 他部門への協力事業

AV事業部では、部としての一般活動や講習会などの他に、他部への協力事業が年間に多数ある。協力なのか共同なのかという区分けが難しいものもあるが、12年度のこういった活動を幾つかを挙げてみる。

【キャッスルクエスト】

ゴールデンウィークに実施されたプレイ事業部主催のゲーム型イベントの映像を扱う部分をサポート。

一つは参加者に導入のために見せるビデオの制作。ストーリー仕立てになったイベントの概要を説明しつつゴッコ遊びの雰囲気を盛り上げるよう演出するためのビデオである。毎年同様のイベントを行っているのだが、イベントのストーリー設定がそのつど変わるために、新しいものを撮りおろしている。

もう一つはゲームのラストシーンにあたる部分で映像や音響を多用した演出をしており、これらの映像・音響機器の調整・運用を担当した。極めて裏方的な協力ではあるが、雰囲気づくりが重要な要素となるこのイベントでは映像・音響演出の果たす役割は大きい。

【スーパースターゲッター】

昨年に引き続きゲームセンターのゲームを模倣したテレビゲーム映像を制作。マラカスを両手に踊るお姉さんの映像に合わせて子どもが踊るゲーム。ビデオの映像を上映するだけなので、映像的にインタラクティブなものはなにもないのだが、人気のプログラムである。このビデオは音楽事業部の「動くこどもの城プログラム」などでも活躍しており、地方の児童館などの希望があれば販売も行っている。

【Bスタジオでのイベントの中継収録】

Bスタジオで行われる他部のイベントの映像収録と館内のテレビへの中継放送を担当。12年度は音楽事業部のコンサート『わいわいスタジオ』の中継・収録と正月特別期間の紙相撲イベントの中継を行った。

(イ) 館内放送

〔こどもの城〕館内に数台設置されたテレビに映像の送出を行っている。平常期間は文字情報によるイベント案内や開館時に制作された施設案内映像等の送出だが、特別期間には独自に撮影・編集した子ども活動エリア全体のイベント案内を放送している。

映像自体は、基本的に特別期間が始まる１ヵ月～２週間ほど前に各部へ取材に行き、特別期間のプログラムを紹介してもらうというスタイルである。制作の手間などの関係であまりテロップを加えておらず、情報的に有効かどうかは疑問であるが、館内の雰囲気を活性化するのにはそれなりの効果を発揮しているのではないかと考えている。

12年度は特別期間の案内に加え、夏期短期講習の案内や音楽事業部からの依頼でガムラン講座の案内映像、放送時間の調整のためジュニアスプリングキャンプの案内映像を制作。

これらの宣伝効果は、ガムラン講座ではあまり有効ではなかったように思われるが、夏期短期講習の案内ではコースによって効果があったように思われる。そもそも人手不足の中で時間を割き制作する案内映像（ある程度タイムリーな映像案内を継続して作り続けるためにはクオリティの追求は不可能）なので、各部の出演者の話術や演技力によって宣伝効果が大きく変わる部分もあり、容易にその効果を計ることは難しい。

今後は講座案内を中心に、平常期間向けの映像素材を準備していくことを検討している。

(ウ) 劇場公演などの収録

15年以上も使い込んできた収録機材の老朽化によって、映像にノイズが混入するなどの不具合がおこるトラブルが絶えない。２つの劇場間でカメラ機材のやりくりを行ったり、収録中に生じた不具合により映像が使えない場合は編集作業で手直しをするなど、スタッフの後作業で対応しているのが現状である。場合によっては、収録に同時使用するカメラ数を減らさざるを得ないなど、見えざる部分でソフトの質の低下があったものの、数的には平成11度並の収録編集をこなすことができた。

収録内容は、ここ数年の傾向として自主公演や共催公演が中心となっている。音楽事業部の事業「三味線のつどい」「ぼくらのサウンド2001」などの、こどもの城の講座がらみの公演では、出演者への収録ビデオの頒布（記録目的）により収入がある。

15年来続いてきた「青山バレエフェスティバル」は、本年でひとまず終了。公演の関係者に記録目的で収録ビデオを頒布するのも本年限りとなる。同ビデオは、可能な限りビデオライブラリーに常設するようにしてきているので、このシリーズは将来的にも「こどもの城ビデオライブラリー」としての良い資産となるだろう。

「青山バレエフェスティバル」に限らず、内容にアピール度のある劇場公演のビデオは、公演から何年を経ていても、それがために視聴をしに来るという利用者が多い。本施設にしか置いていないという希少性により集客力もあるため、今後もこの種のオリジナル劇場公演ビデオの常設・公開は続けていくべきである。

直接の利益に結びつく劇場の外貸公演の収録は、「テレサ林の世界」「食卓の木の下で」の2本であった。若干の設備投資をして機材の不具合を正せば、クライアントに対してもっと積極的な勧誘ができる。その線で、来年度以降の整備予算要求を見直したい。

❹まとめ

〔こどもの城〕の来館者層は、幼児や小学校低学年が中心である。このため、現在はこれらの層への対応が特に手厚くなっている。しかし、今後少子化の傾向がますます進行することなどを考えた場合、より広範な年齢層への対応ができるよう体質改善を図ると共に、外部（遠隔地の親子や指導者など）への対応もより強化すべきではなかろうか。

AV事業部も、その活動を振り返ると、オーディオ＆ビジュアルという比較的狭義（他部と比較して）な分野で低年齢への対応を強く意識し続けてきたように感じる。さまざまなメディアの境界が不鮮明となりつつある昨今の現状を考慮すると、今後はAVという分野にのみ捕らわれることなく、

◎科学など広範な分野に目を向け、高年齢への対応を徐々に模索する。

◎各自の内にしまわれている過去からのノウハウをデーターベース化する。（インターネットなどによる情報発信体制の整備＝外部への対応強化）

などへ目を向けるべき時期に差しかかったと感じる。

短期講習（3D工作教室）

平成12年度活動一覧表

一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
ビデオライブラリー自由利用	開館時間中	趣味、教養、娯楽、スポーツ、アニメなど、さまざまなジャンルにわたるビデオソフトが、18,000タイトル網羅されたビデオの図書館。利用者は、ビデオライブラリー内に設置された35のブース（小部屋）で好みのソフトを視聴できる。
走れ！キャッスルトレイン～こども鉄道模型運転会～－第9回－	6.17～25	鉄道模型（Nゲージ）の運転を体験できるプログラム。列車などを題材にした絵本や童話の本を置いたコーナーや鉄道関連のビデオを視聴したりするコーナーも合わせて設置した。
走れ！キャッスルトレイン～こども鉄道模型運転会～－第10回－	10.7～15	鉄道模型（Nゲージ）の運転を体験できるプログラム。鉄道関連のパソコンコーナーやプラレールコーナーなども設置。
不思議な映像実験室ビデオアスレチック	3.17～20	クロマキー合成やテレビ電話ごっこなど、ビデオ機材を使った映像遊びを実施。
おもしろビデオ館	毎週金曜日 15:30～16:00	ビデオライブラリーにある、上映可能ビデオソフトからテーマを決めて作品を選び、上映。絵本を基にしたヤマハの「世界絵本箱」シリーズ、日本の昔ばなしシリーズなどを紹介。（4階Bスタジオ）
おもしろビデオ館スペシャル	毎月の最終木曜日 （11月まで実施）	おもしろビデオ館で上映し、人気のあった「世界絵本箱」と「もぐらのトッピィくんをアンコール上映。（4階Bスタジオ）
くるくるアニメをつくろう	毎週土曜日 15:30～17:30	2枚の絵を描いて簡単なアニメおもちゃを作るワークショップ。 （4階音楽ロビー）
こどもの城映画劇場	日曜日・祝日 （月1回）	「武藤行雄記念文庫」収蔵のカナダNFBCのアニメーション映画他を音楽Bスタジオで上映。①11:30 ②13:30 ③14:30 ④15:30の4回上映。（4階Bスタジオ）
不思議な映像実験室	日曜日・祝日 （月1～2回） 11:00～17:30	映像が動いて見えるしくみや写るしくみを応用した、映像遊びを展開する催し。2つの絵が合成されて見える「ソーマトロープ」、1枚の風景写真から昼と夜の景色を作りだす「ライトパノラマ」、風景が筒の中に写る「ピンホールカメラ」などを実施。（4階Bスタジオ）
テレビ中継録画	日曜日・祝日 特別期間	音楽Bスタジオで実施される、各部プログラムの館内へのテレビ中継及び録画。特別期間には、催し物案内情報の送出も実施。（4階Bスタジオ、映像調整室）

〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
ビデオライブラリー 日本の自然特集「川」	〈夏期特別期間〉 7.20～8.31	「川」に関するビデオソフトの視聴促進を目的に行った特集。川に生息する魚やカニ、その他の生物の観察コーナーや遊びのコーナーを設けた。
第8回キンダー・フィルム・フェスティバル	7.28～8.6	ドイツのベルリン国際映画祭・子ども映画部門「キンダー・フィルムフェスト・ベルリン」との提携関係により実施される日本で唯一の国際子ども映画祭。第8回目の今年の内容は、ベルリンでのグランプリ受賞作品をはじめ、世界各国から子ども向けの短編映画を選りすぐって上映。また、9月に特別企画としてカナダの人形アニメ作家コ・ホードマンさんによるアニメワークショップやシンポジウムを開催（4階Bスタジオ）
不思議な映像実験室	8.8～31	映画発明以前からあった動く絵を見る玩具、視覚玩具の展示。数種類の視覚玩具の展示と共に、2枚の絵を描いてアニメをつくれる「くるくるアニメ」の工作コーナーも設置。（4階Aスタジオ）
こどもの城・映画劇場 カナダのアニメーション特集上映	〈春期特別期間〉 3.25～30	フィルム・ライブラリー所蔵のカナダのアニメを対象年齢別にプログラムして上映。（4階Bスタジオ）
クラシック映画劇場	4.1～5	「キッド」「黄金狂時代」「キング・コング」「類猿人ターザン」など、サイレントからトーキーにいたるクラシック映画の名作・話題作を上映（地下1階フリーホール）

❷ 講座・クラブ

〈クラブ〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　考
	（人）	（人）		
映・造ワークショップ	10	10	日曜日 13:00～16:00	造形事業部と共同で実施した映像探検クラブ。 （造形事業部の記事も参照）

〈ビデオ講座〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　考
	（人）	（人）		
プロフェッショナル　ビデオ講座 ◎ビデオマンの電気基礎コース	30	15	2.18（日） 13:00～17:00	伝送や照明などに関して現場で起こりうるトラブルを検証しながら、ビデオ撮影や機器運用に不可欠な電気に関する基礎的な知識を再確認するための講座。会場は12階会議室。
◎VE技術コース エンジニア	30	9	2.25（日） 13:00～17:00	アナログ機器に必須なビデオの信号管理と実際の技術を、各種モニターを実際に使用しながら詳細に解説する。ウェーブフォーム、ベクトル、ピクチャの各モニターを受講者が体験使用する時間も設定。毎回好評に付き、今年度は前期、後期と2回実施した。会場は、10階アニメスタジオ（仮称）、12階会議室。
◎映像ソフト制作 セミナー	30	9	3.4（日） 13:00～17:00	師にテレビ番組やビデオソフト制作で活躍するカメラマンやディレクターを招き、ビデオ・ソフト制作での撮影や編集、デジタルビデオの活用例を、詳細に各種の映像資料を比較して講師が論じるセミナー。会場は、4階Bスタジオ。
アニメーション「撮影」「照明」必勝セミナー	30	32	セミナー 8.19（土）、20（日） ワークショップ 8月下旬～10月上旬の各毎土曜日	アニメ作りでの撮影技術にスポットをあて、カメラや照明機器の選び方とその使用方法などを講義するセミナーと、実際に受講者が短い作品を作るワークショップを実施。会場は、9階研修室、4階レクチャールーム

〈短期集中講座〉

名　称	期　間	備　考
3Ｄ工作教室	8.18～27	立体写真を見るためのビュアー「ホイートストーン型・反射式立体鏡」をつくる。立体写真の撮影実習では、自分の立体写真を撮り持ち帰る。(地下１階フリーホール)
手作り映像おもちゃ 映画のしくみを体験！ ヘリオシネグラフ	8.7～17 8.21～31	回すと円盤に描いた絵がアニメのように動いて見える「驚き盤」の工作教室を実施。絵の円盤が交換できるものを作成。講座では各部品を組み立てて「ヘリオシネグラフ」を作り、絵を描くことを通して映画の仕組みを体験させた。会場は視覚玩具の展示コーナー「不思議な映像実験室」と併設。(４階Ａスタジオ)

❸その他（動くこどもの城など）

〈映像記録〉

名　称	期　間	備　考
館内活動の記録	通年	館内の講座等をビデオ取材しソフト化して参加者に記録用として頒布。体育事業部「母と子のすくすくランド」(Part Ⅰ～Ⅲ) の３本。尚、同作品はオリジナルソフトとしてビデオライブラリーに登録。
館外活動の記録	夏期特別期間 冬期特別期間 春期特別期間	こどもの城の館外活動に同行してビデオ取材、ソフト化して参加者に記録用として頒布。 体育事業部「チャレンジキャンプ 2000」「スキースクール」(Part Ⅰ－１期、part Ⅰ－２期、およびPart Ⅱ)。 プレイ事業部「ちびっこ冒険団2000」「フェローシップキャンプ2000」「ゆきんこ冒険団2000」 企画研修部「ジュニアー・アウトドア・スクール2000」「ジュニアー・スプリング・キャンプ2000」 尚、同作品はオリジナルソフトとしてビデオライブラリーに登録。
劇場公演の記録	通年	青山劇場・青山円形劇場でおこなわれた公演・発表会をビデオ記録し、編集の上ビデオライブラリーで公開。また一部を出演者等に記録用として頒布。 ◎青山劇場－自主公演：「第15回青山バレエフェスティバル」など３本。 青山円形劇場－自主公演：「音楽の玉手箱」「第14回青山演劇フェスティバル」「 および共催公演：まんぷく村のハムスターキック４」など28本 ◎青山円形劇場－外貸公演：「テレサ林の世界」「食卓の木の下で」

〈動くこどもの城〉

名　称	期　間	備　考
「アニメはともだち」展 企画協力 アニメワークショップ 大分県立芸術会館	9.22～24	「アニメはともだち」展の関連事業として、ぱたぱたアニメのワークショップと、ソーマトロープ、マジックロール、フェナキスティスコープ３つの視覚玩具制作ワークショップを一般来館者対象に実施。併せて児童厚生員等研修会を実施。視覚玩具の制作を通して残像現象など、アニメーションや映画が動く仕組みを体験。どの玩具も特別な機材を使用せず、紙工作で出来るものを紹介した。

〈講師派遣〉

名　称	期　間	備　考
科学遊び 不思議な映像実験室	10.6	平成12年度福井県・福井県児童連絡協議会　第３回児童厚生２級指導者研修会の研修科目「科学遊び」の講習として不思議な映像実験室を実施。くるくるアニメ、ソーマトロープ、ライトパノラマを実施。

平成１２年度　ビデオライブラリー　利用者実績

月・利用者数（人）・利用組数（組）・平均視聴時間（分）

4月	9,976	4,571	29.6	5月	9,291	4,326	29.7	6月	9,824	4,358	29.0	7月	9,824	4,358	29.0
8月	22,930	10,313	30.9	9月	9,673	4,245	29.8	10月	8,671	4,126	29.5	11月	9,811	4,583	29.5
12月	7,891	3,735	28.7	1月	8,875	4,035	29.9	2月	9,253	4,029	29.5	3月	13,834	6,063	31.5

平成12年度計	平均利用者数／月　133,488	平均利用者組／月　60,394	平均視聴時間（分）／年　29.9
平成11年度計	平均利用者数／月　133,675	平均利用者組／月　60,346	平均視聴時間（分）／年　29.2

保育研究開発部

平成12年度の活動

少子化、核家族化、社会構造、産業構造の変化などにより、子どもが育つ基盤である家庭が親の未形成からくる虐待などに象徴されるように揺らいでいる。少子化対策、子育て支援をめぐる国の施策も注目されている。保育の現場では「子どもの最善の利益を優先する」立場から今、さまざまな子育て支援のプログラムが展開されている。

家庭外の保育などは、これまでにも社会性を身につけたり、人間関係を学んだりするうえから、家庭にとっても子どもにとっても必要な事とされてきた。しかしここへきて子どものみではなく親支援についてもその必要度が増してきている。

こどもの城保育研究開発部は、「子ども」と「家庭」を中心に長年さまざまな側面から「こども家庭支援プログラム」の実践に取り組んできた。本年はこれまでになく「親」と正面から向き合い子どもの幸せ、親の幸せを一緒に考える場面が多った。親の保育参加を取り入れ、子どもの生活を親も体験するなどプログラムの工夫を重ねながら進めた。結果的には親子、親子同士、保育スタッフそれぞれの理解が深まり、少しずつ今後の保育の方向性につながってきていると実感している。

平成12年度も「こども家庭支援プログラム」の保育事業（「親子教室」、「保育クラブ」、「幼児グループ」）および研修事業（「保育セミナー」、「育児相談研修会」、「育児相談概論研修会」、「ニュースレターの発行」）、一般来館児・者事業「作って遊ぼう親子工房（保育室Ⅰ、各特別期間）、低年齢児向けの「よちよちクラブ」（保育室Ⅰ、年間10回）、「1・2歳児の遊び場」（保育室Ⅱ、土・日曜日）を行った。

保育事業では、登録をして利用する会員制の「保育クラブ」は会員数 320人（4月）でスタートした（年間では、457人）。

保育事業においては保育ボランティアの受け入れを行っているが、一人っ子、核家族が多くなり、いろいろな人と保育の場で出会うことの意義は大きくなっている。学生を中心に社会人、主婦などの女性ボランティアが継続的に子どもたちとかかわった。夏期特別期間に受け入れている小中学生保育体験ボランティアは幼児にとってはより近い存在として魅力があるが、幼児の親も小中学生とかかわることを期待して連れてくるのが目立った。

思春期を迎える小中学生にとっても幼児とかかわることで、自らがやさしくなり、自分も多くの人に育てられたと気づいていく効果があるようだ。

❶保育事業

(ア) 親子教室

本年度も、1期を12回（土、3回含）として、年3期を行った。

「親子教室」は親子遊びを通しての子育て支援であるが、親に対しては、もう一度育児を見直してみる、他の親子と交流する事などがねらい。応募理由は「他の子どもと遊ばせたい」「参加して親子で成長したい」「両親参加プログラムがある」など。第1子での参加が多く、よ

り良い子育てを求めていることが応募理由からうかがわれる。

今年度参加の両親の年齢は父親では41人の参加者中30歳前半から40歳前半が最も多く35人。他は20歳後半が4人、50歳前半が2人。母親では30歳前半から後半にかけてが32人と最も多く20歳後半は8人、40歳前半は2人だった。

子どもは一人っ子が33人、二人兄弟は6人、双子での参加は2組であった。

前年度においても父親、母親の親子教室への参加当時の年齢には大きな差は見られなかったが、今年度母親の方が少し年齢が高くなっていることが分かった。

子どもの数についてはこの時期での判断はまだ出来ないが、応募総数（56人）からみると圧倒的に12年度も一人っ子での参加が多かった。

●12年度親子教室参加の親子の特徴

・親子教室参加以前に親子スイミングなどでの集団経験がある。
・母親から離れがたい子どもも回を追うごとに楽しくなった。
・子どもを叱れない、呆然とみているなど対応の難しさを訴える親が多かった。
・講義中の親同士の私語が目立ち社会性が気になった。
・親は子どもの成長を喜び保育スタッフの働きかけを素直に受け止めた。

●遊びのストックがない親に対して

全12回中の5回は集中的に親子で遊ぶプログラムを組んでいるが、「粘土で何作ろう」の親子遊びは小麦粉と食紅を使用している。近年、月齢が低い幼児が口にする場面があり、母親に注意を促すことが多い。母親自身はテーブル越しに他の母親と会話をしながら小麦粉ねんどを楽しんでいるが、わが子の行動に目が行かないことがある。また、「一枚の紙から」の遊びは新聞紙をさまざまに使って遊ぶ遊び。思いっきり破いたり、ちぎったりするのだが、戸惑う親子が多くなった。簡単に家庭でも遊べる遊びと思われているが実は遊んでいないことが分かる。真剣に「参考にします」と言う親が増えた。

「リズムは友だち」では

・音楽に合わせて歩く、止まる
・一緒に歌う・マラカス作り・マラカスを鳴らして歌を歌う。

音楽系統は親子で体を動かすこともあり子どもも親も気軽に参加している。毎回印象的だったのは、母親が歌う口許を子どもがじっと見ていたことである。他にも親子遊びをいろいろと行ったが、全体的に親に遊びのストックがなく、子どもと遊べない要因となっている。

父親、母親に手遊び、身の回りからの玩具づくりなど一つ一つ丁寧に伝えていき、子どもを育てる楽しさにつなげるのが保育スタッフの主要な役割になってきた。

両親参加プログラム（親子教室）

(イ) 保育クラブ・幼児グループ

2歳から就学前迄、1年毎の登録更新で利用できる保育クラブは本年度は更新・新規合わせて457人であった。本年度も、友だちやいろいろな大人とのかかわりと遊びや表現活動などによって、発達に見合った経験の場を提供する保育活動のほか、親子で本物に出会う体験や、家族同士の交流につながるプログラムを実施した。

【2歳児の保育】

2歳児の保育は「集団の中で生活と遊びを経験する」ことを中心に定期保育（年間で利用する曜日を固定した利用システム）とフリーで利用する子どもたちが一緒になって活動した。本年度は2歳児の3時間保育（Aプログラム）と4時間保育（Bプログラム）のプログラム活動の2年目となった。保育時間の差で子どもたちの遊びや生活に大きな変化は見られなかったものの、例年に比べて母子分離に時間がかかる子どもが多く、その対応と親へのアプローチの難しさが改めて浮き彫りになった。2歳児は毎日顔ぶれの異なる子どもたちを、1日14人ずつ、延べ70人（月～金）を保育しているが、曜日によっては不安の強い親子の集まりになることもある。

また、兄弟会員と親子教室終了児は2歳からフリーで利用できるとしており、実際には1歳児も受け入れている。こうしたことから、ようやく2歳児の集団として落ちつきかけたところに入る1歳児に対しては止むなく利

用を制限する場合もあった。

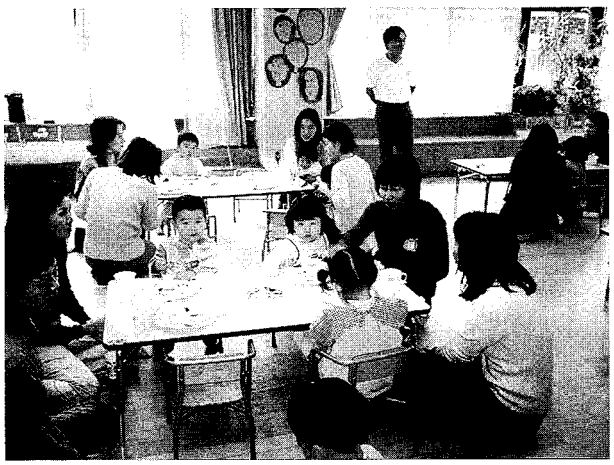
●子どもの姿

1学期は週に1回保育に参加することが精一杯だった親子も9月になると集団生活への不安も少しずつ消えて落ち着きがみられるようになった。特徴的なことは友だちと一緒に席について食事ができるようになり、最後まで座って食べるようになったことである。

「食べてくれない」「好き嫌いが激しい」等食事に対する親の悩みは、この時期に多く関心も高いが、落ちついて食事をするわが子を観察室からみて驚いたり、安心したりする親は多い。また、年々おむつを外すことが遅くなっており、内心気にしていた親も集団に参加することや保育者の助言等で母親の不安が軽減されていった。

遊びや友だちとのかかわりにおいては、まだまだ他児と一緒にいるという年齢であるが、見立て遊びの「ヒーローごっこ」や「ままごとあそび」を保育スタッフの仲介で少しずつ楽しむようになった。例えば「ヒーローごっこ」を通じて仲良くなったAちゃん、Bちゃんが給食時間にAちゃんが、味噌汁にご飯を入れて食べているのをBちゃんが真似て仲良く「おいしいね」と言いながら食べているなど。AちゃんもBちゃんも一人っ子、家庭では日中母親と2人きりの生活であることから保育の中で気の合う友達ができ遊びも広がった。

おいしいごはん（親子教室）



●2歳児の親対応について

今年度も親も一緒に参加して楽しむプログラムを行った。主なものをあげると「親子のお芋掘遠足」「ワクワクさんのワークショップ」「はらぺこあおむしの壁画制作」など。中でも保育活動展に向けての「はらぺこあおむしの壁画制作」は、自主的に参加する親が多く2歳児の親子のほぼ全員の定期利用者が参加して作品を完成させた。親たちのつながりも深まったが、親が活動中の兄弟の扱いをどうするかが今後の課題となった。

この他、年々自己主張はするが、保育者の話や大事な通信物に目を通さない親もいることから、今年度は定期的におたよりを発行してみた。以前よりは連絡事項などにもれがなくなったが、親は直接保育スタッフと話したい時にはいつでも応えられるように配慮した。

【3～5歳児の保育】

「幼児グループ」の4・5歳児に曜日別に参加する「保育クラブ」（主に3歳児）が加わった異年齢統合保育を行った。保育をベースにしながら4人が一つのチームとなって行う〈チーム〉保育はそれぞれの持ち味を生かす形で今年度も進められた。

今年度の幼児グループの活動で特に記しておくことは年長児の「お泊まり保育」を復活させたことである。以前から野外での「お泊まり保育」は年々子どもの生活体験の乏しさ等から見直しが必要とされていた。前年度は思い切って行わなかった経緯がある。今年度も改めて子どもの成長と親の要望、年間の活動の見直しを行う中で「お泊まり保育」について保育スタッフ間で論議を重ねた。その結果、年長児が親から無理なく離れて友だちと一緒に泊まってみるというねらいに絞り行うこととなった。親子とも通い慣れたこどもの城、ということもあり不安は少なく楽しいお泊まり保育となった。

この他、通常の保育活動以外に、親に子どもへの理解を深めてもらうことや、子どもと一緒に活動することの楽しさを味わってほしいとのねらいから親の保育参加を意識的に行った。親には好きな期間や時間を選べることや何回でも参加できるように配慮した。また、親子での館外活動も3回行ったが親子からは家族だけでは経験出来ないワイルドな体験として喜ばれた。プログラムのねらいは次のとおりである。

・動物園～ガイド付きで動物の観察を親子で行い話題を共通にする。
・横浜美術館～泥ねんどの感触を親子で体験してみる。
・昭和記念公園～野外で調理をしながらバーベキューを大勢で楽しむ。

●子どもの姿

2年間定期的にくる4・5歳児が核になって保育クラブの主に3歳児の生活と遊びをリードする形になっているが、今年度は活動に意識的に年齢別の保育も取り入れた。異年齢の統合保育では生活をともにすることでお互いがそれぞれに認め合っていくよさがあるが、一方では年齢や体力の発達に見合った力を出し合うことも必要である。

例えば、４・５歳児は代々木公園まで往復歩き、３歳児は現地集合で公園で思いっきり遊ぶこと。また、４・５歳児はグループでお話作りをする、３歳児は保育者と一緒にお話絵本を楽しむなどである。いずれにしてもプログラムのきめ細かさが求められるが、一人ひとりの保育を大切にする上では欠かせないものとして行った。課題は保育クラブの３歳児の中には週１回の集団になかなか馴染めず緊張が解けない子どももいた。さまざまな親子へのアプローチを試みたが、残念ながら３人が途中で止めた。

【延長保育】

こどもの城の延長保育は保育クラブの３～５歳児以上に火～金まで、原則午後４時まで行っている。子どもたちからはおやつぐみと親しまれ、延長保育担当者のカリキュラムのもとに家庭的な雰囲気で過ごしている。今年度も親の用事、お年寄りの介護、引っ越しの片付けなど利用の理由も多岐にわたったが、その家庭の事情を考慮して受け入れた。

実施日数140日（年間）利用者数 805人。１日当たり約６人。

【特別期間保育】

こどもの城特別期間に保育クラブ会員に対してフリー保育を行っている。

夏休み特別期間の利用が多く今年度は24日間の保育日数に対して２～５歳児が755人が参加した。

【家族プログラム】他

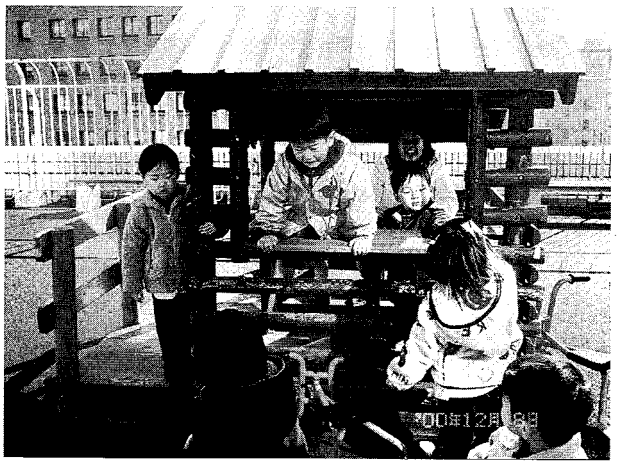
今年度も保育クラブ会員に対して親子遠足、親子の運動遊びなどを行った。家族同士のつながりや、子どもを育てることの楽しさを味わってほしいとのねらいからである。

昨年まで行っていた「親と保育者の共同企画」は親へのアンケートの結果から、親側の企画段階からの参加者が少なく今回は見送ることとした。年３回発行の保育クラブ通信では保育の様子や子育てに関する情報を提供した。

また、保育相談を気軽に利用するようになり今年度は幼稚園選び、就学についての相談が多かった。

おいも掘り（２歳児の保育）

お茶会（３～５歳児の保育）



お外であそぼう（２歳児の保育）

みんなで歌おう（３～５歳児の保育）

❷ 研修事業など

【保育セミナー】

保育研究開発部は、第14回こどもの城保育セミナー「子どもの生活と文化　PART Ⅰ」を平成12年8月5日（土）・6日（日）の二日間で実施した。今年度は新シリーズの最初の年になるが、昨年度までの「家庭とこども・地域と家庭」で取り上げた子育て支援のテーマをそのままに角度を変えて、子どもの生活、それを取りまく文化などについて広く参加者と意見交換をした。

1日目の基調講演は、小川博久日本女子大学教授による「子どもの生活と文化」。子どもの生活は周囲の大人の生活の影響をかなり大きく受けている。しかし、子どもの生活は無目的である遊びが中心になっているのに比べ、大人の生活は与えられた課題や目的を如何に効率よくこなしていくかということで成り立っている。この点では両者には大きなズレがある。このことを理解して子どもの生活や文化を保障することが子どもの成長には不可欠だと述べた。今、氏の講演から保育実践者がどうあるべきかについて、多くの具体的な例と共に強い示唆を受けた。

午後のパネルディスカッションは、午前の基調講演を受けて「子どもの生活と文化を守り育むために」と題して行った。まず司会の岡本美智子聖心女子専門学校専任教員より、さまざまな立場のパネラーから、具体的な報告と子育て支援プログラムの可能性と課題を出してもらうという主旨が話された。その後、新澤誠治江東区子ども家庭支援センター所長より、実際の活動を通して乳幼児とその母親の求める支援について報告があった。続いて吉田弘道専修大学教授は発達心理学の立場から、人と情緒的関わりが上手に結べない子どもや親への支援の仕方を、また前田ちま子こどもの城造形事業部主任指導員は子どもの造形指導の実践者として、親子が自然な状態でいられるために、環境をしかけていくことが必要だと述べ、その具体例を示した。一通りパネラーから提言があった後、コメンテーターの小川氏（前述）は「援助するもの――される者」「大人――子ども」の関係をどう作り、変化させていくのかについて実践例を織りまぜながらまとめた。その後、休憩を挟んでパネラー同士、参加者を含めたディスカッションをした。さまざまな立場のパネラーからの提言を、参加者はそれぞれ新たな課題・ヒントとして持ち帰ったようだ。

第14回〔こどもの城〕保育セミナー

2日目は、4つの分科会に別れて学んだ。第1分科会と第2分科会ではそれぞれ「乳児の生活を考える」「幼児の生活を考える」と題して、ディスカッションや問題提起があったが、いずれも保護者の問題が子どもに影響しているという視点が多く出され、はからずとも親の価値観や育児観・ニーズの多様化を浮き彫りにされ、改めて保育者の対応について考えさせられた。第3分科会は「地域子育て支援を考える」ということで、支援をするという基本的な考え方の講義や、事例報告を中心に行われた。後半は参加者同士がグループに分かれ、互いの実践や問題点をディスカッションした。今まさにタイムリーな話題で当事者の参加が多かったことや身近な話題だったためか、全体に白熱した分科会だった。また、第4分科会は「生活と表現活動」で、助言者の幼稚園教諭としての経験談を交えながらのワークショップはそのまま保育実践に活かせるものだった。終始リラックスした和やかな雰囲気であっという間の3時間半でもあった。また、共に身体を動かしたという一体感からか、さまざまな情報交換も活発に行われたようだ。

【育児相談研修会】

相談事業従事者を受講の対象としているこの研修会は、それぞれが担当した（している）事例について具体的に検討しながら、相談の進め方を学ぶところに特色がある。本年度も例年通り、年3回開催。家庭における育児支援が大きなテーマだが、本年は具体的には「育児相談の進め方―保育所や児童館が行う育児相談とは―」と題して研修会を行った。

【育児相談概論研修会】

本年度が6年目。昨年度から春と秋2回の実施にし、各回ごとの講義終了後に受講修了証の発行を行った。春の第1回目は「育児相談の基礎」のテーマで、小西哲郎厚生省保育指導専門官の行政施策の説明「最近の保育行政の動向について」の後、山崎美貴子明治学院大学副学長が「育児相談の基礎」について講義。その後で、こどもの城育児相談研修会企画委員から事例報告があった。また秋の第2回「相談活動と連携（ネットワーク）」のテーマで、最初に小西哲郎氏の行政説明「保育を取り巻く最近の動向」、それから山崎美貴子氏の基本講義「なぜ連携が必要なのか」があった。その後、こどもの城育児相談研修会企画委員から「連携の実際」について事例報告があった。最後に山崎美貴子氏から「資源リストの作り方」についてすぐに使える技術に関する講義があった。

【ニュースレターの発行】

今年度からは、保育所以外の児童福祉施設でも子育て支援事業を行っていることから、名称を「子育て支援のニュースレター」と改め行政情報も厚生省だけでなく広く関係省庁のものを掲載した。

「子育て支援のニュースレター」第7～9号（通刊23～25号）を発行したが、さまざまな分野の内容が網羅されていて読みやすいと好評で、本年度も116団体から申し込みがあった。

❸ まとめ

「子ども」と「親」をキーワードに本年度も「こども家庭支援プログラム」の保育事業を中心に研修事業や一般来館者事業を行った。年々多様な生活スタイルに多様な家族がいることが当たり前のようになってきた。子育て支援のプログラムを行う際には子どもの保育とともに「親の受け止めが十分にできること」が備えるべき条件と考えているが、親の保育参加等を本年度は積極的に行った。保育クラブの子育て支援プログラムの実践はささやかなものであるが、「研修会」や「子育て支援のニュースレター」等を通して〔こどもの城〕の保育の場から発信する意味は大きいものと考えている。

平成12年度活動一覧表

一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
春の親子遠足	5.13	保育クラブ、幼児グループ２～５歳児親子プログラムとして実施。代々木公園の自然の中で親子同士家族同士を保育スタッフが仲介をして交流を深めることがねらい。親子の紹介ゲームなどで楽しく遊ぶ予定であったが、雨模様になり結果的には中止になった。晴れ間をみて参加した親子がパラバルーンなどで遊んで散会した。反省会では不順天候の際の判断と職員間の連絡徹底を図ることが出された。
よちよちクラブ	平常期間の土曜日	こどもの城に遊びに来る親子を対象にした低年齢児のためのプログラム。保育室Ｉに於いて年間９回、午前、午後の各１回ずつ。各15組の親子。予約と当日受付。参加の親子の自己紹介を保育スタッフが仲介して行い、親子同士が交流するきっかけを作った。「人形劇」「パネルシアター」などの親子で見るもの、スキンシップ遊び（親子で体を使って遊ぶ）、玩具遊び、作って遊ぶなど１～２歳の子どもと親がゆったりと過ごせるように工夫した
親子ｄｅスポーツ	10.28	今年度、始めて渋谷区コミュニテーセンターの体育館に於いて保育クラブ会員対象の「親子deスポーツ」を行った。親子同士が二つのチームに分かれて対抗ゲーム（新聞玉作り、追いかけ玉入れ、綱引き）や親子のダンス、コミュニケーションゲームなどを楽しんだ。屋外と違って、親は安心して子どもを視界にいれることができると好評だった。参加者は親子62人。
保育活動展	1.29～2.4	今回もギャラリーで実施。１年間の保育クラブ・幼児グループの保育活動を子どもたちの作品や写真を中心に展示紹介した。親子、家族で観覧。ギャラリーのため一般来館者も観覧。
保育室の一般開放	土曜日 14:00～17:00 日曜日・祝日 10:00～17:00	保育室Ⅱに遊具や玩具を用意。一般来館の親子が自由に遊べる場を提供した。両親や祖父母の姿、中にはベビーシッターによる利用もみられた。ここを目指して来館する年少児の親子が増えている。大きい子どもたちと混じり合う他のスペースと違い、親子が安心して過ごせる場所となっている。

〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
〈春休み〉 作って遊ぼう親子工房 「タロー凧」	5.3～5	ポリ袋を使ってこどもの城の正面にある岡本太郎作の「こどもの樹」のカラフルな顔を洋凧にする。親子で作って、５月の青空に「タロー凧」をあげてみることもねらいの１つ。簡単に作れてユニークな凧か出来上がった。 午前（10：30～12：00)と午後　(1:30と3:30)保育室Ｉで行った。１回の親子の受け入れは部屋のスペースから20組とした。見本に置いた「こどもの樹」の顔を真似る親子は少なく，思い思いにユニークな顔の洋凧を作った。３日間で312人の親子の参加者。
〈夏休み〉 作って遊ぼう 親子工房 「サマースライム」	8.12～15	不思議なスライム、奇妙なスライム、涼しげなスライム、香ばしいスライム、ミミズのようなスライム、ライムのようなスライムなどなど。親子で感覚体験をする。材料は洗濯糊、水、ホウ砂、その他。シートを敷いた上で参加の親子は座って素手で材料をダイナミックに混ぜ合わせながら感触を楽しんだ。746人の親子の参加者。
〈開館記念日〉 作って遊ぼう親子工房 「トントンランタン」	11.2～11.3	ケント紙にたくさんの穴を開けて筒状にする。中にローソクの火を灯す。すると秋の虫たちがまるで高層ビルのあちこちの窓からコロコロコロリンと鳴きだす。そんなランタンを親子で作ってみた。穴あけポンチ、カッターナイフ、ホッチキス等道具を親子で使ってみることもねらいの１つにした。168人の親子が参加。
〈特別期間中〉 保育室の一般開放	土曜日 14:00～17:00 日曜日・祝日 10:00～17:00	平常期間と同様に、保育室Ⅱを一般開放した。季節の壁装飾や玩具の点検など来館した親子が安心して遊べるように環境を整えた。

❷ 講座・クラブ

〈講座〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　考
親子教室 1期 2期 3期	(組) 1歳児親子 (各期14)	(組) ① 14 ② 14 ③ 15	月曜日　10:15～12:30	親子遊びを中心に育児の楽しさを両親で体験するプログラム。保育スタッフの援助により、他の親子との交流にもつなげる。医学・心理発達に関する講義、保健婦からのアドバイスもあり全12回の講座。よりよい子育てをめざす。 応募総数56通、定員オーバー。受講料は40,000円。
幼児グループ	(人) 4歳児	(人) 10	火曜日～金曜日	〔こどもの城〕を保育の場として週4日、2年間にわたる継続的な保育活動。異年齢保育として保育クラブの3歳児が、曜日毎に異なる顔ぶれでこの活動に参加する。一人一人の個性を発揮させるために遊びの選択を巾広く考えている。複数の担当者がそれぞれにテーマを持ち保育にあたるチーム保育を行った。多様な人間関係を学習する場としてさまざまなボランティアや人を受け入れている。今年は親子一緒の館外活動も積極的に行った。4歳児は定員をオーバー。保育料は月額33,000円給食費は4,800円（月額）
	(10) 5歳児 (10)	8		

〈クラブ〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　考
保育クラブ	2～5歳児 (登録児童数457)	14 14 (1日当たり)	月曜日～金曜日 (1～2歳児) 火曜日～金曜日 (3～5歳児)	集団への参加、母親の社会参加等を主な目的とした子育て支援策として、日時を選べる保育プログラム;イベント・通信・保育相談等の家族プログラムを行った。両親の参加が目立った（送迎、イベント参加など）。子どもにより良い環境を与えたい、集団遊びの中での社会性、協調性を身につけさせたいとする理由が多い。他の幼児施設、習い事など併用している。年会費5,000円。保育料として、2歳児1,200円（1時間）、3歳児以上850円（1時間）。昼食代600円、おやつ代200円。入会金10,000円、

親子工房「サマースライム」

〈講座会等〉

名　称	対象・定員	受講数	日 曜・日 時	備　考
第14回こどもの城保育セミナー「子どもと生活・家庭と文化ーPART Ⅰ」	(人) 保育関係者 親など (50)	(組) 87	8.5　10:00～17:00 6　10:00～15:00	全国の保育所、児童館、行政の児童福祉担当者などを対象に行った。子どもに関する様々な立場の人達と、それぞれに考え、疑問を出し合い、また、情報交換を図ることがねらい。 〔基調講演〕 「子どもの生活と文化」小川博久(日本女子大学教授) 〔パネルデスカッション〕 「子どもの生活と文化を守り育むために」 ー子育て支援プログラムの可能性と課題を探るー パネラー　新澤誠治（江東区子ども家庭支援センター所長） 前田ちま子（こどもの城造形事業部主任指導員） 吉田弘道（専修大学教授） コメンテータ　小川博久（日本女子大学教授） 司　会　岡本美智子（聖心女子専門学校専任教員） 〔分科会〕 ①「乳児の生活を考える」 助言者　近藤洋子（玉川大学助教授） ②「幼児の生活を考える」 助言者　岡健（大妻女子大学講師） ③「地域子育て支援を考える」 助言者　山崎美貴子（明治学院大学副学長） 事例報告者　木村泰子（渋谷区子育て支援センター相談主査） 司会　岡本美智子（聖心女子専門学校専任教員） ④ワークショップ「生活と表現活動」 助言者朝元由美子（アソカ学園浅田幼稚園教頭）
育児相談研修会	育児相談担当者（50）	40	5.20、11.11、1.27 14:00～20:00	テーマは「育児相談事業のすすめ方ー連携の必要性と実践」スーパーバイザーは、山崎美貴子（明治学院大学）と山田美和子（元全社協・高年福祉部）。
育児相談概論研修会	育児相談担当者 (各130)	139	6.17　14:00～17:00 9.30　14:00～17:00 (今年度から2回の開催)	テーマは「児童福祉施設が行う育児相談の基本と実践」第1回目は「育児相談の基礎」。第2回目は「相談活動と連携(ネットワーク)」について学んだ。各回とも厚生省保育指導専門官（春は西村重稀先生、秋は小西哲郎先生）から行政説明を受けた後、山崎美貴子明治学院大学副学長から基本講義、こどもの城育児相談研修会の企画委員が事例報告を行った。
ニュースレターの発行	児童福祉関係者	有料 400部	第20号(7.15) 第21号(1.15) 第22号(3.15)	平成4年度から「保育所の育児相談ニュースレター」を発行してきたが、育児相談が「保育所」だけではなく、より広範に必要とされることになったため、平成10年度からは名称を新たに「子育て支援のニュースレター」と改めた。全国各地で育児センター機能が活発化してきており、具体的な資料を求める声が多く保育所や関係機関からの問い合わせが目立った。児童福祉法一部改正に伴い一層広範囲の情報が必要とされている。内容は、行政、経済界、利用者に関する情報および子育てをめぐる世界の情報、育児相談研修会の内容の概要など。主な配布先は、市長会、見学者、関係所管課。 年間講読料2,000円（郵送費、印刷代一部負担金）

❸ その他（講師派遣など）

名　称	期　間	備　考
幼児のつどい	隔月1回（8月除く）	親子のふれあいを目的とした集い。幼児と親子が対象。主催は東京都港区高輪児童館
幼児のつどい	隔月1回（8月・12月除く）	親子のふれあいを目的とした集い。幼児と親子が対象。主催は東京都港区白金児童館
家庭教育学級・乳幼児コース	6.14	「親子のふれあい・育ちあい」のテーマで乳幼児を持つ親たちにこどもの城の保育の実践例を紹介しながら講演した。高層住宅が次々と建ち、新住民が増加している地域。保育クラブへの関心も高く会員になるにはどうしたらいいかなどの質問が出された。 主催は中央区教育委員会
こどもの城に於ける保育の実際	6.29	こどもの城と保育研究開発部の事業を学生に講義。実践例をビデオで紹介したり、パネルシアターなどのワークショップを入れたりしながら進めた。大型児童館の中で行う「こども家庭支援プログラム」に学生の関心と理解が深まった。主催は玉川大学児童教育学部
パパママご一緒にすくすく子育て講座	7.8	子育ては父親母親の協力が一番という趣旨のもとに5回シリーズの中の親子遊びのプログラム。1歳児の両親20組が参加楽しんだ。主催は港区教育委員会生涯学習推進課。
今が大切触れ合い遊び	7.27	家族で楽しく豊かに子育てをするための遊びを親たちに実践例をもとに紹介。主催は川越市児童センター
子育て講演会 子育てを楽しもう	10.17	現代の子育て事情を保育の実践事例を紹介しながら講演。主催は多摩市民生委員協議会
子育て支援の研修の持ち方	11.30	児童館で行う子育て支援についての職員研修プログラムを考える。主催は千葉市児童ホーム
子育て講座 親子遊びと子育て	1.27 2.3、10	公民館で行う子育て支援。幼児を持つ親に子どもを育てる楽しさを講演。又親子遊びを2回シリーズで行った。主催は千葉市誉田公民館。
親子の運動遊び	2.25	小学生の親子を対象に運動遊び。ダイナミックな遊びなども紹介しながら親子で楽しんだ。主催は大田区教育委員会

小児保健部

平成12年度の活動

活動の概要

平成12年度も、当部は、子どもたちの健全な心身の成長・発達を支援することと、その親たちへの子育ての支援を目的に活動した。平成12年度の大きな変化は、平成11年度に参加者が増加した「赤ちゃんサロン」（0～2歳の乳幼児と親の井戸端会議の場）の会場をこれまでの2倍の広さのある4階の音楽事業部のロビーに移したこと、新たな講座として年4回「季節の離乳食」を始めたことである。

「赤ちゃんサロン」は、当日自由参加制にしているため、前もって人数の予測がつきにくい。平成11年は、140 組の参加があって会場に入りきれないことがあった。乳児を持つ母親たちが、安心して集える場所をいかに求めているかを感じさせられた。そして、運営方法を検討し、広い会場で行うことにした。

離乳食講座は、「赤ちゃんサロン」で離乳食についての質問が多いため、ちょっとした疑問を気軽に相談する場が必要と思われたからである。保健所などでも行っているが、実際に調理した食材などをみながら、自分にあったやり方をみつけてもらうことにした。とりあえず、年4回季節ごとにふさわしい食材で行うことになった。

このほか、日常的に行っている小児保健クリニックにおける診療・相談、ダウン症児親子のための「親と子のリトミック」・肥満の小学生を対象とした「健康スポーツ教室」の講座は例年どおり行われた。「マタニティ・スイミング」は、プールの改修工事のため1～3月は休止した。

年1回の催し物は、5月の「マタニティ・コンサート」では、前年に続き、絵本の朗読・上映と音楽（クラシック・ピアノ）のコラボレーションで好評であった。6月のマタニティ・スイミング同窓会」、7月の「1日ドック」も定員の9割が参加した。秋に　行われる「小児保健セミナー」は、子育て支援を行う専門職を対象にした1日の研修会だが、「子どもと家族の心を支える－カウンセリングの技法をもちいて－」というテーマを掲げた。また、ファミリーウィークの一環として行っている「赤ちゃんサロン」のイベント版「赤ちゃん大集合」は全館的な規模で行われるようになり、天候が不安定だったにも関わらず271 組の乳児親子が参加した。

平成12年は、5月の連休に「バス・ハイジャック事件」が起きてから、連鎖反応的に「17歳」の犯罪がつづき、「きれる」子どもたちが話題となった。子どもの心が健全に成長していくために社会がもっと関心を抱かなければいけないという気運が高まっている。一方、各地に「子育て支援センター」が設立されるなど、国の「エンゼルプラン」による子育て支援活動が盛んになっている。子どもの健全な育成のために、乳幼児期からの親子への支援にどう取り組んだらよいかは、これからそれぞれの地域で経験を重ね、練り上げていく課題であろう。

厚生省と労働省が統合されたが、女性の社会進出や自己実現の願望と子どもの健全な成長とをどう両立させていくかということも、これからの社会全体の方向性を見据えながら考えていかねばならないテーマであろう。

【小児保健クリニック月別診療・相談件数（初診・再診内訳）】（表1）

（件）

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
診療		65	60	65	85	53	72	63	75	68	59	68	86	819
健康診査（公費）		11	18	6	11	16	14	4	11	16	9	12	11	139
健康診査（自費）		2	4	33	5	6	4	4	8	2	7	2	3	80
育児健康相談		1	0	1	2	2	0	1	0	0	1	1	0	9
心理相談		119	118	117	119	131	109	113	96	111	81	79	97	1290
ダウン症療育相談		7	7	9	9	8	8	11	8	11	9	10	7	104
合計		205	207	231	231	216	207	196	198	208	166	172	204	2441
内訳	初診（新規）	7	7	9	9	8	8	11	8	11	9	10	7	104
	再診	205	207	231	231	216	207	196	198	208	166	172	204	2441

【小児保健クリニック新規来所者の居住地域内訳】（表2）

居住地域	渋谷区	世田谷区	港区	目黒区	その他23区	市部部	計	神奈川県	埼玉県	千葉県	その他	計	合計
人 (%)	78 (26.5)	23 (7.8)	24 (8.2)	10 (3.4)	75 (25.5)	28 (9.5)	238 (80.9)	22 (7.5)	20 (6.8)	5 (21.7)	9 (3.1)	56 (19.1)	294 (100)

【小児保健クリニック初回来所時の年齢内訳】（表3）

年齢	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12～17歳	18歳以上	合計
人 (%)	59 (20.0)	42 (14.3)	30 (10.2)	21 (7.1)	25 (8.6)	28 (9.5)	13 (4.4)	19 (6.5)	12 (4.1)	12 (4.1)	8 (2.7)	7 (2.4)	13 (4.4)	5 (1.7)	294 (100)

❷ 診療・相談活動

小児保健クリニックは、子どもの心や体の健康・発達について予約制で診療・相談を受けられる小児科の診療所（保険診療機関）である。小児科医をはじめ、保健婦・看護婦・管理栄養士・臨床心理士等が連携し、心身両面から関われるような体制をとっている。医師の診療は健康保険が適用されるが、初診では1時間をとって、親の話をよく聴き、背景にある子どもの生活や親子関係を理解するようつとめている。現在では小児科診療のなかで小児精神科（週1回）・小児耳鼻科（月1回）も受診できるようになっている。必要があれば、栄養相談・血液検査などのほか、相談料（担当者一人につき1時間5千円）で心理相談・発達相談が受けられる。また、乳幼児健康診査機関にも指定されている。

平成12年度も、非常勤の医師が交代で勤務する体制を継続している。月別診療・相談件数は、表1の通りである。平成11年と比べると、診療・相談の総件数で2441件から2553件に112件（4.6%）、新規来所件数も294件から316件と22件（7.0%）増加している。平成10年度にほぼ近い数字であり、ここ数年総件数では2,500件前後、新規来所者数では300件前後にあるといってよいであろう。なかでも、健康診査（公費）と健康診断（自費）は、計219件が169件にと50件（29.6%）減っているが、これも平成11年度がかなり高い件数であり、平成10年度の状態に近くなったといえよう。診療（健康保険適用）は、819件から1045件に226件（27.6%）と増えているが、これは小児精神科で継続的に服薬する人が増えたためであろう。育児健康相談（医師による健康保険適用外の相談）は9件から13件への微増、ダウン症療育相談は104

【新規来所者の診療・相談内容別内訳】（表4）

	内容	件（%）
発達についての相談	言語発達遅滞（疑いも含む）	33(11.2)
	ダウン症、その他先天異常	8(2.8)
	精神・運動発達遅滞（疑いも含む）	33(11.2)
	学習障害・注意欠陥／多動性障害等	8(2.8)
	自閉症・自閉的傾向	33(11.2)
	小計	8(2.8)
情緒・行動面の相談	情緒障害・情緒不安	33(11.2)
	育児不安（夜泣き・指しゃぶりなど）	8(2.8)
	不登園・不登校	33(11.2)
	集団不適応	8(2.8)
	神経症（強迫神経症・恐怖症など）	33(11.2)
	その他（かん黙症など）	8(2.8)
	小計	33(11.2)
身体的・心身症的な相談	肥満・肥満と心理面の問題	8(2.8)
	夜尿症・遺ふん・ひん尿など	33(11.2)
	アレルギー疾患・湿疹・ぜんそくなど	8(2.8)
	その他身体面（低身長・股関節脱臼疑いなど）	33(11.2)
	その他心身症（脱毛・チック・吃音など）	8(2.8)
	小計	33(11.2)
合計		8(2.8)
健康診断（乳幼児健康診査を含む）		33(11.2)
総計		8(2.8)

件から101件への僅かな減少であるが、横這いと考えてよいだろう。心理・発達相談は、1290件から1225件に75件（5.8%）の減少となっているが、心理相談員が講座の運営に携わる必要が生じたなどの内部の理由によっている。（表1，2）表2は、新規来所者の居住地域別内訳だが、東京都が8割弱、他地域が2割強という割合は変わりない。地元の渋谷区は割合としては昨年度とほとんど変わらないが、乳幼児健康診査の利用は定着してきている。（表3，4）表3の初回来所時の年齢内訳は、5歳以下の乳幼児の受診が今回は比較的多かった。表4は、診療・相談内容別の内訳であり、健康診査・健康診断だけで今回も115件（36%）になっている。発達の相談が割合としては計で72（24.5%）から69（21.%）にわずか減少、「学習障害・注意欠陥多動性障害」の受診は昨年並に16件多い。精神科医により「注意欠陥多動性障害」かどうかという診断も可能になり、服薬を続けている子どももいる。情緒・行動面の相談は、40（13.7%）から58（18.4%）に増加し、情緒障害・情緒不安・神経症・（親の）育児不安などが増えている。身体的・心身症的な相談は、63（21.4%）から74（23．4%）と増加し、特に肥満が19件から38件へと増えている。肥満の子どもは増加しているといわれるが、マスコミでも報道され、健康教室への入会希望者も多く、ますます現代社会の一面を表す現象となりつつある。

乳児保健審査風景

また、マスコミの影響もあって、「学校で落ち着かない」「キレル子どもにならないか」「学習障害ではないか」などの理由で受診する親子も目立っている。実際には、「注意欠陥多動性障害」や「学習障害」ではなく、親子関係や家庭環境に起因する問題である場合もある。小さい時からの子育てが、どこか、子どもの発達に応じた働きかけからずれている、といったケースもみられる。親が高学歴や専門職であったり、社会的には恵まれた層である場合にもしばしばそのようなことが起きている。子どもに向かいあう、やわらかく暖かく、しかししっかり判断力を持った親の心を育てていくことも、これから大きな課題なのではないかと考えさせられる。

❸ 講座など集団で行う活動

冒頭で述べたように、毎年続けて行っている講座等の活動の中では、赤ちゃんサロンを広い場所に移すことが必要になり、平成12年度からは4階の音楽ロビーで行うことになった。時間帯が、12時半の一般開館時間に合わせて始まり、2時までの1時間半となり、これまでより30分短くなったが、平均して70～80組が参加し、時に100組以上になっても場所的には余裕を持って対応することができるようなった。初期の頃にくらべると、スタッフと参加者の密なかかわりよりも、母親同士がインターネットで情報を交換しあい、ここで初めて出会うなど、新しい形の出会いの場・気分転換の場になってきている印象もある。

また、サロンのあとに、同じ場所で音楽事業部の演奏があり、場面を転換させるため、一度参加者に退場していただき、後片付けをしなければならない点が考慮を要する。しかし、音楽事業部の乳幼児向けライブ演奏の時間をはじめ、他の活動部門に自然に親子が立ち寄って帰るようになり、結果的に館内全体で乳幼児を受け入れる方法を考える方向にむかっている。

新しく始めた季節の離乳食は、参加者を「赤ちゃんサロン」や「こどもの城ニュース」などで募っている。乳児は日々成長し、離乳食の悩みも月齢により大きく変化するので、3ヵ月ごとの講習会は広報に難しさがある。平成13年度の春・夏・秋の3回は、まだ知られていないこともあり、定員10組（欠席を見込んで15組募集）のところ、毎回数組で終わった。しかし、4回目の冬になると15組が参加し、母親たちから活発に質問が出ていた。

その他、診療・相談の所でも述べたように、健康スポーツ教室<太りすぎクラス>は、かなりの肥満の子どもが多く参加し、定員をこえる盛況となっている。学校では、運動も苦手で友だちとうまく遊べない子どもたちも、ここでは毎週、友だちができて楽しく運動をしている。父親の送迎も多く、今回は、親子で外を歩くプログラムも盛り込んでみが、好評であった。

秋の、ファミリー・ウィーク「赤ちゃん大集合」は、全館行事として、研修室で「アカちゃんサロン」、地下

の体育事業部での「すくすく親子体操」や4階音楽事業部の「パチパチスペシャル」などを中心に、2歳0ヵ月までの乳幼児と親が楽しめるようなイベントとして行われた。年々大きくなり、今回は8階の研修室の広いスペースに「情報・展示コーナー」を設け、乳幼児向けの用品を販売している企業や子育て援助関係の諸団体が参加した。当日朝まで雨がふっていたにも関わらず、多くの親子が参加して、1日をすごしていた。

「マタニティ・スイミング」は、平成13年1月から3月までは、プールの改修工事のため休止したが、その後再開している。「マタニティ・コンサート」「マタニティ・スイミング同窓会」と合わせて、妊娠期からの子育ての支援事業として定着し、これから子どもを持つ母親たちに〔こどもの城〕を知ってもらうきっかけともなっている。

親と子のリトミック〈ダウン症クラス〉は、少人数ながらも、わきあいあいとした雰囲気で、親と子のふれあいを楽しむ時間となって、継続している。

❹ 研修会などの啓発活動

年1回秋に行われている「小児保健セミナー」は、「子どもと家族の心を支える――カウンセリングの技法を用いて――」というテーマで、「子育て支援」に取り組んでいる保健所・保育園・児童館の職員を対象にした。まず、「家族支援のありかた」として、長年コミュニケーション障害の子どもと親の指導に携わってきた立場から、親を主体に親子の間の情緒を大切に支援していくことが大切だという講義があった。このあと、カウンセリングを専門にしている講師より、具体的に親子の援助をしていく時に必要なカウンセリングの心構えと技法について、次に子どもの内面に沿ったかかわりをしていくにはどうしたら良いかといった「子どものうちなる現実にふれる」というワーク（実技）が行われた。

このほか、恒例になっている「小児肥満のための指導者講習会」は今年も1日コースと2日コースが開催された。これまでにくらべ、参加希望者の数は減少しているが、「小児肥満」についての知識が浸透してきたためであろう。今年度は、参加者同士の情報交換・交流をはかる話し会いの時間も持たれた。各地域での苦労話などが披露されて、充実した時間となっていた。

平成12年度も、「動くこどもの城」や「講師派遣」などで、個々の専門職が乳幼児の親の「子育て支援」活動やそれに携わる職員への研修活動に出向いた。講師派遣事業では子どもの食生活や食育、生活習慣病に関する講義（管理栄養士）、乳幼児・小学生の親を対象にした子どもの発達や親の接し方についての講義（臨床心理士）、乳幼児やその保育における健康管理についての講義（看護婦）などの依頼が多かった。

このほか、「小児保健部研究生」として、平成12年度は心理相談の研修生8名、卒業論文を作成する研究生5名を受入れ、登録した。心理相談の研修生は、これから子どもの心理臨床活動に携わる若い人々を育てる意味がある。現場の相談活動に実際に触れるところから、多くを学んで巣立っている。卒業論文には、「障害児保育の拡充とその地域格差および就学指導について」「乾布摩擦に関する研究」「子どもの事故について」「乳幼児健康診断における現代の母親の相談内容の分析」「子どもの発達相談について」がテーマとして取り上げられ、特に最後の2つは、小児保健クリニックでの健診・相談の内

親と子のリトミック（ダウン症クラス）

容がまとめられた。

❺研究活動・その他の活動

平成12年度に行った学会報告は、「幼児の生活習慣と健康に関する研究――肥満との関係――」（第47回日本小児保健学会）、「『集団不適応』を主訴に小児科を受診した子どもの実態と対応」（第41回日本児童青年精神医学会）、「研修事例報告：依存の欲求、分離の不安、呑みこまれる恐怖のなかで揺れ動いた女児の遊戯療法課程」（第46回日本精神分析学会）の3件であり、当部の職員がかかわった調査の結果と、診療・相談活動の中からまとめたものを発表した。

❻まとめ

診療・相談活動では、「学校で落ち着きがない」「学習障害ではないか」などの主訴で、受診する例が増えている。診療の件数が増加しているが、注意欠陥多動性障害などで小児精神科に継続してかかる例が増えていることが影響しているのであろう。「17歳の犯罪」が報じられることが多く、子どもが健全に育っていくためにどうしたらよいのか、社会も真剣に考えようとし始めている。神経学的な障害に対処することも必要だが、子どもの食事や睡眠、人とのコミュニケーションといった生活の基本から、都会的で便利な現代風の生活のなかでは、子どものためよりも親の願望が優先している傾向がでてきている。今後、妊娠期からの「子育ての支援」により親を支えつつ、子どもの健全な育ちを守っていくことが、ますます大きな課題になってくるであろう。平成12年度は、「赤ちゃんサロン」の場所を移動し、より大人数の場合でも対処できるようにしたり、「季節の離乳食」講座を始めた。これからも、時代の動きを見すえながら、小児保健部としてできることを考えて行きたい。

小児肥満の指導者講習会

季節の離乳食

平成12年度活動一覧表

一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
診療・相談 小児科診療 育児・健康相談 乳幼児健診 健康診断 栄養相談 ※専門相談 心理相談 発達相談 ダウン症療育相談	月曜日を除く毎日 9:30～17:00 日曜日・金曜日（各月1回）	診療・相談はすべて予約制である。小児保健部の小児科医師・看護婦・保健婦・臨床心理士・管理栄養士が診療・相談を行う（週1回小児精神科・月1回小児耳鼻科を含む）。小児科医師の診療には、原則として健康保険が適用される。健康保険が適用されない相談もある。（育児・健康相談は相談料1回5,000円、心理・発達相談は担当者1人の場合1回50分5,000円、医師を通さない場合の初回相談料7,000円、専門相談のダウン症療育相談は、相談料8,000円である。） 専門医が担当。
赤ちゃんサロン	月2回火曜日（原則） 12:30～14:00	対象は0～2歳までの子どもとその親、あるいは妊婦。入館料対応。参加者同士の自由な交流（井戸端会議）の場で、育児情報の交換や、医師・保健婦・栄養士・臨床心理士による育児相談が行われる。本年度は延べ2,530人が参加した。
第15回マタニティ・コンサート	5.14	妊娠によって生活に制約を受けがちな妊婦に、楽しくリラックスできるひとときをすごしてもらい、出産を迎えようという主旨のコンサート。絵本のスライド上映と朗読に、クラシック・ピアノ(竹村浄子）の演奏を合わせて行うコラボレーション。このほか、市川英子助産婦の呼吸法の指導、野末源一医師（山王病院産婦人科）と巷野悟郎こどもの城小児保健部顧問のメディカル・トークを行った。285人参加。
第8回マタニティ・スイミング同窓会	6.7 13:30～15:00	乳児（2歳未満）のいる、マタニティ・スイミングの卒業生（母親）を対象とした同窓会。小児科医のトークや体育事業部の親子体操を楽しみ、久しぶりに会った仲間と子育てについて語り合い、懇親を深めた。44組88人が参加。

〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
〈夏休み〉 こども一日ドック	7.26 12:00～17:30	対象は小学生と中学生。体育事業部との共同事業。医師による診察、検査（尿、血圧測定）、身体計測、生活習慣調査、食生活調査、心理検査、体力測定の結果に基づいた診断・指導。受診者は9人
〈ファミリーウィーク〉 赤ちゃん大集合～赤ちゃんサロンスペシャル	11.1 10:30～15:00	「赤ちゃんサロン」のイベント版だが、小児保健部主催の会場での「小児科医トーク」「井戸端会議」や「親子遊び」のほか、体育室での「親子体操」、音楽ロビーでの「音楽遊び」、育児用品や育児情報の展示コーナー、プレイホールの「みんなのにこにこ広場」など、全館を使って行われた。参加者は271人(542組) と不安定な天候にもかかわらず盛況であった。

❷ 講座・クラブ

〈平常期間〉

名　称	対象・定員	受講数	日曜・日時	備　考
健康スポーツ教室 〈太りすぎクラス〉 第17期	(組) 小学生1～6年の太りすぎ児童とその親 (20)	(組) ①17 ②21 ③21	土曜日14:00～17:00 〃 〃	体育事業部との協力事業。太りすぎの改善のために医学指導（東京女子医科大学第二病院小児科医）・栄養指導（和洋女子大学家政学部栄養学助教授・講師）・体育指導（水泳と体育を交互に）を行う。親向けレクチャー（数回)、親子で屋外活動（年1回）なども実施。

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　考
マタニティ・スイミング	(人) 妊娠16週以降の妊婦 (35)	(人) 4.29 5.28 6.30 7.31 8.21 9.23 10.19 11.14 12.11 1.0 2.0 3.0	水泳（火曜日・木曜日月7回） 10:00～12:00	体育事業部との協力事業。水泳という活動を通して、妊娠中を心身ともに健康に過ごすことをねらっている。水泳の前後の検診担当に、日本赤十字社医療センター産科医師、助産婦。 平成13年1～3月は、プール改修工事のため休止。
母と子のリトミック〈ダウン症クラス〉第17期	(組) 3～5歳のダウン症児とその親 (15)	(組) ①10 ② 9 ③ 7	木曜日14:30～15:30 〃 〃	音楽事業部との協力事業。リトミック活動を利用し、子どもたちが親やスタッフとリラックスして一緒に活動する中で、自分の気持ちを表現できることをねらっている。講師は音楽事業部吉村温子。
季節の離乳食	(組) 5～8カ月の乳児とその親 (10)	(組) 春6 夏3 秋4 冬15	年4回 木曜日13:30～14:30	管理栄養士が担当。離乳食の作り方・与え方に悩む母親たちに、実際に調理した食材などを見せながら、ちょっとした工夫でできる調理法などを紹介。小児保健部プレイルームで行う。

〈講習会等〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　考
小児肥満のための指導者講習会（第28回）	(人) 養護教諭、栄養士、保健婦、保育士など (50)	(人) 21	7.13, 14 10:00～17:00	平成12年度は2日コースを2回行った。全国から肥満児の指導について学習したい養護教諭・栄養士らが集まった。 内容は「肥満の判定と指導」村田光範東京女子医科大学名誉教授、「肥満改善のための食事・栄養指導」坂本元子和洋女子大学教授、「肥満児の運動指導・実技紹介」羽崎泰男こどもの城体育事業部長・山崎綾子同指導員、「肥満児の理解と心理的対応」井口由子こどもの城小児保健部長。参加者数は少なかったが、その分交流会ができて互いの実践の情報交換の機会となった。
小児肥満のための指導者講習会（第29回）	養護教諭、栄養士、保健婦、保育士など (50)	30	3.2, 3 10:00～17:00	内容は「肥満の判定と指導」村田光範東京女子医科大学名誉教授、「肥満改善のための食事・栄養指導」坂本元子和洋女子大学教授、「肥満児の運動指導・実技紹介」羽崎泰男こどもの城体育事業部長・山崎綾子同指導員、「肥満児の理解と心理的対応」井口由子こどもの城小児保健部長。最後にグループに分かれて、互いの実践を確かめあったり疑問を話しあったりした。
第15回小児保健セミナー「子どもと家族の心を支える－カウンセリングの技法をもちいて－」	保育士・保健婦・養護教諭・児童館職員など子育て支援の専門家 (100)	98	10, 21 10:00～17:00	家族をどう支援していったらよいのかをテーマに行った。まず総論として「家族支援のあり方」を田中美郷帝京大学名誉教授（田中美郷教育研究所長）に講義していただいた。続いて「カウンセリング技法について」の題で、親子の間のコミュニケーションのあり方について諸富祥彦千葉大学教育学部助教授に、最後に「ワーク：子どもの内なる現実に触れる」として子どもの自己の核心に触れる関係の持ち方を清水幹夫千葉大学教育学部教授に、実技も含めて話していただいた。

❸ その他（動くこどもの城）

名　称	期　間	備　考
神奈川県藤沢市教育委員会「相談指導教室・いじめなんでも相談ふじさわ」	5.25　6.22　7.22 8.24　10.26　11.16 2.22	不登校の児童・生徒の相談・指導にあたっている教職員の研修会に、定期的に臨床心理士が出向いて、助言・指導を行った。
岐阜県養老町立保育研究会園長会「保護者への対応とコミュニケーションのとり方」	6.17	保育園職員の研修会で、保護者への対応の仕方について臨床心理士が講義を行った。
神奈川県藤沢市辻堂公民館乳幼児課程教育学級「子どもを事故から防ぐ備えについて」	7.1	公民館で、乳幼児を育てている保護者に対し、看護婦が事故予防の備えや心がけと、救急手当の実際について、実技を含めて講義を行った。
埼玉県浦和市母親大会「やりなおせる子育て」	9.10	埼玉県浦和市（当時）の母親や女性教師の集まる大会で、臨床心理士が子育てについて講義を行った。
〈動くこどもの城〉お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	9.19	東京都調布市染地児童館での乳幼児親子向けの体育のプログラムに、臨床心理士が同行。保護者向けに親子関係・発達などの観点からトークを行ったほか、午後は調布市文化会館で、保育士はじめ子育て支援の専門家対象に研修を行った。
東京都中野区塔山児童館健全育成講座「親子のコミュニケーション」	9.30	児童館主催の保護者向け講演会で、臨床心理士が講師として出向き、親子のコミュニケーションの持ち方について、実技を通して体験してもらった。
〈動くこどもの城〉「お母さんと赤ちゃんのすくすく体操」	10.6	静岡県富士市保健女性センターでの、親子向けの体育のプログラムに臨床心理士が同行。乳幼児の親向けに親子関係・発達などの側面から助言を行ったほか、保健婦等の指導者に研修会を持った。
静岡県下田市伊豆健康福祉センター　こどものための生活習慣病予防研修会「生活習慣病と肥満・子どもの食生活」	10.12	母子保健担当職員（保健婦・栄養士）や保育士・養護教諭対象に、管理栄養士が子どもの生活習慣病や肥満、子どもの食生活について講義を行った。
〈動くこどもの城〉「お母さんと赤ちゃんのすくすく体操」	11.7	大阪府摂津市地域子育て支援センターでの親子向けの体育のプログラムに管理栄養士が同行。「赤ちゃんサロン」のように、親同士の交流の場に援助者が加わって相談ができるようにする方法を実際に行い、助言した。午後は職員への研修を行った。
〈動くこどもの城〉「お母さんと赤ちゃんのすくすく体操」	11.8	大阪府大東市立子育て支援センターでの親子向けの体育のプログラムに管理栄養士が同行。「赤ちゃんサロン」のように、親同士の交流の場に援助者が加わって相談ができるようにする方法を実際に行い、助言した。午後は職員への研修を行った。
東京都港区教育委員会家庭教育学級「広げよう手をつなごう子育て仲間」	11.30	２歳の子どもを持つ親が子育てについてグループで話しあう場に臨床心理士が参加して、講義や助言を行った。
東京都大田区南馬込児童館「子どものサインをどうとらえるか」	12.2 1.23	児童館の親向けの子育て講座、１回目は小学生の、２回目は乳幼児について、子どもの表情や行動に現れるサインをどう受けとめるか、臨床心理士が講義を行った。
〈動くこどもの城〉「お母さんと赤ちゃんのすくすく体操」	2.6	埼玉県入間郡三芳町児童館での親子向けの体育のプログラムに臨床心理士が同行。「赤ちゃんサロン」のように、親同士の交流の場に援助者が加わって相談ができるようにする方法を実際に行い、助言した。午後は職員への研修を行った。
〈動くこどもの城〉「お母さんと赤ちゃんのすくすく体操」	2.13	愛知県安城市子育て支援センターでの親子向けの体育のプログラムに臨床心理士が同行。「赤ちゃんサロン」のように、親同士の交流の場に援助者が加わって相談ができるようにする方法を実際に行い、助言した。午後は職員への研修を行った。
東京都大田区保育課職員研修「乳児の発達と保育」	3.13	保育所で乳児保育を開始するにあたり、その健康管理上の留意点等について、看護婦が出向き、講義を行った。

企画研修部

平成12年度の活動

企画研修部は、「企画部門」と「研修部門」の2つで担当を分けて業務を行っている。

企画部門では、事業全般にかかわる企画調整のほか、グループ活動・チャリティ事業・こどもの城友の会の運営、外部関連団体との協同事業・展示やワークショップなど家族で楽しめる催し・子育て支援のための催しなどを行った。

また、国庫補助事業「動くこどもの城」の事務局、全国の児童館などの情報の収集、インターネットを利用したホームページの運営、助成金事業のとりまとめなどを行った（詳細別項）。

研修部門では、ボランティアの養成と日常活動のコーディネイトの他に、夏休み・春休みの野外活動の企画運営、児童厚生員などを対象とした実技指導講習会などの企画運営に当たった。

❶ 事業全般にかかわる企画調整

(ア) 事業全体のとりまとめ

助成金事業・センター機能の充実など、企画研修部がとりまとめている事業は何本もあるが、従来からの大切な業務は、〔こどもの城〕の活動エリア（館内）の事業を調整することである。今年はこれらの柱が複数ある中で、〔こどもの城〕が開館以来行ってきた事業をもう一度見直し、事業部全体でまとめていく年として、企画研修部も本来の調整機能を果たすべく尽力した。

今年は、「子どもたち自身に体験を通じて個々の力を再認識してもらい、その潜在的なものを伸ばす」というテーマを設け、このコンセプトに沿って且つ各部の特徴が明確となるように各部で事業計画を立ててもらうよう調整した。

入館者増のための対策の一つとして、地域の小学校・幼稚園・保育所などとの連携を図った。春休みに渋谷・港・目黒・世田谷の4区の新1年生を招待。また、年間をとおして、渋谷・港2区の小学校開校記念日に全児童を招待。

PRとしては、ゴールデンウィークに渋谷・港2区の小学校、幼稚園、保育所にチラシを送付。夏休みには23区と三鷹・武蔵野市の小学校にチラシを送付、児童館にはチラシに添えて優待券を送付した。

期間の長い夏休みに繰り返し〔こどもの城〕に遊びに来てもらえるよう昨年新設した「夏休みフリーパス」は、おとな143枚・子ども139枚、合計282枚の売り上げがあった。

(イ) グループ活動

グループ活動の受け入れ件数は、121件2,924人と件数、利用者ともに過去最高の利用となった。単に本年度の利用が多かっただけでなく、ここ数年は年間100件以上の利用が継続的にあり、件数的には満足出来る数字が得られていると考えられる。しかし2月、3月の年度末への利用の集中と、養護学校、保育所、幼稚園といった低年齢層が利用の大半を占める状態にあまり変化はない。

今後2002年から始まる新学習指導要領に盛り込まれている「総合的な学習」に対する対応や、学校の完全週5日制の影響がどのような形で表れるかはっきりしないが、本年も小学生への対応という課題は引き続き持ち越された結果となった。

(ウ) 動くこどもの城

詳細は、別項で記述。(145頁)

(エ) チャリティ事業

チャリティー事業は企業や団体のサポートを受けて、養護施設の児童、母子寮の親子、障害児(者)グループ、社会福祉協議会のボランティアの人たちを〔こどもの城〕での劇場公演や各種の催しに招待し、楽しいひとときを過ごしてもらう事業である。開館当初は劇場での演劇公演を中心とした招待であったが、その後、子ども向きの催しへの招待と趣向を変えた。しかし、団体や企業の善意に頼っているこの事業は、今日の経済情勢のもとでは財政的に厳しい状況にある。今後は団体や企業のサポートがなくても、〔こどもの城〕の日常的な活動のなかに招待するような形で継続できるような方法を考えていきたい。

(オ) こどもの城友の会

「こどもの城友の会」は家族単位で入会してもらい、〔こどもの城〕の施設を積極的に利用し、様々な催しに参加してもらう会員組織で、本年も別表にあるような一般の催しへの優待や会独自の催しを行ってきた。「こどもの城友の会」会員のための独自の会報「こどもの城友の会通信」は今年12号発行し、2001年3月で通巻48号の発行となった。毎回会員から意見がよせられてきている。この他「こどもの城ニュース」(年11回)、講座募集や催しの案内などを会員あてにダイレクトメールを発送した。友の会独自の催しでは、会員から要望の多い「ファミリーキャンプ」を6月に芦ケ久保・横瀬キャンプ場で、秋には恒例の「ファミリーハイキング」を昭和記念公園で行った。キャンプやハイキングだけでなく、幅広い年齢層の会員が楽しめ、交流を図ることの出来る催しをこれからも企画し、こうした事業を通して得られる家族の要望を他の事業にも反映していきたい。

会員数は約2000件で年々減少傾向にある。「友の会」は〔こどもの城〕の事業のよき理解者であるだけでなく、モニター的機能を持ち、一般客に対するPRを担い、集客効果のある大切な組織である。今後さまざまな対策を検討したい。

❷特別期間などに実施した事業

昨年までに引き続き、特別期間などにギャラリーや青山円形劇場などを使って、外部との提携事業などを積極的に行った。

(ア) 国連新しい世紀　子どもの願い展(ゴールデンウィーク)

国際交流の欄に別掲。

(イ) こどもフェスティバル(ゴールデンウィーク)

来館者の多いゴールデンウィークに、家族そろって、劇場で気軽に楽しめる質の高い催しとして、毎年実施している。「劇団あとむ」、「ロバの音楽座」の2公演は、(財)児童健全育成推進財団の優良巡回劇事業としておこなった。また「ガドガド」は、〔こどもの城〕音楽事業部スタッフと〔こどもの城〕の活動に協力してくれているミュージシャンがメンバー。日常の音楽ロビー活動を基盤に構成したコンサートで、そのタイトル「おんがくがスキ!」のとおり、大人も子どもも「音楽が好き」になって楽しんでいた。この「ガドガド」の活動は外部からの評価も高く、「動くこどもの城」のほか、派遣の要請も多い。

(ウ) 第6回人形劇カーニバル(夏休み)

毎年テーマを設定し、それにそった作品をプロの人形劇団に上演してもらっている。今年のテーマは「たくさんの『!』〜表現から感動へ〜」。劇団や演目によって人形の素材・使い方・ストーリーなどが異なるものの、それらを通してどれだけ観客に感動を与え、どれだけの「!」を引き出せるか、人形劇団の挑戦ともなるテーマ。出演は、エツコ・ワールド、人形劇団テアトロ天気、あ・ぶ・ぶ@人形劇場、パペットBOX、れもん座、クレヨンカンパニー、人形劇・木ぐつの木、糸あやつり人形劇団みのむし、高津人形座、の9劇団が参加した。

また、クレヨンカンパニーの指導・協力で、紙コップを使ったワークショップ「歩く小人の指人形」を期間中に開催。「人形劇」のワークショップなので作って終わりにせず、作ったあとに即興で人形劇遊びができる工夫をした。

企画研修部

平成12年度の活動

企画研修部は、「企画部門」と「研修部門」の2つで担当を分けて業務を行っている。

企画部門では、事業全般にかかわる企画調整のほか、グループ活動・チャリティ事業・こどもの城友の会の運営、外部関連団体との協同事業・展示やワークショップなど家族で楽しめる催し・子育て支援のための催しなどを行った。

また、国庫補助事業「動くこどもの城」の事務局、全国の児童館などの情報の収集、インターネットを利用したホームページの運営、助成金事業のとりまとめなどを行った（詳細別項）。

研修部門では、ボランティアの養成と日常活動のコーディネイトの他に、夏休み・春休みの野外活動の企画運営、児童厚生員などを対象とした実技指導講習会などの企画運営に当たった。

❶ 事業全般にかかわる企画調整

(ア) 事業全体のとりまとめ

助成金事業・センター機能の充実など、企画研修部がとりまとめている事業は何本もあるが、従来からの大切な業務は、〔こどもの城〕の活動エリア（館内）の事業を調整することである。今年はこれらの柱が複数ある中で、〔こどもの城〕が開館以来行ってきた事業をもう一度見直し、事業部全体でまとめていく年として、企画研修部も本来の調整機能を果たすべく尽力した。

今年は、「子どもたち自身に体験を通じて個々の力を再認識してもらい、その潜在的なものを伸ばす」というテーマを設け、このコンセプトに沿って且つ各部の特徴が明確となるように各部で事業計画を立ててもらうよう調整した。

入館者増のための対策の一つとして、地域の小学校・幼稚園・保育所などとの連携を図った。春休みに渋谷・港・目黒・世田谷の4区の新1年生を招待。また、年間をとおして、渋谷・港2区の小学校開校記念日に全児童を招待。

PRとしては、ゴールデンウィークに渋谷・港2区の小学校、幼稚園、保育所にチラシを送付。夏休みには23区と三鷹・武蔵野市の小学校にチラシを送付、児童館にはチラシに添えて優待券を送付した。

期間の長い夏休みに繰り返し〔こどもの城〕に遊びに来てもらえるよう昨年新設した「夏休みフリーパス」は、おとな143枚・子ども139枚、合計282枚の売り上げがあった。

(イ) グループ活動

グループ活動の受け入れ件数は、121件2,924人と件数、利用者ともに過去最高の利用となった。単に本年度の利用が多かっただけでなく、ここ数年は年間100件以上の利用が継続的にあり、件数的には満足出来る数字が得られていると考えられる。しかし2月、3月の年度末への利用の集中と、養護学校、保育所、幼稚園といった低年齢層が利用の大半を占める状態にあまり変化はない。

(エ) 感覚体験「見て、聴いて、さわって遊ぼう！」(夏休み)

〔こどもの城〕には科学をテーマにした専門のエリアがないので、昨年より、夏休みの機会を使って科学遊びの導入的なプログラムに挑戦した。今年のテーマは五感と科学遊び。〔こどもの城〕は科学館ではないので、専門的な知識を得ることよりも、実際に触れて遊べる遊具を配置し、子どもたちがそのテーマに興味をもってくれるような設定を工夫した。科学を専門としない職員が手作りで制作した〔こどもの城〕風科学遊具は、温かみはあるが、耐久性や質に課題が残った。

(オ) 子育てママの悠遊タイム（ファミリーウィーク）

今年で3回目になるプログラム。子育てに追われる母親に、子育てから少しだけ離れてホッとする空間を提供することを目的とした催し。家族で参加してもらい、母親はゲストを交えたトークやワークショップ、茶話会を楽しみ、父親と子どもたちは、保育研究開発部のスタッフと一緒に親子遊びに参加。

家族全員で集合した後、父親と子どもたちは保育スタッフと保育室に移動して、親子遊びのプログラム。パネルシアターや簡単クラフト、体を使って父親とスキンシップしながらの運動遊び、おやつなどの内容。母親は、自身も8か月（当時）のお子さんを持つ、フラワーショップfam経営の鈴木友子さんをゲストに、簡単なフラワーアレンジメントを体験。

父親の積極的な参加という意味でも、〔こどもの城〕にとっても新しい子育て支援プログラムとなり、今後も継続して実施して行きたいと考えている。

(カ) 第7回おりがみカーニバル（ファミリーウィーク）

昔から手から手へ受け継がれ、子どもからお年寄りまで誰もが幅広く楽しめる折紙。折紙作品の展示とワークショップを、今年も〔こどもの城〕開館記念特別期間「ファミリーウィーク」に実施した。日本折紙協会との共催事業。今年のテーマは「家族」。全国からこの催しのために応募された折紙作品、ミニチュア折紙作品のほか、大型のパノラマ作品を展示。単に折紙作品を楽しむだけでなく、折る楽しさ・飾る楽しさを紹介できた。ワークショップでは動物の親子を折って遊んだ。また、今年は「家族」をテーマにした折紙パノラマ作品の応募を全国の児童館に呼びかけ、〔こどもの城〕を含め全23館が出品。〔こどもの城〕での展示後に巡回展示をした。(詳しくは「動くこどもの城」の項参照)

関連事業として、9月15日に「敬老の日特別イベント・おりがみのたより」をフリーホールで実施した。

(キ) 凧づくりのワークショップ（冬休み）

日本の伝統的な行事が行われる事の多い年末年始の時期に、〔こどもの城〕でも、伝統的な遊びの文化を伝えるために、毎年さまざまな催しを実施している。通常は展示スペースとして使用するギャラリーでは、今年は「凧づくりのワークショップ」のみを行った。入口付近のスペースは「エイ凧」づくり。奥のコーナーでは定員制の「立体飛行機凧」づくりを実施した。

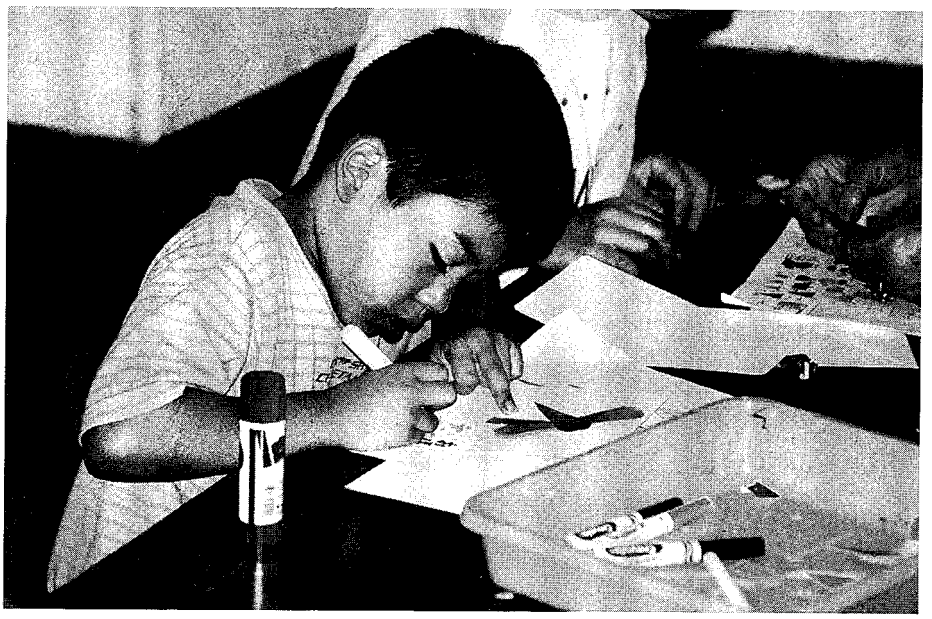
(ク) ニッサンゆかいな絵本と童話展「まぜ・こぜ・ことバザール」(春休み)

「第16回ニッサン童話と絵本のグランプリ」で入賞した作品の原画、イラストレーターのはらだゆうこさんの作品、国際アンデルセン賞受賞作家の絵本などを展示した。例年、クラフト系のワークショップを実施しており、今年は「みんなで作ろう－ことば遊びのタペストリー」というタイトルで行った。「にこにこ」「ぷんぷん」など顔の表情＝「顔のことば」に注目し、紙を使った貼り絵で表現。さらに1人1人の作品を大きな横断幕に貼り込んでいき、タペストリーに仕上げる。それをギャラリーの2階手すりから来館者に見えるように下げて飾った。アトリウムからの眺望が遊び場らしく賑やかになったので、期間終了後（平成13年4月）もしばらく飾ることとなった。

また、平常期間にも以下のようにな外部との提携事業を行った。

(ア) ハロー・ディア・エネミー！国際絵本展

ミュンヘン国際青少年図書館が企画したもので、日本各地で巡回展をおこなっている、絵本を通じて「平和」を考える絵本展。図書館などでの開催が多い中、遊び場である〔こどもの城〕として効果的な展示方法を考え、絵本は表紙が見えて手にとりやすいようにした。日本語以外の言語の作品が多く、せっかくの作品が十分に楽しめないので、〔こどもの城〕内外のボランティアの協力で土・日には展示作品中の絵本の読み語りや、関連作品の人形劇、パネルシアターなどをおこなった。講談社からの協力で、ちょうどこの時期に邦訳が出た「ねことね



おりがみのたより

おりがみのたより

おりがみのたより

ずみ」の絵本をつかって、クラフトで遊ぶワークショップも開催した。

❸ ボランティアの活動と養成

〔こどもの城〕の事業に協力するボランティアを養成するためにボランティア講習会を実施している。本年度の講習会修了者は82人。実際に〔こどもの城〕で活動を希望し登録している人は、前年度からの継続者も含め、年度末現在414名となった。

(ア) ボランティアの活動

【平常期間のプログラムの中での活動】

各部から依頼される活動（保育、スイミング、キッズクラブ、ユースクラブなど）とボランティアが各部に働きかけ生み出された活動（人形劇、紙芝居、影絵、パネルシアターなど）の2つに大別できる。

それぞれのグループが慢性的に抱えている問題として《人手不足》という点があげられる。こうした問題を各グループは、様々な方法で解決しようとしている。青年ボランティアの人形劇グループは、6月に『人形劇わくわくレッスン』を実施した。短期の人形劇体験講習で、練習から公演まで3カ月の期間で行うという計画だった。これには、比較的古い期の21期のメンバーから最新の終了期42期までのメンバーが集まり、意欲的に取り組んでいた。このメンバーは、3カ月終了後も数人がグループに残り活動を続けるようになった。新規メンバーの加入よるグループの活性化という当初の目標は見事に達成できたといえる。また女性ボランティアグループでは、初期講習の段階で活動しているメンバーからのグループ紹介を行うことで活動の理解を深めてはどうかという提案が女性ボランティア総会であり、実行に移された。このように、〔こどもの城〕の各ボランティア活動は、個々の力だけでなくグループで活動を行うメンバーの相互作用によって、活動を行う上で生じる様々な障害を、乗り越えていけるよう配慮している。このような、グループ活動は、メンバー同士でお互いの活動を認め合う《分かち合い機能》、行き詰まった時にお互いを精神的にサポートする《相互支援機能》、問題に対して適切な解決方法を導き出す《問題解決機能》、合理的で効果的な活動を生み出す《活動推進機能》、メンバー同士の様々な学び合いの機会を生み出す《学習伝達機能》を持つことができる。年間、6,500人近いボランティアが活動する〔こどもの城〕にとって、このようにボランティア同士がお互いにより良い環境作りを行う自助的活動は非常に重要である。しかし、そのためには、ボランティア一人ひとりの活動に対する自覚と責任性、ボランティア同士の信頼関係、スタッフとのパートナーシップが大切になってくる。それを、つくるのが、コーディネーターの大きな役割と言える。前記した例は、多くの活動グループのほんの一部である。全体を見渡せば、ほとんどすべてのグループがそうした動きに結びついているとは言いがたい。今後のボランティア活動活性化のためにも、コーディネート機能をますます充実させる必要があると感じた。

【特別期間のプログラムの中での活動】

子どもたちの長期の学校休み期間で利用者が集中する時期に、より多くの子どもたちが同時に参加し、遊ぶことのできるプログラムを計画。春休み、ゴールデンウィーク（児童福祉週間）、夏休み、開館記念、冬休みの5つの期間に実施した。また、AV事業部と共同で鉄道イベントのプログラムも、3年前から毎年数回ずつ実施されている。この、鉄道イベントはAV事業部からの要請で、ボランティアに声をかけ、プロジェクトチームをつくり取り組んできた経緯がある。当初AV事業部から、鉄道に関するビデオ試聴促進活動の一環として、鉄道をテーマにしたプログラムを実施したが、鉄道に精通したスタッフがいないので、それを補完するためにボランティアの力をかりたいと要請があったのがきっかけとなった。そこでボランティアに声をかけ、鉄道に興味、関心のあるメンバーに集まってもらい、AV事業部のスタッフと共にプログラムづくりを開始した。スタッフの子どもに関する専門性と、ボランティアの鉄道に関する専門知識が見事に融合し、すばらしいプログラムが生まれた。〔こどもの城〕を訪れる、鉄道にはあまり興味のない幼児や学齢の子どもたちから、鉄道マニアの少年たちまで、幅広い対象が一緒に楽しむことのできるプログラムとなった。そこでは、鉄道好きの少年たちが、幼児にやさしく声をかけ、鉄道模型の遊びかたを伝える光景を見ることができた。きっかけは、ビデオの試聴促進活動から生まれたプログラムだったが、そこにボランティアの力が効果的に発揮されることによって、〔こどもの城〕らしい暖かい人間交流が生まれるプログラムに変化していったと言える。このように、ボランティアの内在した力を、引き出していくのも、重要なことだと痛感した。

【L.I.T.の活動】

高校生の社会参加活動プログラム。本年度は、前年度の9月から継続しているメンバーの活動が8月まで、そして9月から本年度のL.I.T.（Leader In Training）

活動が行われた。L.I.T.は原則的に月１～２回の活動日を設けている。しかし、学校も地域も違うメンバーが、都合を合わせようとすると、試験等の都合で、月に１回程度しか活動できないのが現状だ。そうなると、半年が経過しても、メンバーの相互関係は希薄なままである。年間のグループの様子を見ていると、半年を経過したところから、人間関係の問題が浮かび上がって来る。これは、言い方を変えれば、この時点から、メンバーが他者を意識し、グループの成員の相互関係の中から様々な体験学習が始まるということだ。この時適切な個人とグループへの働きかけがないと、メンバーは体験したことを一般化し、社会的な自分の成長へと結びつけられないまま、グループの終了時期を迎えてしまう。そのために、前期半年のグループ運営を、次の点に配慮しながら行っている。１つにはメンバーのグループへの帰属意識を高めること、２つ目に自主的なグループ運営のあり方を考えるように働きかけること、３つ目にメンバー一人ひとりのグループへの参加目的、ニーズをとらえることを視点において運営している。L.I.T.は、同じメンバーでグループ活動を行えるのが１年しかない。だからこそ、前半半年のグループの基盤をつくる期間は非常に重要になってくる。過去、なんとなくメンバーの様子を見ているうちに時間が経過して行ったこの期間を、もっと明確な目標と、方法論を持って進めて行く必要性があると感じた。

(イ) 野外活動

『ジュニア・アウトドア・スクール』と『ジュニア・スプリング・キャンプ』の２つの野外活動を本年度も実施した。

毎年このキャンプは多くのボランティアによって支えられている。それだけに、ボランティアの組織がどう機能するかが、キャンプ運営の命運をわけることがある。本年度のジュニア・アウトドア・スクールは、このボランティア組織に大きな課題を残した年となった。

ジュニア・アウトドア・スクールは毎年、25人程度のボランティアが参加する。このメンバーの、経験や適正を考慮して組織づくりを行う。

この組織は、子どもたちに直接接するカウンセラーグループと食事や物品等キャンプのマネージメントを担当するグループに別れる。それぞれの役割は、数人のグループで担当し、各グループにはそれをまとめるチーフがいる。毎年、ボランティア全員に声をかけ、応募してきたメンバーを見てスタッフが組織づくりを行う。

今年のジュニア・アウトドア・スクールは、年間を通して活発に活動している学生のボランティアが多く参加した。そこで、組織の若返りと、そのメンバー一人ひとりの資質の向上を目指し、学生のメンバー中心のチーフと、経験豊かなメンバーがそのチーフをサポートできる組織づくりを行った。過去17年のキャンプの歴史の中で、幾度か今回のようなケースがあり、その度に、ボランティアの新たな力の芽生えを感じることが出来た。そうした、若い力の積み重ねが現在のキャンプを支えていると言っても過言ではない。しかし今回は、過去のケースとは違い、思ったような効果が得られなかった。大きな要因として、20代前後のボランティアの人間関係づくりのあり方が考えられる。まず、同世代のメンバーに対しては、常に『同じ』でなければならないと考えているようだ。だから、同じ仲間が、チーフになった時、そのメンバーをみんなで助けていくのではなく、なんとか自分の位置まで引き下げようとする。直接私たちに「あの人にはあの役割は無理だ」と進言してくるケースもあった。そして、チーフになった当事者も、回りとのバランスに気を取られ、持っている力を存分に発揮できない。このような足の引っ張り合いが様々な場面で見られた。彼らは決して仲が悪いのではなく、常に行動を共にしている仲間である。しかし、こうした状況を見てみると、その関係は大変微妙なバランスで成り立っていて、そのバランスをとるために彼らは常に神経を尖らせていることがわかる。また、世代の違うメンバーとの関係が非常に結びにくいのも特徴だ。自分とは違う世代、価値観の違いがあるとなかなかコミュニケーションが取れない。「自分のあまり知らない人から、どんな話を聞いても聞く気にならないし、協力して欲しいともおもわない」と言うのが彼らの論理である。親しくはないが、その人の経験や知識を肌で感じ取り、お互いの立場を尊重した付き合い方ができないようである。今年、各チーフのサポートに入ったメンバーがこうした中で非常に苦労をした。経験豊かなこのメンバーは、人間的にも成熟した人達で、決して先輩風をふかし、上から物を言うような接し方はしなかった。様々な角度から彼らの気持ちを理解しながら進めていこうとしたが、あまり良い効果は得られなかった。

このように、若い世代を中心にした組織は大きな課題を残してキャンプが終わった。ただ、〔こどもの城〕の各プログラムはこうしたメンバーの力を借りて、運営していかなければ成立しないこともまた事実である。この課題を糧に、ボランティア一人ひとりの力を存分に活か

せるコーディネートを模索して行く必要がある。

ボランティアスタッフは、この2つのキャンプに20名から30名参加し、スタッフと共にキャンプ運営を行っている。そのほか、下記の事業部が主催するキャンプにも多くのボランティアが参加し、班付きカウンセラーや本部運営なども意欲的に行った。

チャレンジキャンプ（体育）／ちびっこ冒険団（プレイ）／フェローシップキャンプ（プレイ）／ゆきんこ冒険団（プレイ）／スキースクール　パート2（体育）。

【ボランティアの養成】

〔こどもの城〕でのボランティア活動を希望する人のために、年3回（2回の青年ボランティア講習会と1回の女性ボランティア講習会）公募して講習会を開催している。希望者はまず、講習会を受講し、〔こどもの城〕への理解や健全育成に携わるボランティア活動の基本的な考え方（子ども論、指導者論、ボランティア論）を学んでもらう。講習会を通して、ボランティア同士の仲間づくりを行い、共通基盤をもって活動に参加し、〔こどもの城〕に新しい風を吹き込む運動体となることを願っている。

【ボランティア講習会】

2回の講習会（第42期・43期）を実施し、社会人・学生合計84人が参加した。本年度の特徴は、43期から定員を50名から30名にしたことだ。これは、近年、講習会を受講する若い世代のコミュニケーション能力の低下と感受性の低下に要因がある。子どもを対象にしたボランティア活動を行う時、ボランティアのコミュニケーション能力と感受性がとても大切になってくる。子どもの気持ちをとらえる時も、より良い人間関係を結ぶ時も、この力を最大限発揮する事が必要になってくる。しかし、近年この能力の低下により、様々な子どもとの活動場面において、より良い対応が出来なくなっているケースが目立つようになって来た。また同様に、共に活動するボランティア同士も、チームワークがうまく取れないことが多くなった。この状態を考慮して、初期講習会の段階で、より効果的な人間関係トレーニングができること、そして、講習会修了後から活動展開まで、一人ひとりにより効果的なアプローチが可能になるよう定員を減らしての、講習会開催へ踏み切った。現段階でまだその効果はあきらかではないが、状況を今後も見守って行きたい。

【ボランティアグレードアップ講習会】

〔こどもの城〕に登録しているボランティアを対象に、活動の資質向上をはかるために実施した。毎年、夏前のグレードアップ講習会は、野外生活に必要な技術（テント設営、野外炊事等）と、組織キャンプの理念の習得をベースにプログラムを作成している。これは、〔こどもの城〕のボランティアを希望するメンバーが野外活動に精通しているケースが少ないことと、それぞれのキャンプに毎年多くの新人ボランティアが参加することがその理由として挙げられる。しかし今年は、『丹沢山系の縦走と山小屋泊まり』の体験をベースに実施した。これは、まず、野外活動の魅力を存分に味わうことが大きな目標である。近年の若い世代のボランティアたちは、そのほとんどがわずかな自然体験しかもたない者となっている。従って、子どもと野外活動に出掛けても、自身の体験を通して子どもに自然体験の魅力を伝えることが難しいのが現状だ。今回の活動では、丹沢のブナの原生林、野性の鹿、雨に濡れる草花、星空等大自然の様々な事象に触れ、野外活動の魅力を充分に満喫出来たのではないかと考える。また、縦走の際に必要な、読図法、コンパスワーク、気象学等専門的な知識、技術も習得できた。

❹ その他

【社会福祉講座】

開館以来実施している「手話講座」を本年度も行った。受講者数は72人であった。講師は昨年度から引き続き、手話通訳士、NHK手話ニュース845キャスター中野佐世子先生。手話だけに留まらず、様々な視点から障害者に対する理解を深めて行く運営で、充実した講習会となった。

❺まとめ

昨年度の年報で述べた〔こどもの城〕が直面している課題は本年度、そして今後数年にわたって、〔こどもの城〕が取り組んでいかなくてはいけない課題である。すなわち、一人でも多くの子どもそしておとなに〔こどもの城〕を利用してもらうこと、〔こどもの城〕の施設としての統一したイメージづくり、そしてボランティアの育成を通じての施設の活性化の3点である。

入館者数はここ数年、パス制度や近隣児童の招待などの対策を講じてきた。対象となる児童数が減少しているとはいえ、相応の利用者に「来館してもらうこと」は、公的な施設として果たすべき基本的な使命である。開館以来17年の年月が経過し施設の存在が社会的に認知されてもまだ〔こどもの城〕を知らない人、来館したことのない人はいるはずで、そうした対象者の掘り起しと、一度利用した人たちが繰り返し来館してくれるような環境づくりに取り組んでいきたい。具体的には地域や対象

に応じた積極的な広報や招待、気軽に利用し快適に過ごせるような環境整備、同時に一度来館した利用者に再来館を促すような催しを含めたプログラムの充実に引き続き努力したい。

統一したイメージづくりは、特に学校の休暇期間の来館者が多く見込まれる時期に、広報戦略的に統一的なイメージづくりの必要性を認識したことにはじまった。まだ、季節や全体の雰囲気、いくつかのプログラムの持つ特色の拡大化によってイメージづくりをしている段階だが、将来的には先に来館者に訴える明確なメッセージを決め、そのイメージに沿ったプログラムが生れてくるような展開を期待したい。

ボランティア活動については社会的にボランティア活動全般に関心が高まっているなかで、〔こどもの城〕での施設ボランティア活動が、参加者の資質を高め、個々の持つ能力や積極性を引き出すために最も必要なことはボランティア同士また、ボランティアとスタッフとの関係づくりであると考える。〔こどもの城〕のボランティア活動は、スタッフの作ったフレームの中で活動するだけでなく、ボランティアが個々の資質を生かし、自分たちの力でプログラムを作りあげてきた所にその特性がある。これからもこうした活動の特性が、〔こどもの城〕

平成12年度活動一覧表

一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
ハロー・ディア・エネミー国際絵本展	1.13～21	19カ国41作品、約100冊の絵本による「平和」を考える展覧会。「おひさまおはなしコンサート」の一環として実施。絵本の展示・絵本の読み語り・ワークショップで構成。読み語り等の公演は土・日中心に、〔こどもの城〕と愛知県児童総合センターのボランティア絵本グループや、大学生サークル「じゃんぐるじむ」、津田塾大学有志ボランティアの協力で行った。また、関連プログラムとしてＡＶ事業部の「カナダのアニメーション」を実施。主催：こどもの城・（社）日本国際児童図書評議会・（財）日本ユニセフ協会。協力：（株）講談社。

〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
国連新しい世紀 子どもの願い展	4.22～5.21	国際交流の欄に別掲。
こどもフェスティバル	5.3～5	来館者の多いゴールデンウィークに、家族で良質のプログラムを気軽に劇場で観劇できるよう、毎年実施している。家族で楽しめるお芝居と、観客参加のコーナーをふんだんに取り入れたコンサートを実施した。「ガドガド」はこどもの城音楽事業部スタッフ中心に編成されている。 5月3日「あとむの時間はアンデルセン」劇団あとむ。 5月4日「愉快なコンサート～ロバの音さがし」ロバの音楽座。 5月5日「おんがくがスキ!」ガドガド。 なお、劇団あとむ、ロバの音楽座の2公演は、（財）児童健全育成推進財団の優良巡回劇事業の一環として実施した。
マックロー グリーティング	5.5 11.3	〔こどもの城〕のマスコット、マック・マックローの誕生日であり、「こどもの日」の5月5日に、マック・マックローが登場。館内の子どもたちと握手をして回ったり、いろいろな遊びにいっしょにチャレンジした。11月3日は開館記念にちなみ、館内の子どもたちと握手をして回った。
感覚体験「見て、聴いて、さわって遊ぼう！」	7.20～9.3	五感と科学遊びをテーマに、体験型の展示を行った。アニメーションの原理を体験できる大型の立体視覚玩具、目を閉じて触覚をたよりに進んでいく迷路、光センサーを使った、手をかざすと音のなるピアノなどを展示し、遊びを通じて科学的な関心を高めてもらった。
第6回人形劇カーニバル	8.13～15	助成金事業の章に別掲。またこの催しに併せて、「つくって演じる人形劇2000」の講習会を8月14日と9月10日に実施した。
第7回おりがみ カーニバル	10.28～11.19	子どもからお年寄りまで幅広く気軽に楽しめる折紙に、多くの人たちに親しんでもらうための催しで、日本折紙協会と共催で行っている。今回は子育て支援基金の助成事業・動く〔こどもの城〕の事業なども加えた総合的な事業として実施した。（助成金事業・動くこどもの城の章に別掲）また、関連事業として、「おりがみにつよくなる講習会」を実施。
子育てママの悠遊タイム	11.5	子育てに追われる母親に、子育てから少しだけ離れてホッとする時間を提供したいと考え、企画した催し。家族で参加してもらい、母親はフラワーアレンジメントと茶話会、父親と子どもたちは、保育研究開発部のスタッフの指導で、親子遊びのプログラムに取り組んだ。協力：フラワーショップfam。
凧づくりの ワークショップ	1.3～8	日本の伝統的な正月遊びを子どもたちに伝承していきたいと考えて毎年実施しているワークショップ。誰でも簡単に作れてよく揚がる「エイ凧」と、「立体飛行機凧」（1月5日～8日）の2種類、4日間で21組の参加。協力：日本の凧の会・秋山幸男氏
新春もちつき大会	1.4	日本の正月文化を子どもたちに伝えていきたいと考え、毎年行っている。できるだけ多くの人たちに参加してもらうために、屋外ピロティで実施している。餅つきの前には、マック・マックローも応援のため登場した。
ニッサンゆかいな絵本と童話展「まぜ・こぜ・ことバザール」	3.24～4.5	第8回を迎えた絵本の原画を中心とした企画展。絵本の楽しさを伝えることを目的として、「第8回ニッサン童話と絵本のグランプリ」で入賞した作品の原画、イラストレーター・はらだゆうこさんのコラージュ等の作品も展示した。共催：（株）日産自動車。

名　称	期　間	備　考
おもちゃ図書館 マックロー	年末、年始を除く毎週水曜日	心身に障害のある子どもたちが気軽に利用できる遊び場として、昭和62年に開設された「こどもの城おもちゃ図書館マックロー」。本年度も10数人に及ぶボランティアを中心に運営され、延べ49回開催した。利用者は延べ352 人、おもちゃの貸し出し数は145 個、活動に参加したボランティアは延べ282 人にのぼった。全国に約 500カ所ある「おもちゃの図書館」のモデル的な活動として、全国からの見学者も多い。
豊かな遊びを広げるおもちゃ展	11.28 ～12.3	毎年この時期におこなわれる「おもちゃ展」。おもちゃメーカーの協力で、障害を持った子どもたちにも使いやすい市販おもちゃの展示と紹介。併せて、各地のおもちゃ図書館ボランティアの手作りのおもちゃの紹介も行った。

❷ ボランティア関係の活動

〈平常期間〉

名　称	期　間	備　考
おはなし紙芝居のつどい （プレイ）	火曜日 15:00 ～15:30	女性が活動している。メンバーの減少が昨年から続いている。常時２～３人での運営。紙芝居の持つ温かさを伝えることを目標に定期的活動している。
おはなし人形広場 （プレイ）	水曜日 15:00 ～15:30	女性ボランティア人形劇・影絵の両グループが第２・第３水曜日に公演。人形劇グループは年度途中からメンバーが２人になり存続の危機が訪れた。しかし、演じ方を工夫し、２人での実施をする。
作りおもちゃ（企画研修）	第２・４金曜日 11:00 ～15:00	女性ボランティアのグループが、プレイホール幼児コーナーにおく、抱き人形やままごと用具などを製作している。人数も増えまた保育研究開発部からの遊具の依頼に応え、意欲的な活動を続けた。
おりがみあそび広場 （プレイ）	木曜日 14:00 ～15:00	主として女性ボランティアが中心となって運営しており、週１回の活動とともに各シーズンごとにプレイホールの壁面に展示する折り紙制作も行っている。しかしこの壁面制作に意欲を燃やしていたメンバーが活動をやめたため、グループが転機を迎える。
楽器屋わんちゃん（音楽）	木曜日 15:30 ～16:00	音楽スタッフが運営するプログラムの補助活動。プログラムも変わり、昨年から活動を続けているメンバーが積極的な活動を展開する。
みかんチャンズのオバオバサンバ（音楽）	金曜日 15:00 ～15:30	女性ボランティアが定期的に活動。音楽のスタッフと一緒に“サンバ”を素材としたリズム遊びのプログラムを運営している。今年からボランティア独自のプログラムも加わり意欲的に活動する。
わいわいスタジオ（音楽）	日曜日 13:00 ～17:00	昨年は活動者がいなかったが、今年度は不定期ながら活動するメンバーが数人いた。
手足の不自由な子どものスイミング（体育）	土曜日 17:00 ～18:00	ハンディキャップを持つ子どもたちを対象とする唯一の活動。定期的に活動するボランティアが定着しない現状。
日曜体育室 （体育）	日曜日 14:00 ～17:00	日曜日の体育室プログラムの指導補助を行う活動。昨年から熱心に活動していたメンバー１名に加え３人のメンバーが定期的に参加した。
絵本の読み語り （企画研修）	①第２日曜日 14:00 ～14:20 ②第３金曜日 13:45 ～14:15	保育室にて、親子対象に絵本を読む。青年・女性ボランティアが共に活動に参加。日曜日の活動はメンバーが着実に増え、意欲的に活動を展開した。また平日の活動は、３人の女性ボランティアが定期的に活動を行う。絵本の前に手遊び等の親子遊びを行うプログラムを試行錯誤しながら実施した。
キッスクラブ（プレイ）	毎月２回土曜日 15:00 ～17:00	小学校低学年30人の遊びのクラブ。ボランティアは、グループワーカーとしての視点からプログラムの立案・準備・実施にかかわっている。新しくボランティアが数人加わった。
ユースクラブ（プレイ）	毎月２回日曜日 13:00 ～15:00	小学校高学年から中学生までの40人が対象。グループリーダーとしてのボランティアは、思春期の子どもたちにとっての“モデル”として大きな存在となっている。
ファミリープレイタイム （プレイ）	毎月１回 11:00 ～12:30	親子を対象に毎回さまざまなプログラムに挑戦。ボランティアリーダーはプログラムの運営をサポートした。
保育 （保育研究開発）	月曜～金曜日 9:45～16:00	保育クラブ・幼児グループに、１～２名程度参加。保育活動の運営補助をする。長期休暇期間には、短期で参加をする活動も今年度より開始。
パネルであそぼう （企画研修）	毎月２回日曜日 13:00 ～15:30	パネルシアターの公演とプレイホール（幼児コーナー）での、ワークショップを行う。新規メンバーが定着せず、慢性的な人手不足となる。社会人も多く、グループのメンバーがコンセンサスをとるのも難しくなる。そのためグループ維持の様々な取り組みが行われる。

名　称	期　間	備　考
日曜クラブ （企画研修）	月1回日曜日 14:00～17:00	屋上ふしぎが丘で、ドッジボール、長なわ、フラフープ等の活動を実施。また季節行事毎にクイズ大会のプログラムも取り入れる。以前から活動しているメンバーが、忙しくなり活動を休む事が多くなったが、新規メンバーがそれにかわり活動を行うようになった。
青年人形劇（企画研修）	月1回土曜日 14:00～15:00	プレイホールにて、マックロー人形劇と手遣いの人形劇のプログラムを実施する。人手不足解消のため、『わくわくレッスン』という、新規メンバー受け入れプログラムを実施。その成果で、新規メンバーの積極的な活動が展開された。
土曜昔あそびの会 （企画研修）	毎月第2･4土曜日 14:00～17:00	昨年度発足したグループ。メンバーも定着し、コマ、みつうま等の昔遊びを中心に活動。お正月行事との連携も充実し、年間を通して意欲的な取り組みを見せた。

※（　）内は主催事業部

〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
〈児童福祉週間〉 キャッスルクエスト2000 ～古代遺跡の謎を追え～ （企画研修・プレイ）	5.3～5.7 11:00～16:00	テレビゲームで人気の「ドラゴンクエスト」をモチーフに行事を企画。当日は5日間で延べ151名のボランティアが活動に参加した。この活動を推進していく中心的なメンバーは、昨年も意欲的な取り組みを見せた学生たちか行った。昨年の経験を生かしスムーズな運営を見せた。5日間で151名ものボランティアを集めるネットワークは、このメンバーの日頃の活動の成果から生まれたものだろう。
〈　〃　〉 おはなし広場 （企画研修）	5.4～5 11:00～16:00	青年ボランティアの人形劇グループとパネルグループが協力して実施。2日間連続で「マックロー人形劇場」と「パネルシアター」の公演を行う。両グループともグループメンバーが減り、日常活動もやっと行っている状態。今回も練習不足が目立ち、課題を残したプログラムとなった。2日間で延べ21名のボランティアが参加。
〈夏休み〉 ウォーター アドベンチャー2000 戦えキャッスルレンジャー （企画研修、プレイ）	8.12～15 11:00～16:00 （受け付け）	屋上ふしぎが丘で、水鉄砲を使ったロールプレイイングゲームが実施された。学生を中心としたプロジェクトチームが結成された。昨年から課題になっている、青年層の人間関係の希薄さは、今年もさまざまな場面でクローズアップされた。今年のチームのメンバーは、昨年から活動を熱心に続けているメンバーで、お互い共有してきた時間は長い。しかしそれにも関わらず、お互いを信頼できないと不安感を訴える事が多かった。4日間で延べ77名のボランティアが参加（雨で1日中止）。
〈ファミリーウィーク〉 だんだん村の秋祭り ～あそびの屋台大集合～ （企画研修）	11.3～5 11:00～16:00 （受け付け）	屋上ふしぎが丘で行う恒例のチャレンジゲーム大会。今年は縁日をテーマにゲームを実施。『のど自慢さけんであー』『金魚屋とんでけポチャン』『ゲーム屋はしってドン』『たこやきひらいてパッ』『おめん屋めくってポン』とユニークなゲームを実施。今回は、屋台がテーマだったので、ダミーのお金を道具として使用した。「あと幾らあるかな？」と真剣な顔で残金を数える子どもたちの姿が印象的。3日間で70名のボランティアが参加。
〈　〃　〉 あそびのおもちゃ箱 （企画研修）	11.25～26 11:00～16:00 （受け付け）	人形劇、影絵、紙芝居、パネルシアター、音楽の各グループの合同公演。公演の合間には、とことこ人形で遊ぶワークショップを実施。この行事は、青年ボランティアと女性ボランティアが協力して実施するのが特徴。今年度は場所の都合から、1日目はプレーホール、2日目はフリーホールでの実施となった。3日間で52名のボランティアが参加。
〈冬休み〉 2001年あそびの初場所 ～はっけよいで お正月～ （企画研修、プレイ）	1.3 13:00～17:00 1.4～1.9 11:00～17:00	昨年度から継続的にこの企画に関わっているボランティアが中心になって進めた。この企画はプレイ事業部との共同により進められるが、このような共同企画の場合、各事業部スタッフとボランティアとのより良いパートナーシップが重要になってくる。今回はボランティアを始めて間もないメンバーも中心的役割で関わっていたが、スタッフとの関係で悩む事が多かった。「ボランティアの意見が活かされない」との意見があがり、パートナーシップの難しさをつくづく感じさせられた。7日間で延べ約110人のボランティアが参加。
あそびのポケット ～いらっしゃい ぽけっと商店街～ （企画研修）	3.1～2 13:00～17:00 3.3 11:00～17:00	昨年に引き続き、3回目の女性ボランティア全体で取り組む企画。女性ボランティアの独自性を活かす事と、企画の準備、実行のプロセスにおける相互交流を狙いとして実施した。今年は『お店屋さんごっこ』をテーマに、『さかな屋』、『やお屋』、『ケーキ屋』、『ペットショップ』、『ふくびき』を地下1階フリーホールに設置した。銀行でもらった、お金とかごを持って各お店で、買い物ごっこを楽しむという設定。シンプルな設定が、幸いにして幼児に大人気のプログラムとなった。準備作業も、画用紙に印刷した商品に、色を塗っていくという比較的誰でも取り組みやすい作業だったので、和気あいあいとしたムードで行われた。今年で3回目となったこの企画も、継続的な取り組みによって成果があがった。3日間で延べ52人のボランティアが参加。

名　称	期　間	備　考
〈春休み〉 「発見あそびの宝島」 （企画研修）	3.20 3.24～25 11:00～16:00 （受け付け）	毎年、この時期はチャレンジゲーム大会を行っていたが、今年は『路地裏あそび』をテーマに実施した。屋上ふしぎが丘で、『こま』、『長縄』、『ゴム段』、『ドッジボール』、『めんこ』等を常時実施。その他時間を決めて、集団で行うゲーム大会を行った。各種目とも、明確なルールを設けず、子どもの年齢層、参加意欲を加味しながら、状況に応じて内容を変化させていくやり方をとった。この方法は、決められた事はその通りしっかりと行うが、その他の事にはいっさい目を向けようとしない、マニュアル世代の若者が増えているボランティアの現状を危惧して、経験豊かなボランティアか中心になって行った活動だった。やはり、実施してみると、子どもたちの心を感じとりながら、遊びを推進していく力の弱さが明らかになった。３日間で延べ56人のボランティアが参加。

〈高校生プログラム＝L.I.T.（Leader in Training）の活動〉

※L.I.T.は昨年度より、年度途中の９月より新規メンバーを募集し活動を展開している。ここでは、11年度グループの４月からの活動と、12年度グループの９月から３月までの活動を報告する。

名　称	期　間	備　考
春のイベント準備 （19名）	4.9	昨年度から準備をしていたイベントの準備を行う。メンバー間の相互関係がまだ薄い。準備活動を通して関係が深まるよう配慮した。
春のイベント準備 （24名）	4.16	「春だ! 遊びのふくぶくろ」のシュミレーションを行う。
L.I.T.春イベント 「春だ!　遊びのふくぶくろ」 （23名）	4.18 11:00～16:00	地下１階フリーホールで、『おめんつり屋』『ペープサートの公演』『うでずもう屋』を実施。子どもと遊ぶ事の楽しさと、大切さを実感できる事が目標だった。しかし、自分の楽しみ、仲間と集う事の楽しみが優先されがちな姿勢に課題を残したプログラムだった。
夏の行事企画会議 （13名）	5.7	８月までの活動計画を立てるために、ミーティングを行う。前回までの活動を通して、グループの人間関係の問題が浮き彫りになる。個々に問題意識を持っているメンバーもいるので、活動計画の話し合いの前に、現在のグループ状態、改善点を話し合う。
夏の行事企画会議 （11名）	6.11	８月の行事の概要が決定。『あつまれ探検隊　2000』小１～小３を対象に実施することになった。合わせて、夏合宿の場所、内容について検討される。終始リラックスしたムード。発言も活発で、スムーズで活気あるミーティングが行われた。
夏の行事企画会議 （10名）	7.9	この活動前にL.I.T.の中心的な存在であるメンバー２人がグループの問題を相談に来る。この数カ月、グループの裏側で起こっていた様々な問題が、明確になり、グループ全体で問題解決に向けて組んでいく姿勢は生まれて来た。この日は、夏の行事、夏合宿の計画を行う。
夏合宿 こどもの城 （21名）	7.15～16 １泊２日	毎年野外活動のトレーニングをを目的として実施していたが、今回は夏行事の企画準備を目的とするため、〔こどもの城〕での館内宿泊の形態で実施した。グループの持つ課題を解決するために。メンバーが自発的に話し合いの時間を設けた。またグループワークトレーニングを実施し、リーダーシップのあり方についての体験学習を行った。
『ジュニア・アウトドア・スクール』 宮城県国立青少年野営場 （９名）	8.3～8.9 ６泊７日（テント泊）	L.I.T.の中から希望者９名が参加。本部スタッフとして、ジュニア・アウトドア・スクールを支える。小学校低学年からキャンプを続けていたメンバーが多く参加。本部スタッフとして始めて参加して、「キャンプの奥深さに気づいた」と感想を述べていた。
『集まれ探検隊　2000』 準備活動 （延べ92名参加）	7.30～8.25までの期間で全６回活動	合宿を機会に、メンバーの相互関係が少しずつ深まる傾向を見せてきた。３年生のリーダーシップは強くはないが、２年生がのびのびと取り組んでいる姿が印象的。今までの活動で非常におとなしかったメンバーが積極的に関わるようになって来た。
『集まれ探検隊　2000』 実施 （延べ40名参加）	8.26～27	小学１年生～３年生を各日、30名ずつ事前に募集し、〔こどもの城〕館内で探検隊ごっこのプログラムを実施。事前募集の段階で両日とも、キャンセル待ちが出る状況。結果的に１日目34名、２日目35名で実施した。両日ともメンバーを入れ換えての同様のプログラム。L.I.T.は２日間で役割を交代した。午前中はアイスブレイクのゲームの後、小グループに別れ館内にあるポイントを探し、そのポイントでゲームに挑戦し地図をもらう。お昼にL.I.T.手作りのカレーライスを食べた後、バラバラになった地図を完成させ、再び地図に従って館内に仕掛けられたチェックポイントを回る。最後のポイントで悪の親玉である『ブラックサンダーズ』のアジトを教えてもらえる。そして、アジトで最終決戦を行い、ブラックサンダーズを倒すというストーリー。 ２日間で同様のプログラムを行う事によって、グループ担当と裏方の役割を、L.I.T.がそれぞれ体験する事ができた。子どもの気持ちを理解することの大切さと難しさ、プログラムを進めて行く上での視点、気配り、チームワークを体験的に学ぶ絶好の機会となった。

名　称	期　間	備　考
平成12年度 L.I.T.開講式 （21名）	10.9	本来9月に開校式の予定だったが、台風直撃のため中止となり、1カ月遅れての今年度がスタート。昨年から募集範囲を広げていたが、今年もその成果が現れ、様々な学校、地域から27名のメンバーが集まった。午前中はオリエンテーションと面接、自己紹介を中心にしたグループワークトレーニングを実施した。午後は、11月の準備活動として、『子どもとあそび』の小講義を聞き、〔こどもの城〕館内を見学した後、ここでどんな遊びが展開できるか話し合いを行った。
ボランティア体験活動① （21名）	11.19	12月の活動を目標に、「子どもとの遊び体験」を中心に活動した。ボランティアの指導のもと、室内あそび、屋外あそびの体験を行う。室内はプレイホールで、ままごと、アスレチック遊びを行う。屋外はふしぎが丘で長縄、ドッジボールを行う。積極的に子どもと関わることのできるメンバーもいれば、アプローチが出来なくて戸惑うメンバーと様々だった。
ボランティア体験活動② （20名）	12.17	11月の活動をさらに発展させ、メンバーがプログラムの内容を決定し実施した。屋内ではかるたとり、屋外ではこままわしを行った。メンバー同士で、相談し、役割分担をして行う事で相互関係を深めようと考えたが、望ましい効果は得られなかった。
冬合宿 埼玉県 高原パーク横瀬キャンプ場 （19名）	1.20～21	野外活動の理念と技術の習得、チームワークのあり方を体験的に学ぶ事を目的にキャンプを実施。当日は、雪がふり、冬枯れの一面雪景色の美しいキャンプ場で、様々な野外活動プログラムに意欲的に取り組んだ。キャンプが初めてのメンバーも、水道も凍るような寒さの中、仲間と助け合い充実したキャンプ生活を送った。お互い素直に自分を表現出来たので、相互関係が一挙に深まったようだった。
これからの活動計画 （18名）	2.11	今後の活動計画を話し合う。会議の前に、前半3カ月を振り返り、一人ひとり感想を述べる形で実施。「メンバーがまだお互いに分かり合っていない」「チームの力が活かせるような、活動がしたい」等活発な意見交換がなされた。グループに対するメンバーの意識の高さが伺われた。
4月までの活動計画 （延べ35名）	3.18 3.20	4月の活動の内容、準備計画を話し合った。プログラムは、「作って遊ぶ」をテーマにのおもちゃづくりのワークショップを実施する事に決定。4月22日を実行日にして、それまで3回の準備期間を設けることにした。実行に向けて、3つのチームに分け、作業を進めて行く事を決めた。
『ジュニア・スプリング・キャンプ　2001』 新潟県 国立妙高少年自然の家	3.27～3.31 4泊5日（宿舎泊）	5名のL.I.T.が参加する。今回はメンバーの中にキャンプ初めてのメンバーが混じる事になった。子どもの頃からキャンプに参加しているL.I.T.にとって、このメンバーとの共同作業は様々な葛藤を生む結果となった。

〈ボランティア講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　考
第42期 ボランティア 講習会	（人） 18歳以上 （50）	（人） 45人	5.13～6.6 18：00～20：30 （5.26～28宿泊研修）	ここ数回に比べて大学生の参加が多かった。このため、講習会修了後、イベント活動、キャンプ活動に参加をする人が多く新規メンバーによる新しい雰囲気がボランティアの中に生まれた。宿泊研修は千葉県・市川少年自然の家で実施。
第43期 ボランティア 講習会	（人） 18歳以上 （30）	（人） 31人	2.3～3.1 18:00～20:30 （2.16～18宿泊研修）	今回より募集人数を30名に変更。近年青年層の人間関係作りが難しいため、少人数運営を実施することになった。そのため、講習生全体を把握しやすく、活動への参加も他期に比べ多い。高校生活動をしていたL.I.T.や、子ども時代に〔こどもの城〕のプログラムに参加していた人がめだって受講するようになった。宿泊研修は、足柄ふれあいの村。
第16期女性 ボランティア 講習会	概ね30歳 以上の女性 （20）	8	10.11、12、19、24 11.9 13:00～15:00	今回は、すでに活動を行っている女性ボランティアのグループに、講習会の場面で活動紹介を行ってもらった。講習会終了後も、それぞれのグループに参加する方が多く、効果的な講習となった。

〈ボランティアグレードアップ講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　　考
野外活動講習会	野外活動に参加するボランティア（30）	（人）12	（講習会・オリエンテーション） 6.8 19:00～21:00 場所　こどもの城　12階会議室 （実習） 6.24～25　キャンプ実習　1泊2日山小屋泊 場所　神奈川県 丹沢　鍋割山荘	『山を歩く自然を楽しむ～山歩きに野外活動の基本を学ぶ～』をテーマに実施した。毎年、キャンプ生活技術を中心に組織キャンプの実際を行っているが、今年は、趣を変え、丹沢山系の縦走を試みた。『山を登る』と言う野外活動を通して、自然を相手にした活動の特質を理解し、安全にかつ楽しくキャンプ活動を行うための、方法や心構えを学ぶことが目的。 講師に伊藤忠記念財団・東京小中学生センター、館長代理の矢部剛先生をお招きした。6.8の講義では、集団登山の教育効果、指導者の心得、読図法、気象学等を学び、実習に備えた。 実習は生憎の雨模様の中、丹沢は大倉から出発し、鍋割山山頂を目指した。午後3時には、山頂の鍋割山荘に到着した。鍋割山荘のまわりは、雨にけむるブナ林に囲まれて、幻想的なムード。野性の鹿も訪れ、息づく自然に参加者全員感激をしていた。また山荘の主人草野氏との出会いも大変な財産となった。丹沢の自然を守る、草野氏の自然観、運動に深い感銘を受けることになった。夜は、草野氏手作りの夕食に舌鼓を打ち、山小屋の夜を満喫した。雨も奇跡的にあがり、星空を楽しむ事ができた。翌日は塔ノ岳山頂を目指す予定だったが、天候と参加者の体力を考慮して、大倉尾根を真っ直ぐ下りてくるコースに変更した。〔こどもの城〕ボランティアは、野外活動の経験が非常に乏しいメンバーが多い。だからこそ、今回のように、体験の幅を広げる機会は重要だと考える。

〈社会福祉講座〉

名　称	対象・定員	受講数	日　曜・日　時	備　　考
手話講座（前期）	高校生以上	（人）35	火曜日 18:30～20:00	4月から8月までの5カ月間、全15回の講座。講師は手話通訳士、NHK手話ニュース845キャスター中野佐世子先生。月曜の休日が増え、その代り火曜日のが振り替え休館になることが多く、実施が難しく、8月を終了としたが、夏休み期間で欠席者が多かった。
手話講座（後期）	高校生以上	（人）37	火曜日 18:30～20:00	10月から2月までの5カ月間、全15回の講座。講師は前期と同じく中野佐世子先生。希望者・継続者が多く、定員以上の受講となったが、休む人が多く、通常が25名前後の参加であった。

❸ その他（野外活動など）

名　称	期　間	備　　考
ジュニア・アウトドア・スクール2000	8.3～8.9 宮城県 国立南蔵王青少年野営場	小学生41人、中学生32人、スタッフ43人、合計116人で実施。小中学生が共に1週間になって6年が経過したが、今回初めて、初日で定員オーバーした。これは、〔こどもの城〕の各部がそれぞれ個々に行っていたDM送付を一本化したことで、効果的な広報活動が展開できたのが大きな要素として考えられる。今回はボランティア組織の若返りを狙い、各役割の中心に若いメンバーを置き、キャンプ運営を行った。その結果、様々な問題が生まれ、非常に難しいキャンプ組織の運営となった。反面、ボランティアの課題が明確になり、今後の方向性を見いだす事ができた。
ジュニア・スプリングキャンプ2000	3.26～3.30 新潟県 国立妙高少年自然の家	小学生41人、中学生18人、スタッフ30人、合計89人で実施。天候は概ね良好で美しい青空の元、思いっきり雪遊びを体験した。今年は、スノーブロックをらせん状に積んでつくる『イグルーづくり』に挑戦した。雪の特質を活かした、このグループ造形活動は、子どもたちの体験活動の幅を大きく広げた。

劇場事業本部

平成12年度の活動

平成12年度のダンス・舞踊企画は大きな特色があった。それはクラシックバレエからコンテンポラリーダンスへのシフトチェンジである。昭和61年8月16日、17日に記念すべき「第1回青山バレエフェスティバル」が開催されて15年、間に〈ローザンヌ国際バレエコンクール東京開催〉をはさんでクラシックバレエから創作バレエ、モダンバレエなどさまざまな舞踊企画を開催し、多くの才能豊かな若い舞踊手がこのフェスティバルを通過して、世界のあちこちで活躍するようになった。第1回の開催にいたる理念は〈若い舞踊手に踊る場を〉だったが、今では15年前には考えられない程踊る場が増え、機会が増えて〈単に踊る場の提供〉という観点での事業趣旨は役割が終わった。時代は21世紀、新国立劇場をはじめいくつかのバレエ団がバレエ芸術の確立に力をそそぎ、さらに多くの若い才能がバレエ芸術への厳しい道を歩みはじめている。一方、演劇や美術とのボーダーレス現象が感じられるコンテンポラリーダンスの世界は混迷の様相を呈しているが、それだけに新しい表現の道をいちはやく探り出すかもしれない。平成12年「青山バレエフェスティバル」は、第15回をラストコンサートとして幕を降ろしたが、私たちは優れて同時代な感性に力をそそぎ、優れたアートを社会に還元する手助けをしなければならない。

本年度の主な演目

○平成12年6月27日～6月29日　3回公演　青山円形劇場　**アジアコンテンポラリーダンスシリーズ**

「EAST　DRAGON」

金潤秀（韓国）「飛花落葉の理」／王栄緑（マレーシア）「撒酒」／白井剛（日本）「テーブルを囲んで」

山田うん（日本）「duo」

○平成12年8月12日～8月13日　2回公演　青山劇場

「第15回青山バレエフェスティバル～Last Concert～」

鈴木稔振付「アンノウンシンフォニー」ほか

提携企画

○平成12年7月27日～7月30日　青山円形劇場およびピロティー

「ワールドフォークロリアーダ」

○平成13年3月6日～3月7日

アマンダミラーとバレエフライブルグ・プリティアグリー

「沈黙の対話」

【五線譜のなかの動物たち
モーツァルトの音楽遊園地「パパゲーノ！」】

「五線譜のなかの動物たち」は、クラシック音楽のなかから動物や鳥や虫を描いた曲をあつめた「芝居仕立ての音楽会」。円形の劇場空間を活かし、音楽家と役者とクラウン（道化）が繰り広げる独自の構成演出方法は、他のオーケストラや音楽団体、会館などが企画する“ファミリーコンサート”物のなかでも異彩を放ち、平成2年(1990年)の第1弾公演以来、シリーズ化して好評を博している。

今回の上演作品「モーツァルトの音楽遊園地・パパゲ

ーノ！」は、1994年に初演したあと、1996年には新演出で再演。島原や新潟県内でも上演したことのある、シリーズ一番の人気作。鳥さしパパゲーノやパパゲーナ、夜の女王やザラストロなど、モーツァルトの「魔笛」の登場人物たちが繰り広げるオペラ仕立ての音楽物語で、モーツァルトのオペラの名旋律とサン＝サーンス、サティ、シューマン、ムソルグスキー、ラモーなどが作った動物や鳥の曲で構成してある。出演者にマイム俳優の沢のえみを起用して新鮮味を増した今回の舞台は、親子づれを中心とした幅広い世代の観客層に好評を博した。

営業面でも観客動員数がシリーズ史上最高を記録し、こどもの城の代表的ファミリー企画として安定した実績を残した。

また今回は、第1回仙台国際音楽コンクールのプレ企画の一つに選ばれ、3月11日に仙台市の宮城県民会館でも上演した。

出演＝山本隆則（バリトン）／光瀬名瑠子（役者）／白井博之（クラウン）／沢のえみ（マイム）／伊藤エイミーまどか（ピアノ）／構成＝光瀬名瑠子、演出＝吉田雅之

助成＝（社）私的録音補償金管理協会(sarah)

（4月3日まで続演）

五線譜のなかの動物たち「モーツァルトの音楽遊園地」「パパゲーノ！」（青山円形劇場）

【第15回こどもの城・キリン・ファミリー劇場】
TOYDANCE（トイダンス）
ー人形たちと7つの不思議な箱ー

ニューヨークを拠点に活動している日本人舞踊家・佐藤亜紀率いる"アキスタジオ・ダンスカンパニー"を招聘し、7つの箱を使ったダンスパフォーマンスを公演した。お芝居のようなあらすじをもたないダンス公演に、大人の観客からは「子どもにどのように説明したらよいのか？」と問われることがあったが、観終わった後には、心にストレートに語りかけてくるダンスの表現に誰もが楽しんでいるようであった。それぞれの年齢によって感じ方は違うもので、指の動きや音に反応する小さな子どももいれば、具体的な物や動きを楽しむ子どももいて興味深かった。大人はついつい意味を見いだそうとして考え込んでしまいがちだが、この「トイダンス」の素直でわかりやすい表現と、身体で表現するコトバの豊かさに、皆感動していた。この公演を通して、多くのファミリーがダンスに親しみを感じていただけたと思う。また、日本人とアメリカ人の共同作業による公演は、両国の文化交流につながったと思われる。

8月23日～27日　青山円形劇場

作・演出・振付：佐藤亜紀　出演：[アキスタジオ・ダンスカンパニー] 佐藤亜紀、笹沼暁子、野崎啓介、ねこまひろし、ブレンダン・マッコール、トーマス・アルドリッチ、アダム・フォレスト

後援：東京アメリカン・センター　主催：こどもの城、キリン福祉財団

TOYDANCE
（トイダンス）

【第13回こどもの城・キリン・ファミリーオペレッタ】

「まんぷく村のハムスター　キック5～あかねちゃんの涙が虹になる」

オリジナルの童話を、歌やバレエ、生演奏で綴るお正月恒例のファミリーオペレッタ。〔こどもの城〕のスタッフで創作するこの作品は、今年で13年目を迎え、おとなも子どもも楽しめるファミリー向け公演として、常に高い人気と安定した動員を保っている。

上演は、飼い主とはぐれてしまったペット達が住む"まんぷく村"を舞台にした「まんぷく村のハムスターキック」シリーズの第5弾。三つ子の弟たちの面倒を見ながら家業の手伝いをするあかねちゃん。常に自分の子を二の次に考え、家族や周囲のために生きてきた少女が、まんぷく村での事件を通して初めて素直に涙を流せるようになるまでを描き、どんな時でもやさしさや思いやりを忘れずにいられるように、そんな心のありかたを素直に明るく表現した。"やさしさと思いやり"というシンプルなテーマを、暖かで楽しい登場人物たちが繰り広げる童話の世界と、観客参加型の演出により、観客を物語のなかに引き込み、今回が最終回となるシリーズの集大成として、子どもだけでなく大人からも多くの反響を得ることができた。今後も、現代社会では忘れられがちな心の豊かさ、大切さを感じとれるような良質な舞台作品を創作し、より多くのお客さまに提供したい。

脚本＝山下哲　演出＝高谷静治　出演＝オペラクリエーション・イン・青山、こどもの城児童合唱団、平多正於舞踊研究所、岸辺バレエスタジオ、他　共催＝キリン福祉財団

■ミューズ・イン・青山～PONTA BOX MEETS 吉田美奈子～

平成11年度に青山円形劇場で行い大好評だったメンバーによる青山劇場公演。青山円形劇場版では舞台と客席の一体感という円形の特性を十分に用いた公演だったが、青山劇場版はブラスも加えて、よりスケールの大きなコンサートとなった。また、インターネットによる生中継も行った。

出演：PONTA BOX（村上"ポンタ"秀一、佐山雅弘、バカボン鈴木）、吉田美奈子

特別協賛：㈱ライブドア、後援：ビクターエンタテインメント㈱

■音楽の玉手箱2000

今年の「音楽の玉手箱」には、中西俊博、佐山雅弘、さねよしいさ子という円形劇場に馴染みの深い3人のアーティストが集まった。中西俊博は「ア・ラ・カルト」、佐山雅弘は「月猫えほん音楽会」、そして、さねよしいさ子は「円形音楽会」のメンバーである。このように、アーティストに愛される劇場であること、劇場を愛してくれるアーティストを通じて劇場の顔が出来てくることはとても重要なことと思われる。

①中西俊博Live2000～21世紀の＊＊＊～

出演：中西俊博（ヴァイオリン）、有田純弘（ギター）、岡部浩美（ピアノ）、クリス・シルバースタイン（ベース）、協賛：ヤマハ

②佐山雅弘SOLO PIANO～a Point of the Globe

出演：佐山雅弘（ピアノ）、柏木玲子（エレクトーン）

③さねよしいさ子円形音楽会2000

出演：さねよしいさ子（ヴォーカル）、鳩野信二（ピアノ）、久下惠生（ドラム）、関島岳郎（チューバ）、近藤研二（ギター）、栗原正己（ベース）、

まんぷく村のハムスターキック

■第15回こどもの城マタニティ・コンサート ～竹村浄子・ピアノの調べ～

妊婦さんとその家族の方に、音楽を聴いてリラックスしてもらおうという「こどもの城マタニティ・コンサート」も1986年の第一回以来、今年で15回目を迎えた。今回のアーティストにはクラシックのピアニスト・竹村浄子を迎えて、シューマンの「子供の情景」などを演奏した。また、「えほんDEクラシック」と題して、絵本の朗読とピアノ演奏のアンサンブルを行った。恒例のマタニティ呼吸法指導や産科医と小児科医とのメディカル・トークもあり、「マタニティ・コンサート」として14年間の蓄積を発揮したものとなった。

出演：竹村浄子（ピアノ）、能祖将夫（朗読）、野末源一（メディカル・トーク）、巷野悟郎（メディカル・トーク）、市川英子（呼吸法指導）、梅田幸恵（司会）

協賛：㈱人形の秀月、雪印乳業㈱

■月猫えほん音楽会2000

昨年公演し大好評を得た作品の2000年版。親子（小学生）を対象にした招待公演で、1600名の定員に対して2883世帯（7757人）もの応募があった。

舞台設定は、満月の夜に猫たち（出演者と観客）が集まり、月に絵本の絵を映しながら、ジャズピアノの即興演奏と絵本の朗読のアンサンブルを楽しもうというもの。今年は絵本を一部、新しいものに替えて公演した。前述のアンサンブルはこの企画の独創性と魅力を支える大きな特徴となっているが、もう一つの特徴として観客参加が挙げられる。開場時に観客はフェイスペインティングを施して猫に変身し、また、入場時には「猫道」と称する布製のトンネルを通って会場内に入っていく。さらにプログラムの中盤には観客を数人舞台上に上げてパントマイムや朗読に参加してもらいながら物語（「注文の多い料理店」）を作っていくというシーンもあり、親も子も楽しめる仕掛けが施されている。

今年は茅ヶ崎市民文化会館（神奈川県）と滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール（滋賀県）へのツアーも行った。

演出：吉澤耕一、構成：能祖将夫、美術：小竹信節、出演：佐山雅弘（ジャズ猫）、中込佐知子（白猫）、本多愛也（マイム猫）、能祖将夫（読み猫）

共催：財団法人こども未来財団、協力：東京動物園ボランティアーズ

第15回青山バレエフェスティバル

■第14回青山演劇フェスティバル～漂流演劇2000・世紀の最果てを流れ流れし物語～

20世紀最後の年の青山演劇フェスティバルは、テーマに「漂流」を選んだ。景気が冷え込み、出口の見えない不安感が深まる中、社会も人々も明確な指針を失ってフワフワと漂っているようなムードに包まれている。この「漂流感」をテーマとして、それを演劇で捕らえてみようという試みである。参加作品は次の4本、いずれも独自の切り口で意欲的な作品を発表した。協賛＝富士通株式会社、提携＝東京国際舞台芸術フェスティバル

①遊◎機械／全自動シアター「メランコリー・ベイビー」
作：高泉淳子、演出：白井晃、自動人形作：ムットーニ、出演：筒井道隆、高泉淳子、福井貴一、白井晃、ムットーニ

財団法人東京都歴史文化財団創造活動支援事業

②弘前劇場「冬の入口」
作・演出：長谷川孝治、出演：福士賢治、畑澤聖悟、後藤伸也、永井浩仁、佐藤誠、山田竜大、中島剛、佐藤てるみ、藤本一喜、杉原文子、大作綾、濱野有希、佐藤友美、長谷川等、伊藤哲哉
TIF 企画公演、TIF 2000 リージョナルシアター・シリーズ参加作品

③ク・ナウカ「王女メディア」
原作：エウリピデス、台本・演出：宮城聡、出演：美加里、阿部一徳、川相真紀子、吉植荘一郎、中野真希、吉田桂子、大高浩一、中村優子、榊原有美、江口諒、棚川寛子、他

④羊団×青山円形プロデュース「水いらずの星」
作：松田正隆、演出：水沼健（MONO）、出演：金替康博、内田淳子

芸術文化振興基金助成事業

■ア・ラ・カルト～役者と音楽家のいるレストラン～

1987年の初演以来大人気を博し、今や青山円形劇場の冬の風物詩と定着した当公演も今年で12年目を迎えた。全22公演、約8000枚のチケットは完売である。

昨年から舞台の形を完全円形に替えてのリニューアル版で、さらに今年はビジターという位置づけでゲストの平沢智を迎えた。そのことにより役者が4人になり、表現の幅が広がった。また音楽も今年はスタンダード・ナンバーを使わずに、ほとんどすべてを中西俊博のオリジナル曲で組み立てた。結果、このシリーズの中でも1、2を争うほど完成度の高い舞台とすることができた。

ア・ラ・カルト

「ア・ラ・カルト」は毎年変わらぬテイストを保ちながらも、いかに新味を加えていくかが問われる舞台である。お客様も毎年変わらぬ味と、その年ならではの味の両方を求めている。その期待に応えながら長く続けていくには、作り手がマンネリズムに陥らず、絶えず新鮮なアプローチを試みていかなくてはならないということを実証した舞台であった。

恒例の大阪公演（近鉄アート館・主催：近鉄百貨店）も10回目を行った。

構成：白井晃、演出：吉澤耕一、台詞：高泉淳子、音楽監督：中西俊博、出演：高泉淳子、白井晃、陰山泰、平沢智、中西俊博（ヴァイオリン）、細野義彦（ギター）、北島直樹（ピアノ）、クリス・シルバースタイン（ベース）協賛：キリン・シーグラム(株)、富士通(株)

平成12年度公演演目一覧表

青山劇場

公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
〈自主公演〉	(日)	(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
青山バレエフェスティバル ～ラストコンサート～	8.11～13 (3)	2	A：7,000・B：6,000	2,384	1,768	74.2	
ミューズ in 青山 ～PONTA BOX MEETS 吉田美奈子	12.3 (1)	1	6,300	1,194	840	72.0	
(小計) 2	(4)	3		3,578	2,628	73.4	
〈提携公演〉							
「KENJI SHOCK」	12.15～17 (3)	2	6,300	2,290	2,013	87.9	
「エンジェルズ・アイ＆ティアーズ」	12.24 (1)	2	5,500	1,156	760	65.7	
(小計) 2	(4)	4		3,446	2,773	80.5	
(内部利用)							
「こどもの城15周年記念　ずっと友だち」	8.26～27 (2)	2	前売：1,700 当日：2,000	2,220	1,334	60.1	
(小計) 1	(2)	2		2,220	1,334	60.1	
〈貸し館〉							
「ザ・コンボイ・ショウ」 (アニマ)	4.1～9 (9)	8	S：10,500・A：8,400 B：6,300	9,584	8,516	88.9	
「アニー」 (日本テレビ)	4.17～5.14(28)	34	S：7,800・A：5,800	37,844	30,854	81.5	
「ラバーダンス」 (ミュージックリーグ)	5.15～16 (2)	3	全：6,500	3,492	2,606	74.6	
「中森明菜2000」 (ミュージックリーグ)	5.17～21 (5)	4	S：8,000・A：7,000	4,648	4,308	92.7	
「オケピ！」 (パルコ)	5.17～7.9 (46)	44	S：10,500・A：8,400 B：6,300	48,028	47,358	98.6	
少年隊ミュージカル　PLAYZONE (ヤングコミュニケーション)	7.10～8.10(31)	36	11,000	39,648	39,027	98.4	
ピーター・ライト版「くるみ割り人形」 (スターダンサーズ・バレエ団)	8.14～23 (10)	8	S：10,000・A：7,000	8,554	6,328	74.0	
岸辺バレエ　(岸辺バレエスタジオ)	8.28～29 (2)	1	A：3000	1,200	1,000	83.3	
室田純子コンサート	9.19 (1)	1	全7000	1,178	1,178	100.0	
今陽子コンサート　(アイエス)	9.20～21 (2)	2	S：6,000・A：5,000	2,312	1,545	66.8	
五木ひろしコンサート　(アイエス)	9.22～24 (3)	2	S：10,000・A：8,000	2,313	2,176	94.1	
石川さゆりコンサート (ビッグワンコーポレーション)	9.25～30 (6)	6	SS：10,500・A：8,400	6,918	6,763	97.8	
ペギー葉山コンサート (ミュージックリーグ)	10.2 (1)	1	S：10,000・A：6,000	1,137	1,052	92.5	
「Can't Stop Dancin'」 (名倉ジャズダンススタジオ)	10.3～8 (6)	6	S：7,000・A：6,000	6,732	6,585	97.8	

公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
本田美奈子コンサート	10.12～13 (2)	1		1,150	1,038	90.3	
ザ・コンボイ・ショウ「新タイムオンネル」(アニマ)	10.16～29 (14)	11	前：7,350・7,500	13,178	12,186	82.5	
「ワンスアポンアマットレス」(東宝)	10.30～11.30 (32)	40	S：12,600・A：7,500 B：4,000	47,920	38,992	81.4	
バンブーオーケストラ	12.1 (1)	1	前：4,000・当4,500	1,084	622	57.4	
坂田おさむコンサート	12.2 (1)	2	前：2,625・当3,150	2,300	1,607	69.9	
アニークリスマスコンサート (日本テレビ)	10.22～23 (2)	4	S：5,000・A：4,800	3,468	4,059	86.9	
「ラ・カルナヴァル」(ピュアマリー)	10.25～26 (2)	3	S：9,000・A：7,000	3,468	2,150	62.0	
サクラ大戦帝国歌劇団新春歌謡ショウ (SEGA)	10.29～1.7 1.1/1.2は休み (8)	8	SS：8,000・A：7,000 B：5,000	9,447	8,588	90.9	
林英哲コンサート	1.25～28 (4)	3	本席：6,000 立見：5,500	3,435	3,194	93.0	
箏&パーカッション	1.30～31 (2)	1	全席：4,500	1,146	657	57.3	
ポーラ化粧品全国大会	2.6～9 (4)	1	無料	1,200	1,200	100.0	
ミッシング・ピース	2.26～28 (3)	2	S：4,500・A：3,500 立見：2,500	2,084	1,763	84.6	
Sans Filtreコンサート	3.3 (1)	1	本席：8,400 立見：6,300	1,198	1,086	90.7	
山本達彦コンサート	3.4 (1)	1	全席：6,000	1,150	801	69.7	
オラクルアカデミー	3.5～7 (3)	2	無料	2,400	2,400	100.0	
「野獣郎見参！」	3.8～31 (24)	25	S：8,400・A：5,800 エキストラ：7,350	29,890	27,111	90.7	
(小計) 30	(256)	262		299,310	266,750	89.1	
青山劇場計 35	(266)	271		308,554	273,485	88.6	

❷ 青山円形劇場

公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
〈自主公演〉	(日)	(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
五線譜のなかの動物たち「パパゲーノ!」	4.1～3 (3)	6	2,800	1,994	1,543	77.4	3.21から続演
音楽の玉手箱2000	4.8～14 (7)	7		2,381	1,903	79.9	
1.中西俊博	4.9 (1)	1	5,000	394	364	92.4	
2.佐山雅弘	4.10 (1)	1	3,800	280	222	79.3	
3.さねよしいさ子円形音楽会	4.11～13 (3)	4	4,000	1,331	1,032	77.5	
4.マタニティーコンサート	4.14 (1)	1	マタニティ：無料	376	285	75.8	
EAST DRAGON 2000	6.26～29 (4)	4	4,500	920	499	54.2	
第2回CIOFF「ワールドフォークロリアーダ」	7.26～31 (6)	4	2,500	1,312	498	38.0	
ことばバラエティショー「月猫えほん音楽会」	8.1～4 (4)	5	無料	1,800	1,521	84.5	
こどもの城・キリンファミリー劇場「トイダンス」	8.21～27 (7)	9	2,600	2,694	1,932	71.7	

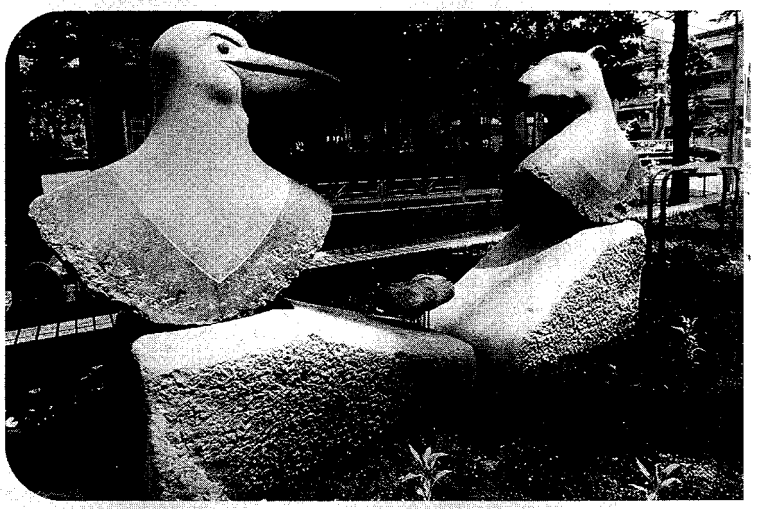
公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
第13回青山演劇フェステバル 1.「メランコリーベイビー」 2.「冬の入り口」 3.「王女メデイア」 4.「水入らずの星」	10.9～11.8 (31) 10.9～25 (17) 10.26～29 (4) 10.30～11. (7) 11.6～8 (3)	32 19 4 6 3	1．プレヴュー：4,000 全席：4,800 2．一般前売：2,800 当日：3,000 学生前売：2,000 当日：2,500 高校生以下：1,500 3．指定前売：4,300 当日：4,500 桟橋前売：3,500 当日：3,800 4．前売：2,800 当日：3,000	10,514 6,751 1,177 1,857 729	9,229 6,512 717 1,652 418	88.4 96.5 60.9 89.0 57.3	
ア・ラ・カルト ー役者と音楽家のいるレストランー	12.8～26 (19)	22	5,500	8,587	8,003	93.2	
こどもの城・キリン・ファミリーオペレッタ 「まんぷく村のハムスターキック」	12.27～1.9 (10) (12.30～1.2は休)	12	2,800	4,464	4,359	97.6	
Amanda Miller「沈黙の対話」	3.5～7 (3)	2	4,000	416	301	72.4	
五線譜のなかの動物たち「パパゲーノ」	3.21～31 (11)	15	2,800	5,101	4,035	79.1	4.3まで続演
(小計) 11	(105)	118		39,663	33,555	84.6	

公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
〈貸し館〉	(日)	(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
遊◎機械全自動シアター 「S エス」ー記憶のけものー	4.4～20 (17)	18	4,500	6,423	6,119	95.3	3.21から続演
日本口琴協会　「ホムス・トゥオヤル」	4.21 (1)	1		341	222	65.1	
「鶴瓶噺2000春」	4.22～26 (5)	5	前：5,000・当：5,500	1,875	1,694	90.3	
「仁科友理コンサート」	4.27 (1)	1	前：5,000・当：5,500	268	201	75.0	
「がんばれ！難病と闘う人々」 HAWAIAN CHARITY CONCERT	4.28～29 (2)	2	6,000	592	789	82.6	
金松由美「マイロード」	4.30～5.1 (2)	2	3,500	414	208	50.2	
「五島良子コンサート」	5.6 (1)	1	前：5,000・当：5,500	326	273	83.7	
「三矢直生コンサート」	5.7 (1)	2	5,000	296	274	92.6	
ALL AROUND MOTHER スィートフラジャイル ジャンキースクエア プラシーボデパート ファンの集い シャイバン	5.15～6.18 (35) 5.15～23 (9) 5.24～31 (8) 6.2～10 (9) 6.10～ (1) 6.11～18 (8)	35 8 9 9 1 8	4,000 4,000 4,000 4,000 4,000 4,000	11,483 2,731 2,999 2,762 321 2,670	9,776 2,185 2,479 2,608 98 2,406	85.1 80.0 82.7 94.4 30.5 90.1	
文化放送「手仕事屋きち兵衛ｺﾝｻｰﾄ」	6.22 (1)	1	5,000	329	283	86.0	
テレサ林「焔」	6.23 (1)	1	S：8,000・A：7,000	222	169	76.1	
ステージ・ドア　「時の河」	6.24～25 (2)	3	2,500	940	754	80.2	
フキコシ・ソロ・アクト・ライブ「両B面」	6.30～7.13 (14)	14	前：4,500・当：4,800	4,602	4,049	88.0	
渡辺真知子「～My room～」	7.14～15 (2)	2	6,000	780	654	83.8	
TRINITE「EN」	7.17～18 (2)	2	前：4,000・当：4,500	556	382	68.7	

公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
ひとみ座「マウイ・チキチキ」	7.19～25（7）	10	前：3,000・当：3,300 他	1,996	1,413	70.8	
ホットスタッフ「CHAKAコンサート」	8.5～6（2）	2	5,500	561	503	89.7	
岩下徹「放下13」	8.7（1）	1	前：3,000・当：3,500	261	127	48.7	
タチ・ワールド「パシフィック・ムーン・ライト」	8.8～11（4）	5	一般5,000 小中高生：3,000　他	1,238	802	64.8	
テイクシステム「TV収録」	8.17（1）	1	無料	250	250	100.0	
ヘブンリーバンブー「カラフル」	8.28～9.11（15）	17	大人：4,000 高校生以下：3,000	3,763	2,217	58.9	
劇団俳優座「ロッテ」	9.12～24（13）	14	一般：5,250 学生：3,675	4,140	2,427	58.6	
「剣幸うた会」	9.25～26（2）	2	6,000	448	380	84.8	
オフィス・ダム　「カルメン2000」	9.27～30（4）	4	5,000	1,004	868	86.5	
ウイリアム館「ペリクリーズ」	10.5～8（4）	5	前：3,300・当3,700 他	1,326	754	56.9	
パワーボム「Music　Revolution Dance　Renaissance　vol.3」	11.9～12（4）	4	前：4,000・当4,500	1,172	1,084	92.5	
能と狂言「楊貴妃」	11.13～15（3）	3	SS：15,000 S：10,000 A：8,000	836	649	77.6	
ハラホロシャングリラ「Duralumin Case」	11.16～23（8）	7	前：4,500・当：5,000	2,243	1,993	88.9	
星屑の会 「淋しい都に雪が降る」	11.24～30（7）	8	4,000	1,968	1,651	83.9	
キョードー東京「せきらら」	12.1～2（2）	2	前：3,675・当：4,200	588	443	75.3	
創作舞踊展	12.5～7（3）	3	5,000	881	664	75.4	
オスエンターテイメント「沢田知可子＆池田聡」	1.10（1）	1	7,000	395	383	97.0	
テイクシステム「TV収録」	1.11（1）	1	無料	250	250	100.0	
劇団一跡二跳「愛しすぎる男たち」	1.15～23（9）	8	前：3,800・当：4,000 他	2,192	1,393	63.5	
三井コラボレーション「天国の本屋」	1.24～26（3）	3	前：3,500・当：3,700	912	764	83.8	
三重野瞳「MISTAKE」	1.27～28（2）	3	前：3,800・当：4,000	556	421	75.7	
花柳かしほ「河のむこうに」	2.1～2（2）	2	一般：3,500 学生：2,000	412	253	61.4	
ヤマハ音楽振興会「谷山浩子コンサート」	2.3～18（16）	12	6,000	4,664	4,011	86.0	
テイクシステム「TV収録」	2.19（1）	1	無料	250	250	100.0	
日本映画学校卒業公演「漫才病棟」	2.20～26（7）	6	2,000	1,771	1,431	80.8	
タチワールド「マンハッタン・コレクション」	2.27～3.4（5）	7	指定席：6,000 自由席：5,000	2,012	1,829	90.9	
テイクシステム「TV収録」	3.9（1）	1	無料	250	250	100.0	
関東うたり会「トンコリとムックリ」	3.10（1）	1	前：2,500・当：2,800	279	183	65.6	

公演名称		期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
吉本興業　「チハラトーク」		3.11（1）	1	前：2,500・当：2,200	394	366	92.9	
大浦みずき「Una Noche」		**3.12～15（4）**	**4**	**7,000**	**1,160**	**1,103**	**95.1**	
（小計）	**45**	（221）	229		67,619	54,659	80.8	
〈内部利用〉								
こどもフェスティバル		5.2～5（4）	9	無料	2,862	2,396	83.7	企画研修部
人形劇カーニバル		**8.12～15（4）**	**9**	**無料**	**2,916**	**2,491**	**85.4**	**企画研修部**
三味線の夕べ		12.1（1）	1	大人：3,000・子ども：1,500	336	213	63.4	企画研修部
おひさま・おはなしコンサート		**1.13～14（2）**	**2**	**無料**	**590**	**444**	**75.3**	**企画研修部**
ぼくらのサウンド		3.17～20（4）	5	無料	1,221	812	66.5	企画研修部
（小計）	**5**	**（15）**	**26**		**7,925**	**6,356**	**80.2**	
青山円形劇場計	61	（341）	373		115,207	94,570	82.1	
劇場総計	**96**	**（607）**	**644**		**423,761**	**368,055**	**86.9**	

広報部



平成12年度の活動

〔こどもの城〕および、〔こどもの城〕の活動を多くの人に知ってもらうのが、広報部の仕事である。「こども活動エリア」の各部門と大きく異なるのは、〔こどもの城〕という存在があってはじめて成り立つ部門である、ということである。〔こどもの城〕を取り巻く人びとに、知っておいてほしいこと、知らせたいこと、などがあって、はじめて出番となるからだ。

〔こどもの城〕から外部へ向けて、いろいろなメディアを使って、いろいろな方法で多くの人に情報を伝える。基本となる考え方、それをふまえて行われている各部門の活動を、内容や対象を考慮しながら的確に周囲の人たちへ提供することが要求される。たくさんの情報が飛び交うなかで、いかに〔こどもの城〕の情報を伝えることができるかが課題となる。

最近は、夏休みにもなるといろいろなところで「工作教室」「親子○○教室」が行われるようになってきている。《物作り》や《体験》が売り物になる時代になってきた。このような社会環境の変化のなかで、《遊びをとおした体験》をひとつのキーワードに活動している〔こどもの城〕は、他との違いをどのように伝えていけばよいのかが、重要なポイントとなる。《健全育成》のための《手段》として〔こどもの城〕の活動があるという基本理念の再確認をする時期にきているのではないだろうか。

目に見えない部分（活動をとおして子どもたちに伝えたいことがら等々）を、独りよがりにならないように、いや味にならないように伝えることで、提供する情報の差異化を図るなどの工夫が必要になってきている。《一味違う》ところを強調して、〔こどもの城〕への信頼性を高めていかなければならない。国が作った施設ということで、高い信頼を得、それに見合った活動をしてきたつもりだが、開館して15年以上経過した今、改めて多くの人に理解してもらえるように情報を提供していきたい。

具体的な活動の中心となるのは、さまざまな媒体を使った情報提供—「こどもの城ニュース」などの定期刊行物の編集・発行、新聞・雑誌・放送などの外部の各種媒体への情報提供（パブリシティ）—である。これらは、宣伝の要素も含んでいるが、主に広報に属する活動（〔こどもの城〕を理解してもらい、利用者との間に信頼関係を築く活動）である。宣伝に属する活動（来館や参加を促す活動）としてはゴールデンウィーク・夏・冬・春休み特別期間、講座・クラブの募集などのちらしポスターの制作、広告の出稿などがある。

最近は《ＩＴバブル》という言葉も聞かれるようになり、ＩＴ革命でもてはやされ肥大化し、独り歩きする《情報》の見直しの動きもある。インターネットなどの新しいメディアも、だれに、なんのために、なにを、など情報を伝えることの原点を考えながら対応していきたい。質の高い、内容の充実した情報をいかに簡潔、的確に提供できるか、いろいろなメディアをその特質を理解していかに有効に利用していくか、など、ＩＴ時代の広報のあり方を模索していく必要があるだろう。

パブリック・リレーションズ

〔こどもの城〕は、〈あそび〉をとおして児童の健全育成をはかる施設である。子どもたちは遊びのなかからさまざまなことを吸収し、成長していく。〈あそび〉という表記でその意味を強調しているのだが、遊びのどの部分に着目するかは多様であり、一言で説明するのは難しい。《鬼ごっこ》ひとつをみても、体を動かすという面からは身体能力を高める運動に結びつくし、ルールがあるという面では社会性を身に付けることにつながる。どの部分に着目するかで、〈あそび〉の意味もかわってくる。

また《健全育成》も実際的には、感性を育んでほしい、社会性を身につけてほしいなど、それぞれの活動領域に応じた展開がなされているので、これも一言で説明することができない。

子どもも一個の人間である。大人と同じように、さまざまな顔をもち、ときには矛盾する顔をもっている。そのような子どもの成長を手助けするときに、《健全育成》という抽象的な言葉で一律にくくるのは無理がある。体育、造形、プレイ、音楽、ＡＶなどの各領域で行われている〈あそび〉をとおした、それぞれの健全育成活動を積み上げたものが〔こどもの城〕であると考えるのが自然ではないだろうか。まず個々の活動への理解を得ることからＰＲしていきたいと考えている。

(ア) 「こどもの城ニュース」の編集発行

年11回編集・発行。実質的には月刊化である（年末年始に合併号を発行するので年11回となる）。〔こどもの城〕の利用者や周辺の学校、幼稚園、保育所などを主な対象に、〔こどもの城〕の活動を紹介している。さらに、全国の児童館・児童センターにも、都道府県児童館連絡協議会をとおして配付している。

編集にあたっては、〔こどもの城〕の催し物の《お知らせ》に終わるのではなく、それらのプログラムが意図するもの―子どもたちへのメッセージ、それをきっかけにして子どもたちの生活を豊かにするなど―まで伝えられればと考えて紙面作りをしている。直接来館できる人への働きかけと同時に、来館できない各地の児童館関係者の参考になるのではないかと考えている。紙面に限りがあること、私たちの制作能力（文章力や編集力など）などから、意図していることが、どこまで伝えられているかという課題はあるが、よりよい紙面作りをめざしている。

子どもの遊びや子育て支援のプログラムが各地で活発に行われるようになってきているなかで、印刷（活字）媒体の利点を生かした編集を心がけ、〔こどもの城〕の活動をアピールしていきたい。

「こどもの城ニュース」はＢ３版、表面４色（カラー）印刷、裏面１色印刷。各号25,000部発行。主な配付先は下記のとおり。

都道府県児童館連絡協議会など……6,350部
こどもの城友の会……約2,000部
各都道府県民生主管部……1,156部
保育所、幼稚園、小・中学校（各２部）
（渋谷区、港区）……390部
渋谷区町内会長ほか（各２部）……202部
その他（一般入館者、招待者、
見学・視察者など）……約15,000部

(イ) 取材対応・パブリシティ

オピニオン・リーダーとして大きな影響力を持っていた総合雑誌や週刊誌（出版社系、新聞社系）に代わって、情報誌・紙が書店の書棚を独占している。最近は、ＩＴ時代ということもあり、さまざまな情報サイトがインターネットに作られるようになり、情報提供の問い合わせが増えてきている。

子育てへの関心も高まり、子どもや若い家族を対象としたものが、インターネットを中心に増えている。

夏・冬・春休みなどの《おでかけシーズン》にあわせた問い合わせが多いが、月刊誌などの原稿の締め切りは早く、問い合わせを受けた段階でプログラム内容が決まっていないことも多い。早めの決定、早めの宣伝を心掛ける必要がある。

問い合わせを受けた媒体には、毎月１回（月末から月始め）「こどもの城通信」という名称で１～２か月先の情報を提供するようにしている。送付先は新聞社などのマスコミから地域のミニコミまで約160社。ファックスやＥメール、郵送などさまざまな方法をとっている。さらに、各特別期間のプログラム紹介、講座・クラブ等の募集のお知らせなども「こどもの城通信」の特別号として送付している。

本年度の取材件数は、新聞34件、テレビ・ラジオ23件、雑誌30件、その他130件の合計217件。前年に比べ30件の増だった。なかでも、その他が前年に比べ51件と大幅に増えている。そのほとんどは、インターネットの情報サイト関連のもの。多数の新規参入者が情報サイトを立ち上げているようだ。《ＩＴ革命》という社会

の動きの反映が、ここにも現れている。

❷ 宣伝関係

一口に宣伝といっても、新聞広告のように多くの人に広く伝えることに適したものもあれば、ダイレクトメールのように個人に直接はたらきかけ詳しく伝えることに適したものもあり、その手段・方法はさまざまである。

講座・クラブの受講生募集のように地域的に限定されるものもあれば、特別期間プログラムの案内のようにより広範な地域への働きかけが必要なものもある。対象年齢の絞り込み、個々人の興味・関心の持ち方などもあるし、〔こどもの城〕がだれに何を働きかけたいかという主体性とも関係してくる。価値観が多様化している現在、どのような宣伝方法がよいのか、ますます難しくなってきている。

(ア) 新聞広告など

夏休み特別期間、講座・クラブの新年度受講生募集の前などに、別表のような宣伝（新聞広告、新聞折り込み、駅張りポスター）を実施した。

前年度に引き続き、都営地下鉄とのタイアップ広告（沿線の観光案内のポスターで、下部に〔こどもの城〕の広告が入る）で都営地下鉄全駅へポスター掲示し、夏休み特別期間の周知をはかった。さらに、本年度は都営交通の全車両の車内吊り広告を加えて実施した。駅ホーム・通路と車内の２つのポイントで目にすることにより、効果が増大すると考えたからだ。

平成13年度の講座・クラブ募集については、対象範囲が限定されるので、新聞広告を縮小し、新聞折り込み・ポストイン（各戸配付）に重点を移し、経費削減に努めた。ポスト・イン方式は、住居のみを選んで配付できる（場合によっては、一戸建てとマンションの分けることも可能）ので、子どものいない事業場への配付、複数紙講読している家への重複配付を避けることができるなど、無駄をなくすことができるので、ポスト・インができるエリアはこれを中心に、できないエリアへは新聞折り込みを行うことで効率化を図った。

(イ) ちらし・ポスターなど

児童福祉週間（ゴールデンウイーク）、夏休み、冬休み、春休みの各特別期間に催し物案内（ちらし）・ポスターや講座・クラブの募集案内などを作成、配付した。

ちらしについては、〔こどもの城〕に資料請求をしたことのある人をリストアップして、ダイレクトメールを送るようにしている。

❸ その他

(ア) 渋谷スタンプラリー

夏休み恒例の「渋谷スタンプラリー」に本年度も参加した。第16回目。「ＮＨＫスタジオパーク」「こどもの城」「たばこと塩の博物館」「天文博物館五島プラネタリウム」「電力館」「東京都児童会館」の６館で実施。約１万人が参加した。なお、天文博物館五島プラネタリウムは平成13年３月末をもって、閉館。長い歴史を閉じた。

このスタンプラリーは、渋谷駅周辺にある各館が共同で施設の存在と活動をＰＲするのが目的。《点》ではなく《面》でＰＲするのが大きな特長。６館の情報交換の場ともなっている。

(イ) その他

インターネットのホームページ（ＨＰ）は、コンピュータでネットワークされた社会の一種の《掲示板》であり、街角にある町会や行政の掲示板、電柱や壁・塀にはられているビラなどと本質的には同じものといえる。現実の社会ではその場所に行かなければ、掲示したり、見たりすることはできないが、ＨＰでは端末のコンピュータを使って居ながらにしてできる。コンピュータがもたらした《便利なシステム》である。

〔こどもの城〕でもＨＰを開設してはいるが、その管理・運営が十分な体制のもとで行われているとは言いがたいのが現状。今後の課題である。広報部では、プレスリリース「こどもの城通信」、特別期間のちらし、講座募集などの作成時のデータを二次利用する形で、ＨＰに情報を掲載している。

❹ まとめ

《ＩＴ革命》といわれるように、情報技術がめざましい勢いで進歩している。デジタル化、信号の圧縮技術の進歩、高速高容量の通信システム等々、その進歩の速度は《ドッグ・イヤー》と言われるほど、加速度的に早くなっている。

こうしたなかで、情報を取り扱うセクションの重要度は増している。新しい情報伝達の方法が次々と登場しているが、《目新しさ》に目を奪われるのではなく、私たちがどんな情報を、だれに、いつ伝えたいのかという情報伝達の原点に立ち返って、メディアを選んで有効に活用できる力を身につけていかなければならない。どのよ

うな媒体を使うにしても、常に《情報の質》が問われることにはかわりがないと考えるからだ。

また、さまざまな媒体に対応するために、基本となる情報をそれぞれに適した形にアレンジして提供できる能力も必要になる。業務用・一般用・贈答用で梱包が異なるように、同じ商品でも用途によって使い分けることに似ている。核となる1つの情報をそれぞれの対象や媒体に適した形にして提供する—いわば、情報の多角的有効利用の体制作りも考えなければならない。

【平成12年度発行の「こどもの城ニュース」の主な内容】

	発行日	内容	発行部数
第104号	平成12年4月15日	みがけ！　みんなの運動センス～あけてみよう！　動きのかんづめ	25,000部
第105号	5月15日	保育の「よちよちクラブ」（1・2歳児の親子対策）	〃
第106号	6月15日	素材との出会い展～竹と造形～バンブー革命	〃
第107号	7月15日	国際子ども映画祭　第8回キンダー・フィルム・フェスティバル	〃
第108号	8月15日	ボランティア・リーダーをめざすL.I.T.(Leader In Training)の高校生	〃
第109号	9月15日	元気みなぎる〔こどもの城〕の夏休み～〈あそび〉大好き!!	〃
第110号	10月15日	おりがみカーニバル～全国から個性豊かな作品集まる	〃
第111号	11月15日	"音楽"をとおして"ふれあい"を～音楽ロビーのプログラム	〃
第112号	12月15日	2001年は「ボランティア国際年」"あそびのボランティア"大集合	〃
第113号	平成13年2月15日	〔こどもの城〕の音楽講座・クラブ～いろいろな国の音楽を楽しむ	〃
第114号	3月15日	《おにごっこ》とスポーツの共通点！？	〃

※年末年始は合併号とし、年11回発行した。

【平成12年度に作成した印刷物などの一覧】

名称	名称	内容
平成13年度講座・クラブ一覧	240,000部	平成13年度全講座・クラブの案内（B4、4ページ、2色刷り）
〔こどもの城〕の案内（和文）	200,000部	9月に100,000部、3月に100,000部増刷
その他（各種ちらし・ポスター）	223,500部	GW・夏休み・冬休み・春休み等特別期間の催し物案内、講座・クラブ等募集案内（2期、3期、夏休み短期講習会）等のちらし等

※「事業年報」の編集業務は、11年度から事業本部付きスタッフが担当することになった。

【掲載した新聞広告の一覧】

掲載新聞名	掲載形式	掲載日	内容
朝日新聞　都内各版	全5段ほか	平成12年7月5日～9月2日	夏休み特別期間の〔こどもの城〕のPR。
〃　少年少女スポーツ（埼玉）	全2段	平成12年7月12日	
朝日小学生新聞	全5段	平成12年7月20日	
毎日小学生新聞・毎日中学生新聞	タブロイド3段	平成12年7月14日	
東京新聞	全5段	平成12年7月17～19, 21日、8月12, 15日	冬休み特別期間の〔こどもの城〕のPR。
日刊スポーツ新聞　東京本社版	7×10cm	平成11年7月18日	
朝日小学生新聞	全5段	平成12年12月20日	
東京新聞	全5段	平成12年12月18, 24日、平成13年1月1日（新年号）	
毎日小学生新聞・毎日中学生新聞	タブロイド3段		
朝日新聞　都内各版ほか	全5段ほか	平成13年1月25日～3月23日	平成13年度1期の〔こどもの城〕講座・クラブ受講生募集
朝日小学生新聞	全5段	平成13年2月16日	
毎日小学生新聞・毎日中学生新聞	93×127mm	平成13年3月22日	春休み特別期間の〔こどもの城〕の　PR。

【その他の広報活動】

形式	日時	掲載日
都営地下鉄駅ばりポスター	平成12年7月16日～8月5日	都営地下鉄とのタイアップ広告。B全版ポスター「板橋の花火大会」の記事下200×728mm　のスペースで〔こどもの城〕の夏休み特別期間をPR。都営地下鉄全75駅に掲示。
都バス・都電の車内吊り	平成12年7月30日～8月5日	都営交通とのタイアップ広告。駅ばりポスターのほか、都バス・都電の全車両に中つり広告を実施。80mm×515mm。
新聞折り込み	平成13年2月8日	平成13年度開講の〔こどもの城〕の全講座・クラブの案内と受講生募集のちらしを、〔こどもの城〕周辺地域の読売新聞と毎日新聞の朝刊（合計7万5千部強）に折り込みむ他、本年度新たにサンケイリビングの各戸ポストイン（14万部強）を行った。
サンケイリビングのポストイン	平成13年2月10日	

2000コールデンウィーク特別期間（チラシ・ポスター）

2000夏休み特別期間（チラシ・ポスター）

2000→2001冬休み特別期間（チラシ・ポスター）

2001春休み特別期間（チラシ・ポスター）

国際交流担当

平成12年度の活動

交流プログラム

平成12年度は〔こどもの城〕の国際交流事業が転機を迎える年度となった。開館以来〔こどもの城〕の国際交流事業は①〔こどもの城〕を利用する日本語を解さない人たちへのサービス　②英語・日本語の2カ国語による異文化理解と交流のための講座の実施　③前述の講座受講生の発表を目的とした「青山円形劇場」での公演事業　④首都圏のインターナショナルスクール間の交流を目的とした「アートスケープ」展に代表される外部団体との協力による事業　⑤外国の類似施設や政府関係者などの見学や交流目的の訪問の受け入れ、などの五つの要素から成り立ってきた。そしてこのうち②の講座と③の公演が予算の面からも、参加者数の面からも、国際交流事業のなかで大きな割合を占めていた。

7月末に開館以来この講座と公演を担当していたスタッフが〔こどもの城〕を退職することになった時、これらの事業の継続について検討した結果、次の様な理由から講座と公演事業を取り止めることとした。第一に、これらの事業が、担当する講師の個人的なキャラクターに拠るところが大きかったこと、第二に、英語圏文化の紹介を中心とした講座が今日のアジア、アフリカ、南米などを含めたグローバルな国際交流の概念とはズレてきていると考えたからである。とはいえ、年度当初に計画した講座を途中で中止することは、受講生とその保護者に多大な迷惑を掛けるところとなった。〔こどもの城〕は保護者に対する説明会を開いて経緯を説明し、謝罪すると共に、登録料の返金や、希望者には他講座への優先受付を行った。また①〔こどもの城〕を利用する日本語を解さない人たちへのサービスについては、現有のスタッフが協力し、季節休み毎の行事案内チラシや講座案内の英訳版を作成した。これらは従来からのそれぞれの仕事配分であり、特に支障をきたすことはなかつた。

(ア)　「アートスケープ2001」

〔こどもの城〕で16回目を迎えた「アートスケープ2001」は3月1日から11日までアトリウム・ギャラリーを使って開催された。参加校はアメリカンスクールインジャパン、ブリティッシュスクールイントウキョウ、クリスチャンアカデミーインジャパン、キニックハイスクール、武蔵野東学園、西町インターナショナルスクール、聖心インターナショナルスクール、清泉インターナショナルスクール、セントメリーズインターナショナルスクール、横浜インターナショナルスクール、横須賀ミドルスクール、横田ミドルアンドハイスクールの計12校となり、昨年より1校増えた。

日本に住む50数カ国の子どもたちや、海外で教育を受けた日本の子どもたち、小学5年生から高校3年生までの生徒たちによる水彩画・油絵・版画・陶芸・ガラス工芸・建築・写真など600点以上の作品がアトリウム・ギャラリーに展示された。

本年も設定日2月28日の夕方にアトリウムで参加校の教師、生徒、関係者ら約300人が集まるオープニングセレモニーが行われた。会期中の日曜日に行われる恒例

アートスケープ2001

のワークショップは3月4日（日）に行われた。昨年度までの陶芸作りのワークショップは持ち帰りの手間や破損が心配なため、代わって、クッキーを使用したマーブルペインティングと、保護者たちも参加してのドリームキャッチャー（北米ネイティブアメリカンのお守り）づくりが行われた。

また前回聖心インターナショナルスクールの先生の尽力でアートスケープのホームページが開設されたが、本年度はさらに多くの画像を取り込み、単なる案内にとどまらず、〔こどもの城〕に来られない人にもアートスケープ展を楽しんでもらうことが出来た。

(イ) 『日本・ノルウェー友好こども絵画展～瞳をひらいて』

ノーベル平和賞の授与国であるノルウェー王国外務省が、アルフレッド・ノーベルとノーベル平和賞を記念して行った「平和と国際理解」のためのプロジェクト。その一環として日本とノルウェーの子どもたちに参加を呼び掛けて絵画コンテストが行われたが、コンテストの入賞作42点に「オスロこども国際美術館」のコレクション約100点を加えた展覧会が、平成13年3月26日から（3月24・25日はプレヴュー）4月15日まで〔こどもの城〕地下1階フリーホール、3・4階ロビーを使用して開催された。ノルウェー王国外務省が同国の在日大使館を通じて、同展を開催するにふさわしい場所として〔こどもの城〕に協力を求め、実現したものである。入賞作は平和の尊さや地球全体を大切に思う気持ちが表現されているもので、日本・ノルウェー両国の表現方法の違いも見る人たちの興味を惹いていた。また「オスロこども国際美術館」のコレクションは世界の異なる国や地域・環境に暮らす子どもたちの生活や意見、心象風景などを表現したもので、子どもたちがそれぞれの環境のなかで精一杯生きている様子が伺われる点が共感を得ていたと思う。

会場設定はオスロこども国際美術館のアラ・ゴールディン館長のアイディアとこどもの城造形事業部の共同作業ですすめられ、比較的重いテーマの作品の多い会場を明るく楽しい雰囲気に構成していた。3月26日のオープニングセレモニーには、国賓として来日中のソニア王妃陛下が皇后陛下と共にご来館になり、テープカットの後絵画展をご覧になっただけでなく、ノルウェー人の子どものバイオリン演奏や「こどもの城合唱団」のコーラスを楽しまれた。

この事業は外部から持ち込まれた企画であったが、〔こどもの城〕が今までの活動を通じて築いてきたイメージと、例えば会場設定に際して造形事業部が発揮した展示に関するノウハウがあったからこそ受け入れることができた企画であった。結果的には新聞など報道機関にも紹介され、〔こどもの城〕の存在を多くの人に知ってもらうとともに、国際交流にも多少なりとも寄与できたのではないかと思う。

(ウ) 今後の国際交流

日本に在住するアジア、アフリカ、南米などの地域の人たちの数が増加し、地域での生活でこうした異文化に触れ興味を持つ人たちが増えてきている。若者を中心とした中国語や韓国語、ポルトガル語などの習得者の増加も、異文化を意識させる人たちが身近に増えてきたということと無関係ではない。特定の人による特定の地域文化の紹介だけが国際交流ではなく、誰もが自分のフィールドで異文化と向き合い、ある時はそれを受け入れ、ある時は拒み、ある時は反対に自分の文化を他者に示すことによって国際交流が図れるはずである。幸いにして〔こどもの城〕では、例えば音楽事業部による世界の民族音楽の紹介や、AV事業部でのキンダーフィルムフェストジャパンのように、それぞれのジャンルで広い地域の文化について紹介をしてきた実績がある。今後はこうした実績を生かして、自分たちそれぞれが自分のフィールドを生かした国際交流にチャレンジしていきたい。各部間にわたる事業は企画研修部を窓口とし、また日本語を解さない人たちへの案内・対応は、広報・総合案内・企画研修部と協力して対処していきたい。

❷ 特別期間などに実施した事業

(ア) 国連新しい世紀　子どもの願い展（ゴールデンウィーク）

国連広報センター・こどもの城・読売新聞社・日本テレビ放送網の主催、日本航空の協力で、世界の子どもたちによる絵画などの作品展示とワークショップ、インターネットによる情報発信・会話をおこなった。この催しは、アメリカ合衆国・ニューヨークの国連本部で開催されたものを、日本巡回展として〔こどもの城〕のギャラリーで実施したものである。

職員がニューヨークまで下見・打ち合わせに行ったり、予定した作品の一部が届かないトラブル等、準備段階では苦労もあったが、外部団体との協力で大きなプロジェクトができ、〔こどもの城〕のよいPRにもなった。

ワークショップで子どもたちが作り上げたオフジェ「地球の未来」は、こどもの城アトリウムに飾られたのち、〔こどもの城〕に隣接した国連大学本部ビル内で長期間に渡り展示された。

また、オープニングセレモニーに際して来日したアメリカ・アトランタのスタッフと子どもたちを歓迎するため、職員有志の協力でホームステイや都内・近郊の観光なども企画することとなったが、催しの成功だけが大切なのではなく、人との関係づくり・心遣いなどにかかわるすべてが、大切にしなければいけない重要な要素だと改めて痛感した。

この催しのインターネットを使った情報発信・会話の部分については、日本テレビのホームページで管理・運営し、〔こどもの城〕のホームページにもリンクした。

アートスケープ2001

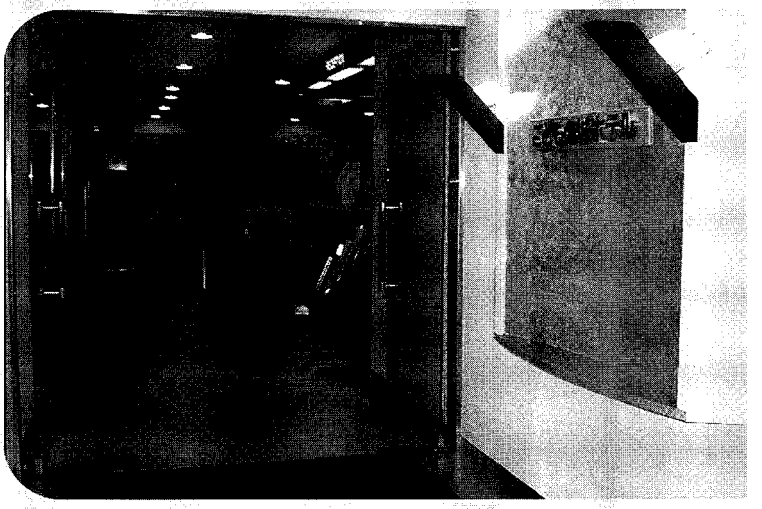
平成12年度活動一覧表

一般利用

〈特別期間〉

名　称	期　間	備　考
国連新しい世紀子どもの願い展	4.22～5.21	ギャラリーでは、世界の子どもたちの絵画などの作品の展示、創作・メッセージ、（来館者が参加できるワークショップ含む）情報発信・会話（インターネット）をおこなった。作品は、「戦争や紛争のない平和な世界のために」ほか5つのテーマで子どもたちが描いた絵画や写真、立体など100点。ワークショップではカラー粘土を使って小さな「地球」を一人一個作り、それをつなげて全員で大きなオブジェ「地球の未来」を製作。4月21日（金）にはオープニングセレモニーを行い、日本・アメリカ両国から、出品者である子どもも参加した。夜にはレセプションを、4月22日（土）には造形スタジオで、子ども交流会も実施した。主催：国連広報センター・こどもの城・読売新聞社・日本テレビ放送網。協力：日本航空

業務部



平成12年度の活動

業種別の状況

(ア) ホテル

ホテルの利用状況を見ると、客室利用率は和洋室全体で80.0％、客数利用率では65.0％となっており、前年度に比べ客室利用率で3.7％の減少、客数利用率で4.8％の減少となった。客数利用率が客室利用率に比べて低いのは、ツインルームのシングルユースおよび和室の利用人員が客室定員より少ない場合が多かったためである。

3室しかないシングルルームの利用率は、窓のない部屋であるにもかかわらず、94.8％と極めて高率であり、ツインルームのシングルユースも28.5％と利用率が高く、シングルルームの需要が高い。

4月から、ホテル業界の価格競争に対抗し、利用率の回復を図るため、新たに以下のように宿泊料金の割引及び宿泊者サービスの充実を図ることとした。

①関係団体・業務委託会社役職員、友の会会員の利用、紹介割引
②お得意様（会社、個人）割引
③ウェルカム・イン（外国人旅行者紹介団体）紹介割引
④当日予約割引
⑤朝食セット割引
⑥リニューアルオープン割引（4月1日～9月30日）
⑦宿泊者売店利用割引サービス
⑧女性客のD・H・C利用無料サービス

前年度に引き続き、旅行情報誌、ホテルガイドへの広告の掲載や関係団体の全国会議でのパンフレットの配付など宣伝に努めた。

【ホテルの利用状況】

客室種別	利用客室数	客室利用率	利用客数	客数利用率
シングル	1,007室	94.8％	1,007人	94.8％
ツイン	5,730室	80.9％	10,265人	72.5％
和室	625室	58.9％	3,005人	44.7％
合計	7,362室	80.0％	14,277人	65.0％

（注）利用率は、次により算出した。

(1) 客室利用率＝$\dfrac{\text{利用客室総数}}{\text{営業日数（354日）×販売可能客室数（26室）}}$×100

(2) 客数利用率＝$\dfrac{\text{利用客室総数}}{\text{営業日数（354日）×販売可能客室人（26室）}}$×100

※総客室数は27室、総定員は64人だが、このうちツイン1室を予備室としているため、販売可能客室数は26室、収容可能客数は62人とした。

(イ) 研修室・ギャラリー

研修室の利用率は合計で59.0％で、前年度より3.0％減少した。

利用の内容は、外部への有料貸しのほか、〔こどもの城〕の企画による催事などにも利用されている。とりわけ春・夏・冬休み、ゴールデンウィーク（児童福祉週間）などの特別期間中は、研修室、ギャラリーのいずれも内部利用の割合が極めて高く、〔こどもの城〕の限られたスペースでの充実したプログラム作りに寄与している。

研修室の広告は、産労総合研究所の「全国研修施設／講師一覧」、社会経済生産性本部の「全国研修室便覧」（インターネット版を含む）に毎年掲載している。

【貸し室の利用状況】

客室種別		有料利用		内部利用		計	
		件数	利用率	件数	利用率	件数	利用率
研修室	午前	1,690	47.7	209	5.9	1,889	53.6
	午後	2,283	64.3	216	6.1	2,499	70.4
	夜間	1,329	45.8	173	6.0	1,502	51.8
	合計	5,302	53.1	598	6.0	5,900	59.0
ギャラリー		34	9.5	204	56.8	238	66.3

（注）利用率は、次により算出した。

(1) 客室利用率＝$\frac{\text{各室を午前・午後・夜間各1件とした場合の年間利用件数}}{\text{年間営業可能件数}}$×100

※平成12年度における年間営業可能件数は、午前3,540　件、午後3,550件、夜間 2,902件の合計 9,992件（日曜日・祝日の夜間休業のほか、じゅうたんクリーニングなどのため利用不能となった件数を除く）である。

(2) ギャラリー利用率＝$\frac{\text{利用日数}}{\text{365日－（年末年始5日＋基幹停電日1日）＝359}}$×100

(ウ) その他の業務

売店、自動販売機による販売、駐車場の提供、館内公衆電話の管理などについては、前年度に引き続き〔こどもの城〕事業活動に即応する形で利用者サービス事業の一環として実施してきている。

〔こどもの城〕の利用を促進していくうえで、これらの利用者サービス事業はいずれも欠くことのできないものなので、引き続き多様な利用者需要に合わせたサービスの向上を図っていく必要がある。

4月から、屋内駐車場において違法駐車車両の保管業務を引き受けることとした。

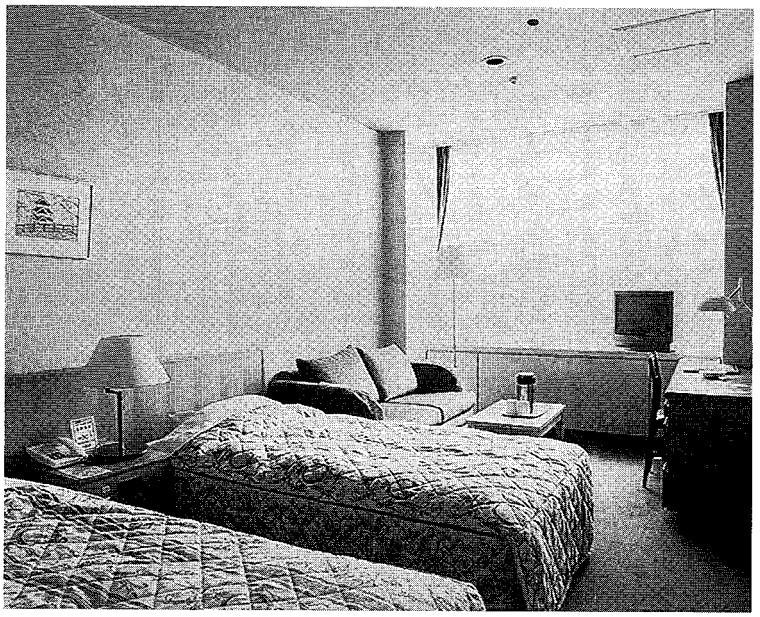
11月から、ホテル宿泊者からのミネラルウォーター設置の要望により、6階エレベーターホールにペットボトル飲料の自動販売機を設置した。

1月から、2階の「アミティーエ」でのフランス料理の営業を廃止し、喫茶、軽食のみとし、平日の営業を中止し、土・日・祝日・特別期間中のみの営業とした。これに伴い、1階の「アンファン」の営業時間を7時30分～18時30分から7時30分～19時に、1階の「ひさご」の営業時間を11時～18時30分から11時～19時に、2階の「アミティーエ」の営業時間を12時～20時から11時～18時にそれぞれ変更した。

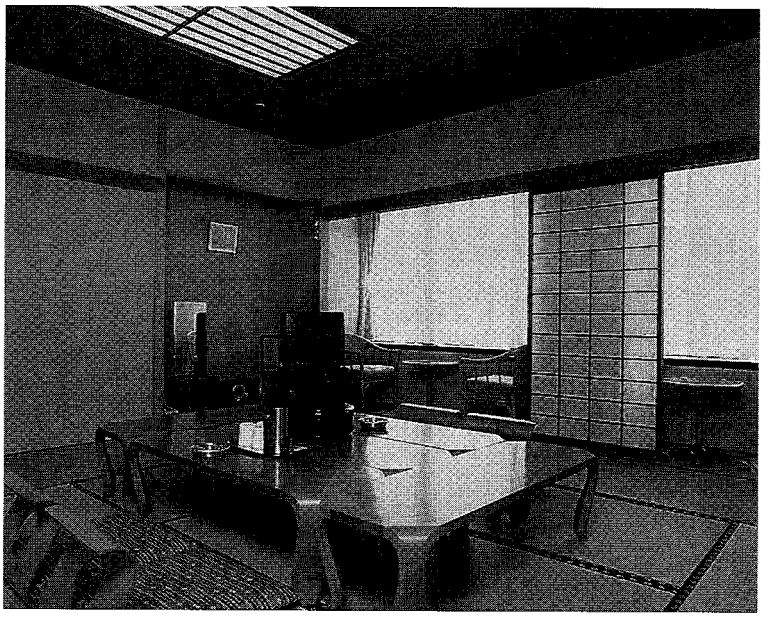
平成12年度の概要

業務の一覧

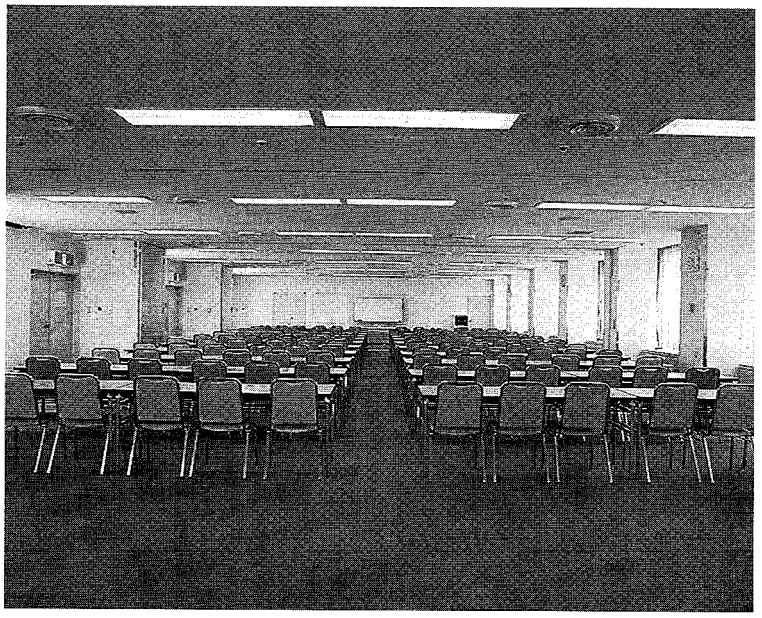
業種	店名等	場所	利用客席数	営業日・営業時間	備考
ホテル	こどもの城ホテル	6・7階	客数 27 客室定員 64	無休（12月29日～1月2日を除く）	洋室24室（シングル3、ツイン10、デラックスツイン11） 和室3（4人用1、5人用1、10人用1）料金＝1泊6,400円～（税別）
貸し室	研修室	8・9階	研修室 10 ※一部通しで使用できる。利用人員350人ぐらいまで	無休（12月29日～1月2日を除く） 営業時間＝9：00～21：00	研修および会議など 料金＝1単位時間11,500円～（税別）
	ギャラリー	1階アトリウム		無休（12月29日～1月2日を除く） 営業時間＝10：00～18：00	各種展示会および実演など 料金＝1日30,000円（税別）
物品販売	売店	1階アトリウム	1カ所	営業日時＝「こども活動エリア」の開館日時と同じ 毎週月曜日休業（月曜日が祝・休日のときは火曜日） 土、日、祝・休日、春・夏・冬休みの特別期間＝10：00～17：30 平日＝12：30～17：30	玩具、文具、音楽用品、スポーツ用品、講座指定水着、催事関係用品、印刷出版物、衣料、雑貨、フィルムなど
	自動販売機	館内各所	飲・食・乳 15か所 たばこ6カ所 フィルム1カ所 テレホンカード 2カ所	無休	ドリンク類、牛乳類、スナック類、カップ麺類
公衆電話		館内各所	15カ所19台	無休	
駐車場		屋内（地下2階～地下4階）、屋外（1階）	約126台 （業務車両分含む）	無休（12月29日～1月2日を除く） 営業時間＝8：00～22：00	普通車両は地下駐車場、バスなど大型車両は屋外（1階）に駐車 料金＝普通車両30分300円、 マイクロ車両1時間840円、 大型車両1時間1,260円 （税込み）
飲食関係	カフェテラス「アンファン」	1階	客席数 140	無休（12月29日～1月2日を除く） 営業時間＝7：30～18：30 （1月9日～＝7：30～19：00）	ファミリーレストラン、弁当仕出し、パーティーなどホテル宿泊者の食事など
	すし「ひさご」	1階	カフェテラス「アンファン」内	無休（12月29日～1月2日を除く） 営業時間＝11：00～20：30 （1月9日～＝11：00～19：00）	すし、和食、弁当・料理の仕出しなど
	コーヒーラウンジ「アミティーエ」	2階	客席数 60	無休（12月29日～1月2日を除く） 営業時間＝12:00～20:00 （1月9日～土・日・祝日・特別期間営業、平日休業 営業時間＝11:00～18:00）	フランス料理、喫茶、軽食 （喫茶、軽食のみ）
	劇場内「スナック」	青山劇場内地下ロビーおよび2階ロビー	立食	公演に合わせて営業 営業時間＝開演前・開幕	喫茶、軽食



こどもの城ホテル客室（洋室）



こどもの城ホテル客室（和室）



研修室

Ⅲ こどもの城から全国へ

こどもの城から全国へ

平成12年度の活動

こどもの城のセンター機能について

年毎に、全国の児童館のセンターとしての〔こどもの城〕への期待が大きくなってきていると感じる。これは、動くこどもの城事業、児童厚生員等実技指導講習会、講師派遣などを継続的に行い、〔こどもの城〕のセンター機能が多くの児童健全育成関係者に周知されてきた結果だと考える。〔こどもの城〕が求められる情報を地域の児童館に対して発信する際には、規模や設備、スタッフ構成など環境の違いを考慮した上で、情報を伝えていく必要があり、また、地域の児童館も自分たちに必要な情報を選別して受け取ることが大切になってくる。このような、〔こどもの城〕と地域の児童館とのコミュニケーションが、県立の大型児童館の力添えもあり、少しずつ構築されてきている。今後も、こうしたコミュニケーションを生かしたセンター機能の充実が、〔こどもの城〕にとって最も必要なこととなる。また、同時に大型児童館には地域密着型の児童館とは異なる固有のノウハウや問題点も存在する。こうした大型児童館同士の情報交換と連携にも取り組んでいきたい。

今年度は、従来の事業の活性化とともに、公的な助成金による全国の児童館への啓発事業にも取り組んだ。センター機能を果たすために実施した事業は、(ア) 児童厚生員などの児童館で働く職員を対象とした実技指導の講習会、(イ) 児童厚生員などの児童館で働く職員の研修生としての受入れ、(ウ) 地域で開催される研修会や催しへの〔こどもの城〕職員の講師派遣、(エ)「動くこどもの城」事業、(オ) 社会福祉・医療事業団子育て支援基金などの助成事業の5つである。それぞれの事業の具体的な内容は以下のとおり。

❷ センター機能の実践

(ア) こどもの城児童厚生員等実技指導講習会

〔こどもの城〕開館時から毎年3～4回開催されてきた、児童厚生員などの児童館で働く職員を対象とした実技指導の講習会。明日から活動の中で利用できるプログラムの紹介と、児童館活動のなかで起こりうる事象の考察という極めて実践的な内容に特徴がある。宿泊研修では参加者同士が生活をともにする時間を通し、児童館の運営についての情報交換を行うことのできる場としても貴重である。3日間の宿泊研修が勤務の都合上難しいという、主に首都圏の児童館関係者の声を考慮して、通いで行う2日間の講習会も開催している。参加希望者が多くすべてを受け入れるのが難しいので、講習会に参加した各々が地域に戻り、講習会で得た知識や技能をその地域の人たちに伝達し、その地域で抱える問題点や独自のプログラムを携えて、この講習会に参加してくれるようお願いしているのが現状である。また、今後は需要の異なる大型児童館職員の研修会についても検討していきたい。

(イ) 研修生・実習生の受け入れ

主に県立の大型児童館職員の初任者研修を、日常活動

のなかで研修生という形で受け入れてきた。また、ここ数年、地域密着型児童館の職員から、単なる施設見学にとどまらない短期研修ついての要望がでてきている。「児童厚生員等実技指導講習会」の参加定員に限りがあり、日程や予算措置などの条件によりすべての希望者が「児童厚生員等実技指導講習会」に参加することが難しい現状を補う意味もあり、こうした要望も現状の業務のなかでできる形で受入れていきたい。

実習生の受け入れは、大学・短期大学、専門学校から依頼のあったものについて、企画研修部がコーディネートして、各事業部で50人の実習生を受け入れた。また今年度も、日産自動車㈱が実施しているNPO（公益法人）ラーニングシステムでの奨学生1人を受け入れた。

(ウ) 講師派遣

地域で開催される研修会や催しへの〔こどもの城〕職員の講師派遣については、年々その要請がふえてきている。〔こどもの城〕がこれまで行ってきた「こどもの城児童厚生員等実技指導講習会」「保育セミナー」「小児保健セミナー」、さらには「動くこどもの城」といった事業により〔こどもの城〕の事業内容が広く知られることとなり、評価されている結果と考えられる。件数の増加にともない、依頼の内容も広範なものとなってきており、新しく始めた事業についても、こうした講習会で紹介していけるような準備が常に求められているのである。職員個人の知識や技能が評価されているだけでなく、〔こどもの城〕の事業全体への評価と受けとめ、これからも日常業務に支障をきたさない範囲で積極的に応じ、事業の成果を多くの人たちに紹介していきたい。

(エ) 動くこどもの城

今年度の「動くこどもの城」のプログラムは、児童厚生員などを対象とした指導者講習会の充実を目的に、「打楽器で遊ぶワークショップ」「絵本のワークショップ」の新たなプログラムを加えた。また、地域の児童館での活動の中で、折り紙の作品を制作し、その作品を一堂に会し展示する「全国児童館おりがみ作品展」を新たに実施した。今年度は、全国から23点の作品が集まり、〔こどもの城〕での展示の後、全国4カ所の児童館で巡回展を行った。

さまざまな地域での子育て支援活動の活性化の中で、「お母さんと赤ちゃんのすくすく体操」が、非常に派遣要望が多く、全国8カ所で、親子を対照したプログラムと研修会を実施した。今後も高いニーズがあると思われるが、現在は0歳児を対象としており、1～2歳児のプログラムの開発が急務であると実感した。また、派遣を通じて、児童館と地域の美術館、子育て支援センター、小学校などとの連携をとることができた事業もあり、今後も「動くこどもの城」をきっかけとした、地域の子育てネットワーク作りにも貢献していきたいと痛感した。

動くこどもの城
お母さんと赤ちゃんのすくすく体操

(オ) 助成事業

全国の児童館に対するセンター的役割を充実させるため、今年度より公的な助成金を得て行う事業にも積極的に取り組んだ。今年度は、社会福祉・医療事業団の子育て支援基金より助成を受け、「こどもの城ファミリーフェア事業」「小・中学生ボランティア交流事業」に取り組んだ。どちらの事業も3カ年の予定で、全国の児童館へ対する啓発活動が求められたものである。

「こどもの城ファミリーフェア事業」では、少子化社会の中での家族の役割を改めて見直すために、祖父母を含めた親子を対象としたプログラムの開発と啓蒙を目的とした事業で、1年目にあたる今年度は、絵本の読み語りや人形劇のプログラムの開発、乳幼児と母親を支援するプログラムの開発を実施した。また、全国の児童館に対する0～3歳を対象とした子育て支援活動についてのアンケート調査を行い、その結果を「のびのび子育て」という小冊子にまとめ、フィードバックを行った。このことは、〔こどもの城〕にとって開館以来初めてのことで、非常に貴重な事業となった。

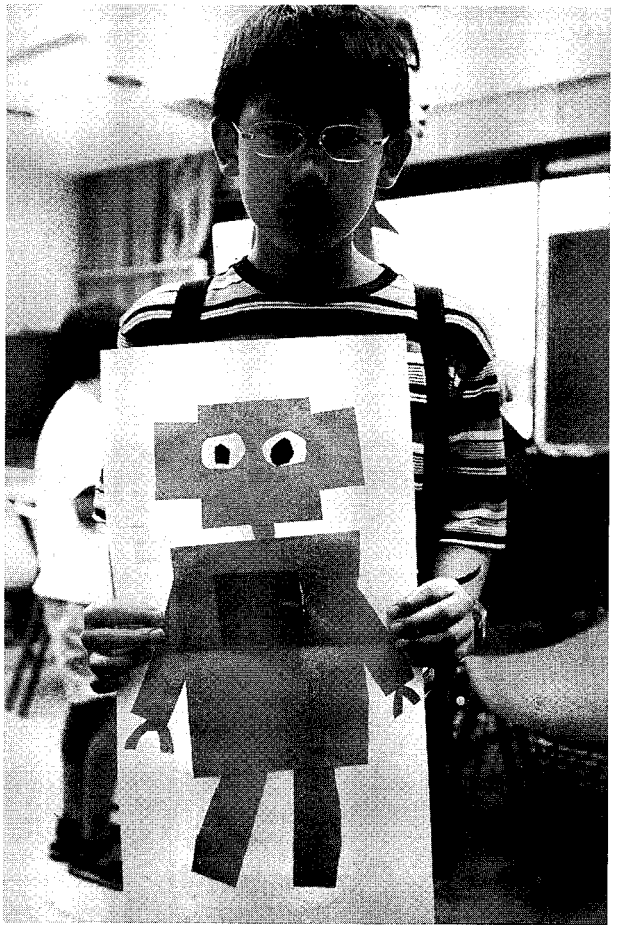
「小・中学生ボランティア交流事業」では、全国にある県立の大型児童館などでのボランティア活動を活性化させることによって、小・中学生にボランティア・スタッフと自然に接してもらい、ボランティア活動について考える機会を提供したいと実施した事業である。初年度にあたる12年度は、〔こどもの城〕と県立の大型児童館のボランティア・スタッフの交流から始めた。〔こどもの城〕のボランティア・スタッフを宮城県中央児童館、富山県こどもみらい館、愛知県児童総合センター、さぬきこどもの国、えひめこどもの城の5館に派遣し、実際にプログラムに参加させてもらいながら交流を図った。また、上記の5館の内、富山県こどもみらい館を除く4館と栃木県子ども総合科学館のあわせて5館をこどもの城に招聘し、更に交流を深めた。

❸ 今後の課題

昨年度までは、〔こどもの城〕が大型の総合児童センターとして実践してきたものを中心に、センター機能を発揮してきたが、今年度は全国の児童館を対象とした子育て支援活動に関するアンケート調査を実施し、それに基づいた情報発信を行うことができた。また、大型の児童館との交流を通じて、〔こどもの城〕に対するニーズを把握することもできた。全国の児童館のニーズを把握した上でのプログラム開発とその情報発信という理想の形に少し近づくことができたことは、今年度の最大の収穫であった。

今後もこのような事業を継続していき、所管官庁である厚生労働省とも連携をとり、ナショナルセンターとしての役割をしっかりと果たしていきたい。そのためには、そのベースになる〔こどもの城〕での事業の活性化、県立の大型児童館とのネットワーク化、そしてインターネットなどを利用した情報発信の方法についての検討などが今後の課題であると認識している。

動くこどもの城
コマガタワールド

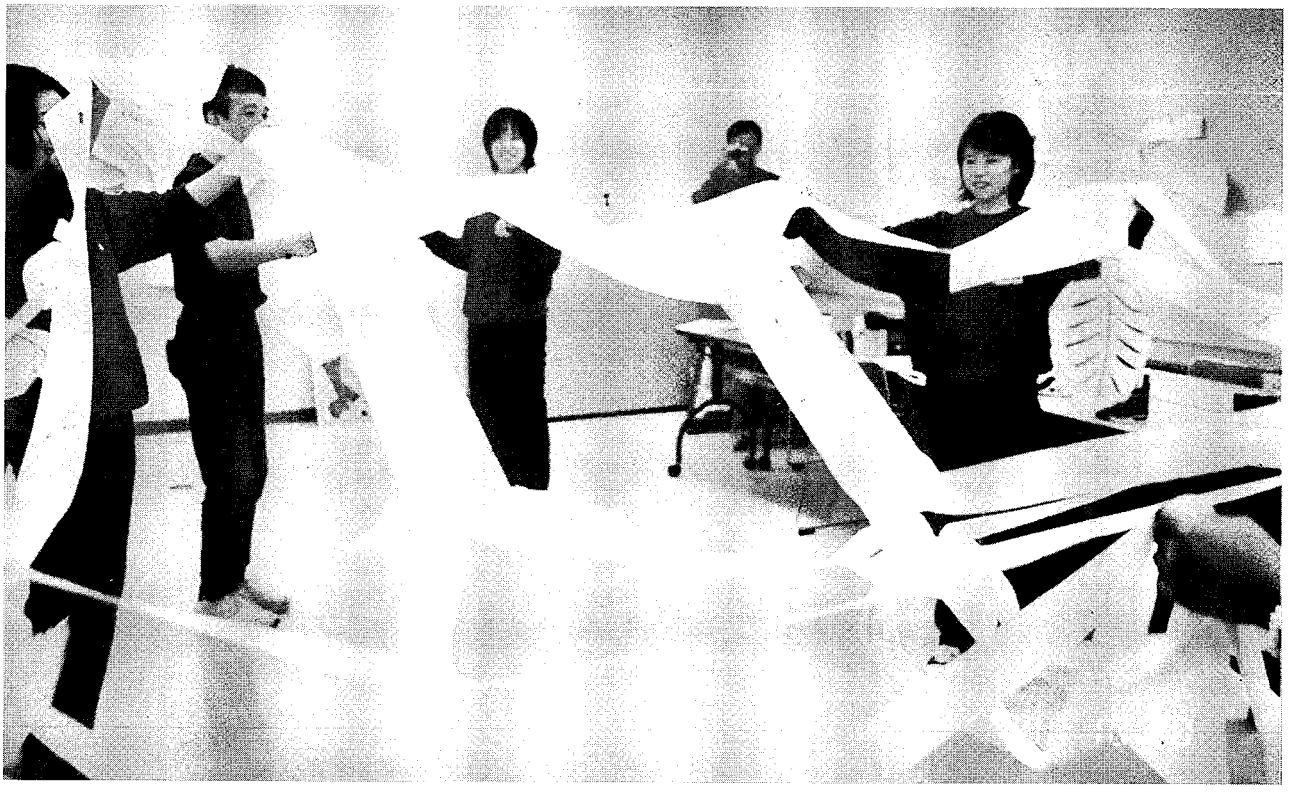


動くこどもの城
ブルーノ・ムナーリ展

動くこどもの城
ブルーノ・ムナーリ展

動くこどもの城
ブルーノ・ムナーリ展

動くこどもの城
ブルーノ・ムナーリ展



平成12年度活動一覧表

〈動くこどもの城〉プログラム一覧

〈子どもや家庭を対象に行うプログラム〉

プログラム名	内　容
スポーツ遊びで体力づくり	かつて、子どもたちは元気に遊ぶ中で自然に身につけていた体力、その中でも「敏捷性」「バランス」を養うために、陣取りゲームなどのスポーツあそびを身近な道具を生かして多彩に展開する。
お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	赤ちゃんが自然に健康に成長していることは、母親でも意外と意識しないもの。音楽や楽しい遊具を使いながら、赤ちゃんのできる簡単な体操を通して、表情や動きの新しい発見をしてもらう。
パソコン遊びのワークショップ	パソコンで楽しく遊ぶコーナーを一定期間設置する。実施するプログラムは、「きれいなグラフィック遊び」やさまざまなペーパークラフトをパソコンでデザインし、実際に作って遊ぶ「パソコンクラフト」など、今まで［こどもの城］のパソコンルームで実施したプログラムの中から、いくつかを選択して実施する。
みんなで遊ぼうパペット・ランド	人形作りと人形遊びの２つの活動で構成されたプログラム。人形は、紙コップや封筒など身近な素材で作制。人形でお話をしたり、仲間とコーラスを楽しんだり、ごっこ遊びを繰り広げたりと、イメージの世界をみんなで共有するプログラム。
ガドガドコンサート「おんがくがスキ！」	ロック、クラシック、ラテン、民族音楽好きのメンバーによる手作り楽器、民族楽器、身の回りの道具などを使った参加型コンサート。歌遊びや手遊びの要素が盛り込まれているコンサート。演じる・観る・聴く・楽しむの行為が一体となり音楽の楽しさをより一層体験できるコンサート。
竹の響き「アンクルン・コンサート」	アンクルンはすべてが竹で作られたインドネシアの民族楽器。一つの楽器から一つの音しかでないため、「竹のハンドベル」とも呼ばれている。コンサートでは、アンクルンのほかに、竹のマリンバ、ベースなどといっしょに、童謡やインドネシアの民謡を演奏する。子どもたちをステージにあげ、アンクルンを体験するコーナーもある。
アニメ・ワークショップ	遊びを通して、映像の仕組みを考えることができるプログラム。２枚の簡単な絵を描いて作る「ぱたぱたアニメ」、映画発明以前の動く絵を楽しむ玩具、「視覚玩具」などの制作を通して映画、映像の仕組みを体験する。また、ワークショップでは制作の難しい複雑な「視覚玩具」などの展示も行う。
映像探検 写真ワークショップ	私たちが日常なにげなく撮っている写真も、いろいろな“仕組み”の上に成り立っている。そんな、写真の“写る仕組み”を体験してみるプログラム。写真の発明以前に、画家たちがデッサンの補助的器具として用いていた“カメラオブスクラ”や、レンズを使わないカメラ“ピンホールカメラ”を使ったワークショップや写真の仕組みや歴史についての展示も併設。
こどもの城映画劇場	子ども向けに作られた国内外の芸術的なアニメーションの短編作品の上映を行う。基本的に、こどもの城フィルムライブラリー「武藤行雄記念文庫」に収蔵されたアニメーション作品から数本を選んで上映する。「武藤行雄記念文庫」にはカナダ国立映画制作庁NFBCのアニメーションをはじめ、世界中の優れた作品を約110本収蔵している。
ボランティア交流プログラム	［こどもの城］で活動しているボランティアリーダーと地域のボランティア・スタッフとの交流プログラム。ボランティア・スタッフの養成やさまざまな活動についての情報交換を行う。

〈地域の児童館などでの巡回展示とワークショップを併せて行う事業〉

プログラム名	内　容
手作り楽器のワークショップ	普段は、がらくたとして捨ててしまうようなものを生き返らせて、楽器を制作。金属の缶やフィルムのケースなどが、音の道具に早変わり。そして制作終了後には、全員で作った楽器で音をだして遊ぶ。
造形ワークショップ	素材・発想・技法などで、さまざまなプログラムが生まれる。どこにでもある素材を用いて、ほんの少しだけ発想を変えると、普段は見えないものが見えてくる。こうしたプログラムを何種類か参加者と体験制作し、それが生まれる考え方や発想法についても考察する。
打楽器で遊ぶワークショップ	打楽器をみんなで元気よくたたき、アンサンブルを作っていくことはとても楽しいものである。ブラジルのサンバやアフリカの太鼓「タムタム」を活用して、リズム遊びを手づくりの楽器などで体験するワークショップである。
絵本のワークショップ	さまざまな絵本をモチーフにした、簡単な絵本づくりのワークショップである。絵を描くためのきっかけを渡すことによって、子どもたちは想像力を広げて制作に取り組む。絵本をコミュニケーションの道具としてとらえたプログラムである。

〈地域の児童館などでの巡回展示とワークショップを併せて行う事業〉

プログラム名	内　容
ブルーノ・ムナーリ展	1985年に［こどもの城］の開館を記念して行われたブルーノ・ムナーリ氏の作品展およびワークショップ。子どもの触覚、視覚、体感覚を使って造形感覚を磨こうという考えが基本となっている。グラフィック・アート、プレイシングス、絵本、オブジェなどの展示とワークショップで構成。
ビクトル・ダミコ展	1995年に［こどもの城］の開館10周年を記念して行われた「ビクトル・ダミコ展"こどもアートカーニバル"」を巡回キット化。「色、光、触覚」を遊びながら体験できる21個のボックス型造形美術玩具は、子どもの造形意欲や創造性を喚起させ、好奇心と感性に刺激を与える環境となる。このほかに、特別に設計されたイーゼルや回転式円形コラージュ・テーブルなどを加えた環境の中で、絵画とコラージュ制作を中心としたワークショップを実施。
造形ワークショップ展	［こどもの城］造形スタジオの、今までの実践活動のプログラムを、視覚的に分かりやすく、展示パネルの形式にまとめて展示。その中からいくつかのプログラムを子どもたちやその家族を対象に実施。パネル展示が中心となるプログラム。
お父さんの少年時代	児童館などを訪れる子どもたちのお父さん、お母さんが子どもだった頃、昭和30～40年代の「遊び」の展示。めんこ、ベーゴマ、凧、日光写真などの遊び道具の展示をきっかけにして、親子のコミュニケーションを図り、子どもたちに昔遊びのエッセンスを体験してもらう。
「コマガタワールド」 創造的な絵本の世界	「コマガタワールド」は、絵本の持つ「コミュニケーションのためのツール」という面に着目し、さまざまな絵本を制作し、ワークショップを実践してきた駒形克己氏の絵本の世界を取り上げたもの。平成9年夏に［こどもの城］で実施した展示とワークショップで構成している。
全国児童館おりがみ作品展	「家族」をテーマとした折り紙の作品展。全国の児童館に対して応募を呼びかけ、立体作品15点、平面作品8点が集まり、こどもの城での展示の後、巡回展を実施した。

❷〈動くこどもの城〉実施一覧

都道府県	開催団体	期日	プログラム	担当部	催し	研修	展示
福島県	霊山こどもの村遊びと学びのミュージアム	4.29～7.9	コマガタワールド	企画研修部	○	○	○
福島県	いわき市立美術館	7.15～8.27	コマガタワールド	企画研修部	○	○	○
鳥取県	倉吉東児童センター	9.12～13	お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	体育事業部	○	○	
東京都	調布市染地児童館	9.19	お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	体育事業部 小児保健部	○	○	
大分県	大分県立芸術会館	9.22～24	アニメ・ワークショップ	ＡＶ事業部	○	○	○
静岡県	富士市保健女性センター	10.6	お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	体育事業部 小児保健部	○	○	
新潟県	新潟県立こども自然王国	10.6	造形ワークショップ展	造形事業部		○	○
栃木県	栃木県子ども総合科学館	10.6～8	絵本のワークショップ	企画研修部	○	○	
千葉県	佐倉市志津児童センター	10.11～12	スポーツ遊びで体力づくり	体育事業部	○	○	
秋田県	秋田県児童会館	10.13	手作り楽器のワークショップ	音楽事業部		○	
愛媛県	えひめこどもの城	10.21～11.19	ブルーノ・ムナーリ展	造形事業部	○	○	○
大阪府	摂津市地域子育て支援センター	11.7	お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	体育事業部 小児保健部	○	○	
大阪府	大東市立子育て支援センター	11.8	お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	体育事業部 小児保健部	○	○	
和歌山県	和歌山県福祉保健部	11.29	手作り楽器のワークショップ	音楽事業部		○	
宮城県	仙台市太白区中央児童館	1.20～21	おんがくがスキ！	音楽事業部	○	○	
埼玉県	三芳町北永井児童館	2.6	お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	体育事業部 小児保健部	○	○	
愛知県	安城市子育て支援センター	2.13	お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	体育事業部 小児保健部	○	○	
香川県	坂出市子育てふれあいセンター	2.19～20	お母さんと赤ちゃんのすくすく体操	体育事業部 小児保健部	○	○	
福岡県	北九州市福祉事業団	2.24～25	おんがくがスキ！	音楽事業部	○	○	
宮崎県	清武町立かのう児童館	11.29～12.6	全国児童館おりがみ作品展	企画研修部			○
栃木県	栃木県子ども総合科学館	12.16～1.14	全国児童館おりがみ作品展	企画研修部			○
埼玉県	三芳町北永井児童館	12.15～17	全国児童館おりがみ作品展	企画研修部			○
石川県	安城市子育て支援センター	2.20～28	全国児童館おりがみ作品展	企画研修部			○

❸ 講習会

名称	対象	受講数	日程・日時	備考
平成12年度 第1回児童厚生員等実技指導講習会	児童館職員ほか(50)	35	5.17・24 こどもの城研修室	『身近な素材で科学を遊ぶ～遊びの中の科学を探る～』をテーマに、児童館で日常的に行われている遊びを、科学的な視点でみることによって、より楽しく、興味深く子どもたちに提示するためのヒントを学んだ。また、身近な素材を使った新しい科学遊びの方法論を学んだ。これらの研修を通じ『科学』を切り口とした遊びの支援者としての児童厚生員の資質向上を図った。協力：㈶日本科学技術振興財団
平成12年度 第2回児童厚生員等実技指導講習会	児童館職員ほか(50)	54	10.25～27 こどもの城研修室	『児童館で創る魅力的なキャンプ～地域の中で、人と人、人と自然を結ぶ～』をテーマに実施。キャンプの要素である「自然環境」「指導者」「目的とプログラム」をもう一度見つめなおし、地域の児童館で身近な自然と人を結ぶプログラムの可能性について考察した。講師：ネイチャースキー研究所、桃井奉彦氏、東京小中学生センター、柴田俊明氏
平成12年度 第3回児童厚生員等実技指導講習会	児童館職員ほか(50)	55	1.17～19 こどもの城研修室	『親子の健康を考える～乳幼児とその親に対する児童館活動』のタイトルで、児童館活動の課題のひとつになっている未就園児と親への対応がテーマ。〔こどもの城〕小児保健部及び体育事業部での実践例を中心に、親子で参加できるプログラムの実際について実技指導をおこなった。

❹ 講師派遣

名称	期日	担当	依頼先	派遣先
骨粗しょう症予防教室運動	4.1～H13.3.31	体育事業部	横浜市衛生局保健部健康増進課	横浜市各区保健所
児童健全育成指導者研修会	6.15	体育事業部	山口県児童センター	山口県児童センター
児童館職員専門研修	6.22	体育事業部	豊島区	豊島区立雑司が谷体育館
駒沢ジュニアスポーツ公開セミナー	6.24	体育事業部	財団法人東京都生涯学習文化財団／東京都教育委員会	駒沢オリンピック公園
夏休み親子教室	8.1	体育事業部	東林地区健康づくり運動普及員協議会	東林公民館
都児連第3ブロック研修「0歳児の親子ふれあい体操」	10.11	体育事業部	品川区立品川児童センター	目黒区立八雲住区センター
子育て支援の輪づくり講座「乳幼児の遊びと関わり方」(運動遊び)	10.13	体育事業部	新潟市保健福祉部児童福祉課	新潟市総合福祉会館
児童館職員研修会「0歳～2歳児を対象とした親子体操」	10.26	体育事業部	江東区厚生部	江東区大島第二児童館
渋谷区スポーツ教室「幼児期のからだと運動」	10.31	体育事業部	渋谷区教育委員会	渋谷区スポーツセンター
埼玉県児童館連絡協議会西部ブロック研修会	11.9	体育事業部	埼玉県児童館連絡協議会	川越市南公民館
こどもの健康スポーツ研修会	1.25	体育事業部	神奈川県平塚保健福祉事務所	川越市南公民館
子育て講演会「動いて、遊んで、楽しく育児」	2.8	体育事業部	北区赤羽保健センター	平塚市内平塚保健福祉事
食・生活探検セミナー	2.10、3.10、3.26	体育事業部	神奈川県平塚保健福祉事務所	北区赤羽会館
浦和市母子専門研修会	2.13	体育事業部	浦和市市民保健センター	浦和市市民保健センター
父親の子育てセミナー	2.25	体育事業部	伊豆健康福祉センター	西伊豆町子育て支援センター
鵜の木オリンピック「みんなで楽しめる交流遊び」	10.11	プレイ事業部	大田区児童部児童課	大田区立鵜の木児童館
家庭教育学級「子どもの社会性を育てる」	11.10	プレイ事業部	浦安市日の出公民館	日の出公民館
調布市児童青少年課職員研修「児童館でのレクリエーションゲーム指導」	2.8	プレイ事業部	調布市福祉部児童青少年課	調布市立西部児童館

名　称	期　日	担　当	依　頼　先	派　遣　先
放課後児童指導員研修会「児童遊びのあれこれ」	2.13、2.15 2.19	プレイ事業部	静岡県健康福祉部子育て支援室	県東部総合庁舎静岡県庁西館 県浜松総合庁舎
児童健全育成指導者研修会	2.17	プレイ事業部	財団法人香川県児童・青少年健全育成事業団	高松商工会議所
保育所保育士研修会「しなやかな五感を培う造形遊び」	6.13	造形事業部	栃木県社会福祉教育センター	栃木県社会福祉教育センター
夏季実技研修会「造形・美術体験ワークショップ」	7.25、26、27	造形事業部	横浜市教育委員会／横浜市小学校図画工作教育研究会	こどもの城
子育て夢のフォーラム「ワークショップたのしい造形」	9.30	造形事業部	山口県／子育ての夢フォーラム実行委員会	山口県児童センター
福井県児童科学館児童支援ボランティア研修会	10.1	造形事業部	福井県児童科学館	福井県児童科学館
遊びと造形の実技研修会	11.17	造形事業部	山口県児童センター	山口県児童センター
幼稚園教諭研修会	11.21	造形事業部	北区教育委員会	区立さくらだ幼稚園
福島県保育・子育てのつどい	11.25	造形事業部	福島県保育・子育てのつどい実行委員会	福島県立会津大学
放課後児童指導員等研修会	12.1、22	造形事業部	愛知県健康福祉部児童家庭課	愛知県西三河総合庁舎／
非常勤講師 年3回	4.1～H13.3.31	音楽事業部	宮城教育大学	宮城教育大学
児童館職員前期研修会	5.16	音楽事業部	長野県／長野県児童館連絡協議会	山王閣
ブロック別児童厚生員等研修会北海道・東北ブロック／関東・甲信越ブロック／東海・北陸・近畿／中国・四国・九州	1.15、9.13、10.5	音楽事業部	財団法人児童健全育成推進財団	
碧南市保育士研修	6.3	音楽事業部	財団法人児童健全育成推進財団	南部プラザ
みずほ幼稚園こどもの城音楽会	6.6	音楽事業部	私立狛江みずほ幼稚園父母の会	私立狛江みずほ幼稚園
一人ひとりを大切にする心身障害教育指導法の研究	6.9	音楽事業部	世田谷区心身障害学級研究協議会	世田谷区立弦巻小学校
特別研究「バリ幼稚園交流とバリダンスのレッスン」	6.16、17	音楽事業部	福島学院短期大学	福島学院短期大学
子育てひろば事業「子育て講座」	7.12	音楽事業部	八王子市	八王子市生涯学習センター
豊島区子ども家庭部保育園職員・部職員研修	7.13	音楽事業部	豊島区	豊島区民センター
群馬県内児童館交流フェスティバル	7.14	音楽事業部	倉賀野・豊岡・井野児童館	倉賀野児童館
おはなし　おんがく　ぱんぱかぱ～ん	7.16	音楽事業部	台東区社会福祉事業団	文京区立不忍通りふれあい館
子育て支援の輪づくり　講座	7.18	音楽事業部	新潟市保健福祉部児童福祉課	新潟市総合福祉会館
サントリーホール夏休みオルガン企画「それいけ！オルガン探検隊」	7.20	音楽事業部	サントリー株式会社サントリーホール	サントリーホール
スペシャル2000東京大会	8.19	音楽事業部	日本ダウン症協会	東京ディズニーランド

名　称	期　日	担　当	依　頼　先	派　遣　先
印旛地区音楽実技研修会	8.22	音楽事業部	千葉県印旛地区教育研究会音楽教育部	佐倉市民音楽ホール
夏の日の集い	8.20	音楽事業部	渋谷区立心身障害者福祉センター	渋谷区立心身障害者福祉センター
音楽プログラム派遣	9.2	音楽事業部	会津本郷町役場健康福祉課	会津本郷町体育館
親子鑑賞会	9.16	音楽事業部	聖公会八王子幼稚園父母会	聖公会八王子幼稚園
国立市教育研究奨励校授業研究	10.7	音楽事業部	国立市立第三小学校	国立市立第三小学校
総合的な学習の時間研究授業	11.1	音楽事業部	目黒区立中根小学校	目黒区立中根小学校
子育てフレンズ	11.9	音楽事業部	印西市立そうふけ公民館	印西市ふれあい文化館
子育て講座「親子でリズム遊び」	11.15	音楽事業部	八王子市	台町市民センター
総合的な学習の時間研究授業	11.1	音楽事業部	目黒区立中根小学校	目黒区立中根小学校
子育てフレンズ	11.9	音楽事業部	印西市立そうふけ公民館	印西市ふれあい文化館
子育て講座「親子でリズム遊び」	11.15	音楽事業部	八王子市	台町市民センター
東上地区私立幼稚園実技講習	11.18	音楽事業部	東上地区私立幼稚園協会	朝霞市民会館
児童館の幼児活動（2歳児以上のリトミック）	11.22 H13.1.23	音楽事業部	八王子市	台町市民センター
音楽プログラム派遣	12.9	音楽事業部	土浦市地域子育て支援センター“さくらんぼ”	土浦市都和公民館
手遊び実技研修会	1.19	音楽事業部	三芳町立児童館・学童保育室	北永井児童館
福井県・福井県児童館連絡協議会 児童厚生2級指導員研修会	1.19	音楽事業部	福井県児童館連絡協議会	福井県児童科学館
第一ブロック区立児童館職員研修会	1.23	音楽事業部	東京都公立児童厚生施設連絡協議会	港区女性センター
親子イベント“リズムと遊ぼう”	1.26	音楽事業部	世田谷区立多聞幼稚園	世田谷区立多聞幼稚園
藤の里エンゼルプラン推進キャンペーン事業	2.1	音楽事業部	藤の里エンゼルプラン推進キャンペーン事業実行委員会	藤沢市市民会館
赤ちゃんとリズムをたのしもう	2.6	音楽事業部	調布市立多摩川児童館	調布市立多摩川児童館
音楽プログラム派遣	2.10、11、17、18	音楽事業部	全日本空輸株式会社	ジュネーブ ブリュッセル フランクフルト デュッセルドルフ
キリン　リーダースシアター	2.18	音楽事業部	財団法人児童健全育成推進財団	杉並区児童青少年センター「ゆう杉並」
アートマネジメントセミナー2001 「ワークショップで何ができるか？」	2.22	音楽事業部	社団法人日本芸能実演家団体協議会	国立オリンピック記念青少年総合センター
「親子で遊ぶ会」	2.27	音楽事業部	新宿区立中町児童館	牛込箪笥区民センター
子育て支援事業	3.5、6	音楽事業部	那覇市教育委員会	那覇市立与儀幼稚園
地球市民講座「音楽で知る世界の文化	3.13	音楽事業部	神奈川県立地球市民かながわプラザ	地球市民かながわプラザ
ほっとタイムスペシャルデー「幼児親子音楽遊び講習会」	3.23	音楽事業部	西神田児童・家庭支援センター	千代田区立西神田児童・家庭支援センター

名　称	期　日	担　当	依　頼　先	派　遣　先
アニメ・ワークショップ	4.3～5	ＡＶ事業部	財団法人多摩市文化振興財団	パルテノン多摩
メビウスの卵展2000「不思議な映像実験室」	7.22	ＡＶ事業部	メビウスの卵展東京展実行委員	O美術館
福井県児童館連絡協議会児童厚生２級指導員研修会	10.6	ＡＶ事業部	福井県児童科学館	福井県児童科学館
映像表現関係企画研修会	12.19	ＡＶ事業部	財団法人愛知公園協会児童総合	愛知県児童総合センター
授業「美術概説」	1.11	ＡＶ事業部	文教大学教育学部	文教大学
企画事業「ふしぎ・びっくり！映像たんけん」	2.23	ＡＶ事業部	財団法人愛知公園協会児童総合センター	愛知県児童総合センター
企画事業「ふしぎ・びっくり！映像たんけん」	3.13、18、26	ＡＶ事業部	財団法人愛知公園協会児童総合センター	愛知県児童総合センター
社会・人間系総合講座	12.14、1.11	ＡＶ事業部	早稲田大学	早稲田大学
相談指導教室・いじめなんでも相談ふじさわ	5.25、6.22、11.16 H13.2.22	小児保健部	藤沢市教育委員会	藤沢市相談指導教室／藤沢市役所
養老町立保育研究会保育士研修会	6.17	小児保健部	岐阜県養老町立保育研究会園長	養老町中央公民館
岐阜県主催保育士研修会	6.29	小児保健部	岐阜県健康福祉環境部児童家庭課	長良川会館
あひるの学校（乳幼児家庭教育学級）	7.1	小児保健部	藤沢市教育委員会	辻堂公民館
児童厚生員等研修会「児童の発達理論」	7.4	小児保健部	財団法人群馬県児童健全育成事業団	ぐんまこどもの国児童会館
相談指導教室	8.24、10.26	小児保健部	藤沢市相談指導教室	藤沢市相談指導教室
講演「やりなおせる子育て」	9.10	小児保健部	浦和母親大会実行委員会	浦和市民会館
こどものための生活習慣病予防研修会	10.12、24	小児保健部	伊豆健康福祉センター	静岡県下田総合庁舎下田市市民文化会館
家庭教育学級「今、子育って？」「子育てをする私って？」	11.30	小児保健部	港区教育委員会	女性センター
子育て講座「こどものサインをどうとらえるか」	12.2	小児保健部	大田区児童部児童課	大田区馬込特別主張所／南馬込三丁目児童館
「早期教育に関する総合的研究」	12.5～10	小児保健部	国立教育研究所「早期教育研究会」	韓国（ソウル）
大田区職員研修「乳児の発達と保育」	3.13	小児保健部	大田区児童部	池上会館
「早期教育に関する総合的研究」	3.16、19	小児保健部	国立教育政策研究所	京都大学付属図書館
子育てコンサルタント研修会	3.22、23	小児保健部	岐阜県健康福祉環境部	ソフトビアジャパンセンタービル／関市役所
幼児のつどい	隔月１回（8月除く）	保育研究開発部	港区立高輪児童館	港区立高輪児童館
家庭教育学級・乳幼児コース	6.14	保育研究開発部	中央区教育委員会	区立月島社会教育会館

名　称	期　日	担　当	依　頼　先	派　遣　先
父親教室「お父さん出番ですよ」	6.18	保育研究開発部	富士見市立健康増進センター	富士見市立健康増進センター
特別講義　保育実習	6.29	保育研究開発部	玉川大学	玉川大学文学部
家庭教育学級「親子でみんなで一緒にア・ソ・ボ！」	7.8	保育研究開発部	港区教育委員会	女性センター
子どもと楽しむ運動遊び	7.22	保育研究開発部	長岡市立保育事業研究会	長岡市立南部体育館
市民健康教室「親子のふれあい遊ひ」	7.27	保育研究開発部	川越市市民健康づくり推進協議会	川越市山田公民館
講演「外国人から見た日本の子育て」	11.28	保育研究開発部	葛飾区立幼稚園ＰＴＡ連合会	葛飾区立北住吉幼稚園
ＰＴＡ主催「親子体操」	11.30	保育研究開発部	渋谷区立千駄ケ谷幼稚園	渋谷区立千駄ケ谷幼稚園
船橋市児童ホーム時間内研修「研修企画の立て方、進め方」	11.30	保育研究開発部	船橋市児童家庭課	船橋市西船児童ホーム
子育てフォーラム「楽しく子育て」	1.27～2.10	保育研究開発部	千葉市誉田公民館	千葉市誉田公民館
公共ホール音楽活性化事業	4.25～H13.3	劇場事業部	財団法人地域創造	財団法人地域創造
ステージラボ金沢セッション	7.4～7	劇場事業部	財団法人地域創造	金沢市民芸術村
新国立劇場整備計画策定委員会	H.13.1.15～H14.1.14	劇場事業部	財団法人地域創造	金沢市民芸術村
世田谷パブリックシアター舞台技術者養成講座	3.13	劇場事業部	財団法人世田谷区コミュニティ振興交流財団	世田谷パブリックシアター
「児童厚生施設におけるボランティアの心構えと活動」	6.18	企画研修部	栃木県子ども総合科学館	栃木県子ども総合科学館
指導者研修会「今、子とも達に一番大切なものは？」	6.18	企画研修部	栃木県子ども総合科学館	栃木県子ども総合科学館
中野区ジュニア・リーダー講習会	7.24～27	企画研修部	中野区教育委員会	高原パーク横瀬
絵本ワークショップ	9.7、21、28	企画研修部	足立区教育委員会	青年センター
南中野教育フォーラム「地域の中で、子は育てる」	9.9	企画研修部	南中野地域センター	南中野地域センター
ボランティア養成講習会「健全育成施設とボランティア活動」	11.5	企画研修部	富山県こどもみらい館	富山県こどもみらい館
社会教育施設専門職研究協議会	11.22	企画研修部	茨城県教育委員会	茨城県立中央青年の家
東京都公立学校現職研修１部研修会	6.8	国際交流担当	東京都立多摩教育研究所	都立多摩教育センター
サマースクール 東北大会 北海道大会 四国大会	6.8	国際交流担当	東京都立多摩教育研究所	都立多摩教育センター
遊具・遊びプログラム開発研究会	10.1～H13.3.31	事業本部付	愛知県児童総合センター	愛知県児童総合センター
子育て夢のフォーラム	10.29	事業本部付	子育て夢のフォーラム実行委員会	山口市南総合センター
「バリアフリー」の造形活動にかかわる企画委員	11.1～H13.3.31	事業本部付	視覚障害者芸術活動推進委員会	ギャラリーＴＯＭ
「陽のまち・わらべフォーラム」	3.24	事業本部付	福岡県八女郡上陽町	上陽町農業活性化センター

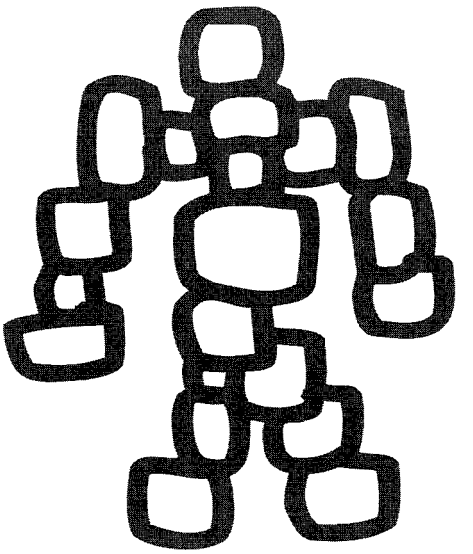
❺ 助成金事業

〈こどもの城ファミリーフェア事業〉

名　称	期　間	備　考
第６回人形劇カーニバル	8.13～15	家族で楽しめるプログラムの開発・実践を目的に子育て支援基金助成事業「こどもの城ファミリーフェア事業」の一環として実施した。今年は、「たくさんの『ｉ』～表現から感動へ」というテーマのもと、プロの９劇団による人形劇の公演の他に、親子で楽しめる人形づくりと人形遊びのワークショップを実施した。また、公演の情報、都内の人形劇団の情報を掲載した冊子を都内の児童館に配布した。
敬老の日特別イベント「おりがみのたより」	9.15	日本折紙協会の講師で、孫を持つ年代の女性の方に協力していただいた。来館した子どもたちが折り紙を折り、それをカードに貼り封筒で送れるようにし、おじいちゃんおばあちゃんに手紙を送る、というワークショップ。折る場所でも異世代の交流が生まれ、手紙によっても祖父母世代との交流ができた。
第７回おりがみカーニバル	10.28～11.19	三世代交流のプログラムという視点を新たに加えて、７回目のカーニバルを行った。今回は、「家族」をテーマとして折り紙の作品、自由に参加できるワークショップを行った。
赤ちゃん大集合	11.1	こどもの城の子育て支援プログラムとして、小児保健部を中心に、複数の事業部の協力を得て実施した。当日は、雨が降り、肌寒い一日であったが、２７０組を越える親子が来館した。この催しは関連部門で担当者会議を繰り返し、当日のスケジュール・催しの内容検討などを行った。企画研修部は全体の時間調整、広報などを担当した。
公開講座「みんなで子育て」	11.8	子育てにおける家族の役割を見直すための公開講座。今回は、「祖父母の育児参加」をテーマに、小児保健部顧問の巷野医師による基調講演と、こどもの城のさまざまな部署のスタッフによるパネルディスカッションを行った。
おひさまおはなしコンサート	1.14	絵本を家庭で楽しんでもらうことを目的として実施した絵本の読み語りの公演。小さな子どもたちを持つお母さん・お父さん声優４名と、テレビの子ども番組で活躍するピアノ奏者・人形劇団・効果音担当者を迎え、生の音楽やスライド上映を交えながら絵本の読み語りを行った。共催：株式会社81プロデュース、後援：小学館、協力：劇場事業部。
児童館での子育て支援のための情報誌「のびのび子育て」の発行	3.1	12年度の「ファミリーフェア事業」の報告書として、児童館での子育て支援のための情報誌「のびのび子育て」を発行した。主な内容は、６月に実施した「児童館における０～３歳児と親に対する子育て支援の実態について」というアンケート調査の報告、西宮市児童館での子育て支援活動の活動紹介、こどもの城の子育て支援活動の紹介など。

〈小・中学生ボランティア交流事業〉

名　称	期　間	備　考
ボランティア通信「じょいん」の発行	11.10、1.31	こどもの城のボランティア活動を紹介するとともに、遊びのボランティア活動については31日に、「じょいん」第２号を発行した。
ボランティア交流会①	11,18、19	宮城県中央児童館へこどもの城のボランティアが訪問。ボランティア主催の合宿に参加し、情報交換・交流を図った。
ボランティア交流会②	12.16、17	えひめこどもの城・神戸市総合児童センター「こべっこランド」の２館へ、それぞれこどもの城のボランティアが訪問。こべっこランドでは、ボランティア主催の冬イベントに参加し、実際の活動を通じて交流を図った。
ボランティア交流会③	1.13、14	愛知県児童総合センターへ訪問。愛知の「えほんのへや」での活動を見学し、交流を図った。
ボランティア交流会④	1.20、21	愛知県児童総合センター・栃木子ども総合科学館・えひめこどもの城の３館がこどもの城を訪問。「日曜クラブ」や絵本展のイベントに参加してもらい、交流を図るとともに、１３年度に予定している「じょいんフェスティバル」への参加を要請した。
ボランティア交流会⑤	2.11、12	さぬきこどもの国へ訪問。折り紙・クラフト・音楽などの活動に参加し、交流を図った。
ボランティア交流会⑥	2.24、25	富山県こどもみらい館へ訪問。ボランティア主催の「パペットワールド」という人形劇と人形制作・人形遊びのイベントに参加し、交流を図った。
ボランティア交流会⑦	3.10、11	宮城県中央児童館・神戸市総合児童センター・さぬきこどもの国の３館がこどもの城を訪問。パネルシアターや昔遊びのイベントに参加してもらい、交流を図るとともに、13年度に予定している「じょいんフェスティバル」への参加を要請した。
ボランティア通信「じょいん」特別号の発行	3.20	12年度の「小・中学生ボランティア交流事業」の報告書として、県立児童館との交流報告をまとめた、「じょいん」特別号を発行した。



こどもの城 事業年報

平成12年度

平成13年3月31日発行

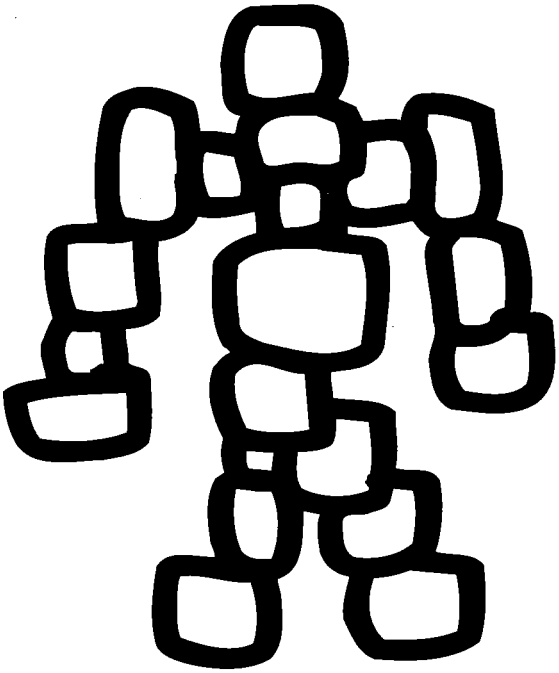
［編集・発行］

財団法人 児童育成協会

理事長　　高峯　一世

〒150-0001　東京都渋谷区神宮前5-53-1
電話　03-3797-5666

表紙イラスト ―――――― 田中靖夫
デザイン ―――――― COIL
印刷所 ―― オーイ・アート・プリンティング



財団法人 児童育成協会
こどもの城
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-1
TEL 03-3797-5666(代表) FAX 03-3797-5676